古代インドにおける
Vaiśeṣika学派の運動論の研究

東洋大学工学部
大網　功

古代インドにおける
Vaiśeṣika学派の運動論の研究

東洋大学工学部　大網　功

東洋大學圖書

目次

序章 ---------- 3

第１章　運動の共通的な特徴 ---------- ５８

第２章　運動の種類 ---------- ９１

第３章　継続的な運動 ---------- １２３

第４章　身体の運動 ---------- １８３

第５章　古代インドにおける Vaiśeṣika 学派の
運動論と業の理論との比較 ---------- ２１１

第６章　インド運動論と因果律 ---------- ２３１

第７章　古代インドの運動論
--------その認識論的な側面 ---------- ２６２

第８章　Vaiśeṣika 学派における
インド運動論の展開 ---------- ２８９

序章

1　はじめに

古代インドにおいて、運動をきちっと体系的にかつ論理的に扱っているのはVaiśeṣika 学派の運動論である。この運動論では人間の行為を中心に、物体の運動と身体の運動が取り扱われている。Vaiśeṣika 学派では運動はすべて瞬間的と考えられ、“運動は運動するものをある場所から分離させ、次の場所へ結合させる。”という考え方を基本原則とされた。すなわち Vaiśeṣika 学派では運動を瞬間的な場所の移動と考えて認識論的な運動論が展開されている。継続運動は意志的努力や運動の潜在能力、ヴェーガ（運動の勢い）などの動力因によって瞬間的な運動が次々に引き起こされるために生ずるとされた。この派の運動論では、“運動は運動を生み出すことはあり得ない”と考えて、物体あるいは身体は独りでに動くのではなく何か原因に基づいて動いていると考えられていた。例えば、手足の意識的な運動は身体を支配するアートマン（我、認識および行動の主体）に生じた意志的努力によって生じ、無意識的な運動は意志の働かない何か他の原因に基づくとされた。空中での物体の運動はヴェーガによって生じるとしている。また、この瞬間的な運動は手足の運動を中心に５種に分類されている。それらは持ち上げること　（utkṣepaṇa）、振り下ろすこと（apakṣepaṇa）、屈曲（折り曲げること、ākuñcana）、伸張（折れ曲がっているものを真っ直ぐにすること、prasāraṇa）、進行（gamana）である。

この学派の運動論について最も整理された形の書物は A.D. 6 世紀の Praśastapāda による Praśastapādabhāṣya である。この書物の第３章「運動論」は次の５節からなっている。それらは第１節　運動一般、第２節　個々の運動、第３節　運動の分類についての論議、第４節　アートマンに支配された運動、第５節アートマンに支配されない運動である。第１節は運動の共通的な１２の特徴が述べられている。これらは運動に共通であることを示すために、すべて -tva を接尾辞とした抽象名詞で記載されている。第２節、個々の運動では瞬間的な５種の運動が説明されている。第３節では運動はこの５種の運動以外にないことの理由が普遍を使って説明されている。第４節ではアートマンに生じた意識過程の１つ、意志的努力を原因として生じた運動の過程が Vaiśeṣika 学派の因果律によって述べられている。この節で記載された運動は（１）手の上げ下ろしの運動、（２）杵を持ち上げ、振り下ろして臼に衝突させる運動、（３）槍を投げる運動、（４）弓矢の運動である。第５節、アートマンに支配されない運動では意志的努力以外のものを原因として生じた運動の運動過程が記述されている。ここで記載

された運動は（１）特殊な結合による運動、（２）落下運動、（３）水の流れ、（４）ろくろの回転運動、（５）息という風の運動、（６）マナスの運動、（７）アドリシュタ（見えざる力）による運動である。

このようなインドの運動論がどのようなものであったか、その構成について筆者は Praśastapādabhāṣya およびその１０世紀の注釈書 Śrīdhara の Nyāyakandalī と Vyomaśiva の Vyomavatī に基づいて今まで研究してきた。その成果をここで述べる。

2　Vaiśeṣika 哲学

Vaiśeṣika 哲学は B. C. １、２世紀頃の Kaṇāda によって始められた。この学派の最初の教典は Vaiśeṣikasūtra で、Kaṇāda の作といわれている。この Vaiśeṣikasūtra が現在の形をとったのは A. D. ５０～１５０年頃といわれている。

Vaiśeṣika 哲学の思想の源はいろいろいわれている。多くはジャイナ教やジャイナ教が起こった頃活躍していた自由思想家に淵源を求めている。ジャイナ教の原子の考え、アジタ・ケーシャカムバラの４元素説などに求めている。Dasgupta は古いミーマンサー学派に求めている。Vaiśeṣikasūtra は自然哲学と考えられているが、この自然哲学ににあまり関係しないダルマが言及され、ダルマ、アダルマを総称しているアドリシュタ（不可見力）を物理的な現象の原因にされている。このことはミーマンサー学派が祭式においてダルマを求めるのと類似しているからとしている。また、中村はジャイナ教やアジタに淵源を求めると同時にカテゴリー論は古代の文法学者に求めている。文法学者達は実体(dravya)、運動(kriyā)、性質(guṇa)、形相(ākṛti 普遍）の４つの概念を術語として用いていたという。このようにいろいろ Vaiśeṣika 学派の思想の源がいわれているが、一定していない。研究者の多くが述べているジャイナ教や自由思想家達の自然哲学の流れの中でまた文法学者達の影響も受けて Vaiśeṣika 学派のカテゴリー論が出き上がったのだと考えられる。

Vaiśeṣika 哲学では自然界を観察して、概念分析を行った結果、自然界の構成要素として実体、性質、運動、普遍、特殊、内属という６つのカテゴリーが立てられた。それによって自然界の諸現象を説明しようとした。その中で存在物を事実上構成しているカテゴリーは実体、性質および運動である。性質や運動は実体に密着していて、実体から離れられない結合関係にある。例えば、動きをいう場合、そこには動く対象すなわち実体が必ず存在している。このとき動く対象があるから動きが考えられるので

ある。このように密着していて離れられない結合関係が内属である。性質と運動は実体に内属している。すなわち、実体は性質と運動の拠り所となるものである。また、普遍はものに内属した共通性で、同種のものが群を作ったとき、その個々のものに内属し、個々のものが共通であるという認識を持つ原因となるものである。そして客観性のある実在である。特殊は異種のものを排除するという観念を引き起こす原因となるものである。

実体というカテゴリーについては土、水、火、風、空、時間、方角、アートマン、マナスという９つの実体が上げられている。土、水、火、風についてはそれぞれ究極の粒子として４つのタイプの違った原子(paramāṇu)が考えられ、土の原子は属性として色、味、香り可触性を持っている。水の原子は色、味、可触性を有し、火の原子は色、可触性を有し、そして風の原子は可触性のみを有している。それぞれの原子は球の形をしており、常住のものと考えられた。そして原子の構成物である、土性の物質、水性の物質、火性の物質、風性の物質は無常のものと考えられた。虚空は物質等が存在し、運動する場所であり、音を属性として有し、音を伝える媒介物である。そして、常住で遍在なる実体である。時間は時間観念を実体化したもので、前後、同時、遅速などの時間的観念を起こさせるもとになるもので、常住で、遍在である。方角は方角を実体化したもので、常住で遍在である。アートマンは精神性を持ち、認識および行動の主体である。我と訳される。マナスはアートマンの補助器官で、意と訳されるもので、体内に１つ存在し、微小な粒子でいつも体内を駆けめぐっている。マナスはアートマンと結合することによってアートマンに認識等の意識作用を生じせしめるものである。アートマンはマナスと結合しないときは認識を生じない。

性質については Praśastapādabhāṣya によれば、２４種類の性質が上げられている。それらは色、味、香り、可触性、数、量、別異性、結合、分離、彼方、此方、知識、快感、不快感、欲求、嫌悪、意志的努力、重さ、流動性、粘着、サンスカーラ（潜在能力）、ダルマ、アダルマ、音である。その内、サンスカーラ（潜在能力）はヴェーガ（勢い）、潜在印象、弾性の３種類に分かれている。ヴェーガは運動の勢いで、物体が空中で運動しているとき、瞬間的な運動を次々に生じせしめるものである。潜在印象は記憶の原因となるものである。ダルマ（善業の功徳）、アダルマ（悪業の罪悪）は人が意志の力で行為をなしたとき、心、すなわちアートマンに残った倫理的な残余感である。輪廻の世界で、後世ダルマ、アダルマは煩悩を伴うことによって心のなか

で熟してきたとき、神の評価によって果報が与えられる。潜在印象は知識の原因となるものであるが、ダルマ、アダルマは人の感情、快感および不快感の原因となるものである。

運動についてはすべて瞬間的と考えられ、上述の５種の運動（持ち上げること、振り下ろすこと、屈曲、伸張、進行）が瞬間的な運動の種類として上げられている。これらの内、進行を除いた４種の運動は方向の定まった運動とされ、“持ち上げる”などの特殊な意志的努力によって生じた運動である。

このような６つのカテゴリーの内、運動は物質を構成する３つのカテゴリーの１つであり、Vaiśeṣika 哲学の中で重要な役割を演じていると考えられる。

２－２　Vaiśeṣika 学派の因果律

インドでは因果律について２つの考え方があった。１つは Sāṃkhya 学派に代表される因中有果論である。他は Nyāya および Vaiśeṣika 学派の因中無果論である。因中有果論とは原因があって結果が生ずるのであるが、原因と結果とは本質を同じくするもので原因と結果はそれぞれ独立したものではないと考え、その原因の中に既に潜在的に結果を持っているとされた。従って結果に到達するとき、その潜在的なものが顕在化されただけで、あるいは変化しただけであるという理論である。

一方、Vaiśeṣika 学派による因中無果論は原因と結果は全く別個のもので結果は全く新しい存在であると考えられていた。この因中無果論では結果は種々の原因の集合から生じたものであるとされた。Nyāya-Vaiśeṣika 学派ではこれら種々の原因を３種類に分けていた。それらは内属因（samavāyikāraṇa）、非内属因（asamavāyikāraṇa）および動力因（nimittakāraṇa）である。内属因は結果と不可分離の関係にあって、結果を包摂する原因となる基体（すなわち、実体）である。非内属因は内属因と親密なる関係にあって、結果を生み出す能力を持つ原因である。例えば、諸々の糸から布が作られる場合、糸の結合は布の非内属因である。糸の結合は糸に内属している。布も糸に内属している。それ故、糸の結合は布の内属因である糸と親密な関係にある。しかも糸の結合は布という結果を生み出す原因である。以上より、糸の結合は布の非内属因である。上記の２原因以外のすべての原因が動力因と呼ばれていた。

Vaiśeṣika 学派ではこのような３種の原因を使って運動が説明されている。運動の発生に対して運動の基体、すなわち運動している物体が内属因、運動を直接生み出す結合または能力が非内属因、この結合または能力を生み出す原因となるもの、あるい

はそれ以外の原因が動力因と呼ばれた。

３、Praśastapādabhāṣya 第３章運動に記載された内容

次に Praśastapādabhāṣya 記載の運動論について第１節から５節までその内容を簡単に説明しよう。

第１節では運動の１２の特徴が述べられている。Vaiśeṣika 学派の運動に対する基本概念である“運動は運動するものをある場所から分離させ、次の場所へ結合させる”（Vaiśeṣikasūtra １－１－１９の Candrānanda 注[2]）という考え方すなわち、運動を認識論的に瞬間的な場所の移動とする考え方を基本として運動の特徴が述べられている。この　１２個の運動の特徴の内、“運動は同一時に１つの実体に存すること”や“運動は瞬間的である”など運動の定義に相当するものが６個述べられている。そして運動の性格的なものが４個述べられている。また、運動の原因となるもの、および結果となるものがそれぞれ１個ずつ述べられている。以上計１２個の運動の共通的な特質が述べられている。

第２節では瞬間的な５種の運動、すなわち“持ち上げること”（utkṣepaṇa）、“振り下ろすこと”（apakṣepaṇa）、“屈曲（折り曲げること）”（ākuñcana）、“伸張（折れ曲がっているものを真っ直ぐにすること）”（prasāraṇa）、“進行”（gamana）が定義されている。その定義によれば、進行を除いた４種の運動は方向の定まった運動であった。すなわち、“持ち上げること”は“上方にある諸々の場所との結合の原因となり、下方にある諸々の場所との分離の原因となる運動”である。また、“振り下ろすこと”は“持ち上げること”と反対の結合と分離を引き起こす原因となる運動で、振り下ろすものを上方の場所から分離させ、下方の場所と結合させる運動である。そして、“屈曲”は真っ直ぐになっている物質を根本の場所に折り曲げる運動であり、“伸張”は折れ曲がっているものを真っ直ぐにする運動である。“進行”は“方向の定まっていない場所との結合と分離とを引き起こす運動”として定義され、上記の４つの運動以外の運動はすべてこの“進行”という種類に含ませている。

第３節「運動の分類についての論議」では継続運動が“意識の作用に基づく運動”（satpratyaya-karman）、“意識の作用から離れた運動”（asatpratyaya-karman）、“意識によらない運動”（apratyaya-karman）に分類されている。“意識の作用に基づく運動”は身体および身体と一緒に動く物体の運動において、現在意識が作用している、すなわち

意志的努力に基づく運動である。“意識の作用から離れた運動”は今まで意識が作用していたが、現時点では意識が作用していない、すなわち意志的努力に基づかない運動である。これに属する運動は身体の無意識的な運動と意志の束縛から離れた物体の運動である。“意識によらない運動”は意志的努力に基づかない運動である。
このように分類された継続運動において、５種の瞬間的な運動は“意識の作用に基づく運動”に配置され、“意識の作用から離れた運動”および“意識によらない運動”には５種の運動の内、“進行”だけが配置されている。このように Vaiśeṣika 学派の運動論では意識の作用によって運動が分けられている。

そしてこの節ではこの瞬間的な運動が５種類であるのかどうかについて議論がなされている。運動が５種である理由は Praśastapādabhāṣya によれば、普遍を使って説明がなされている。普遍は同種である個々のものに内属し、個々のものが共通であるという認識を持つ原因、すなわちものの共通性である。この普遍を使って瞬間的な運動が５種である理由は Praśastapādabhāṣya によれば、次のように説明されている。５種の運動はそれぞれ同種の運動でまとまり、群をなしたとき、それらは共に同類であるという観念が起こり、他の種類の運動とは異なっているからその群から他の運動を排除しようという観念が起こるそのような観念が起こる原因となる普遍（共通性）がそれぞれの運動群に付随すると書かれている。すなわち５つの運動が種類である理由は５種の運動にそれぞれ普遍が内在していることである。そしてこの種類は Vaiśeṣika 学派では主観的でなく、誰もが認識できる客観性のあるものであると考えられていた。
このように第３節は運動の種類について議論がなされている。

第４節「アートマンに支配された運動」ではアートマンに生じた意識過程の１つ、意志的努力を原因として生じた運動の過程が Vaiśeṣika 学派の因果律によって述べられている。例えば、弓矢の運動では人が弓に矢をつがえるという人の意志的努力から始まって矢が弓に射られて空間を飛び、落下するまでの過程が因果律によって記述されている。すなわち、空中での矢の運動を結果と考えたとき、原因は何かをつきつめて最後の原因が弓を引くと言う意志的努力に到達するような因果関係によって、弓を引くという意志的努力から矢の空中での運動までの運動過程が記述されている。この節で記載された運動は前述のように（１）手の上げ下ろしの運動、（２）杵を持ち上げ、振り下ろして臼に衝突させる運動、（３）槍を投げる運動、（４）弓矢の運動である。

第５節「アートマンに支配されない運動」では第４節と同じように運動を結果と考

えたとき、原因を追及した結果、意志的努力以外のものが最後の原因となった運動過程が記述されている。ここで記載された運動は（１）特殊な結合による運動、（２）落下運動、（３）水の流れ、（４）ろくろの回転運動、（５）息という風の運動、（６）マナスの運動、（７）アドリシュタ（不可見力）による運動である。
以上が第３章運動で述べられた内容である。

４、　Vaiśeṣikasūtra およびその注釈書

Vaiśeṣikasūtra は簡潔な文章で書かれており、１０章からなっている。７世紀の注釈者、Candrānanda による Vṛtti によれば、第１章から第７章まではそれぞれ２つの日課（āhnika）に分けられている。第１章第１日課では実体、性質、運動についてそれぞれの特徴が述べられている。この中で、“＜運動は＞結合と分離において独立な原因である”（Vaiśeṣikasūtra １－１－１６）とか、“運動は運動を生じない”（Vaiśeṣikasūtra １－１－２１）などの運動の特質が記載されている。[3]第２日課では普遍と特殊が述べられている。以後、Vaiśeṣika 哲学が簡潔に述べられている。その中で、第５章では継続運動が述べられている。[4]第５章第１日課では主にアートマンに支配された運動、第２日課では主にアートマンに支配されない運動が述べられている。第１日課で記載された運動は手の運動、杵と臼との衝突運動、ものを投げる運動、弓矢の運動などである。第２日課では土、水、風、火の四大種によって作られた物質の運動、マナスの運動などが記載されている。この記述の仕方は簡潔で、運動経過は断片的に書かれている。そのため、運動のメカニズムは A. D. ６世紀に作られた Praśastapādabhāṣya よりかなりあいまいな形で書かれている。この書物は Vaiśeṣika 哲学を体系的に述べていない。
この Vaiśeṣikasūtra の現存している注釈書として、
（１）　７世紀頃の Candrānanda による Vṛtti [5]
（２）１２，３世紀頃の作者不詳の　Anonymous　Commentary [6]
（３）１５世紀の Śaṅkara Miśra による　Upaskāra [7]
がある。それぞれに含まれている、sūtra は相互に多少相違している。一番古い注釈書である Candrānanda による Vṛtti は初期の Vaiśeṣikasūtra の形を保ったものといわれている。

5、Praśastapādabhāṣya およびその注釈書

Praśastapādabhāṣya の正式な書名は Padārthadharmasaṅgraha（「句義法綱要」）といわれ、6世紀の Praśastapāda による著作である。この書物は Vaiśeṣika 哲学をカテゴリーに従って体系的に述べた書物である。筆者はこの Praśastapādabhāṣya およびその注釈書を主に用いて Vaiśeṣika 学派の運動論を研究した。J. Bronkhost によれば、Praśastapādabhāṣya において実体、性質、運動、普遍、特殊、内属というカテゴリーに従って章が構成されている。[8]この書物では序章では6つのカテゴリーについておよび6つのカテゴリー相互の共通性と差違が述べられている。第1章では実体、第2章では性質、第3章では運動、第4章では普遍、第5章では特殊、第6章では内属がそれぞれ述べられている。第3章運動では Vaiśeṣika 学派の運動論が述べられている。[9]それらは前述したように第1節　運動一般、第2節　個々の運動、第3節　運動の分類についての論議、第4節　アートマンに支配された運動、第5節　アートマンに支配されない運動である。第4節、5節では継続運動が述べられている。この書物の主なる注釈書は

① １０世紀頃（または１０世紀以前）の Vyomaśiva による　Vyomavatī [10]

② １０世紀（９９１年）の Śrīdhara による　Nyāyakandalī [11]

③ １１世紀の Udayana による　Kiraṇāvalī [12]

である。

Udayana の Kiraṇāvalī は実体と性質の章だけが注釈され、運動の章以下は注釈されていない。Vyomavatī と Nyāyakandalī は全体に注釈されている。したがって、Praśastapādabhāṣya に記載された運動論に注釈した書物は Vyomavatī と Nyāyakandalī である。筆者は Praśastapādabhāṣya に記載された運動論を Vyomavatī と Nyāyakandalī の両注釈書に基づいて研究した。

6、Vaiśeṣika 学派の運動論についての今までの研究

この学派の運動論に関して、今までに B. Faddegon, S. Bhaduri, B. N. Seal, U. Mishra などによって研究および紹介がなされた。[13]そしてこの運動論の仏教側からの批判についての研究が菱田によってなされている。[14]これらの内で B. N. Seal と U. Mishra は Vaiśeṣika 学派の運動論を詳細に述べている。特に運動の原因については詳細に記述している。

これらの研究者によって Vaiśeṣika 学派の運動論がどのように書かれているか、記す。

ここではB. Faddegon, S. Bhaduri, B. N. Seal, U. Mishraによって今までなされた運動論の研究を紹介する。

これらの研究によれば、Vaiśeṣika学派では運動はすべて瞬間的と考えられ、“運動は運動するものをある場所から分離させ、次の場所へ結合させる。”という場所の移動が基本とされ、運動の特質について、“運動は運動を生ずることはない”、“1つの実体に1つの運動が存在する。”等のPraśastapādabhāṣya記載の運動の特質が紹介されている。そしてこの瞬間的な運動は持ち上げること、振り下ろすこと、屈曲、伸張、進行という5種の瞬間的な運動に分類されている。継続運動は“運動は運動を生ずることはない”という運動の特質からこの瞬間的な運動が意志的努力や推進力など運動を生ずる原因によって次々に引き起こされるために生ずるとされ、手から離れた物体の運動はvega（勢い）と呼ばれる推進力によって引き起こされると記されている。そして運動は①意志的努力、②重さ、③流動性、④衝動、⑤衝突、⑥“＜それとそれに＞結びついた部分との結合”（saṃyukutasaṃyoga）、⑦ヴェーガ（勢い）および⑧アドリシュタ（不可見力）を原因として生ずることが記されている。⑥“＜それとそれに＞結びついた部分との結合”とは物体に運動が生ずるとき、直接、衝動や衝突などで運動が生じている部分とまだ、生じていない部分とがある場合に、この結合は直接運動を生じている部分からそうでない部分に運動を伝える役目をする結合である。これらの原因の内、①意志的努力は2種類存在している。1つは生命に基づく意志的努力で、他は欲求や嫌悪に基づいて生じた意志的努力である。生命に基づく意志的努力は眠っている人の呼吸を生じさせる息という風の運動の原因である。また、眠っている人が目覚めたときに対象物を知覚するためにマナスが外部感覚器官と接触するために生じたマナスの運動の原因である。一方、欲求や嫌悪に基づく意志的努力は意識のある身体の運動が生ずる原因である。②重さは落下運動の原因であり、意志的努力やヴェーガによって妨げられる。そして落下運動は第1瞬間時には重さによって生じ、第2瞬間時以降にはその運動によって生じたヴェーガと重さによって生ずることが記されている。③流動性は水などの液体が流れを生じさせるための原因である。④衝動は“推すもの”と“推されるもの”が離れない状態で“推すもの”が“推されるもの”へ動力を与える結合である、そして例として泥の上に石を乗せたとき、泥と石は一緒に沈んでゆく、この場合の結合が衝動であると述べている。手で槍を投げる場合、手と槍の間に生じている衝動や弓矢の運動において、弓を引いて弦から指を放すとき、

弦と矢の間に生じた衝動については言及されていない。⑤衝突はヴェーガを持つ“衝突するもの”が“衝突されるもの”との結合で、両者が一瞬のうちに分離して１つの運動を生ずるような結合である。その例として、物体が堅い物体にぶつかったときの衝突が上げられている。　⑦ヴェーガ（勢い）は瞬間的な運動を一定方向へ継続させるための能力である。そしてそれは意志的努力、衝動、衝突や重さなどに基づいて生じた速い運動から生ずる。この能力は感触のある実体と接触することによって妨げられる。⑧アドリシュタは見えない力、すなわち原因の分からない力のことをいう。Praśastapādabhāṣya ではアドリシュタはダルマ、アダルマをいい、人が行為をした後に心に残る倫理的な残余感である。輪廻の原因となるものである。このアドリシュタは原因の分からない運動に対して原因として作用している。例えば、木の幹を水が上昇する水の運動、磁石に引きつけられる鉄の運動、火の上昇運動、風の横吹、原子の最初の運動など原因の分からない運動に対してアドリシュタが原因とされている。

更に B. Faddegon によれば、継続運動は“意識の作用に基づく運動”（satpratyaya-karman）、“意識の作用から離れた運動”（asatpratyaya-karman）および“意識によらない運動”（apratyaya-karman）の３種類に分類されている。Faddegon によれば、この３種の継続運動には次のような運動が分類されている。“意識の作用に基づく運動”には意識を伴った運動で、身体に生じた運動が、“意識の作用から離れた運動”には身体に伴われた物体の運動および身体から離れた物体の運動が、また“意識によらない運動”には常に意識の作用を欠いた運動が分類されている。この分類によれば、身体と結びついた物体の運動はすべて“意識の作用から離れた運動”に分類されている。しかし、身体と結びついた物体の運動には身体、すなわち手や足と共に動く物体の動きと意志的努力に依存しない物体の動きが含まれている。手、足と共に動く物体の動きは意志的努力に基づく動きなので、“意識の作用に基づく運動”の分類に入り、意志的努力に基づかない物体の動きは“意識の作用から離れた運動”の分類にはいると考えられる。それを第２章「運動の種類」で示したい。従って Faddegon の分類は間違っていると考えられる。更に Faddegon は Praśastapādabhāṣya に記載された運動論は Vaiśeṣikasūtra に記載された運動論より冗長すぎてよくないと指摘している。しかし、両書を読み比べてみるならば、Vaiśeṣikasūtra の運動論では断片的で運動のメカニズムがはっきり書かれてないが、Praśastapādabhāṣya の運動論ではその運動の運動過程が Vaiśeṣika 学派の因果律によって明瞭に記述されている。第３章「継続的な運動」で考察したいと考える。

また菱田によれば、Vaiśeṣika 学派の運動論に対して仏教側、Tattvasaṃgraha において反論が述べられている。[15]Tattvasaṃgraha では Vaiśeṣika 哲学について批判がなされている。その中でヴェーガ（勢い）と運動について刹那滅の立場から次のような批判がなされている。運動している基体である実体は刹那滅であり、刹那滅のものは生起するやいなや滅するのであるから、実体に運動やヴェーガが依存することは不可能であるとしている。運動は瞬間的であり、空中での矢の運動はヴェーガによって継続される。この Vaiśeṣika 学派の見解に対して仏教側では継続運動は諸々の因縁が作用して生ずるのであるからヴェーガが継続運動の原因であるとは限らないとしている。“もし原因であるとしても矢が落ちないのはヴェーガの働きが原因であるとするなら、矢の落下を妨げるヴェーガはあらゆる場合に矢に依存しているはずであるから、矢は永久に落ちることはない”などヴェーガの働きについて仏教側から色々反論がなされている。

このように今までの研究において Vaiśeṣika 学派の運動論が紹介されている。特に運動の原因については詳細に記述している。しかし、Praśastapādabhāṣya に記載された個々の運動がどのような形で生ずるのか、そのメカニズムがあまり述べられていない。例えば、B. N. Seal によれば、ヴェーガ（運動の勢い）について２種類あることが記されている。この２種とは落下において重さによって生ずる勢いと矢が空中で運動しているとき、運動を継続させるための勢いである。Seal はこの２つの勢いは種類の違ったものであると述べている。すなわち、矢が空中で運動しているとき、運動を継続させるための勢い、すなわちヴェーガは落下運動の原因である重さを妨げる。しかし、矢が勢いをなくしたとき、矢は重さのために落下する。その落下運動に対しては、落下運動の第１瞬間時は重さによって落下運動が生じ、その運動によって勢い、すなわちヴェーガが生ずる。落下運動の第２瞬間時以降は重さと勢いによって運動が生ずる。このように勢いは落下運動を助長させる。従って勢いがある時には重さの能力を妨げて、勢いは落下運動を生じさせないが、ひとたび落下運動が生じたときには重さと共に落下運動を助長する。このことから勢いは一方では重さの能力を妨げ、他方では重さと共に落下運動を助長する。勢いは重さの能力を妨げるのであるから、落下運動においても重さの能力を妨げるべきなのに助長してしまう。これは勢いが２種あると考えざるを得ないと B. N. Seal は述べている。しかし、これらの勢いは異なるものではなく、後に示すようにどちらも運動を継続させるための能力で運動の勢い以外の何ものでもない。このような考えはヴェーガの発生するメカニズムがきちっと把握されて

いなかったために生じたものと考えられる。

S. N. Sen, B. V. Subbarayappa などはヴェーガ理論が中世ヨーロッパのインペトス理論に類似したものであると述べている。[16]従って、これらの研究は Vaiśeṣika 学派の運動論について、個々の言葉の説明は良くなされているが、それを総合する運動のメカニズムが捕まれていない。そのため、分析の仕方があいまいである。例えば、ヴェーガの発生がどのような運動の過程においてなされたものなのか、その運動機構が記されていない。また、このヴェーガ理論が何故、インド運動論に必要なのか等インド運動論の本質が明らかにされていない。そこで本研究はこの Vaiśeṣika 学派の運動論を原文に則して考え、運動の機構がどのようなものであるか、その一端を次章以降で考察したいと考える。

7、Vaiśeṣika 学派の運動論の概要

古代インドにおいて、運動を体系的にかつ論理的に扱っているのは6世紀の著作、Praśastapādabhāṣya に記載された Vaiśeṣika 学派の運動論である。

今までに、6世紀の著作、Praśastapādabhāṣya を中心にして Vaiśeṣika 学派の運動論を調べてきた。それによれば、この運動論では場所の移動、すなわち“運動は運動するものを瞬間的にある場所から分離させ、次の場所へ結合させる”という認識論的な考え方を基本として、瞬間的な運動が考えられていた。継続運動は意志的努力や運動の潜在能力、ヴェーガ（運動の勢い）等の動力因によって瞬間的な運動が次々に引き起こされるために生ずるとされた。この派の運動論では“運動は運動を生み出すことはあり得ない”と考えて物体あるいは身体は独りでに動くのではなく、何か原因に基づいて動いていると考えられていた。例えば、手足の意識的な運動は身体を支配するアートマンに生じた意識的努力によって生じ、無意識的な運動は意志の働かない何か他の原因に基づくとされた。空中での物体の運動はヴェーガによって生ずるとしている。Praśastapādabhāṣya 第3章運動第4節、5節に記載された運動過程は Vaiśeṣika 学派の因果律によって書かれていた。すなわち、運動過程の最後に記述された運動、例えば、弓矢の運動については空中を運動する矢の運動、を結果と考えたとき、原因を次々に遡って意志的努力に到達した運動過程がアートマンに支配された運動として第4節に記述されている。第5節では遡った原因が意志的努力でないものに到達した運動過程が記述されている。

この運動論の内容を筆者の研究に従って紹介していく。

７－１、　運動の共通的な特質。

Praśastapādabhāṣya 第３章、第１節「運動一般」では運動の共通的な特質が１２個述べられている。[17]これに記載された運動の特質は Vaiśeṣika 学派の運動に対する基本概念である“運動は運動するものをある場所から分離させ、次の場所へ結合させる”という考え方を基本として述べられている。すなわち、運動を認識論的に瞬間的な場所の移動と考えて運動の特質が述べられている。この１２個の特質の内、６個は運動の定義に相当するものであり、４個は運動の性格的なものである。また、運動の原因と結果について書かれたものがそれぞれ１つずつある。

これらの特質の内、重要なものについて以下に論ずる。

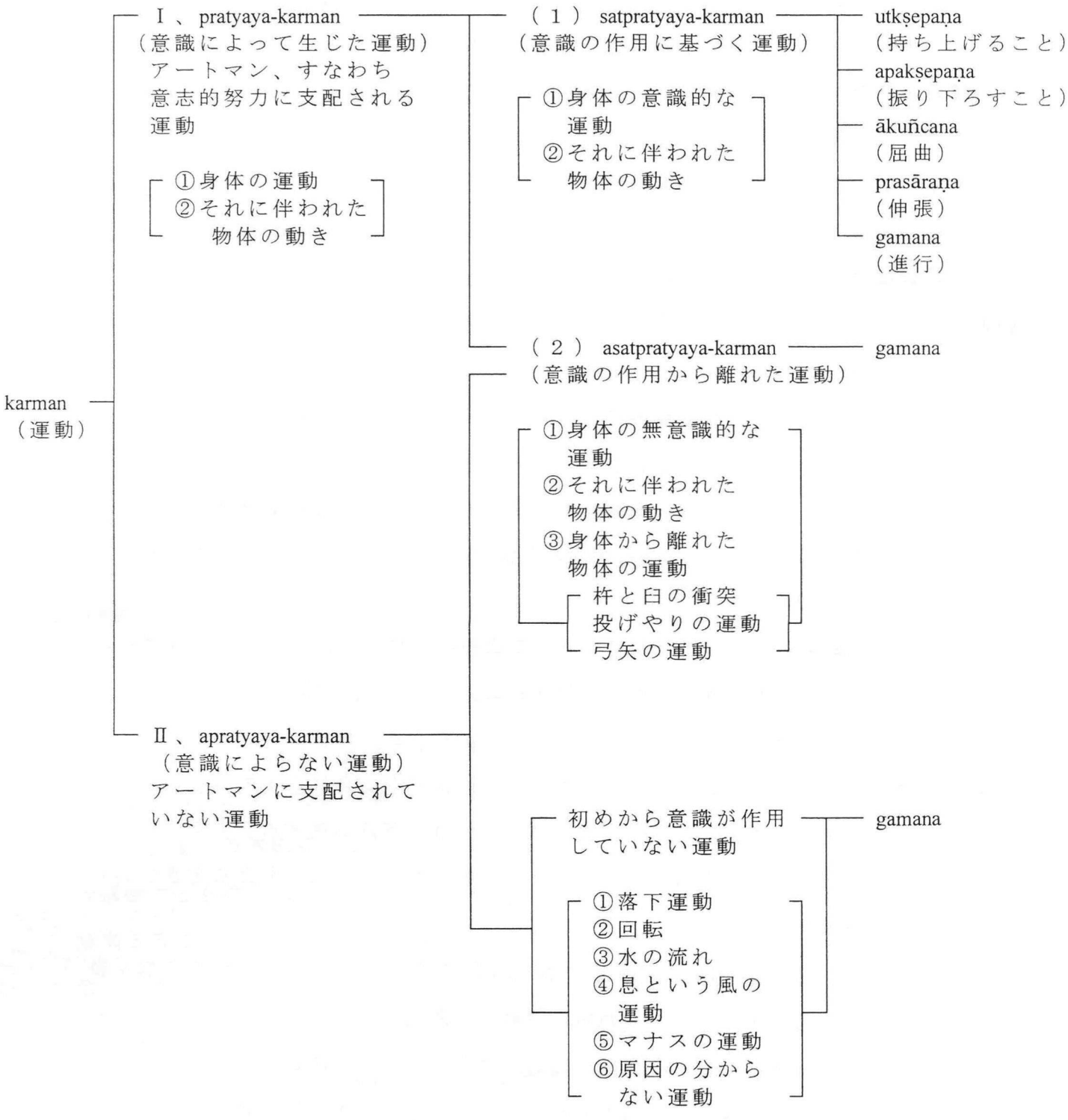
運動の定義に相当する特質の内、（４）“運動は性質を持たないこと”、という特質は Candrānanda によって Vaiśeṣikasūtra １－１－１９に注釈されているように、“運動は運動するものをある場所から分離させ、次の場所へ結合させる”（Candrānanda １－１－１９）[18]という考え方を基本原則として運動を概念分析した結果である。すなわち運動というカテゴリーから運動を生じたり（すなわち、運動が運動を生ずる）、停止したりする概念を排除したために生じたものと考えられる。もし運動が運動を生ずるとすれば、運動の基本原則である運動によって生じた分離と結合を放棄しなければならなくなってしまう。何故なら、運動が運動を生ずるとすると、運動している基体は第１の運動によってある場所から分離されるが、次の場所との結合がなされない。すると、第２の運動による分離も結合も起こらなくなってしまう。このことは“運動は運動するものをある場所から分離させ、次の場所へ結合させる”という基本原則を放棄することになる。そのことは不可能なので、Vaiśeṣika 学派では性格的な運動の特質、（１０）“運動が運動を形成しない”としたのである。従って、Vaiśeṣika 学派では運動というカテゴリーは運動そのもの、すなわち運動の分類を論じるだけのものにして、運動を生じたり、停止したりする概念は他のカテゴリーに入れられたのである。従って必然的に運動が生ずる原因と停止する原因を考えなければならなくなってしまった。運動の停止は性格的な特質、（６）“＜運動＞自ら作り出す結合によって妨げられること”によって書かれている。この特質は運動を（２）“瞬間的なもの”と考えたことと（７）“運動は結合と分離に対して独立な原因であること”と考えたこと、すなわち Candrānanda による Vaiśeṣikasūtra １－１－１９の注釈“運動は運動するものを

ある場所から分離し、次の場所へ結合させる”という運動を場所の移動と考えたことによって生じたものである。このことによって、運動の停止は運動の結果である結合によって生ずる。また、運動が生ずる原因となるものは、（5）“重さと流動性と意志的努力と結合”である。重さは落下運動に必要な原因であり、流動性は水が流れるという運動に必要な原因である。意志的努力は人が行為、すなわち手を上げるとか弓を動かすとかという運動が生ずる場合の原因である。次に結合であるが、この結合がどのような結合であるのか、Nyāyakandalī および Vyomavatī のこの個所の注釈では何も云われていない。しかし、Candrānanda による Vaiśeṣikasūtra の注釈において、運動の原因として“重さ、流動性、意志的努力、衝動、衝突、＜それとそれに＞つながれた部分との結合（saṃyuktasaṃyoga）、意志的努力およびアドリシュタ（不可見力）”が上げられている。[19]アドリシュタを除けば Praśastapādabhāṣya に記載された運動の原因である。しかも、結合に関しては後に示すように Praśastapādabhāṣya 第３章「運動」、第５節「アートマンに支配されない運動」で、運動の原因となっている特殊な結合すべてが上げられている。従って、Praśastapādabhāṣya 記載の結合は特殊な結合と考えられる。

このように、Vaiśeṣika 学派では運動を瞬間的な場所の移動と考えたため、継続運動は次のように考えることができる。運動の原因によって第１瞬間時の運動が生ずる。その運動の結果である結合によって第１の運動は終わる、そしてまた運動の原因によって第２の運動が起こり、運動する実体と場所との瞬間的な結合によって第２の運動が終わる、というように瞬間的な運動が次々に生じて継続運動が生ずると考えられていた。運動の結果である結合と分離であることは運動を場所の移動と考えたとき、必然的に出てくる帰結である。

以上により、Praśastapādabhāṣya に記載された運動の特質は運動を認識論的に取り扱ったために生じたものである。すなわち、運動を瞬間的と考え、“運動は運動するものをある場所から分離させ、次の場所へ結合させる”という認識論的な場所の移動を基本原理としているために生じたものである。また、その基本原理に則して運動を概念分析した結果、運動そのものを運動と考え、運動を引き起こす原因や停止の原因は他のカテゴリーに入れられた。運動の原因としては“重さ、流動性、意志的努力、結合”が上げられている。また、運動の停止については運動によって生じた結合が上げられている。また、継続運動はこのように生じた瞬間的な運動が運動の原因によって

第１図　運動の分類


karman
（運動）
Ⅰ、pratyaya-karman
（意識によって生じた運動）
アートマン、すなわち
意志的努力に支配される
運動
①身体の運動
②それに伴われた
物体の動き
（１）satpratyaya-karman
（意識の作用に基づく運動）
①身体の意識的な
運動
②それに伴われた
物体の動き
utkṣepaṇa
（持ち上げること）
apakṣepaṇa
（振り下ろすこと）
ākuñcana
（屈曲）
prasāraṇa
（伸張）
gamana
（進行）
（２）asatpratyaya-karman
（意識の作用から離れた運動）
gamana
①身体の無意識的な
運動
②それに伴われた
物体の動き
③身体から離れた
物体の運動
杵と臼の衝突
投げやりの運動
弓矢の運動
Ⅱ、apratyaya-karman
（意識によらない運動）
アートマンに支配されて
いない運動
初めから意識が作用
していない運動
①落下運動
②回転
③水の流れ
④息という風の
運動
⑤マナスの運動
⑥原因の分から
ない運動
gamana

次々に生ずるために起こるのである。そして運動を結果と考えたときその原因が、あるいは運動を原因と考えたときその結果が Vaiśeṣika 学派の因果律にのっとって認識論的に解明されていた。しかし、運動の時間的な関係については一切触れられていない。

このようにここで論じられている運動の特質は認識論の立場から運動の特質が考えられただけにすぎない。

7－2、　運動の種類

Vaiśeṣika 学派では瞬間的な運動は５種に分類されている。それらは“持ち上げること”（utkṣepaṇa）、“振り下ろすこと”（apakṣepaṇa）、“屈曲（折り曲げること）”（ākuñcana）、“伸張（折れ曲がっているものを真っ直ぐにすること）”（prasāraṇa）、“進行”（gamana）である。

ここでは，この５種の運動がどのような運動であるのか、また運動の種類が Vaiśeṣika 学派でどのように考えられていたのか、そしてこれらの運動が何故、運動の種類であったのか Praśastapādabhāṣya および１０世紀のその注釈書，Nyāyakandalī と Vyomavatī について調査した結果を述べる。[20]

Praśastapādabhāṣya 第３章「運動」では種類としてこの５種の運動が上げられているが、実際には運動を述べた例は瞬間的な運動ではなく、継続運動について述べられている。この瞬間的な運動がどのような運動であるか述べる前に、継続運動について運動の分類をまず見ておく。継続運動は第１図の如く、大別して２種に分類された。（Ⅰ）“意識によって生じた運動”（pratyaya-karman）、すなわち意志的努力に基づく運動と（Ⅱ）“意識によらない運動”（apratyaya-karman）、すなわち意志的努力に基づかない運動とに分かれている。（Ⅰ）“意識によって生じた運動”は２つのサブグループ、“意識の作用に基づく運動”(satpratyaya-karman)と“意識の作用から離れた運動”(asatpratyaya-karman)とに分かれる。“意識の作用に基づく運動”は現在意識が作用している、すなわち意志的努力に基づく運動である。例えば、ものを持ち上げるとか弓を引くという運動である。“意識の作用から離れた運動”は今まで意識が作用していたが、現時点では意識が作用していない、すなわち意志的努力からもはや離れた運動である。例えば、弓矢の運動については、Praśastapādabhāṣya では第３章第４節において意志的努力による弓を引くという運動から矢が弓から離れて空中を運動するまでの運動過程が記述されている。この運動過程において、“意識の作用から離れた運

動”は弓の弦と矢を手で十分に引いて、手を弦から放した後の弓矢の運動である。この種類に属する運動は身体の無意識的な運動と意志の束縛から離れた物体の運動である。（Ⅱ）“意識の作用によらない運動”は意志的努力に基づかない運動であるため、“意識の作用から離れた運動”と“初めから意識が作用してない運動”に分類された。Praśastapādabhāṣya では“意識の作用に基づく運動”は５種の瞬間的な運動すべてが配置され、“意識の作用によらない運動”は“進行”だけが配置された。[21]

このような運動の分類において、瞬間的な５種の運動（持ち上げること、振り下ろすこと、屈曲、伸張、進行）は“意識の作用に基づく運動”、すなわち意志的努力によって生じた運動に属している。そして５種の内、“進行”は分類中のすべてに含まれている。従って、“進行”を除いた４種の運動は“意識の作用に基づく運動”だけに属している。すなわち、意志的努力に基づく運動である。そして また、４種の運動は方向の定まった運動とされ、“進行”は方向の定まらない運動とされた.[22]

次にこの５種の運動がどのような運動であったか調査した。Praśastapādabhāṣya によれば、５種の運動は以下のように記されている。[23]

(1)“持ち上げること”は“上方にある諸々の場所との結合の原因となり、また下方にある諸々の場所との分離の原因となる運動である。”

(2)“振り下ろすこと”は“持ち上げることと反対の結合と分離を起こす運動である”

(3)“屈曲”は“真っ直ぐになっている物質の先端にある部分をその場所から分離させ、根本の場所と結合させる運動である。”

(4)“伸張”は“屈曲と反対に結合と分離を発生させ、全体を真っ直ぐにする運動である。”

(5)“進行”は“方向の定まっていない場所との結合と分離とを引き起こす運動である。”

このような瞬間的な運動について、Praśastapādabhāṣya の注釈書 Vyomavatī と Nyāyakandalī を調べた結果、次のようなことが分かった。

（１）瞬間的な５種の運動

① ５種の運動の内、“進行”を除いた４つの運動、すなわち“持ち上げること”、“振り下ろすこと”、“屈曲”、“伸張”は、“持ち上げる”など特殊な意

志的努力によって運動の方向が規定されている。しかもその方向はすべて縦方向である。

“持ち上げること”および“振り下ろすこと”はそれぞれ“持ち上げる”、“振り下ろす”という意志的努力に基づき、下から上へ、上から下へそれぞれ向かう直線的な運動である。また“屈曲”は“折り曲げる”という意志的努力によって縦に真っ直ぐな物体の先端を根本に折り曲げる運動である。これは上から下に向かって折り曲げる運動である。また、“伸張”はその逆で、“真っ直ぐにする”という意志的努力によって根本に曲がっていた物体を下から上に向かって真っ直ぐにする運動である。そして“進行”は方向の定まらない運動とされている。

② 横方向の運動は方向の定まらない運動とされ、運動の種類として考えられず、すべて“進行”という種類に入れられている。これは、上下は意志的努力によって方向を定めることが出来たが、横は出来なかったと言うことである。横はいろいろな方向があるために方向を一定として捉えることが出来なかったと考えられる。

③ 上記特殊な意志的努力による4つの運動以外の運動はすべて方向の定まらない運動とされ、“進行”という種類に含まれている。従って、“進行”は非常に多くの運動を含んでいる。それらは上記の特殊な意志的努力以外の意志的努力に基づく運動と意志的努力によらない運動である。

以上より方向の定まらない運動の種類、“進行”は非常に多くの運動を含んでいる。“持ち上げること”等4つの運動は特殊な意志的努力によって縦方向に方向付けされた運動で、それぞれが独立した種類をなしている。

（2） 運動が5種類である理由

Vaiśeṣika 学派では、5つの運動を独立した種類と考える理由はそれぞれの運動の群に“持ち上げるという共通性”などの普遍が伴われているからであるとしている。すなわち、“持ち上げるという共通性”は“持ち上げること”という運動の群に対して共に同類であるという観念を起こし、“振り下ろすこと”という運動の群等を排除しようという観念を起こす原因である。そして Vaiśeṣika 学派では普遍、すなわち運動の種類は主観的でなく、客観的な実在でなければならないと考えられていた[24]。Vaiśeṣika 学派において5つの運動を種類と考えた理由は以下のように考察される。

Vaiśeṣika 学派では、“運動は運動するものをある場所から分離させ、次の場所へ結合させる”という考え方を基本としている。そのために運動を種類として客観的

に捉えるためには、方向の定まったものと定まらないものとを分けることが必要であったと考えられる。それ故、定まった方向を有する運動がまず独立した種類と考えられ、それ以外の運動はまとめられて１つの種類とされた。（１）で示したように、定まった方向はすべて縦方向である。 それ故、定まった方向を客観的に選ぶことの出来たのは縦方向以外にはなかったと考えられる。 そのため、“持ち上げること”等縦方向の４つの運動が種類となり、それ以外の運動は方向の定まらない運動とされ、“進行”という種類に入れられている。

以上より、Vaiśeṣika 学派で運動をこの５種類と考えたのは運動を場所の移動として捉え、時間の経過として捉えていなかったことに起因すると考えられる。

７－３、 継続的な運動

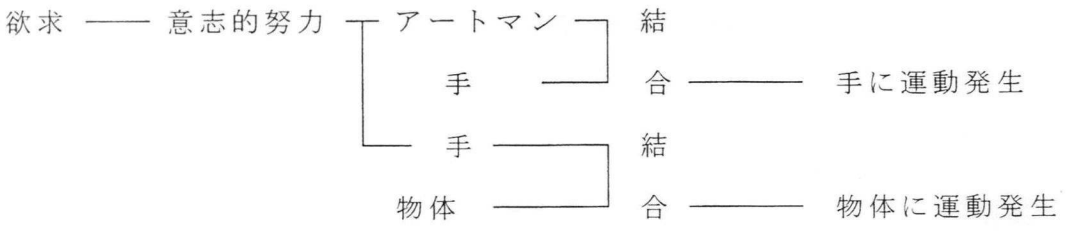
継続運動は Praśastapādabhāṣya 第３章「運動」第４節「アートマンに支配された運動」、第５節「アートマンに支配されない運動」に記載されている。ここではこの第４節および第５節において継続運動がどのような運動であったかを述べる。第４節ではアートマンに支配された運動、すなわち意志的努力に基づいた運動が記載され、[25] 第５節では初めから意志的努力に基づかない土性の物質、水、風（四大種のうち３種）の運動およびマナスの運動が記載されている[26]。その記載の仕方は第４節では意志的努力による手の運動からその運動が生ずるまでの運動過程が記されている。第５節では意志的努力以外の運動の原因によって生じた運動が記載されている。そして、第４節では手の持ち上げの運動、杵と臼との衝突運動、槍を投げる運動、弓で射るときの矢の運動が記載されており、第５節では特殊な結合（衝動、衝突、＜それとそれに＞つながれた部分との結合）に基づく運動、落下運動、水の流出運動、ろくろの回転運動、息という風の運動、マナスの運動、アドリシュタ（adṛṣṭa,不可見力と呼ばれ、ダルマ、アダルマによる力。原因の分からない運動はすべてアドリシュタに帰している。）による運動が記載されている。前述の継続運動の分類に従えば、第４節は“意識によって生じた運動（pratyaya-karman）”に分類される。しかも、身体の意識的な運動とそれに伴われた物体の動きは“意識の作用に基づく運動（satpratyaya-karman）”に分類され、それ以外の運動、すなわち身体の無意識的な運動や身体から離れた物体の運動などは“意識の作用から離れた運動（asatpratyaya-karman）”に分類されている。第５節は“意識によらない運動（apratyaya-karman）”に分類されている。第４節、５

節で記載されたこれらの運動がどのように記載されているか代表的なものを例にとって説明する。代表的なものとして、ここでは（１）身体の運動（例：手に伴われた物体の運動）、（２）杵と臼との衝突運動、（３）弓矢の運動を説明する。最後に、（４）物体運動の運動過程のパターンを示し、（５）空中での運動の原因となるヴェーガ（運動の勢い）について述べる。弓矢の運動における衝動過程のパターンは第４節槍を投げる運動、第５節落下運動、ろくろの回転運動にも使われている。

（１）　身体の運動（例：手に伴われた物体の運動）

身体およびそれに伴われた物体の運動は次の順序で生ずる。まず、アートマン、すなわち心に“物体を動かす”という欲求がわく。それにふさわしい意志的努力が生ずる。この意志的努力に基づいてアートマンと手との結合が生ずる。手に運動が生ずる。この意志的努力に基づいて手と物体との結合が生ずる。物体に運動が生ずる。これを図示すると第２図のようになる。

第２図　身体の運動

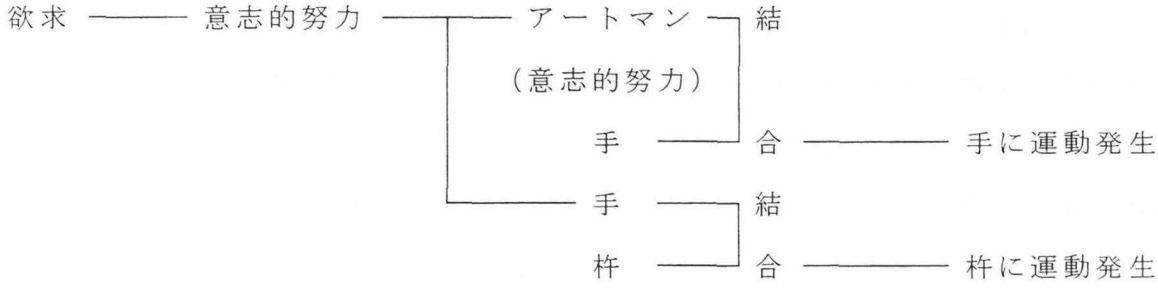


（２）　杵と臼との衝突運動

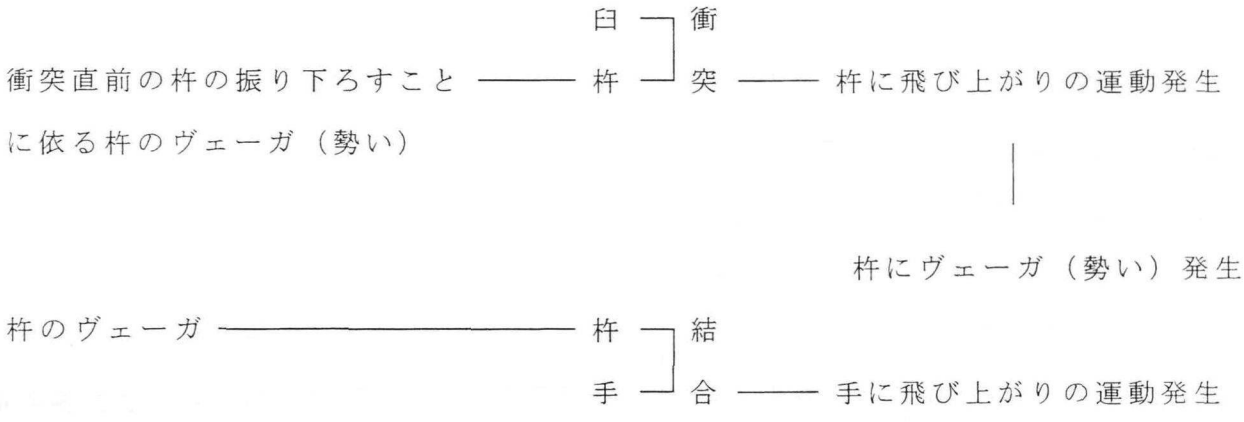
（１）で述べたように“杵を持ち上げる”と言う意志的努力によって杵は持ち上がり、“杵を振り下ろす”という意志的努力によって杵は臼めがけて振り下ろされる。ここまでの手と杵との運動過程は（１）と同じパターンを示している。ここでは杵と臼との衝突過程がどのように記載されているか見ていく。その過程は Praśastapādabhāṣya によれば、[27]“杵の振り下ろす最後の運動によって杵と臼にとって衝突という結合が生ずる。そのとき、杵の振り下ろしによって杵に生じた潜在能力、ヴェーガ（勢い）に基づいて杵に意識に依らない飛び上がりの運動が生ずる。それに伴われて杵に潜在能力、ヴェーガ（勢い）が生ずる。この杵に存するヴェーガに基づいて杵と手の結合から手に無意識的な飛び上がりの運動が生ずる。”と記載されている。これを図式化すると第３図のようになる。

第３図　杵と臼との衝突運動

(1)　身体部分の運動（杵を持ち上げる、振り下ろす運動）



(2)　臼と杵との衝突



（３）　弓矢の運動[28]

Praśastapādabhāṣya で説明された弓矢の運動は次の４つの部分に分けることができる。それらは(1)弓を引くときの手の運動およびそれに伴われた弓と矢の運動、(2)弓の弦から指を離したときの弓と弦の運動、(3)弦と矢が結合しながら、一緒に動くという弦と矢の特別なる結合、衝動における矢の運動、(4)空中における矢の運動である。これらの運動を図に示したのが第４図である。これらの運動は次のように説明されている。

(1)　弓を引くときの運動

ここでは次の３つの運動が説明されている。それらは弓を引くときの手の運動、それに伴われた弦と矢の運動、弦の動きに伴われた弓の両端の運動である。それらは第４図の(1)①の部分で示されている。人が弓に矢をつがえ、“弓を引く”という意志的努力によってアートマンと手の結合から手に弓を引くという運動が生ずる。それに伴われて手と弦と矢との結合から弦と矢に引くという運動が生ずる。そして弦の動き

に伴われて弦と弓の両端との結合から弓の両端に運動が生ずる。

(2)　弓の弦から指を離したときの弓と弦の運動

この部分は弓が束縛を解かれて運動を生ずるところである。第４図の(1)②、(2)③④の部分で示された運動である。すなわち、人が弓を十分に引いた後、指を弦から離す。弓に束縛がなくなるから弓の弾力によって弓を、丸くなっている状態から元の安定な状態へ戻すべく弓に運動が生ずる。その運動に伴われて弓と弦との結合から弦と矢に運動が生じる。そして弦の運動から弦に潜在能力（すなわち、ヴェーガ（勢い））が発生する。

(3)　衝動中での矢の運動

(2)によって弦に潜在能力が生じる。このとき、弦と矢の結合は弦の潜在能力に基づいて特殊な結合、衝動を発生する。衝動とは“推すもの”と“推されるべきもの”が一緒に動くような結合である。この結合を媒介として“推すもの”の運動が“推されるべきもの”に徐々に伝わって行くのである。ここでは、この衝動を通して弦が矢を推し、弦の運動が矢に伝わり、矢の運動が徐々に激しくなっていく。すなわち、衝動を通して弦の潜在能力に基づいて矢に最初の運動が生ずる。その矢の運動に伴われて矢に潜在能力（ヴェーガ（運動の勢い））が生ずる。さらに衝動のもとで弦が矢を推し続けるため、矢の潜在能力から矢により激しい運動が生じ、その運動からより強い潜在能力が生じる。このような方法でこの衝動のもとで矢の運動と潜在能力が相乗的に増して行く。これは第４図(2)⑤⑥の部分の運動である。

(4)　空中での矢の運動

ここでは(3)で矢の運動が激しくなり、ついに矢は弦との結合、衝動が保てなくなり、弦から離れてそれまでに蓄えられた潜在能力によって空間中を運動する。第４図⑦の部分である。この潜在能力は矢の重さが障害となり徐々に減少して行きついには０となる。そのとき、矢の重さによって落下する。

以上が Praśastapādabhāṣya によって述べられた弓矢の運動である。弓矢の運動を図式化した第４図の⑤から⑦までの図式、すなわち衝動過程における図式は回転や落下などに使われた方法である。

（４）　物体の運動

今まで見てきたように、Praśastapādabhāṣya 第３章第４節と第５節で記載された運動過程において、落下運動と川の流れは内に持っている重さと流動性を原因として生ず

第４図　弓矢の運動

（１）　身体部分の運動

①　弓を引く

欲求 —— 意志的努力 ┬ アートマンと手の結合 ——— 弓を引くという手の運動
　　└ 手と弦と矢との結合 ┬ ——— 弦と矢の引くという運動
　　└ 弦と弓の両端との結合 — 弓の両端の運動
　　（弓が丸くなる）

②　弓を解き放つ

欲求 —— 意志的努力 —— アートマンと指の結合 ——— 弦から指を離す動作
　　|
　　弓に束縛がなくなる

（２）　弓矢の運動

③　弓の運動

弓の弾力 ——————————————— 弓に運動発生
　　（弓：丸くなっている状態 ———— 元の安定な状態）

④　弦の運動

弓の弾力 ———————— 弓と弦との結合 ——— 弦と矢に運動発生
　　|
　　弦に潜在能力（勢い）発生

⑤　衝動中の矢の運動①

弦の潜在能力 ———————— 弦 ┐ 衝
　　矢 ┘ 動 ——————— 弦と結合中の矢に最初の運動発生
　　|
　　矢に潜在能力（勢い）発生

⑥　衝動中の矢の運動②

弦と矢の間の衝動 ┐
矢の潜在能力（勢い） ——————————— 弦と結合中の矢の運動
　　益々激しくなる。
　　|
　　矢の潜在能力増大

⑦　矢が弦から離れ、空間中での運動。

衝動中に得られた ———— 空間と矢との結合、 ———— 矢が落下するまで
矢の潜在能力　　分離の繰り返し　　の諸々の運動

る。それ以外の物体の運動は特殊な結合（衝動と衝突）を媒介として同じパターンで説明されている。すなわち、「推すもの」と「推されている物体」との間に生じた衝動を介して「推すもの」の推進力を原因として物体に運動が生ずる。または「衝突する物体」と「衝突されるもの」との間に生じた衝突を介して「衝突する物体」のヴェーガを原因として衝突する同一物体に跳ね返りの運動が生ずる。その運動の発生の仕方は次の順序で生ずる。

（ｉ） 特殊な結合：

(1) 衝動

① 衝動は「推しているもの」と「推されている物体」との間に生じた結合で、この結合を介して、運動の推進力が「推しているもの」から物体へ徐々に伝えられる。

② 衝動を介して、「推しているもの」の推進力を原因として物体に最初の運動が生ずる。

③ この最初の運動から物体中にヴェーガ（vega、勢い）が生ずる。

④ さらに衝動中において、物体は生じたヴェーガから運動を生じ、その運動によってヴェーガはさらに増す。このように衝動中においては「推しているもの」の運動が物体に伝わり、物体の運動は益々激しくなり、ヴェーガもまた増してくる。ついに、物体は衝動から離脱する。

(2) 衝突

① 衝突は「衝突するもの」のヴェーガ（勢い）に基づいて「衝突するもの」と「衝突されるもの」とを一瞬結合させ、この結合によって生じた運動によって両者をすぐに分離させてしまうような結合で、衝突前の推進力（ヴェーガ）を衝突後の物体へ伝える結合である。例えば、杵が臼に衝突して、杵が跳ね返る運動において、衝突直前の杵のヴェーガ（勢い）を原因として、衝突後、杵に跳ね返りの運動が生ずる。

② 衝突を介して、「衝突するもの」（杵）の衝突直前のヴェーガを原因として衝突後の物体（杵）に最初の跳ね返りの運動が生ずる。

③ この最初の運動から物体中にヴェーガが生ずる。

（ⅱ） 特殊な結合から離れた後の物体の運動

物体は結合中に得られたヴェーガ（勢い）に基づいて、ヴェーガが無くなるまで運動を続ける。

これらの過程を図に示すと第５図のようになる。

第５図　物体の運動

①　特殊な結合

推すものの推進力 ―― 推すもの ― 衝
推される物体 ― 動 ―― 物体に最初の運動発生
|
物体にヴェーガ発生

衝突するもの ― 衝
衝突する物体のヴェーガ ―― 衝突する物体 ― 突 ―― 物体に最初の跳ね返り運動発生
|
物体にヴェーガ発生

②　衝動中に於ける物体の運動

推すものの推進力 ―― 推すもの ― 衝
推される物体 ― 動
物体中のヴェーガ ―― 物体の運動激しさ増す
|
物体のヴェーガ（勢い）増大

③　空中での運動

物体中のヴェーガ（勢い） ― 空間との結合分離 ―― 特殊な結合から離れた物体の運動
周囲の抵抗
重さ
物体中のヴェーガ減少

（５）　ヴェーガ（運動の勢い）

最後に物体に動力が働いていないときの物体の運動（例えば、空中での物体の運動）の原因となるヴェーガ（運動の勢い）について述べておく。

ヴェーガは特殊な結合に基づいた運動から生ずる運動の勢いであって、単なる運動からは生じない。このヴェーガは瞬間的な運動を一定方向へ継続させるために必要なある種の能力である[29]。空中での運動では矢が落ちないように一定方向を保つために横方向の運動の原因となっている。このとき、重さが障害となる。そのため、矢の横方向の運動の勢い、すなわちヴェーガが徐々に減少していき、０になったとき、落下が生ずる。ひとたび矢に落下運動が生じたとき、矢は重さという推進力を常に内に持っているため、矢は常に衝動過程を生じている。すなわち、最初の瞬間では矢は重さのため落下する。この落下によって矢はヴェーガ（運動の勢い）を生ずる。第２瞬間時以降では矢は常に重さという推進力に駆り立てられているから重さとヴェーガの両方から落下運動が生ずる。そのため、その過程の中、すなわち落下中ではヴェーガ、すなわち運動の勢いは増してゆき、落下は次第に速くなっていくと考えられる[30]。このようにヴェーガ（運動の勢い）は特殊な結合、すなわち衝動や衝突等のもとで生じた運動から生じ、運動を継続させるためのある種の能力、運動の勢いである。

７－４、　身体の運動

Vaiśeṣika 学派では身体の運動は心の中、すなわちアートマンの中で、対象の認識から一連の意識過程を経て得られた意志的努力によって生ずる。ここではこの意識過程を見ておく。そして物体運動の潜在的能力（vega）と記憶に必要な潜在的能力、潜在印象（bhāvanā）との間にどのような関係があるか調べる。

（１）　認識から身体の運動が生ずるまでの意識過程

アートマンに生起する意識過程はアートマンとマナスとが結合状態にあるとき、次の順序で発生する。

① アートマンに意志的努力が生じたとき、マナスはこの意志的努力によってアートマンと感覚器官が外界の対象物と接している場所へ動かされ、これらと接触することによってアートマンに対象物を認識させる[31]。

② アートマンが対象を認識した後、ダルマ（善業の功徳）の作用によってアートマンに快感が生ずる。あるいはアダルマ（悪業の罪悪）の作用によって不快感が生ず

る。また、記憶からも快感、不快感が発生する。[32]

③　快感に基づいてそれを得たいという欲求がアートマンに生ずる。不快感に基づいてそれを避けたいという嫌悪が生ずる。[33]

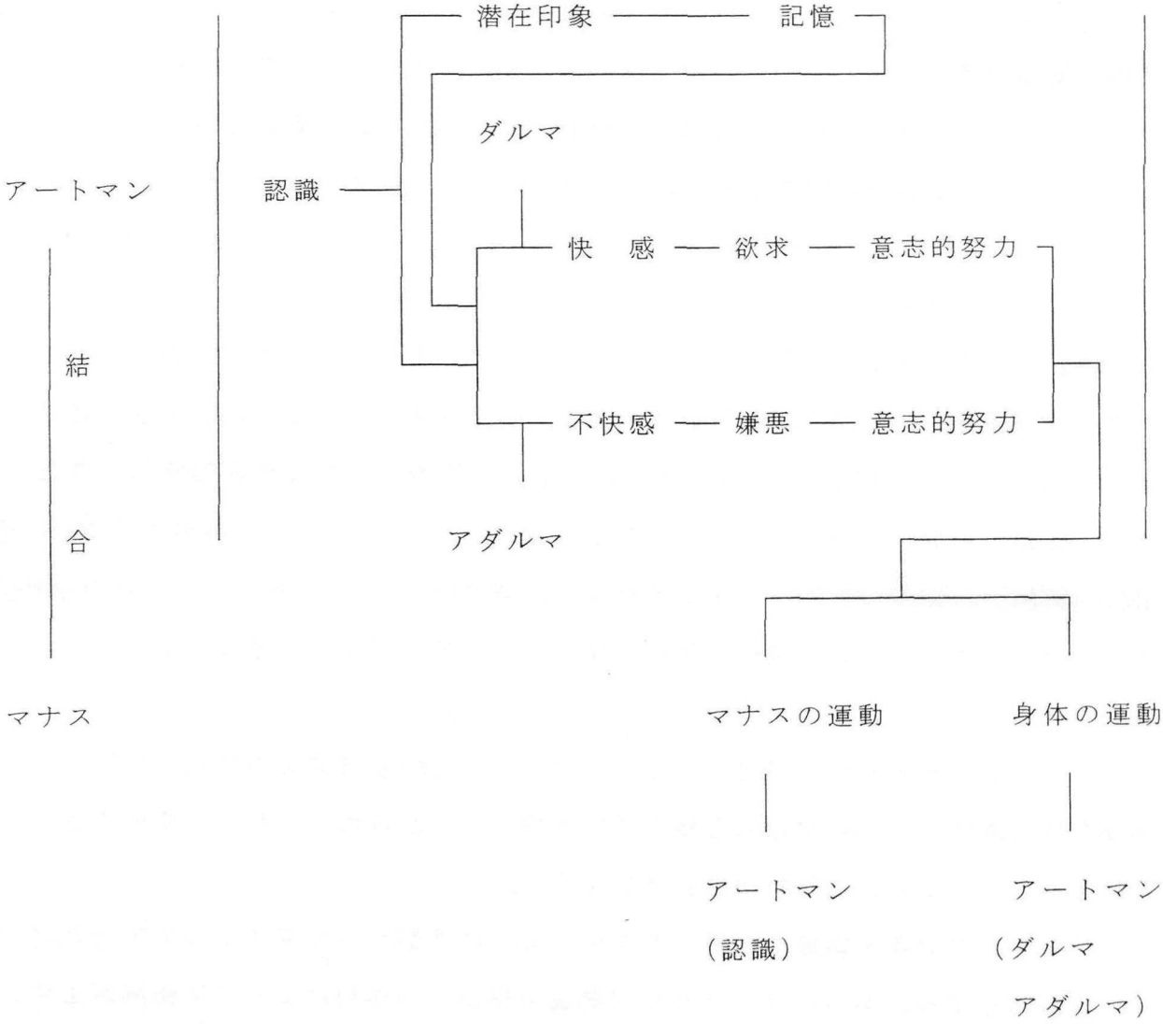
④　欲求に基づいてそれを得ようとする意志的努力が生ずる。嫌悪に基づいてそれを回避しようとする意志的努力が生ずる。[34]

⑤　この意志的努力に基づいて身体の運動が生ずる。体内ではマナスに運動が生ずる[35]。

⑥　運動の結果、身体の運動ではその倫理的結果によって、その人のアートマンにダルマあるいはアダルマが発生する。マナスの運動では対象物をアートマンに認識させる。

以上のような意識過程を図示すると第６図のようになる。

第６図　認識から身体の運動が生ずるまでの意識過程



（２）　運動物体の潜在的能力、vega と記憶に必要な潜在的能力、bhāvanā との比較

Praśastapādabhāṣya では２つの潜在的能力、vega（勢い）と bhāvanā（潜在印象）がもっと広い概念、saṃskāra（潜在能力）の中で一緒に取り扱われていた[36]。この２つの潜在的能力について、発生パターンが全く類似していることを以下に示す。

①　物体の運動については６－３で示したように、衝動（nodana）あるいは衝突（abhigāta）という「推すもの」と「推される物体」との間に働いている特殊な結合を媒介として「推すもの」の推進力が物体に伝わり、物体に運動が発生するとされた。

（ｉ）　特殊な結合、衝突による物体の運動

衝突は「衝突するもの」と「衝突されるもの」との間にできた一瞬の接触である。この接触によって物体に跳ね返りの強い運動が生じ、その運動によって物体に強いヴェーガが発生する。このヴェーガによって衝突後の運動が物体に次々に生ずる。

（ii）　特殊な結合、衝動による物体の運動

衝動は「推すもの」と「推されている物体」との間に生じた接触である。この接触を通して「推すもの」の運動が物体に徐々に伝わっていく。初め、物体に弱い運動が生ずる。この運動によって物体に弱いヴェーガが発生する。このヴェーガと衝動とから物体により強い運動が生ずる。それにつれてより強いヴェーガが発生する。このような方法で物体の運動とヴェーガは相関的に増大する。この増大によって衝動が持ちこたえられなくなったとき、物体は「推すもの」から離れ、その増大したヴェーガによって空間中を次々に運動する。周囲の抵抗や重さによってヴェーガは徐々に減少し、ついに０となる。物体は重さのため落下する。

以上、物体の運動は６－３で示したように第５図のように示される。

②　記憶に必要な潜在的能力、潜在印象（bhāvanā）

Vaiśeṣika 学派では記憶はある事柄の認識がそれに伴われたアートマンとマナスとの特殊な結合を通して後々までアートマン、すなわち心に刻印されることであると考えられた。その認識はじきに消えてしまうものであるが、これが持続して記憶として残るために必要な保持能力が潜在印象（bhāvanā）と呼ばれる能力（saṃskāra）である。Praśastapādabhāṣya によれば、この潜在印象が非常に強いとき、それから記憶が生ずるとされた。また、潜在印象の生じ方は認識の度合いによって３つの方法に分けられていた。それらは強烈なる認識による強い潜在印象、通常の認識の繰り返しによって得られた強い潜在印象、留意による認識から得られた強く、鮮明な潜在印象である。

（ｉ） 強い認識および留意による認識

強い認識は奇妙なあるいは珍しい事柄を経験したときに生ずる。また、留意による認識は未曾有の事柄、すなわち宗教的な想像上の事柄を見ようと努力をして、一瞬見えたとき生ずる認識で、電光の閃きを見るようにはっと心を打つような非常に強いものである。これら２つの認識は非常に強いため、それに伴われたアートマンとマナスとの１回の結合だけで記憶を生ずるに十分な潜在印象を発生させる。

（ii） 通常の認識の繰り返し

通常の経験は弱い認識を生ずる。この認識からそれに伴われたアートマンとマナスとの結合を通して弱い潜在印象が生ずる。同じ経験を繰り返すことによって、すなわちその認識に伴われたアートマンとマナスとの度々の結合を通して、認識と潜在印象とは相関的に増大する。ついに記憶を生ずるに十分な強い特別なる潜在印象が発生する。

と Praśastapādabhāṣya では説明されていた。これから記憶を生ずる過程は第７図のように示される。

以上のことから第５図と第７図とを比較することにより、運動および記憶の発生の仕方が全く類似していることが分かる。すなわち、運動物体の衝突という特殊な結合と記憶に必要な強い認識および留意による認識（それに伴われたアートマンとマナスとの特殊な結合）が対比される。また、運動物体の衝動という特殊な結合と記憶に必要な通常の認識の繰り返しとが対比される。特に、物体運動の潜在的能力、ヴェーガと記憶に必要な潜在的能力、潜在印象との発生過程が全く類似している。従って、この２つの潜在的能力は１つの潜在能力、サンスカーラに包括されている。

第７図　記憶

１、アートマンに生じた　①　強烈なる認識　paṭu-pratyaya

②　留意による認識　ādara-pratyaya

③　繰り返しによる認識　abhyāsa-pratyaya

に伴われたアートマンとマナスとの結合中において

（ｉ）　アートマン　アートマン

①不思議な事柄 ―― （強い認識作用） ―― （強い認識）

珍しい事柄

②未曾有の事柄 ―― （留意による認識作用） ―― （非常に強い認識）

③通常の事柄 ―― （通常の認識作用） ―― （弱い認識 anubhava）

学問、工芸、体操等

（弱い潜在印象）　（強い潜在印象）

（ii）　（認識の繰り返し）

（弱い潜在印象） ―――――――― （認識　増大）

（潜在印象増大）

（強い潜在印象）

２、（強い潜在印象） ―――――――― （記憶 smṛti）

反対の知識

陶　　酔

不　快　感

享　　楽

（潜在印象　減少）

（記憶　減退）

７－５、古代インドにおける Vaiśeṣika 学派の運動論と業の理論との比較

Vaiśeṣika 学派では物体の運動に関する潜在的能力であるヴェーガと、業の理論における潜在的能力であるダルマ、アダルマ、またはカルマアーシァヤとは種類の異なった能力であるが、いずれも運動または行為（karman）から生じた潜在的能力と考えられる。ヴェーガは動力から離れた物体の瞬間的な運動を継続させようとする運動の能力で、動力と物体との特殊な結合のもとで生まれた物体の運動から生ずる勢いである。ダルマ、アダルマまたはカルマアーシァヤは人が意志を持った身体の運動、すなわち行為（karman）をなしたとき、その人の心（アートマン）に生じた倫理的な残余感で、輪廻の世界で後の世でその人に果報を生ぜしめる能力である。

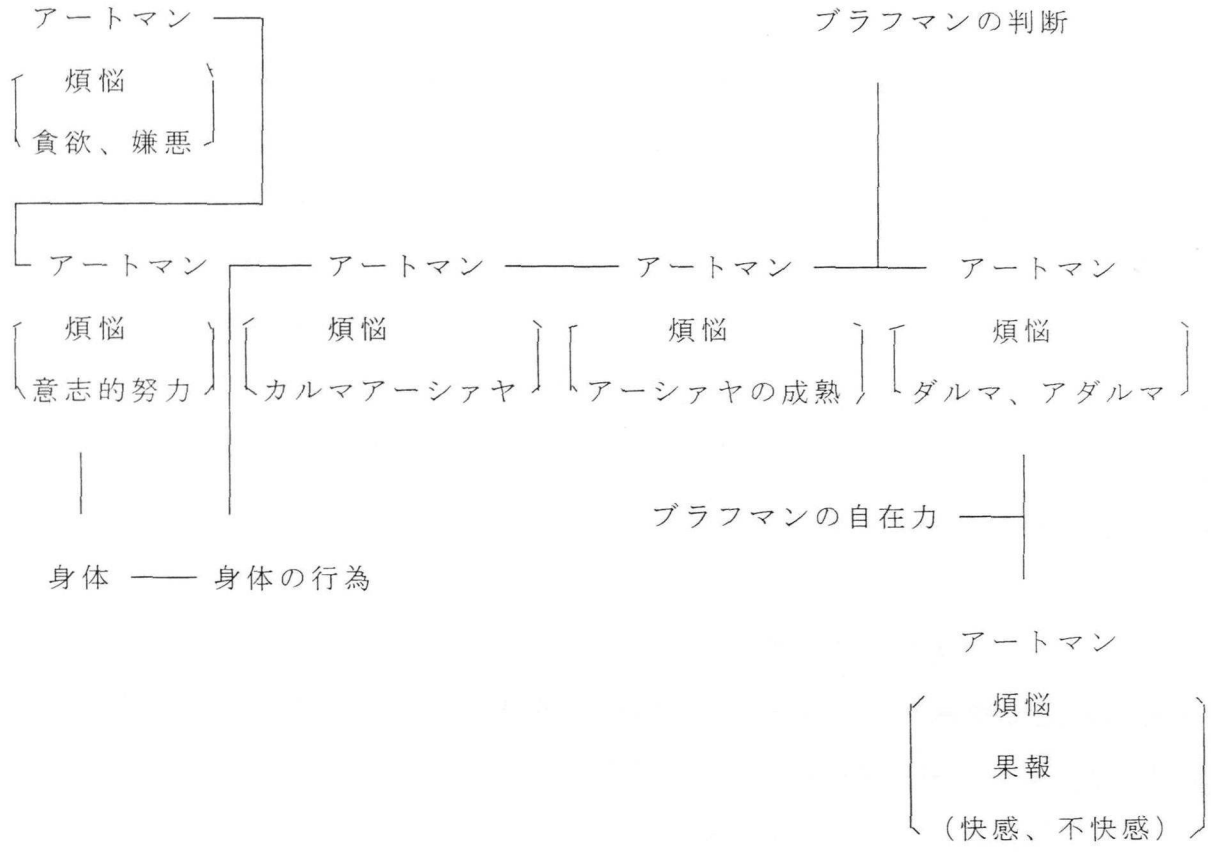
身体の運動は意志的努力によって生じ、その意志的努力によって継続されるので、物体の運動と同じような運動の能力は必要としない。この意志的努力は６－４で示したように心の中の意識過程の１つの状態で、ダルマ、アダルマの影響を受けている。従って、身体の運動はダルマ、アダルマの影響を受けていると考えられる。しかし、動力から離れた物体の運動は前述のようにヴェーガによって継続される。このヴェーガと対象を認識した後に生ずる潜在印象とはサンスカーラ（潜在能力）というカテゴリーに入り、記憶および運動の発生の仕方においてパターン的に類似している。

ここでは運動および記憶の発生の仕方と Vaiśeṣika 学派の業の理論における果報の発生の仕方を比較することによって、ヴェーガおよび潜在印象とカルマアーシァヤまたはダルマ、アダルマとはパターン的に違っていることを示し、それによって Vaiśeṣika 学派の運動論の内、物体の運動はインド哲学の他学派と違って、業の理論を引きずったものでないことを示したいと考える。ヴェーガと潜在印象については６－４で述べたので、ここでは Vaiśeṣika 学派の業理論について述べる。

ダルマ、アダルマまたはカルマアーシァヤは人が行為をなしたとき、その人の心に生じた倫理的な残余感である。この残余感は煩悩を伴うことによって成熟し[37]、神の関与によって果報を生ずる[38]。この果報は行為をなした人に後の世で神の偉大なる自在力によって与えられる。しかし煩悩を断ち切った人にとってはカルマアーシァヤが成熟しないため、果報が生じない[39]。従ってこのような人は輪廻の中で再生されることがないため、解脱に達したといわれる。カルマアーシァヤの成熟の仕方はちょうど籾殻のついた米粒が発芽するように煩悩に包まれたアーシァヤは心の中で発芽し、実が熟成する。この成熟したアーシァヤを創造神ブラフマンは正しく理解し、公平な立

場からそれがダルマなのかアダルマなのかを判断し、その結果を、行為のなした人にそれぞれ神の偉大なる力によって報わしむる。このような潜在的能力がカルマアーシァヤまたはカルマンまたはアーシァヤである。この潜在的能力の発生から果報までのカルマンの移行過程は第８図のようになる。

第８図　カルマアーシァヤの移行過程



以上のことから物体の運動および記憶の発生過程と業理論におけるカルマアーシァヤの移行過程とを比較すると、すなわち第５図および第７図と第８図とを比較するとパターン的にかなり違っている。カルマアーシァヤに神が関与することは大いなる違いであるが、それを別にしてカルマアーシァヤの成熟までの移行過程と運動および記憶の発生過程とを比較する。

カルマアーシァヤが成熟するためには煩悩という潜在的能力がカルマアーシァヤに伴われなければならない。しかし、運動の潜在的能力、ヴェーガが増大するためには衝動という「推す動力」と物体との特殊な結合だけが必要である。また、記憶の発生においても潜在印象が増大するためには認識作用というアートマンとマナスとの特殊

な結合だけが必要である。潜在的能力はなくなるまで永続的であるが、結合はそのときだけである。

ヴェーガは物体が空間中を運動しているとき、重さまたは周囲の抵抗などによってその強さが減少する。また、潜在印象は苦しみまたは不快感や陶酔などによってその強さが減少する。そのため、人が生まれ変わるとき、前世で残された潜在印象は生まれるときの苦しみから消失してしまう。[40]しかし、カルマアーシァヤの多くは前世から現世にそのまま受け継がれ、後に成熟して果報をその人に与える。　このような比較から、ヴェーガはパターン的に記憶を生ずるための能力、潜在印象と非常に類似していたが、カルマアーシァヤとはパターン的に全く違う種類のもであった。それ故、物体の運動の理論はパターン的に業の理論に引きずられたものではなく、独立なものであると考えられる。しかし、身体の運動は意志的努力によって生ずるが、意志的努力は業の潜在的能力、ダルマ、アダルマに影響されるので、業の理論に深く関わっているものと考えられる。また、Vaiśeṣika 学派の業の理論で用いられたカルマンという言葉はカルマアーシァヤ、すなわち“行為の＜後に＞心に横たわる能力（倫理的残余感）”という言葉の省略形と考えられる。

７－６、　インド運動論と因果律

この Vaiśeṣika 学派の運動論は Praśastapādabhāṣya の注釈書、Vyomavatī によれば、Vaiśeṣika 学派特有の因果律の影響を非常に強く受けて出来上がったものである。以下において Nyāyakandalī と Vyomavatī（Nyāyakandalī より早い時期）を使用して Vaiśeṣika 学派の運動論が因果律によってどのように固められていたかを示していきたいと考える。

（１）　Vaiśeṣika 学派の因果律

前述したように、Vaiśeṣika 学派による因中無果論は原因と結果は全く別個のもので結果は全く新しい存在であると考えられていた。この因中無果論では結果は種々の原因の集合から生じたものであるとされた。[41]Nyāya-Vaiśeṣika 学派ではこれら種々の原因を３種類に分けていた。それらは内属因（samavāyikāraṇa）、非内属因（asamavāyikāraṇa）および動力因（nimittakāraṇa）である。[42]内属因は結果と不可分離の関係にあって、結果を包摂する原因となる基体（すなわち、実体）である。非内属因は内属因と親密なる関係にあって、結果を生み出す能力を持つ原因である。
上記の２原因以外のすべての原因が動力因と呼ばれていた。

Vaiśeṣika 学派ではこのような３種の原因を使って運動が説明されていた。以下で、物体の運動が因果律でどのように説明されているか見て行く。

（２）　Vyomavatī において注釈された因果関係

Vyomavatī および Nyāyakandalīi において、内属因が１５例、非内属因が２８例、動力因が１２例が因果関係として注釈されている[43]。これらの因果関係について次のようなことが結論される。

①　運動および潜在能力発生に際しては運動物体が内属因とされている。

②　運動発生に際しては非内属因の殆どがこの運動を直接発生させる“結合”にあてられている。しかし、槍の空中での運動では衝動中に得られた槍の潜在能力（運動の勢い）、弓の運動では弓を引いたときに生じた弓の弾力、落下では重さおよび潜在能力がそれぞれ非内属因とされている。これらのものは運動を直接発生させる原因である。また、潜在能力発生ではこの能力を直接発生させる運動が非内属因とされている。以上のことから、非内属因は結果を発生させるための直接の原因である。

③　動力因は注釈されている個所が少ない。そこで、非内属因と動力因との関係を調べ、それによって考察すると、動力因は非内属因を発生させ、非内属因は結果を発生させるものである。

（３）　因果関係について Praśastapādabhāṣya で用いられた語形

ここでは Vyomavatī および Nyāyakandalī において内属因、非内属因、動力因と注釈されている個所を Praśastapādabhāṣya では文法的にどのような語形が使われているのか調べた。その結果、α を内属因、γ を非内属因、β を動力因および δ を結果とすると

α (Locative) β -apekṣamāṇa (Ablative) γ (Ablative) δ (Nominative) utpadyate.

（α において δ は β に依存する γ から生ずる。）

または

γ (Nominative) β (Accusative) apekṣamāṇa (Nominative) α (Locative) δ (Accusative) karoti (または ārabhate) .

（β に依存する γ は α において δ を生ずる。）

の形で書くことができる。

（４）　運動の発生過程を因果律によって再構成する。

Vyomavatī では Praśastapādabhāṣya 記載の文章すべてについて因果律が注釈されているわけではなく、部分的に注釈されている。ここで得られた文型を Praśastapādabhāṣya 記載

の弓矢の運動に適用して、その発生過程を動力因、非内属因、結果に分解してみた。その結果を表にしたものが第９図である。それを動力因から非内属因に線を引き、非内属因から結果に線を引いて弓矢の運動過程を再構成したものが第１０図である。ただし、この第１０図では運動を結果とする因果律を中心に描いた。そのため、潜在能力を結果とする因果律は潜在能力を運動の下に描いた。従ってそのときは結果と書かれている運動が非内属因となり、非内属因と書かれている結合が動力因である。Praśastapādabhāṣya 記載の弓矢の運動過程は６－３で述べた。弓矢の運動過程を図式化したものが第４図である。それと第１０図を比較すると、全く同じであった。

また、杵と臼との衝突運動、落下運動および槍を投げる運動についても Praśastapādabhāṣya 記載の文章に前節の文型を適用して、動力因、非内属因、結果に分解し、再構成してみると全く因果律によって作られていることが分かった。また、ろくろの回転運動については Praśastapādabhāṣya では簡単に記されているので、Nyāyakandalī で因果関係を調べると全く因果律によって作られていることが分かった。以上より、Praśastapādabhāṣya 記載の運動過程は因果律によって作られたものであると結論される。

（５）　このように Praśastapādabhāṣya の運動論は因果律によって固められたものである。Vaiśeṣika 学派では運動は何か物体を動かす原因がなければ生じないと考え、運動という結果から原因を追及していったものである。その追求の結果、原因が意志的努力にたどりついた一連の運動過程（第１０図で示された弓矢の運動）が運動の分類、（Ｉ）“意識によって生じた運動”(pratyaya-karman)に属する運動である。その分類に入る運動過程は第４節「アートマンによって支配された運動」に記載された杵と臼との衝突運動、槍を投げる運動および弓矢の運動である。一方、落下運動は因果律で調べていくと、最後の原因が重さにたどりつく。これは“アートマンに支配されない運動”、すなわち“初めから意識に依存していない運動”、第５節「アートマンに支配されない運動」に属する。

以上より Vaiśeṣika 学派の運動論は Vaiśeṣika 学派の因果律によって固められたもので、それに従って運動の原因をずっと遡っていったものである。そして遡った最後の原因によって運動が分類されている。第４節「アートマンによって支配された運動」に入る運動は原因をずっと遡って人の意志的努力に至ったものである。原因をずっと遡って意志的努力以外の原因に至った運動過程は第５節「アートマンに支配されない運

第９図　因果関係で示された弓矢の運動（１）

（１）　身体部分の運動

	動力因	非内属因	結果

①　弓を引く

欲求	意志的努力	アートマンと手の結合 手と弦と矢との結合	弓を引くという手の運動 引くという弦と矢の運動
意志的努力	手と弦と矢との結合	弦と弓の両端との結合	弓の両端の運動

②　弓を解き放つ

欲求	意志的努力	アートマンと指の結合	弦から指を離す動作

（２）弓矢の運動

③　弓の運動

		弓の弾力	弓の運動

④　弓と弦の運動

	弓の弾力	弓と弦の結合	弦と矢との運動
弓の弾力	弓と弦との結合	弦の運動	弦に潜在能力（勢い）

⑤　弦と矢の結合に衝動発生および衝動中の矢の運動①

弦の潜在能力	弦と矢の間の衝動	矢の最初の運動	矢の潜在能力(勢い)

⑥　衝動中の矢の運動②

		弦と矢の間の衝動 矢の潜在能力（勢い）	弦と結合中の矢の運動

⑦　矢が弦から離れ、空間中での運動。

		衝動中に得られた 矢の潜在能力	矢が落下するまで の諸々の運動

第１０図　因果関係で示された弓矢の運動（２）

（１）　身体部分の運動

動力因	非内属因	結果
①　弓を引く		
欲求 —— 意志的努力 ——	アートマンと手の結合 ——	弓を引くという手の運動
	手と弦と矢との結合 ——	弦と矢の引くという運動
	｜	
	弦と弓の両端との結合 ——	弓の両端の運動 （弓が丸くなる）
②　弓を解き放つ		
欲求 —— 意志的努力 ——	アートマンと指の結合 ——	弦から指を離す動作

（２）　弓矢の運動

③　弓の運動		
	弓の弾力 ——	弓の運動
④　弦の運動		
弓の弾力 ——	弓と弦との結合 ——	弦と矢の運動
		｜
		弦の潜在能力（勢い）
⑤　衝動中の矢の運動①		
弦の潜在能力 ——	弦と矢の間の衝動 ——	弦と結合中の矢の最初の運動
		｜
		矢の潜在能力（勢い）
⑥　衝動中の矢の運動②		
	弦と矢の間の衝動	
	矢の潜在能力（勢い） ——	弦と結合中の矢の運動
		｜
		（矢の潜在能力増大）
⑦　矢が弦から離れ、空間中での運動。		
	衝動中に得られた 矢の潜在能力 ——	矢が落下するまで の諸々の運動

動」に属する。

7－7　インド運動論における認識論的な側面

Vaiśeṣika 学派では直接知覚は対象物との接触によって生ずる。すなわち、直接知覚は対象物と感覚器官とマナスとアートマンとの４つが同時に接触しているときに起こる。このように直接知覚は対象物と感覚器官、特に眼との接触によって起こるが、その接触は対象物の内、実体だけに生ずるのであって、性質や運動において生じない。直接知覚の対象が色などの性質や運動であったとしても接触は対象物である実体において生じ、性質や運動が感覚器官と接触することはない。従って、Vaiśeṣika 学派では実体の直接知覚の仕方は性質と運動とは少し違っていた。実体の知覚は対象物と感覚器官との接触によって生ずる。しかし、性質や運動は実体に内在したものと考えられている。従って、性質や運動の知覚は感覚器官と接触している実体を通して性質や運動が把捉されて知識が生ずると考えられている。Vaiśeṣika 学派では、対象物の知識は限定されるものの知識（すなわち、対象物の知識）が限定するものの知識（すなわち、普遍や特殊等の知識）によって生ずるという考え方を基本として生ずると考えられている。

Praśastapādabhāṣya に記載された直接知覚については、村上、宮元による研究、特に村上による詳細なる研究がある。[44]それらによれば、直接知覚による対象物の知識は限定されるものの知識（すなわち、対象物の知識）が限定するものの知識（すなわち、普遍や特殊等の知識）によって生ずるという考え方が基本になっている。そして直接知覚は３つの段階に分けることができるとされている。それらは判断を伴わない無分別の知覚が２段階、判断を伴う有分別の知覚が１段階である。

宮元や村上による認識論では一般的な直接知覚については詳細に述べているが、運動については述べられていない。

ここでは Vaiśeṣika 学派において瞬間的な運動が直接知覚によってどのように認識されていたかを調べる。村上によれば、直接知覚の３つの段階は次の通りである。

（１）Praśastapādabhāṣya に記載された一般的な直接知覚の３つの段階

(1) 無分別の直接知覚

①　直接知覚の第１段階

第１段階は対象との接触である。すなわち、対象、感覚器官、マナス、アートマ

ンの４つのものの接触である。

②　直接知覚の第２段階

第２段階は第１段階の対象物との接触によって対象物の普遍や特殊が判断を伴わない無分別の状態で把捉される。この状態では普遍と特殊は他の個物との関係が以前の記憶と結びつきがなく、これが普遍である、あれが特殊であるというように識別して理解するに至らない状態の知覚である。

（2）有分別の直接知覚

③　直接知覚の第３段階

第３段階は判断を伴う有分別の知覚であって、②で得られた普遍や特殊が以前の記憶と結びついて、対象物と他の個物との共通性および排除性が認識される状態となる。次に、普遍や特殊に限定されて対象物の実体等の知識が概念化され、それに続いて性質、運動等の知識が限定するものに依存して概念化されていく。

例えば、白い牛が動いているという対象について、①存在している。②実体である。③地の元素から出来ているものである。④角がある。⑤白い。⑥白い牛である。⑦それが動いている。という順序で知覚されるとしている。

以上が Praśastapādabhāṣya に記載された直接知覚に対する考え方である。

（２）　運動についての直接知覚

前述したように、性質と運動の直接知覚の仕方は実体の直接知覚の仕方と少し違う。性質と運動は実体に内在しているため、感覚器官と接触している実体を通して知覚される。実体についての直接知覚は上述の認識の仕方でよいと考えられるが、性質と運動は実体との内属関係から知覚される。では、性質や運動の知識はどのように知覚されるのであろうか。

(1) Vaiśeṣika 学派では、実体と性質と運動における直接知覚はそれぞれの普遍に基づいて知覚されるとしている。まず、実体性、性質性、運動性が知覚され、それに限定されて実体、性質、運動が知覚される。これらの普遍はそれぞれの基体に内属したものである。すなわち、実体性は実体に内属し、性質性は性質に内属し、運動性は運動に内属している。しかも性質および運動は実体に内在した属性とされている。従って、運動性は実体から見れば、実体に内属した運動にさらに内属しているものとなる

(2)　この普遍についてどのようなものであるか、少し述べる。

①　Vaiśeṣikasūtra　２－１－８によれば、牛性という普遍は「角を有し、＜背に＞隆

肉を有し、尾の端に毛があり、喉の下に垂肉がある」という牛の外観を特質としている。すなわち、牛性はこのような外観を特質とする牛という実体の共通性である[45]。

② Vaiśeṣikasūtra、Praśastapādabhāṣya およびそれらの注釈書において、運動性については書かれていない。そこで、①でいわれた牛性という普遍の特質を運動にあてはめてみると、運動性や持ち上げるという共通性などの普遍は次のように推論される。

運動性は動くあるいは動いているという共通性、すなわち動き一般である。このことは言い換えてみると、運動について、“運動することによって運動体をその場所から分離させ、次の場所と結合させる。”という Vaiśeṣika 学派の定義がある。その定義を特質とする、運動体が動くという共通性が運動性であると考えられる。従って、「持ち上げるという共通性」は“持ち上げようという意志的努力によって運動体を下の場所から分離させ、上の場所と結合させる”という運動を特質とする、持ち上げるという動きの共通性と考えられる。また、「振り下ろすという共通性」は“振り下ろそうという意志的努力によって運動体を上の場所から分離させ、下の場所と結合させる”という運動を特質とする、振り下ろすという動きの共通性と考えられる。このようにして「持ち上げるという共通性」、「振り下ろすという共通性」等の普遍が推測される。

(3) ここで運動の直接知覚について考える。

Vaiśeṣika 学派では感覚器官と接触しているのは対象物の実体だけである。それ以外のものはその内属関係から知覚される。すなわち、感覚器官と接触している実体を通して性質や運動からそれぞれ性質性、運動性が無分別の段階で知覚される。それに限定されて性質や運動が知覚される。

① 例えば、性質についての知覚は Vaiśeṣikasūtra 8－9 における Candrānanda の注釈によれば、白いという知覚は次の順序で行われる[46]。

実体の把捉を通して白いという性質に内属している「白さ」という普遍がまず知覚され、その知覚によって「白さ」という普遍の知識が生じ、それに限定されて「これは白い」という性質の知識が生ずるとされている。

② 運動については書かれていないが、これを運動に適用してみると、運動の知覚は次のように推論される。

運動体と感覚器官が接触することによって、運動体が知覚される。その運動体を介して運動に内属する運動性、すなわち動きの共通性が知覚される。その知覚によっ

て運動性の知識が生ずる。それに限定されて「これは運動である」という知識が生ずる。例えば人が手を持ち上げるという運動の知覚について考えれば、次のように推論される。

まず、眼と動いている運動体、すなわち手が接触することによって手を通して手の動きから無分別の段階で「運動性」（すなわち、手が動いているという共通性）が知覚され、「手が動いているという共通性」の知識が生ずる。この普遍の知識に限定されて「これは手の運動（手の動き）である。」という知識が生ずる。さらに、無分別の段階で運動性に伴われて「持ち上げるという共通性」が知覚される。すなわち、“持ち上げようと言う意志的努力によって手を下の場所から分離させ、上の場所と結合させる”という動きの共通性が知覚される。その知覚によって、有分別の段階で「持ち上げるという共通性」という普遍の知識が生ずる。この普遍の知識から「これは手を持ち上げることである」という運動の知識が生ずる。このようにして運動の知覚が推論される。

７－８、　Vaiśeṣika 学派における運動論の展開

Vaiśeṣika 学派では物体の運動について２つの考え方が存在している。１つは Praśastapādabhāṣya およびその注釈書に書かれている運動論で、「推すもの」と「推される物体」との間に特殊な結合、衝動が作用して物体に最初の運動が生じ、その運動によって運動の能力、ヴェーガが生じる。この衝動のもとで物体の運動とヴェーガは相乗的に増加していく。「推すもの」から離れた後、物体の運動は衝動中に蓄積されたヴェーガによって生ずるという考え方である。他は Vaiśeṣikasūtra およびその注釈書に書かれている運動論で、衝動の作用のもとで唯１回の運動が生じ、それにつれてヴェーガが生ずる。「推すもの」から離れた後、物体の運動はこのヴェーガによって生ずるという考え方である。

この２つの考え方の内、Vaiśeṣikasūtra およびその注釈書に書かれている理論では衝動中での運動が雑に取り扱われている。

これら２つの考え方は Praśastapādabhāṣya および Vaiśeṣikasūtra のそれぞれの注釈書において、時代が変わっても元本の考え方通りにそのまま受け継がれている。

ここでは、このような２つの理論が１１世紀以後１７世紀ぐらいまで Vaiśeṣika 学派の中でどのような展開をしているのか、その一端を当時の Vaiśeṣika 学派の著作を調べ

ることによって見ていきたい。当時の著作を調査するにあたって、

① G. Kaviraj : The History and Bibliography of Nyāya- Vaiśeṣika Literature, Varanasi, 1982.

② B. K. Matilal : Nyāya- Vaiśeṣika (A History of Indian Literature, Vol. VI), Wiesbaden, 1977, pp. 53- 75.

③ K. H. Potter : Nyāya- Vaiśeṣika (Encyclopedia of Indian Philosophy Vol. II), Delhi, 1977, pp. 9-12.

を用いた。

Praśastapādabhāṣya の運動論のメカニズムが記載された注釈書は１０世紀の Vyomavatī と Nyāyakandalī の２書である。その後、Nyāyakandalī の注釈書が３書作られている。それらは１３世紀頃の Naracandrasūri による Nyāyakandalī Tippaṇa、１５世紀頃の Rājaśekharasūri による Nyāyakandalī Pañjikā および年代不明の Śiḍila による Kusumodgama である。これらの内、Nyāyakandalī の運動論に注釈しているのは年代不明の Kusmodgama である。[47]この注釈書では弓矢の運動で矢が空中を運動する個所で、矢は衝動で得られたヴェーガ唯１つによって空中を運動するという Vaiśeṣika 学派の説を擁護し、ヴェーガを瞬間的と考えた Nyāya 学派の説を批判している。それ以外には運動論の重要な個所に注釈はされていない。したがって、Praśastapādabhāṣya の運動論のメカニズムについて、発展は Vyomavatī と Nyāyakandalī で終わってしまったようである。また、Vaiśeṣikasūtra の注釈書は１２世紀頃の Anonymous Commentary および１５世紀の Upaskāra を除くと１９世紀までない。しかし、Praśastapādabhāṣya の注釈書でも初めの２章、Dravya（実体）と Guṇa（性質）だけを注釈した１１世紀の Kiraṇāvalī は１７世紀までに１５の注釈書が書かれている。中でも１６，１７世紀の注釈書が最も多く、１１もある。また、１２世紀の注釈書ではない Vaiśeṣika 学派の書物、Nyāyalīlāvatī は多くの人々によって愛読されたという。[48]そして９つの注釈書が書かれている。Nyāyalīlāvatī は書物の構成の仕方は Praśastapādabhāṣya の構成を踏襲している。しかし運動の章では運動の種類が５種であることが盛んに議論されているのみで、身体の運動および物体の運動についてそのメカニズムは一切記されていない。[49]

このように、１１世紀以後、物体運動のメカニズムを記載している著作は Vaiśeṣika 学派の著作の中で非常に少ない。

従って、１１世紀以後、Vaiśeṣika 学派の多くの人々は運動について、種類が５つで

あることの哲学的な議論だけを必要とし、物体運動のメカニズムなどには殆ど、興味を示していなかったと結論づけられる。

７－９、　結論

（１）　運動の特質

Vaiśeṣika 学派では運動を瞬間的と考え、「運動は運動するものをある場所から分離させ、次の場所へ結合させる」という場所の移動を運動の基本原則と考えた認識論的な運動論であった。この場所の移動を運動の基本原則と考えたため、運動という概念を分析した結果、「運動は運動を生じない」という考えにいたり、運動というカテゴリーは運動そのものを論ずるだけにし、運動を停止したり、生じたりする原因は他のカテゴリーに求められた。運動の停止は運動を瞬間的な場所の移動と捉えたため、運動の結果である、自ら作る結合によって生ずると考えられた。また、運動を生じる原因は“重さ、流動性、意志的努力および特殊な結合（衝動、衝突、＜その部分とそれに＞つながれた部分との結合）”であるとされた。このことから継続的な運動は運動の原因によって第１の瞬間的な運動が生じ、自ら作り出す結合によって滅し、第２の運動が運動の原因によって生じ、また壊れるというようにして瞬間的な運動が次々に生ずるために生ずると考えられた。

（２）　瞬間的な運動

この瞬間的な運動は５種類考えられていた。それらは“持ち上げること”、“振り下ろすこと”、“屈曲”、“伸張”および“進行”であった。これらの内、進行を除いた４種の運動は“持ち上げる”など特殊な意志的努力によって生じたもので、すべて縦方向の運動であった。すなわち、“持ち上げること”および“振り下ろすこと”はそれぞれ“持ち上げる”、“振り下ろす”という意志的努力に基づき、下から上へ、上から下へそれぞれ向かう直線的な運動である。また、“屈曲”は“折り曲げる”という意志的努力によって縦に真っ直ぐな物体の先端を根本に折り曲げる運動である。これは上から下に向かって折り曲げる運動である。“伸張”はその逆で、“真っ直ぐにする”という意志的努力によって曲がっていた物体を下から上に向かって真っ直ぐにする運動である。そして“進行”は方向の定まらない運動とされた。上記の４つ以外の運動はすべて方向の定まらない運動とされ、“進行”という種類に含ませた。従って、“進行”は非常に多くの運動を含んでいた。

何故に、これらの運動が種類と考えられていたのか次に考察する。

（３）　５つの運動が種類となった理由

Vaiśeṣika 学派では、５つの運動を独立した種類と考える理由はそれぞれの運動の群に“持ち上げるという共通性”などの普遍が伴われているからであるとしている。すなわち、“持ち上げるという共通性”は“持ち上げること”という運動の群に対して共に同類であるという観念を起こし、“振り下ろすこと”という運動の群等を排除しようという観念を起こす原因である。そして Vaiśeṣika 学派では普遍、すなわち運動の種類は主観的でなく、客観的な実在でなければならないと考えられていた。Vaiśeṣika 学派において５つの運動を種類と考えた理由は以下のように考察される。

Vaiśeṣika 学派では瞬間的な場所の移動を運動の基本原則としたため、運動を種類として客観的に捉えるためには、方向の定まったものと定まらないものとを分けることが必要であったと考えられる。それ故、定まった方向を有する運動がまず独立した種類と考えられ、それ以外の運動はまとめられて１つの種類とされた。前述したように、定まった方向はすべて縦方向である。 それ故、定まった方向を客観的に選ぶことの出来たのは縦方向以外にはなかったと考えられる。すなわち、上下、縦方向は意志的努力によって方向を定めることが出来たが、横方向は意志的努力によって方向を定めることが出来なかったということである。横は色々な方向があるため方向を一定として捉えることが出来なかったと考えられる。　そのため、“持ち上げること”等縦方向の４つの運動が種類となり、それ以外の運動は方向の定まらない運動とされ、“進行”という種類に入れられたのである。

このように、Vaiśeṣika 学派が運動をこの５種類と考えたのは運動を場所の移動として捉え、時間の経過として捉えていなかったことに起因すると考えられる。

（４）　継続運動の分類

継続運動は第１図の如く、大別して２種に分類された。（Ⅰ）“意識によって生じた運動”（pratyaya-karman）、すなわち意志的努力に基づく運動と（Ⅱ）“意識によらない運動”（apratyaya-karman）、すなわち意志的努力に基づかない運動とに分かれている。（Ⅰ）“意識によって生じた運動”は２つのサブグループ、“意識の作用に基づく運動”（satpratyaya-karman）と“意識の作用から離れた運動”（asatpratyaya-karman）とに分かれる。“意識の作用に基づく運動”は現在意識が作用している、すなわち意志的努力に基づく運動である。例えば、ものを持ち上げるとか弓を引くという運動であ

る。“意識の作用から離れた運動”は今まで意識が作用していたが、現時点では意識が作用していない、すなわち意志的努力からもはや離れた運動である。例えば、弓矢の運動については、Praśastapādabhāṣya では第３章第４節において意志的努力による弓を引くという運動から矢が弓から離れて空中を運動するまでの運動過程が記述されている。この運動過程において、“意識の作用から離れた運動”は弓の弦と矢を手で十分に引いて、手を弦から放した後の弓矢の運動である。この種類に属する運動は身体の無意識的な運動と意志の束縛から離れた物体の運動である。（Ⅱ）“意識の作用によらない運動”は意志的努力に基づかない運動であるため、“意識の作用から離れた運動”と“初めから意識が作用してない運動”に分類された。

（５）　運動過程と因果律

Praśastapādabhāṣya では継続運動は第３章第４節「アートマンに支配された運動」、第５節「アートマンに支配されない運動」に記載されている。その記載の仕方は第４節では意志的努力による手の運動からその運動が生ずるまでの運動過程が記述されている。第５節では意志的努力以外の原因によって生じた運動が記載されている。第４節では手の持ち上げの運動、杵と臼との衝突運動、槍を投げる運動、弓で矢を射るときの矢の運動が記載されており、第５節では特殊な結合に基づく運動、落下運動、水の流出、ろくろの回転、息という風の運動、マナスの運動、原因不明な運動（この運動は原因をすべてアドリシュタに帰している）が記載されている。このような運動を記述した運動過程は Vaiśeṣika 学派の因果律によって固められたものであった。運動を結果と考えたとき、原因を因果律に従って追求してゆき、原因が意志的努力にたどりついた一連の因果関係がそのまま Praśastapādabhāṣya に記載された運動過程になっていた。そしてその運動過程は運動の分類、（Ⅰ）“意識によって生じた運動”（pratyaya-karman）に属する運動である。その分類に入る運動過程は第４節「アートマンによって支配された運動」に記載された運動である。最後の原因が意志的努力以外の原因にたどりついた運動過程は“アートマンに支配されない運動”、すなわち第５節に属する。このように運動過程が因果律に従っていたため、継続運動の分類は意識の作用に基づいた分類になっていた。

（６）　物体運動およびその発生過程

物体運動において運動発生のメカニズムは多くの運動について記述されている。代表的な例は第４節の杵と臼との衝突運動における衝突過程と弓矢の運動における衝動

過程である。そしてこの２つの特殊な結合に基づいた運動から生じたヴェーガは動力から離れた物体の運動、例えば、空中での矢の運動を継続させるために必要な能力、運動の勢いである。弓矢の衝動過程のパターンは槍を投げる運動、落下運動、ろくろの回転運動にも使われていた。そのメカニズムは次のようなものであった。

(1) 衝動

① 衝動は「推しているもの」と「推されている物体」との間に生じた結合で、この結合を介して、運動の推進力が「推しているもの」から物体へ徐々に伝えられる。

② 衝動を介して、「推しているもの」の推進力を原因として物体に最初の運動が生ずる。

③ この最初の運動から物体中にヴェーガ（vega、勢い）が生ずる。

④ さらに衝動中において、物体は生じたヴェーガから運動を生じ、その運動によってヴェーガはさらに増す。このように衝動中においては「推しているもの」の運動が物体に伝わり、物体の運動は益々激しくなり、ヴェーガもまた増してくる。ついに、物体は衝動から離脱する。

(2) 衝突

① 衝突は「衝突するもの」のヴェーガ（勢い）に基づいて「衝突するもの」と「衝突されるもの」とを一瞬結合させ、この結合によって生じた運動によって両者をすぐに分離させてしまうような結合で、衝突前の推進力（ヴェーガ）を衝突後の物体へ伝える結合である。例えば、杵が臼に衝突して、杵が跳ね返る運動において、衝突直前の杵のヴェーガ（勢い）を原因として、衝突後、杵に跳ね返りの運動が生ずる。

② 衝突を介して、「衝突するもの」（杵）の衝突直前のヴェーガを原因として衝突後の物体（杵）に最初の跳ね返りの運動が生ずる。

③ この最初の運動から物体中にヴェーガが生ずる。

(3) 特殊な結合から離れた後の物体の運動

物体は結合中に得られたヴェーガ（勢い）に基づいて、ヴェーガが無くなるまで運動を続ける。

これらの過程を図に示したのが第５図である。

(4) ヴェーガ

ヴェーガは上記の特殊な結合に基づいた運動から生ずる運動の勢いであって、単なる運動からは生じない。そしてヴェーガは瞬間的な運動を一定方向へ継続させるため

に必要なある種の能力である。空中での運動では矢が落ちないように一定方向を保つために横方向の運動の原因となっている。このとき、重さが障害となる。そのため、矢の横方向の運動の勢い、すなわちヴェーガが徐々に減少していき、0になったとき、落下が生ずる。ひとたび矢に落下運動が生じたとき、矢は重さという推進力を常に内に持っているため、矢は常に衝動過程を生じている。すなわち、最初の瞬間では矢は重さのため落下する。この落下によって矢はヴェーガ（運動の勢い）を生ずる。第2瞬間時以降では矢は常に重さという推進力に駆り立てられているから重さとヴェーガの両方から落下運動が生ずる。そのため、その過程の中、すなわち落下中ではヴェーガ、すなわち運動の勢いは増してゆき、落下は次第に速くなっていくと考えられる。このようにヴェーガ（運動の勢い）は特殊な結合、すなわち衝動や衝突等において生じ、運動を継続させるためのある種の能力、運動の勢いである。

物体の運動は落下運動と川の流れを除いては衝突および衝動という特殊な結合を媒介として同じパターンで説明されている。すなわち、「推すもの」と「推されている物体」との間に生じた衝動を介して、「推すもの」の推進力を原因として物体に運動が生ずる。または「衝突する物体」と「衝突されるもの」との間に生じた衝突を介して「衝突する物体」のヴェーガを原因として衝突する同一物体に跳ね返りの運動が生ずる。そしてこの2つの特殊な結合から離れた物体の運動、例えば空中での物体の運動はその結合時に得られた運動の勢い、ヴェーガによって次々に生ずる。この運動過程を示した図が第5図である。落下運動は内に重さという運動の原因を持っているから、落下物体には常に重さという動力が働いていることになる。それ故、落下運動は常に衝動過程を生じていると考えることができる。また、川の流れについても、内に流動性を持っているからそれによって流れが生ずる。しかし、落下運動と同じように常に衝動過程を生じていると考えた説が Vaiśeṣikasūtra の Anonymous Commentary に紹介されている。

以上より、物体運動の発生過程において衝動と衝突は非常に重要な役割を演じていた。そしてヴェーガ、すなわち運動の勢いはこの2つの特殊な結合に基づいた運動から生じ、物体運動において動力から離れた物体の運動を継続させるという非常に重要な役目を持った能力である。

（7） ヴェーガの発生過程と潜在印象の発生過程との比較

この運動の勢い、ヴェーガは Praśastapādabhāṣya 第2章性質のサンスカーラ（潜在能

力）の節で、記憶の原因となる潜在印象と同じに論じられている。すなわち、ヴェーガと潜在印象とはサンスカーラ（潜在能力）という種類に属している。この２つの潜在的能力について、発生パターンが全く類似していた。以下においてそれを示す。

ヴェーガは既に述べたように特殊な結合、衝動および衝突のもとで生じた運動から生ずる。その発生過程は第５図のように示される。

潜在印象（bhāvanā）は記憶を生ずるための潜在的能力である。Vaiśeṣika 学派では記憶はある事柄の認識がそれに伴われたアートマンとマナスとの特殊な結合を通して後々までアートマン、すなわち心に刻印されることであると考えられた。その認識はじきに消えてしまうものであるが、これが持続して記憶として残るために必要な保持能力が潜在印象(bhāvanā)と呼ばれる能力（saṃskāra）である。Praśastapādabhāṣya によれば、この潜在印象が非常に強いとき、それから記憶が生ずるとされた。また、潜在印象の生じ方は認識の度合いによって３つの方法に分けられていた。それらは強烈なる認識による強い潜在印象、通常の認識によって弱い潜在印象が生ずる。通常の認識を繰り返すことによって強い潜在印象が得られる。留意による認識から得られた強く、鮮明な潜在印象である。このような潜在印象による記憶の発生過程は第７図のようになる。

以上のことから第５図と第７図とを比較することにより、運動および記憶の発生の仕方が全く類似していることが分かる。すなわち、運動物体の衝突という結合と記憶に必要な強い認識および留意による認識（それに伴われたアートマンとマナスとの特殊な結合）が対比される。また、運動物体の衝動という特殊な結合と記憶に必要な通常の認識の繰り返しとが対比される。特に、物体運動の潜在的能力、ヴェーガと記憶に必要な潜在的能力、潜在印象との発生過程が全く類似している。従って、この２つの潜在的能力は１つの潜在能力、サンスカーラに包括されている。

（８）　ヴェーガと業の潜在的能力カルマアーシァヤとの比較

Vaiśeṣika 学派では物体の運動に関する潜在的能力であるヴェーガと、業の理論における潜在的能力であるダルマ、アダルマまたはカルマアーシァヤとは種類の異なった能力であるが、いずれも運動または行為から生じた潜在的能力と考えられる。

ヴェーガは動力から離れた物体の瞬間的な運動を継続させようとする運動の能力で、動力と物体との特殊な結合のもとで生まれた物体の運動から生ずる勢いである。ダルマ、アダルマまたはカルマアーシァヤは人が意志を持った身体の運動、すなわち行為（karman）をなしたとき、その人の心（アートマン）に生じた倫理的な残余感で、輪

廻の世界で後の世でその人に果報を生ぜしめる能力である。この残余感は煩悩を伴うことによって成熟し、神の関与によって果報を生ずる。このような Vaiśeṣika 学派業理論において、カルマアーシァヤの発生から果報までの移行過程は第８図のようになる。

物体の運動および記憶の発生過程と業理論におけるカルマアーシァヤの移行過程とを比較すると、すなわち第５図および第７図と第８図とを比較するとパターン的にかなり違うことが分かった。神の関与は別として、カルマアーシァヤが成熟するために煩悩という潜在的能力がカルマアーシァヤに伴われなければならない。しかし、運動の潜在能力、ヴェーガが増大するためには衝動という特殊な結合だけが必要である。また、記憶の発生においても潜在印象が増大するためには認識作用というアートマンとマナスとの特殊な結合だけが必要である。煩悩という潜在的能力はなくなるまで永続的であるが、結合はそのときだけである。これは大いなる違いである。

このようなことから、ヴェーガはパターン的に潜在印象と非常に類似していたが、カルマアーシァヤとはパターン的に全く違う種類のもであった。それ故、物体の運動の理論はパターン的に業の理論に引きずられたものではなく、独立なものであると考えられる。

（９）　運動の直接知覚

Vaiśeṣika 学派の直接知覚の仕方は対象が感覚器官と接触することによって生ずる。感覚器官と接触できるのは実体だけであった。運動や性質は実体に内属しているため、実体を通して知覚されるとしている。その知覚の仕方は無分別の段階で、普遍が知覚され、有分別の段階で普遍に限定されて順次対象物が知覚されると考えられていた。それ故、運動を知覚するためには無分別の段階で運動の普遍、運動性を知覚されねばならなかった。運動性は運動に内属しているため、そして運動は実体に内在しているため、運動性は実体から見れば、実体に内属した運動にさらに内属しているものとなる。運動性が知覚されるためには実体が感覚器官と接触することによってこの実体を通して、更に運動を通して運動性が知覚されねばならない。この普遍の知覚が無分別で生ずれば、それに限定されて有分別の段階で運動が知覚される。その知覚の仕方を Vaiśeṣikasūtra における Candrānanda の注釈では白いという性質の知覚が記載されている。それにならって運動の知覚を次の如く推論してみた。運動体と感覚器官が接触することによって、運動体が知覚される。その運動体を介して運動に内属する運動性、すなわち動きの共通性が無分別の段階で知覚される。その知覚によって有分別の段階で運

動性の知識が生ずる。それに限定されて「これは運動である」という知識が生ずる。Vaiśeṣika 学派では運動は認識論的にこのようにややこしい段階を経て認識することができるのである。

このような Vaiśeṣika 学派の運動の理論は運動を瞬間的な場所の移動と考えた認識論的な運動論であった。継続運動を述べた運動過程は Vaiśeṣika 学派の因果律に従って記述されたものであった。運動は運動を生じないという基本原則から運動を生ずるためには何か動力が必要であった。ヴェーガは物体がその動力から離れたとき、瞬間的な運動を継続させるために必要な能力であった。このように Vaiśeṣika 学派の運動論は運動を場所の移動として捉え、時間の経過として捉えていなかった。ヴェーガの発生過程は記憶の原因である潜在印象の発生過程と類似したものであった。

このように、Vaiśeṣika 学派の認識論的な運動論は６世紀の Praśastapādabhāṣya とその１０世紀の注釈書、Vyomavatī および Nyāyakandalī において完成を見た。１１世紀以後、物体運動のメカニズムを記載している書物は Vaiśeṣika 学派の著作の中で非常に少ない。メカニズムが記載してあっても、Praśastapādabhāṣya 記載の運動論を越えることはなかった。従って、１０世紀以後、物体運動のメカニズムをさらに発展させる理論は生まれなかった。それ故、Vaiśeṣika 学派の多くの人々は物体運動のメカニズムなどには殆ど興味を示していなかったと結論づけられる。

［引用文献］

(1) 参考文献

① S. Dasgupta : A History of Indian Philosophy Vol. 1. Cambridge, 1963.

② E. Frauwallner : Geschite Der Indischen Philosophie, Band II (Translated by V. M. Bedekar : History of Indian Philosophy, Part II . Delhi, 1997)

③ 金倉圓照 :「インドの自然哲学」平楽寺書店, 1971

④ 中村元 :「ニヤーヤとヴァイシェーシカの思想」春秋社, 1996.

⑤ 服部正明 :"ヴァイシェシカ学派の自然哲学", 「インド思想１」,岩波書店, 1988.

⑥ 宇井伯寿 :「勝論経における勝論学説」, 『印度哲学研究』第３巻, 岩波書店

(2) Muni Śrī Jambuvijayaji : Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the Commentary of Candrānanda. Baroda, 1961, p. 6.

(3) Ibid. pp. 5-6.

(4) Ibid. pp. 37-44.

(5) Ibid.

(6) Sh. Tripathi (The editor of Second edition) : Vaiśeṣikadarśana of Kaṇāda with An Anonymous Commentary. Darbhanga, 1988.

(7) Śrī Nārāyaṇa Miśra : Vaiśeṣikasūtropaskāra of Śrī Śaṅkara Miśra. Varanasi, 1969.

(8) J. Bronkhorst and Y. Ramseier : Word Index to the Praśastapādabhāṣya, Delhi, 1994

(9) D. Jhā : Praśastapādabhāṣya with Commentary Nyāyakandalī by Śrīdhara Bhaṭṭa along with Hindi translation. Varanasi, 1977, pp. 697- 740.

(10) G. Śāstrī : Vyomavatī of Vyomaśivācārya. Varanasi, 1984.

(11) D. Jhā : op. cit.

(12) J. S. Jetly : Praśastapādabhāṣyam with the Commentary Kiraṇāvalī of Udayanācārya. Baroda, 1971.

(13) ① B. Faddegon : The Vaiśeṣika- System. Liechtenstein (reprint), 1969 (the first ed. Amsterdam, 1918), pp.221- 236.

② S. Bhaduri : Studies in Nyāya- Vaiśeṣika Metaphysics. Poona, 1975 (rep.), pp. 134-141.

③ B. N. Seal : The Positive Sciences of the Ancient Hindus. Delhi, New ed. 1958, pp.

129- 152.

④ U. Mishra : Conception on Matter. Delhi, reprint 1987, pp. 196- 223.

⑤ S. Dasgupta : A History of Indian Philosophy, Vol.1. Cambridge, 1963, p. 317.

⑥ E. Frauwalliner : Geschichte Der Indischen Philosophie, Band II. (Translated by V. M. Bedekar : History of Indian Philosophy, Part II. Delhi, 1997, pp. 99- 101.)

⑦ K. H. Potter : The Tradition Nyāya- Vaiśeṣika up to Gaṅgeśa. Encyclopedia of Indian Philosophy Vol. 2 Delhi, 1995 (reprint), pp. 131- 132.

⑧ S. P. Kannu : The Critical Study of Praśastapādabhāṣya. Delhi, 1992, pp. 177- 187.

⑨ S. N. Sen : "The Impetus Theory of the Vaiśeṣikas", Indian Journal of Histiry of Science, Vol. 1 (1966), pp. 34- 45.

⑩ B. V. Subbarayappa : "The Physical World : Views and Concepts", A Concise History of Science in India, New Delhi, 1971, pp. 445- 482 ("Motion" pp. 472-475).

⑪ H. Ui : The Vaiśeshika Philosophy. Varanasi, 1962 (Second ed.), pp. 98-99, 113-116, 170-173 and 213- 219.

⑫ 宇井伯寿："業句義"「勝論経に於ける勝論学説」,『印度哲学研究』第3巻, pp. 547- 561.

(14) 菱田邦男：『インド自然哲学の研究』, 山喜房佛書林, 1993, pp. 47-51, pp. 216-229, pp.59-62, pp. 230- 244.

(15) 菱田邦男 : op. cit., pp. 230-244.

(16) S. N. Sen : op. cit.

B. V. Subbarayappa : op. cit.

(17) D. Jhā : op. cit. pp. 697- 698.

(18) Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit. p.6.

(19) Ibid.

(20) D. Jhā : op. cit. pp. 699- 713.

G. Śāstrī op. cit. Part II. pp. 246 - 253.

(21) D. Jhā : op. cit. p. 701.

(22) D. Jhā : op. cit. p. 700.

(23) D. Jhā : op. cit. pp. 699- 700.

(24) 野沢正信：書評「村上真完著『インドの実在論』」,『印度哲学仏教学』第 13 号, 1998, pp. 359- 360.

(25) D. Jhā : op. cit. pp. 713- 724.

(26) D. Jhā : op. cit. pp. 725- 740.

(27) D. Jhā : op. cit. pp. 715- 717.

(28) D. Jhā : op. cit. pp. 720- 724.

(29) D. Jhā : op. cit. pp. 646- 647.

(30) D. Jhā : op. cit. p. 728.

(31) D. Jhā : op. cit. pp. 216- 218.

(32) D. Jhā : op. cit. pp. 630- 633.

(33) D. Jhā : op. cit. pp. 634- 637.

(34) D. Jhā : op. cit. p. 638.

(35) D. Jhā : op. cit. p. 713, pp. 735- 736.

(36) D. Jhā : op. cit. pp. 646- 658.

(37) D. Jhā : op. cit. pp. 681- 682.

(38) D. Jhā : op. cit. pp. 129- 131.

(39) D. Jhā : op. cit. pp. 681- 682.

(40) D. Jhā : op. cit. p. 133.

(41) 前田専学 ："ニャーヤ・ヴァイシェーシカ哲学と因果論", 仏教思想研究会編「仏教思想因果論」, 平楽寺書店, 1978, pp.473-497.

(42) ① Keiichi Miyamoto : "The Early Vaiśeṣika on asamavāyikāraṇa and the Term 'apekṣ-'" 今西順吉教授還暦記念論集, 「インド思想と仏教文化」, 春秋社, 1996, pp. 918-903.

② B. Faddegon : The Vaiśeṣika-system, Leichtenstein, 1969 (reprint) pp. 130- 146.

③ M. C. Bhartiya : Causation in Indian Philosophy, Ghaziabad, 1973, pp. 155- 171.

(43) G. Śāstrī : op. cit. Part II. pp. 253- 268.

(44) 村上真完 : 「インドの実在論」, 平楽寺書店, 1997, pp. 115- 212.

宮元啓一 : 「svarūpa と viśeṣaṇa-----Praśastapāda の pratyakṣa 論」田村芳朗博士還暦記念論集「仏教教理の研究」, 春秋社, 1982, pp. 513- 526.

(45) Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit. p. 12.

(46) Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit. p. 63.

(47) J. S. Jetly and V. G. Parikh : Nyāyakandalī being a commentary on Praśastapādabhāṣya, with three sub-commentaries. Vadodara, 1991, pp. 640- 667.

(48) B. K. Matilal : Nyāya-Vaiśeṣika (A History of Indian Literature, Vol. VI). Wiesbaden, 1977, pp. 72- 73.

(49) Vallabha : Nyāyalīlāvatī. Benares, 1927, pp. 678- 684.

第１章　運動の共通的な特徴

１、　はじめに

Vaiśeṣika 学派の運動論において最も整理された形の書物は A.D. 6 世紀の Praśastapāda による Praśastapādabhāṣya である。この書物の第３章「運動論」は次の５節からなっている[1]。それらは第１節　運動一般、第２節　個々の運動、第３節　運動の分類についての論議、第４節　アートマンに支配された運動、第５節アートマンに支配されない運動である。

この第１章ではこの「運動論」の第１節運動一般で述べられた運動の共通的な１２の特徴について述べる。この１２の特徴の大半は Vaiśeṣika 学派の最初の書物 A.D.150 年頃の Vaiśeṣikasūtra に記載されている。Praśastapādabhāṣya の書物に入る前に Vaiśeṣikasūtra に記載された運動の共通的な特徴がどのようなものであったかを論じる。

２、　Vaiśeṣikasūtra における運動の特徴

Vaiśeṣikasūtra の第１章第１日課では主に実体、性質、運動についてそれぞれの特徴が対比的に、しかも因果論的に論じられている。

ここでは第１章第１日課で、実体、性質および運動についてそれぞれの特徴が対比的に、しかも因果論的に論じられていることを示す。つぎにこの第１日課において運動に関するスートラを抽出し、どのようなものが運動の特徴になっているかを示す。Vaiśeṣikasūtra には主なる２つの注釈書がある。それらは７世紀頃の Candrānanda による注釈書と１５世紀の Śaṅkaramiśra による Upaskāra である。この２書を較べてみると、スートラの記載および番号に多少の異なりがある。Upaskāra は年代が相当にたっているので、後世の影響を受けている可能性が強い。ここではスートラの記載および番号は Candrānanda に従った。またスートラを訳すにあたって主に Candrānanda による注釈に従った。[2]

（１）　Vaiśeṣikasūtra　第１章第１日課の構成

ここでは実体、性質および運動についてそれぞれの性格が対比的に論じられていることを示す。

まず、１－１－４から６までは実体、性質、運動についてそれぞれ前述のような種類（実体：土から始まる上述の９種の実体。性質：色から始まり意志的努力に終わる１７種の性質。運動：持ち上げることから始まる上述の５種の運動）が述べられてい

る。そして１－１－１４から１６までは実体、性質、運動について次のような定義が述べられている。

（ここに原文と筆者の直訳を付しておく。（）、＜＞は筆者が注記したものである。）

１－１－１４　kriyāvad guṇavat samavāyikāraṇam iti dravyalakṣaṇam ／

活動（運動）を有し、性質を有し、そして内属因であることが実体の定義である。

１－１－１５　dravyāśrayī aguṇavān saṃyogavibhāgeṣv akāraṇam anapekṣa iti guṇalakṣaṇam ／

実体に依存し、性質を有せず、結合と分離において独立であって原因ではない、ということが性質の定義である。

１－１－１６　ekadravyam aguṇaṃ saṃyogavibhāgeṣv anapekṣaṃ kāraṇam iti karma-lakṣaṇam ／

１つの実体を有し、性質を有せず、結合と分離において＜他を必要としない＞独立な原因であるということが運動の定義である。

この定義によれば、実体が性質および運動の基体になっていることがわかる。また運動では、３つのこと、すなわち“１つの実体を有する”、“性質を有しない”、“結合と分離において独立な原因である”ことが定義されている。“１つの実体を有する”とは１つの運動が１つの実体に依存していること、すなわち、実体が運動する場合、同一時に１つの実体が１つの瞬間的な運動をするということである。“性質を有しないこと”と云う定義は次の通りである。すなわち、Vaiśeṣika 学派では運動というカテゴリーは概念分析の結果、運動そのもの、すなわち運動の分類を論じるだけのもので、運動を生じたり停止したりする概念は他のカテゴリーに入るとされた。“性質を有しないこと”はそのためのものと考えられる。“結合と分離において独立な原因であること”はスートラ１９（“運動は結合と分離の＜原因＞である。”）に再び記載されている。このスートラ１９は Candrānanda によって次のように注釈されている。[3]

svāśrayam anyato vibhajya āśrayāntareṇa saṃyojayati ataḥ saṃyogavibhāgānāṃ kāraṇaṃ karma ／

＜運動は＞自らの拠り所となるもの（すなわち、その運動を生じている基体）を他から分離させ、他の拠り所となるものと結合させる。これから運動は諸々の

結合と分離の原因である。

このように、１－１－１６において“運動は結合と分離において独立な原因である”という個所は運動を認識論的に場所の移動として捉えた結果である。すなわち、運動が起これば、運動している実体はそれがいる場所から分離し、次の場所と結合する、このことは必然的な結果であり、他の助けを必要としないことが意味されている。

このような定義に対して実体、性質、運動について因果論的な性格の異なりがスートラの１－１－８から１０、１７から１９まで対比して記載されている。すなわち、

１－１－８　dravyāṇi dravya-antaram ārabhante ／

諸々の実体は他の実体を形成する。

１－１－９　guṇāś ca guṇa-antaram ／

そして諸々の性質は他の性質を＜形成する＞。

１－１－１０　karma karmasādhyaṃ na vidyate ／

運動によって生じられるべき＜他の＞運動は知られない。

１－１－１７　dravyaguṇakarmaṇāṃ dravyaṃ kāraṇaṃ sāmānyam ／

実体は実体、性質、運動の共通の原因である。

１－１－１８　tathā guṇaḥ ／

性質も同様である。

１－１－１９　saṃyogavibhāgānāṃ karma ／

運動は諸々の結合と分離の＜原因＞である。

これらのスートラは実体、性質、運動のそれぞれによって発生する結果性について対比して書かれている。すなわち、８から１０までは実体と性質は同じカテゴリーの実体、性質をそれぞれ発生させるが、運動は異なった性格を示し、同じカテゴリーの運動を発生させないことが記されている。また、１７から１９までは実体、性質は実体、性質、運動の共通の原因であることがそれぞれ述べられているが、運動はそうでなく、結合と分離の原因であることが述べられている。これらより、運動によって生じた結果の性格は実体や性質に較べてかなり異質である。

また、その結果によってそれ自身がそこなわれるかどうかが１－１－１１から１３に論じられている。すなわち、

１－１－１１　kāryāvirodhi dravyaṃ kāraṇāvirodhi ca ／

実体は＜自らの＞結果によってそこなわれない。また＜自らの＞

原因によってもそこなわれない。

１－１－１２　ubhayathā guṇaḥ ／

性質は両方の場合において存在する。

（すなわち、性質は結果と原因によってそこなわれる場合もあれば、そこなわれない場合もある。------Candrānanda 注釈による）

１－１－１３　kāryavirodhi karma ／

運動は＜自らの＞結果によってそこなわれる。

これらのスートラによれば、実体はそこなわれないが運動はその結果によってそこなわれることが書かれている。性質はその中間である。スートラ１３に関するCandrānanda の注釈において、“＜運動の＞結果である結合、分離、潜在能力の中から結合によってだけ運動は妨げられる。”と記載されている。[4]これは運動を瞬間的と考えたために生じた認識論的な帰結である。すなわち、瞬間的な運動が生ずれば、運動する基体はある場所から分離して次の場所と結合する。その結合によってその瞬間的な運動が終わるのである。Vaiśeṣika 学派ではこの考えを基本原理とし、継続運動はこのような瞬間的な運動が意志的努力などの動力因によって次々に生ずるために起こると考えられていた。このスートラにおいても運動は実体、性質と性格を異にしている。

このように第１節では実体、性質、運動について性格の異なりが因果論的に対比して論じられている。実体、性質および運動においてこのような因果論的な関係を表にしてみると図－１のようになる。[5]

この表に従えば、実体と性質は因果論的に共通的な性格を持っているが、運動はこれら２つのカテゴリーから因果論的にかなり違ったものになっている。運動が実体および性質と較べて異質的性格を持っているよい例はスートラ８から１０に至る個所および１７から１９に至る個所である。これらは前述したように、それぞれによって生じた結果の違いが記されている。８から１０では実体は他の実体を、性質は他の性質をそれぞれ形成するが、運動は他の運動を発生させない。また、１７から１９では実体と性質をそれぞれ原因としたとき、結果として実体、性質、運動が生ずる。しかし、運動を原因としたとき、実体と運動は発生せず、性質である、結合と分離が生ずると書かれている。これらの個所は運動の異質性を端的に表したものである。

第１図　Vaiśeṣikasūtra 第１章第１日課に記された因果関係

スートラ番号	原因	結果
１－１－８	諸々の実体	他の実体
１－１－９	諸々の性質	他の性質
１－１－１０	運動	他の運動を発生しない。
１－１－１７	実体	実体、性質、運動。
１－１－１８	性質	実体、性質、運動。
１－１－１９	運動	結合と分離。
１－１－２０	運動	実体を発生しない。
１－１－２１	運動	運動を発生しない。
１－１－２２	諸々の実体	一つの実体
１－１－２３	諸々の実体	２を始めとする数、個別性、結合と分離
１－１－２４	諸々の実体	一つの運動を発生しない。
１－１－２５	諸々の結合	実体
１－１－２６	諸々の部分に内属する色	実体全体に広がる色。
１－１－２７	重さ、意志的努力、結合	持ち上げること（という運動）
１－１－２８	運動	結合と分離
１－１－２９	運動	実体と運動を発生しない。

（２）　第１日課で述べられた運動の特質

次にこの第１日課で運動に関係したスートラを上げると次の通りである。

１－１－６　持ち上げること、振り下ろすこと、折り曲げること、真っ直ぐにすること、および進行、以上が諸々の運動である。

１－１－１０　運動によって生じられるべき＜他の＞運動は知られない。

１－１－１３　運動は＜自らの＞結果によってそこなわれる。

１－１－１６　一つの実体を有し、性質を有せず、結合と分離において＜他を必要としない＞独立な原因であるということが運動の定義である。

１－１－１７　実体は実体、性質、運動の共通の原因である。

１－１－１９　運動は諸々の結合と分離の原因である。[6]

１－１－２０　＜運動＞は実体の＜原因＞ではない。何故なら、＜結果として実体が生ずるとき（現れるとき）には運動は既に＞消滅しているが故に。[7]

１－１－２１　＜運動は＞性質と性格を異にするが故に、諸々の運動の＜原因では＞ない。[8]

１－１－２４　＜一つの運動は諸々の実体に＞内属しないが故に、運動は＜諸々の実体の＞共通の結果であることは知られない。[9]

１－１－２７　持ち上げることは重さ、意志的努力および結合の＜共通の結果である＞。

１－１－２８　諸々の結合と分離は諸々の運動の＜結果＞である。

１－１－２９　原因一般において、１つの運動は諸々の実体と運動の原因ではないといわれる。

第２図　Vaiśeṣikasūtra　第１日課で述べられた運動の特徴

（１）　運動の定義に相当するもの

①　１つの実体に存する。（１－１－１６，１７，２４）

②　性質を持たない。　（１６）

③　結合と分離において独立な原因である。（１６，１９，２８）

（２）　運動の性格的なもの

①　運動は自ら生じた結果によってそこなわれる。（１３）

②　運動は運動を生じない。（１０，２１，２９）

③　運動は実体の原因ではない。（２０，２９）

（３）　運動の原因

①　持ち上げることは重さ、意志的努力および結合の共通の結果である。（２７）

以上運動に関係したスートラを上げた。これらは“運動は運動するものをある場所から分離させ、次の場所へ結合させる”という認識論的な場所の移動を基本原理として運動の特徴が述べられている。これらの運動の特徴を大きく分けると第２図のように３つに分類することができる。これらの運動の特徴は後に示す Praśastapādabhāṣya に記載された１２の運動の特徴の内半分を占めている。これらの運動の特徴については第３節で Praśastapādabhāṣya との比較でさらに詳しく論ずる。

以上が第１章第１日課を分析した結果である。

３、Praśastapādabhāṣya に記載された運動の特徴

Praśastapādabhāṣya では第３章運動論、第１節“運動一般”において運動の特徴が述べられている。ここではこの第１節“運動一般”において運動の特徴がどのように述べられているか、そしてこの書物の１０世紀の２つの注釈書、Nyāyakandalī と Vyomavatī においていかに注釈されているかを調査すると共に、この運動の特徴が Vaiśeṣikasūtra とどのような対応関係にあるのか見ていく。Praśastapādabhāṣya の第３章運動　第１節　運動一般では次の如く運動の特徴が記載されている。[10]

utkṣepaṇādīnāṃ pañcānām api karmatvasambandhaḥ ／ ekadravyavattvaṃ kṣaṇikatvaṃ mūrtadravyavṛttitvam aguṇavattvaṃ gurutvadravatvaprayatnasaṃyogajatvaṃ svakāryasaṃyogavirodhitvaṃ saṃyogavibhāganirapekṣakāraṇatvam asamavāyikāraṇatvaṃ svaparāśrayasamavetakāryārambhakatvaṃ samānajātīyānārambhakatvaṃ dravyānārambhakatvaṃ ca pratiniyatajātiyogitvam ／

持ち上げること等５つ＜の運動＞にはまた、運動性（運動であること、または運動であるという共通性）との結びつきがある。＜それらの運動には次のような１２の共通的な特徴が存在する。＞＜すなわち、運動は１、同一時に＞１つの実体に存すること、＜２、＞瞬間的であること、＜３、＞有形な実体に存していること、＜４、＞性質を持たないこと、＜５、＞重さと流動性と意志的努力と結合とから生ずること、＜６、＞＜運動＞自ら作り出す結合によって妨げられること、＜７、＞結合と分離に対して＜他を必要としない＞独立な原因であること、＜８、＞非内属因であること、＜９、＞＜運動＞自らの＜拠り所となるもの＞（すなわち、その運動を生じている物質）および他の拠り所となるものとに密接に結びついた＜結合および分離という＞結果を発生させること、＜１０、＞＜自身と＞同

じ類に属するものを形成しないこと、＜１１、＞実体を形成しないこと、＜１２、＞それぞれ定まった類に付随していること、＜以上が運動に共通している特徴である＞。

以上である。

この第１節では初めに持ち上げること、振り下ろすことなど５つの運動が運動性と結びついていることが記されている。これは運動性、すなわち動くという共通性が運動すべてに含まれている、すなわち内属していることを示しているのである。次に、運動に共通している特徴が１２上げられている。これらは運動に共通的に存在していることを示すために、すべて-tva を接尾辞とした抽象名詞で記載されている。では、これらの特徴が Nyāyakandalī および Vyomavatī 等の諸注釈書にどのように書かれているか調査した結果を述べる。最初に、

（１）　ekadravyavattvam

＜運動は同一時に＞１つの実体に存すること。

が記載されいる。

これについては Vyomavatī と Nyāyakandalī に同じように注釈されている。それらの注釈によれば、“同一時に１つの実体に１つの運動だけが存在し、＜かつ＞１つの実体だけに１つの運動が存在する”[11]と注釈されている。これは運動が実体に依存するのであるが、その依存の仕方が同一時に１つの運動と１つの実体との間には必要かつ十分条件が成り立っていることを示している。すなわち、同一時に１つの実体が必ず１つの運動だけを行うことを示している。また、Vaiśeṣikasūtra では前述したように１－１－１６に定義としてこの特徴が記されている。

１つの実体に運動が１つだけ存在することの証明は、Nyāyakandalī と Vyomavatī では同じように注釈されている。ここでは Nyāyakandalī の注を示しておく。[12]

yady ekasmin dravye yugapad viruddhobhayakarmasamavāyaḥ syāt, tadā tayoḥ parasparapratibandhād digviśeṣasaṃyogavibhāga-anutpattau saṃyogavibhāgayor anapekṣaṃ kāraṇaṃ karmeti lakṣaṇahāniḥ syāt ／ atha-aviruddhakarmadvayasamāveśaḥ, tadaikasmād eva taddeśadravyasaṃyogavibhāgayor upapatteḥ dvitīyakalpanāvaiyarthyam ／ evam ekaṃ karma na-anekatra vartate, ekasya calane tasmāt karmaṇo' nyasya calana-anupa-lambhāt ／

もし、１つの実体に同時に相対立した２つの運動が併存しているなら、そのと

きその２つが互いに障害となることから、特別な方向との結合と分離を生じない＜、その＞ことにおいて“運動は結合と分離において＜他を必要としない＞独立な原因である”（Vaiśeṣikasūtra １－１－１６）という＜運動の＞定義を放棄することになろう。しかし、相対立しない（すなわち、同方向の）２つの運動が＜同時に１つの実体に＞共存している＜なら＞、そのときは＜２つの運動が一緒になってしまうため、＞全く１つということからその場所と実体との結合と分離が生ずるが故に、第２の＜運動＞の想定を必要としない。同様に１つの運動は多くのものには存在しない。何故なら、１つ＜の運動＞の動きにおいて、それとは別の運動の動きが認められないが故に。

１つの実体に運動が１つだけ存在するということに対する証明はこの注釈によると、同一時に１つの実体に相対立した運動がある場合と２つの運動が同方向にある場合についてだけなされている。相対立した運動については互いに障害となり、すなわち止まってしまうことになり（Vyomavatī では、“互いに障害となり、進行がない”と注釈されている[13]）、特別な方向とその実体との結合、分離を生じなくなってしまう。従って、Vaiśeṣikasūtra（１－１－１６）（“運動は結合と分離において独立な原因である。”）で示された運動の定義と反する。従って相対立した運動は同一時に１つの実体に存在しないとしている。２つの運動が同方向にある場合、２つの運動合わせて１つの運動と考えられるから問題ないとしている。

この証明において、２つの相対立した運動の大きさが同じであれば問題はないが、違う場合にはどちらかの方向に運動が生ずる。このことについては言及されていない。また、運動方向の逆と同じ方向だけが論じられそれ以外の方向については論じられていない。このような不十分な点はあるが、実体が運動する場合、同一時に１つの実体に必ず１つの運動だけ、すなわち瞬間的な１つの動きだけが存在するということは認識論的には正しいと考えられる。

（２）　kṣaṇikatvam

瞬間的であること

この個所の注釈は Vyomavatī には明確な形で記されていないが、Nyāyakandalī では‘瞬間的’を“より速く消滅してしまう”（āśutaravināśin）と注釈されている。[14] Vaiśeṣikasūtra では“運動が瞬間的であること”は直接書かれていないが、暗黙の内に了解されていたようである。中村元の注によれば、Vaiśeṣikasūtra（Ca.）２－２－２９

に間接的に書かれていることが記されている。[15]

Vaiśeṣikasūtra ２－２－２９は次の通りである。すなわち、

guṇasya sato' pavargaḥ karmabhiḥ sādharmyam ／

性質として存在している＜音＞の＜瞬間的な＞消滅は諸々の運動と共通的な性格である。

この文章中の apavarga について、Candrānanda による注釈と Upaskāra の注釈を見ると、Candrānanda によれば、“消滅”（vināśa）と注釈され[16]、Upaskāra では“速やかなる消滅”（āśunāśaḥ）と注釈されている[17]。Candrānanda は単なる消滅であるが、その理由として、“＜音は＞発生の直後に把捉されないから、消滅が推論される”（utpattyanantaram agrahaṇād vināśo' numīyate）と注釈している。これは音の消滅が瞬間的であること示している。これより、Vaiśeṣikasūtra においてもまた運動が瞬間的に消滅することが理解されていたと考えられる。

（３） mūrtadravyavṛttitvam

有形な実体に存していること

Nyāyakandalī では‘有形なる実体’を“大きさの特定することのできる実体”（avacchinnaparimāṇadravya）と注釈されている。[18] 運動の特徴の第一番目として‘運動は１つの実体に存する’と述べられているが、それをもっと限定して‘有形な実体に存する’と述べたのであろう。実体にはアートマンや時間や方角や虚空のような普遍的なものがある。このような普遍的なものでは運動を生ずることができないから、それを除くために運動は‘有形なる実体に存する’と実体を限定したものと考えられる。Vyomavatī では注釈があまり明確でないのでここでは言及しない。また、Vaiśeṣikasūtra では対応する個所がない。

（４） aguṇavattvam

性質を持たないこと

これについては Vyomavatī では注釈されていないが、Nyāyakandalī では‘性質を持たないこと’は“性質を有していることが欠如していることである”[19]と注釈されている。すなわち、運動は性質を持たないということである。Vaiśeṣikasūtra では１－１－１６において、“＜運動は＞性質を有しない”ことが運動の定義として上げられている。[20]

このことは前述したように次のことが意味されている。すなわち、Vaiśeṣika 学派では

運動というカテゴリーは運動そのもの、すなわち運動の分類を論じるだけのもので、運動を生じたり、運動を停止したりする概念は他のカテゴリーに入るとされた。そのため、矢が空中を運動する場合、運動が運動を生ずるわけではないので、運動の動力としてヴェーガ（運動の勢い）（性質のカテゴリーに入る概念）を考えざるを得なかったと考えられる。[21]次に運動の原因となる性質が上げられている。

（５）　gurutvadravatvaprayatnasaṃyogajatvam [22]

＜運動は＞重さと流動性と意志的努力と結合とから生ずること。

ここでは運動の発生原因が述べられている。この個所は Nyāyakandalī では注釈されていないが、Vyomavatī では次のごとく注釈されている。[23]

vyastañ ca gurutvādikaṃ kāryāntarasampādakam api na samuditaṃ karma-vyatirekenānyasya ity asādhāraṇam eva ／ na caivam sakalakarmabhedavyapākam iti vaidharmyamātram eva ／ yad vā gurutvādyanyataṃ kāraṇajanyatvaṃ vivakṣitam ／

＜これらの内＞重さ等単一のものは他の結果もまた生じさせる。＜しかし、これらが＞集まったものは運動を除外して他には存在しないという＜これらの単一の場合とあつまった場合とでは原因性において＞共通でないことがまさに存在する。そしてこのように全部の運動の種類に＜これらのすべてが＞常に随伴しているのではないという違い（異質性）だけがまさに存在する。もしそうでなければ、重さ等の内、いずれか一つ＜だけ＞の原因から＜すべての運動が＞生ずるということが意味されることになる。

すなわち、Vyomavatī で云われていることは重さ、流動性、意志的努力、結合の集まったものが運動だけの原因であって、単独のものは他の原因にもなりうると述べている。従って、これらのすべてがそれぞれの運動に内属しているわけではない。この重さ等の単独のものは Praśastapādabhāṣya では後に示すように、この第４節、第５節に述べられた運動について運動を結果としたときに、原因をずっと遡っていったとき、最後にたどりついた原因である。

Vaiśeṣikasūtra ではこの個所に対応する sūtra は１－１－２７である。すなわち、“持ち上げることは重さ、意志的努力、および結合の＜共通の結果である＞。”

この個所では Candrānanda も Upaskāra も大した注はしていないが、Candrānanda は sūtra １－１－２１（“＜運動は＞性質と性格を異にするが故に、＜運動は＞諸々の運動の＜原因＞ではない。”）の注釈において運動の原因を明らかにしている。すなわち、

このスートラに対して Candrānanda は次の如く注釈している。[24]

gurutvadravatvanodanābhighātasaṃyuktasaṃyogāḥ svāśraye parāśrye ca karmakāraṇam, prayatnādṛṣṭau tu parāśraya eva ／ tatra tāvat karma［na］svāśraye karmakāraṇam, niṣkriyadravyānupalabdhiprasaṅgāt ／ nāpi parāśraye, tatsaṃyogenaiva nivartitatvāt ／ tasmād etaiḥ karmakāraṇair guṇair vaidharmyān na karma karmakāraṇam ／

重さ、流動性、衝動、衝突、＜それとそれに＞つながれた部分との結合は＜これら＞自身の拠り所となるものと他の拠り所となるものとにおいて運動の原因である。しかし意志的努力とアドリシュタは他の拠り所となるものにおいてだけ＜運動の原因である＞。その場合、第一に運動は自身の拠り所となるものにおいて運動の原因ではない。何故なら、＜もし運動が自身の拠り所となるものにおいて運動の原因であるなら、＞活動しない実体があり得ないという誤りが結果するが故に。他の拠り所となるものにおいてもまた運動の原因ではない。何故なら、＜運動には＞＜自身の拠り所となるものと＞それ（他の拠り所となるもの）との結合によってまさに消滅するという特質があるが故に。それ故、これらの運動の原因となる性質と＜運動＞とは性格を異にするが故に、運動は運動の原因ではない。

ここにおいては重さ、流動性、意志的努力、結合（特殊な結合、すなわち衝動、衝突、＜それとそれに＞つながれた部分との結合）、アドリシュタ（不可見力、すなわちこれは原因の分かっていない運動に対してその運動の原因とされる、超自然的な力である。）が運動の原因とされている。そして意志的努力とアドリシュタは他の拠り所となるものにおいてだけ運動の原因であると記されている。これは意志的努力とアドリシュタは自らの拠り所となるものはアートマンと考えられる。アートマンは運動しないのでこの２つの動力は他の拠り所となるものにおいて原因と考えられている。これらはアドリシュタを除けば、すべて Praśastapādabhāṣya に記載された“運動の原因”である。しかも、結合に関しては Praśastapādabhāṣya では単に結合と記しているだけであるが、Candrānanda の注釈では後に示すように Praśastapādabhāṣya 第３章「運動」の第５節「アートマンに支配されない運動」で、運動の原因となっている特殊な結合、すなわち衝動、衝突、＜それとそれに＞つながれた部分との結合のすべてが上げられている[25]。また、原因の分からない運動に対して第５節で原因と考えられているアドリシュタまでも上げられている。これは運動の原因についてすべてが上げられており、

Praśastapādabhāṣya の記載よりも勝っていると考えられる。

（６）　svakāryasaṃyogavirodhitvam

＜運動＞自らが作り出す結合によって妨げられること。

ここでは運動が作り出す結果の内、結合が運動自身を妨げることが述べられている。このことについて Nyāyakandalī では運動が壊されるのは“自らの作り出す結合によって壊されるのであって、分離によって壊されるのではない”[26]と述べられている。Vyomavatī では非常に論理学的に注釈がなされている。すなわち、結合といっても運動が滅する結合は運動自身が作り出した結果としての結合であり、また運動が作り出す結果といっても結合、分離、ヴェーガとあるので、運動が滅するのはその内の結合である。しかし運動が壊されるのはこの結合だけでない。運動をしている基体が滅しても運動は滅してしまう。従って運動が滅するためには運動が作り出した結合だけでは論理的に十分でないことが述べられている。[27]

以上よりこの個所は運動を瞬間的と考え、さらに運動を場所の移動として捉えたために生じた認識論的な帰結である。すなわち、運動は運動するものを瞬間的にある場所から分離させ、次の場所と結合させる。運動が瞬間的であるため、この運動によって生じた結合によって運動自身が妨げられると云うことである。

Vaiśeṣikasūtra では１－１－１３“運動は＜自らの＞結果によって妨げられる。”がこの個所に対応する。

（７）　saṃyogavibhāganirapekṣakāraṇatvam　／

＜運動には＞結合と分離に対して独立な原因であるという特質がある。

これは Vaiśeṣikasūtra １－１－１６に記載されている。すなわち“一つの実体を有し、性質を有せず、結合と分離において＜他を必要としない＞独立な原因である、以上が運動の定義である。”また、Nyāyakandalī では運動によって生ずる結果は結合、分離、およびヴェーガである。その内、“ヴェーガの発生においては、＜運動は＞衝動や衝突という特殊＜な結合＞に依存しているが、結合と分離の発生においては、このように衝動等に依存しない”と述べている。[28]すなわち、運動が生ずれば何の助けも必要とせず必然的に起こる現象である。Vyomavatī では、“結合と分離が＜運動によって＞作られるとき、＜運動が＞独立な原因であることは運動の本来の姿（karmaṇaḥ svarūpam）である”と注釈されている。[29]また、Vaiśeṣikasūtra １－１－１９（“運動は結合と分離の原因である。”）では Candrānanda によって前述のよう

に注釈されている（<運動は>自らの拠り所となるもの（すなわち、その運動を生じている基体）を他から分離させ、他の拠り所となるものと結合させる。これから運動は結合と分離の原因である。）。[30]

これらより、運動が生ずれば、その直後に運動している基体は瞬間的にその場所との分離を生じ、次の場所との結合を生ずる。これは運動によって必ず起こることであり、他の助けを必要としない、ということである。

（８）　asamavāyikāraṇatvam

<運動には>非内属因であるという特質がある。

これについては Nyāyakandalī および Vyomavatī とも性質は非内属因と動力因となりうるが、運動は非内属因だけである、と注釈している。[31] すなわち、Nyāyakandalī では

asamavāyikāraṇatvam, yathā guṇānāṃ nimittakāraṇatvam api naivaṃ karmaṇām kim tv asamavāyikāraṇatvam evety arthaḥ ／

‘非内属因であるという特質’とは、例えば、諸々の性質には<非内属因であるという特質の他に>動力因であるという特質もまた存在するが、運動にとってはそうではない。しかし、非内属因であるという特質だけが存在するという意味である。

Vaiśeṣikasūtra １０－１４[32] では

kāraṇasamavāyāt karmaṇi ／

<結合と分離に対して>原因<である実体>に<運動が>内属しているが故に、運動において<原因であるということが>存在する。

（このスートラは Candrānanda に従い、その注によった。）

ここに記載された原因が単なる原因なのか、非内属因なのかここだけでは決めにくい。スートラは１０－１２では[33]

kāraṇam iti dravye kāryasamavāyāt ／

原因であるということは実体において結果が内属していることの故に<存する>。

この両者において、Candrānanda による注釈では単に“原因”と記載されているが、Upaskāra では１０－１２（Upaskāra では１０－２－１）の原因を“内属因”とし、１０－１４（Upaskāra １０－２－３）の原因を“非内属因”と注釈されている[34]。Upaskāra は１５世紀の著作であるから後世の影響を受けていると考えられるので、こ

こでは Candrānanda に従い、原因の意味を単なる“原因”にとっておく。従って Vaiśeṣikasūtra では原因を内属因、非内属因、動力因に分けるに至っていなかったと考えられる。

Vaiśeṣika 学派の因果律については後に詳細に述べるが、ここでは簡単に触れておく。Vaiśeṣika 学派は自然界の現象を原因と結果という因果律によって説明しようとしている。この因果律は原因と結果を別のものと考え、Praśastapādabhāṣya では原因を３つの種類、すなわち内属因、非内属因、動力因に分類している。内属因は生ずる結果の基体となるものであり、非内属因は結果を直接発生させる原因となるものである。また、動力因は結果を発生させるための動力となる原因である。[35]

（９）　svaparāśrayasamavetakāryārambhakatvam ／

＜運動には運動＞自らの＜拠り所となるもの＞（すなわち、その運動を生じている物質）および他の拠り所となるものとに内属した結果を発生させるという特質がある。

ここに書かれた‘内属した結果’について、Nyāyakandalī および Vyomavatī では共に結合及び分離が内属した結果であることが注釈されている。[36] すなわち、運動を生じている物質（運動自身の拠り所となるもの）と空間などの他の拠り所となるものとに内属する結合と分離という結果を運動が作り出す、という趣旨である。

この個所は Vaiśeṣikasūtra には記載されていない。

（１０）　samānajātīya-anārambhakatvam ／

＜運動には＞＜自身と＞同じ類に属するものを形成しないという特質がある。

これは運動が他の運動を発生させないという運動の特徴を表したものである。Nyāyakandalī では“１つの運動が他の運動を発生させるなら、動きつつあるものにとって動きの停止がないであろう。”（karmaṇaḥ karmāntarārambhe gacchato gativināśo na syāt ／）と注釈されている[37]。Vyomavatī では運動は分離と結合を形成するので他の運動は形成されないと注釈している。[38]従って Nyāyakandalī によれば、運動が運動を生ずるとするなら、運動が無限に生じてしまうからこれは成り立たないとされている。また、Vaiśeṣikasūtra では“運動によって生じる＜他の＞運動は知られない。”（１－１－１０）が対応する。この個所の Candrānanda の注釈では運動には自ら作る結合によって停止があるのであるから運動は運動を生じないとされている。[39]これは

Nyāyakandalī と同じような考え方である。また、Upaskāra では次のように注釈されている。[40]

karma yadi karma janayet svotpattyanantaram eva janayet śbdavat ／ tathā ca pūrvakarmaṇaiva yāvat saṃyogidravyebhyo vibhāge janite dvitīyaṃ karma kena saha vibhāgaṃ janayet vibhāgasya saṃyogapūrvakatvāt saṃyogāntarasya ca tatrādhikaraṇe ' nutpannatvāt, vibhāgājanane tu karmalakṣaṇakṣteḥ ／

もしも運動が運動を生ずるなら、音のように＜運動＞自らの発生の直後にまさしく＜運動が＞発生することになるであろう。同様にまた前の運動によって結合している諸々の実体から全く分離が生じている限り、第２の運動は何と共に分離が生ずるのか、何故なら分離は結合に伴われることの故に。そしてその場合、基体において他の結合（新しい結合）の発生が生じないということの故に。しかし分離が生じないことにおいて運動の定義が崩壊するが故に。

この注釈によれば、もし運動が運動を生ずるとすれば、第１の運動によって生ずる結合はない。すると第２の運動では分離が生じなくなる。何故なら、結合に伴われて分離があるので、結合がなければ分離もないということになるからである。すると、運動の結果である結合と分離がないことになる。従って運動の定義が崩壊することになるので運動は運動を生じないとされている。

以上の注釈より、“運動が運動を生じない”という考え方は運動の基本原理である“運動は運動するものをある場所から分離させ、次の場所へ結合させる”を忠実に守ったがために生じた考えである。Nyāyakandalī で示されているように運動がもし運動を生ずるとすれば、運動が無限に生じてしまうということもまた、この基本原理から生じた帰結である。従って Vaiśeṣika 学派ではこの基本原理を守るために、運動というカテゴリーを運動そのものを論じるだけのものにしてしまい、運動を生じたり、停止したりする概念は他のカテゴリーに入れたと考えられる。

（１１） dravya-anārambhakatvam ／

＜運動には＞実体を形成しないという特質がある。

これに関しては Nyāyakandalī では、“次の結合から運動が停止するとき、実体が生ずる”（uttarasaṃyogān nivṛtte karmaṇi dravyasyotpādanam ／）[41] と注釈されている。Vyomavatī では“運動は実体を形成しない。何故なら＜実体を形成するとすれば、＞運動が次の結合によって消滅していくことの原因性がなくなってしまう。”（na

karma dravyam ārabhate, tasyottarasaṃyogena vinaśyadavasthasya kāraṇatva-asambhavād ／）と注釈されている。[42] これは Nyāyakandalī では運動が停止したとき実体が生ずると述べているが、Vyomavatī では運動が実体を形成するとすれば、運動が結合によって消滅することの原因性が存在しなくなると述べている。

Vaiśeṣikasūtra では１－１－２０（Ca.）で、“＜運動は＞実体の＜原因＞ではない。何故なら、＜結果としての実体が生ずるときには運動は既に＞消滅しているが故に”。（na dravyāṇāṃ vyatirekāt ／）

と記載されている。これは Nyāyakandalī と同じ趣旨で実体が形成されないことが記されている。

これらによれば、実体は運動が形成するのではなくて、運動によって生じた結合によって生ずるとされている。

（１２） pratiniyatajātiyogitvam ／

それぞれ定まった類に付随していること。

この個所は Nyāyakandalī および Vyomavatī では共に持ち上げること等運動５種にはそれぞれ持ち上げるという共通性（utkṣepaṇatva）等の種に付随していることが注釈されている。Vaiśeṣikasūtra には記載されていない。Nyāyakandalī によれば、次の如く注釈されている。[43]

pratiniyateti ／ utkṣepaṇādiṣu pratyekam utkṣepaṇatvādiyoga ity arthaḥ ／

‘それぞれ定まった類に----’とは次の通りである。持ち上げること等においてそれぞれが持ち上げるという共通性等と結びついているという意味である。

以上で Praśastapādabhāṣya に述べられた１２の運動の特質について、どのような注釈がなされていたかを終わりにする。

４、 まとめ

Praśastapādabhāṣya に記載されたこれら１２の特質は既に見たように半分は Vaiśeṣikasūtra 第１章第１日課に記載されたものである。ここではこれら１２の特質についてまとめてみたいと考える。

これら１２の特質はいろいろな種類のものが混じっている。これらを大きく分けて４つの分類に分けることができると考えられる。それらは運動の定義に相当するよう

なもの、運動の性格的なもの、運動の原因となるもの、および運動の結果である。これらを表にすれば、第３図のようになる。

第３図　１２の運動の特質

Ⅰ、運動の定義に相当するようなもの （１）　同一時に１つの実体に存すること。 （２）　瞬間的であること。 （３）　有形な実体に存すること。 （４）　性質を持たないこと。 （７）　結合と分離に対して＜他を＞必要としない独立な原因であること。 （１２）　それぞれ定まった類に付随していること。
Ⅱ、運動の性格的なもの （６）　＜運動＞自ら作り出す結合によって妨げられること。 （８）　非内属因であること。 （１０）　＜自身と＞同じ類に属するものを形成しないこと。 （１１）　実体を形成しないこと。
Ⅲ、　原因 （５）　重さと流動性と意志的努力と結合とから生ずること。
Ⅳ、　結果 （９）　＜運動＞自ら＜拠り所となるもの＞および他の拠り所となるものとに密接に結びついた＜結合および分離という＞結果を発生させる。

次にこの第３図に従って１２の運動の特質を論ずる。

Ⅰ、　運動の定義に相当するようなもの

この項目に入る運動の特質は（１）から（４）、（７）および（１２）である。そ

れらの殆どは Vaiśeṣikasūtra １－１－１６（“１つの実体を有し、性質を有せず、結合と分離において独立な原因であるということが運動の定義である。”）に記載された運動の定義である。（４）“運動は性質を持たないこと”、これは Candrānanda によって注釈されているように（Vaiśeṣikasūtra １－１－１９）、Vaiśeṣika 学派では“運動は運動するものをある場所から分離させ、次の場所へ結合させる”（Candrānanda １－１－１９）という考え方を基本原理として運動を概念分析した結果である。すなわち運動というカテゴリーから運動を生じたり（すなわち、運動が運動を生ずる）、停止したりする概念を排除したために生じたものと考えられる。もし運動が運動を生ずるとすれば、運動の特質（１０）で述べたように、運動の基本原則である運動によって生じた分離と結合を放棄しなければならなくなってしまう。このことは運動を認識論的に場所の移動として考えたとき不可能なことであった。従って、Vaiśeṣika 学派では運動というカテゴリーは運動そのもの、すなわち運動の分類を論じるだけのものにして、運動を生じたり、停止したりする概念は他のカテゴリーに入れられたのである。また、（１）“同一時に１つの実体に存すること”、（２）“瞬間的であること”、（３）“有形な実体に存すること”より同一時に１つの有形な実体が瞬間的な１つの動きだけをなすそれが運動であると考えられていた。すなわち、１つの運動は有形な実体の瞬間的な動きとして捕らえられている。そのため、運動が生ずると、運動している基体、すなわち運動している実体は瞬間的にその場所から分離して他の場所と結合する。これが運動によって必然的に生ずるものであるから、“結合と分離に対して＜他を＞必要としない＜独立な＞原因であること”が（７）でいわれている。以上が運動の定義と思われる特質を解析したものである。しかしこれは運動を認識論的に見たにすぎず、動きと時間との関わりについてはどこにも書かれていない。従って、これは認識論の立場から運動を定義したものと考えられる。

Ⅱ、　運動の性格的なもの

この項目に入る運動の特質は（６）、（８）、（１０）、（１１）である。（６）“＜運動＞は自ら作り出す結合によって妨げられること”は実体に瞬間的な運動が生ずれば、その実体はそれがあった場所と分離して次の場所と結合する。その結合によって１つの瞬間的な運動が消滅する。次の瞬間に実体が運動を生ずると、実体はその場所と分離して更なる場所と結合して瞬間的な運動が消滅する。従って、運動の結果

として生ずる分離と結合の内、結合において瞬間的な運動が消滅すると考えられていた。このことは運動を瞬間的な場所の移動と捉えたために生じた認識論的な帰結である。このように運動は結果として分離と結合を生ずる。それを Vaiśeṣika 学派では因果律を使って書き表した。Vaiśeṣika 学派の因果律では原因が３種、すなわち内属因、非内属因、動力因に分類されている。内属因は結果を生ずる基体であり、非内属因は結果を生ぜしめる直接の原因である。動力因は結果を生ずるための動力となる原因である。運動は運動している実体がその場所と分離し、次の場所と結合するための直接の原因である。従って、（８）“運動は非内属因である”と考えられた。また、（１０）“＜自身と＞同じ類に属するものを形成しないこと”、すなわち運動が運動を生じないということは前述したように、もし生ずるとすると運動の基本原則である運動によって生じた分離と結合を放棄することになる。何故なら、運動が運動を生ずるとすると、運動している基体は第１の運動によってある場所から分離されるが、次の場所との結合がなされない。すると、第２の運動による分離も結合も起こらなくなってしまう。このことは“運動は運動するものをある場所から分離し、次の場所へ結合させる”という基本原則を放棄することになる。そのことは不可能なので、Vaiśeṣika 学派では“運動が運動を形成しない”とした。

次に、（１１）“運動は実体を形成しないこと”という特質に移る。Nyāyakandalī では実体は運動が消滅した後に出現するのであって、運動は実体を形成しないと注釈されている。すなわち、運動によって生じた結合によって実体が生ずる。その例は Nyāyakandalī および Vyomavatī のその個所の注釈において記載されていない。また、Vaiśeṣikasūtra の諸注釈書のその個所の注釈でも記載されていない。しかし、Praśastapādabhāṣya 第１章実体、第６節「創造と破壊」において、世界帰滅後、大自在神（maheśvara）が世界を創造しようとしたとき、アートマンに存在しているアドリシュタ（不可見力）によってアートマンと諸々の風の原子との結合が起こり、それによって諸々の風の原子に運動が起こる。その運動によって原子同士が結合して風の二原子体（dvyaṇuka）が生ずることが記載されている。[44] これは運動によって生じた結合から実体が生ずるよい例であると考えられる。従って、運動によって生じた結合から運動が停止するときに実体が形成されるのであって、運動しているときに形成されないということである。

Ⅲ、　運動の原因

Ⅰで論じたように運動が生ずる原因および停止する原因を運動のカテゴリーは内に持っていないから、必然的に運動が生ずる原因を考えなくてはいけなくなってしまった。その原因となるものは（５）“重さと流動性と意志的努力と結合”である。重さは落下運動に必要な原因であり、流動性は水が流れるという運動に必要な原因である。意志的努力は人が行為、すなわち手を上げるとか弓を動かすとかという運動が生ずる場合、これらの行為の主体であるアートマン（すなわち、心）に“手を上げたい”あるいは“弓を動かしたい”という欲求がおこり、それによって“手を上げる”、“弓を動かす”という意志的努力が生ずる。この意志的努力によって手を上げる、弓を動かすという運動が生ずるのである。後に示すようにこの章の第４節「アートマンに支配された運動」においては運動の原因が究極的に意志的努力に帰着してしまうような運動が記載されている。[45]それらは身体の運動、杵を動かし臼に衝突させる運動、投げ槍の運動、弓矢の運動である。次に結合であるが、運動が作り出す結合は運動を停止する原因となる。しかしここでいわれている結合は運動を生ずる原因となるものである。これについてはどのような結合であるのか、Nyāyakandalī および Vyomavatī のこの個所の注釈では何も云われていない。しかし、Candrānanda による Vaiśeṣikasūtra の注釈において、運動の原因として“重さ、流動性、意志的努力、衝動、衝突、＜それとそれに＞つながれた部分との結合（saṃyuktasaṃyoga）、意志的努力およびアドリシュタ（不可見力）”が上げられている。[46]Candrānanda によって記載された運動の原因はアドリシュタを除けば Praśastapādabhāṣya に記載された運動の原因である。しかも、結合に関しては後に示すように Praśastapādabhāṣya 第３章「運動」、第５節「アートマンに支配されない運動」で、運動の原因となっている特殊な結合すべてが上げられている。さらに第５節で運動の原因が分からない運動に対する原因として考えられているアドリシュタまでも上げられている。[47]これは運動の原因についてすべてが上げられており、Praśastapādabhāṣya の記載より勝っている。これら３つの特殊な結合についてはいろいろな運動を扱うときに詳しく論ずる。運動の原因としての結合をさらに調べてみると、Praśastapādabhāṣya 第２章性質、第１０節「結合」の最初の部分において、“結合は実体、性質、運動の原因である。”と述べられている。Nyāyakandalī のその個所では運動の原因となる結合の例として次のような結合が上げられている。[48]

prayatnavadātmahastasaṃyogo hastakarmaṇo hetuḥ ／

意志的努力を所有しているアートマンと手の結合は手の運動の原因である。

ここに記載された例は手の運動について意志的努力を所有するアートマンと手の結合が手の運動の原因であることが示されている。従ってこのような結合、すなわち意志的努力のような動力を伴ったものと手のような動かされるものとの結合はその動かされるものの運動の原因である（第４節、５節において非内属因として取り扱われている）。

その他に運動の原因として“運動の勢い（ヴェーガ、vega）”という潜在能力がある。ここには記載されていないが、第４節「アートマンによって支配された運動」および第５節「アートマンに支配されない運動」において運動の原因として上げられている。この潜在能力は物体が空中を運動するとき、その運動を生ずる原因となるものである。その例として第４節の矢の運動を述べた個所で、矢の空中での運動は“運動の勢い”によって生ずることが記載されている。[49]“運動の勢い”についてはここでは言及せず、第４節、第５節を見るときに詳しく論ずる。

Ⅳ、　運動の結果

この項目に入る運動の特質は（９）“＜運動＞自ら拠り所となるものおよび他の拠り所となるものとに密接に結びついた結果を発生させる。”である。運動の結果について既に述べたように、運動が生ずれば運動を生じている実体はそれがいた場所と分離し、次の場所と結合する。その結合によって運動が消滅する。このような過程において運動によって生ずる結果は結合と分離だけである。すなわち、＜運動＞自ら拠り所となるもの、すなわち運動を生じている実体および他の拠り所となるもの、すなわち実体がいる場所に密接に結びついた結果は結合と分離である。

以上であるが、これらより Praśastapādabhāṣya に記載された運動の特質は運動を認識論的に取り扱ったために生じたものである。すなわち、運動を瞬間的と考え、“運動は運動するものをある場所から分離させ、次の場所へ結合させる”という認識論的な場所の移動を基本原理としているために生じたものである。また、その基本原理に則して運動を概念分析した結果、運動そのものを運動と考え、運動を引き起こす原因や停止の原因は他のカテゴリーに入れられた。運動の原因としては“重さ、流動性、意志的努力、結合”が上げられている。また、運動の停止については運動によって生じた結合が上げられている。このように Vaiśeṣika 学派では瞬間的な運動が考えられていた。そして、継続運動はその瞬間的な運動が運動の原因によって次々に生ずるため起

こるとされた。また、運動を結果と考えたときその原因が、あるいは運動を原因と考えたときその結果が Vaiśeṣika 学派の因果律にのっとって認識論的に解明されている。しかし、運動の時間的な関係については一切触れられていない。 このようにここで論じられている運動の特質は認識論の立場から運動の特質が考えられただけにすぎない。

以上が第1節“運動一般”に記載されていた運動の特質について分析した結果である。

［引用文献および注］

(1) D. Jhā : Praśastapādabhāṣya with the commentary, Nyāyakandalī along with Hindi translation, Varanasi, 1977, pp. 697- 740.

(2) Muni Śrī Jambuvijayaji : Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the Commentary of Candrānanda, Baroda, 1961, pp. 1-7.

(3) Ibid. p. 6.

(4) Ibid. p. 5.

１－１－１３に対する Candrānada の注釈：

saṃyogavibhāgasaṃskārāṇāṃ kāryāṇāṃ madhyāt saṃyogenaiva karma virudhyate, na vibhāgasaṃskārābhyāṃ saṃyogānutpattiprasaṅgāt ／／

＜運動の＞結果である結合、分離、潜在能力の中から結合によってだけ運動は妨げられる。分離と潜在能力によって＜運動は妨げられ＞ない。何故なら、＜もし分離と潜在能力によって運動が妨げられるなら、運動によって＞結合が生じないという誤りが生じるが故に。

(5) 図－１に用いたスートラを記すと共に Candrānanda の注釈に従って翻訳した。

（１－１－８～１９は本文に記載してあるので省略）

１－１－２０ na dravyāṇāṃ vyatirekāt ／

＜運動＞は実体の＜原因＞ではない。何故なら、＜結果として実体が生ずるとき（現れるとき）には運動は既に＞消滅しているが故に。

１－１－２１ guṇavaidharmyān na karmaṇāṃ ／

＜運動は＞性質と性格を異にするが故に、諸々の運動の＜原因では＞ない。

１－１－２２ dravyāṇāṃ dravyaṃ kāryaṃ sāmānyam ／

一つの実体は諸々の実体の共通の結果である。

１－１－２３ dvitvaprabhṛtayaś ca saṅkhyāḥ pṛthaktvaṃ saṃyogavibhāgāś ca

そして２を始めとする諸々の数、別異性（個別性）、および諸々の結合と分離は＜諸々の実体の共通の結果である＞。

１－１－２４ asamavāyāt sāmānyaṃ karma kāryaṃ na vidyate ／

＜一つの運動は諸々の実体に＞内属しないが故に、運動は＜諸々

の実体の＞共通の結果であることは知られない。

１－１－２５　saṃyogānāṃ dravyam ／

実体は諸々の結合の＜共通の結果＞である。

１－１－２６　rūpāṇāṃ rūpam ／

＜一つの実体全体に内属している＞一つの色は＜諸々の部分にある＞諸々の色の＜共通の結果である＞。

１－１－２７　gurutvaprayatnasaṃyogānām utkṣepaṇam ／

持ち上げることは重さ、意志的努力および結合の＜共通の結果である＞。

１－１－２８　saṃyogavibhāgāḥ karmaṇām ／

諸々の結合と分離は諸々の運動の＜結果＞である。

１－１－２９　kāraṇasāmānye dravyakarmaṇāṃ karma-akāraṇam uktam ／

原因一般において一つの運動は諸々の実体と運動の原因ではない。

(6)　Vaiśeṣikasūtra の１５世紀の注釈書、Upaskāra に記載された sūtra では次のようになっている。

１－１－２０（Up.）　saṃyogavibhāgavegānāṃ karma samānam ／ *

運動は結合と分離とヴェーガの共通の＜原因である＞。

* Nārāyaṇa Miśra : Vaiśeṣikasūtropaskāra of Śaṅkaramiśra, Varanasi, 1969, p.61.

(7)　Candrānanda による。

Candrānanda の注釈によれば、次の通りである。

yadi khalu dravyasya kāraṇaṃ karma bhavet tathā sati kṛtvāpi saṃyogaṃ na nivarteta, nivṛtte tu karmaṇi kevalasya saṃyogasyopalambhāt manyāmahe “na dravyakāraṇaṃ karma” ／

もしも実体の原因が実に運動であるとするなら、そのようであるとき、結合が生じた後、＜運動は＞消滅しないであろう。しかし、運動が消滅したとき、唯一つの結合が得られるが故に、私たちは“運動は実体の原因ではない”と理解する。

(8)　Candrānanda による。この個所の Candrānanda の注釈：

gurutvadravatvanodanābhighātasaṃyuktasaṃyogāḥ svāśraye parāśraye ca karmakāraṇam, prayatnādṛṣṭau tu parāśraya eva ／ tatra tāvat karma ［na］ svāśraye karmakāraṇam, niṣkriyadravyānupalabdhiprasaṅgāt ／ nāpi parāśraye, tatsaṃyogenaiva nivartitatvāt ／

tasmād etaiḥ karmakāraṇair guṇair vaidharmyān na karma karmakāraṇam ／

重さ、流動性、衝動、衝突、＜それとそれに＞つながれた部分との結合は＜運動＞自身の基体と他の基体とにおいて運動の原因である。しかし、意志的努力とアドリシュタは他の基体においてだけ＜運動の原因である＞。その場合、第一に運動は＜運動＞自身の基体において運動の原因ではない。何故なら、＜もし運動が自身の基体で運動の原因なら＞活動しない実体があり得ないという誤りが結果するが故に。他の基体においても存在しない。その結合によって＜運動は＞まさに消滅するということの故に。それ故、これらの運動の原因である性質と＜運動は＞性格を異にするが故に、運動は運動の原因ではない。

(9) Candrānanda による。この個所の Candrānanda の注釈：

anekasmin dravye ekasya karmaṇaḥ samavāyaniṣedhād na dravyāṇāṃ dvibahūnāṃ karma samānaṃ kāryam asti ／

多くの実体に一つの運動が内属することを否定するが故に、運動は二つのあるいは多くの実体の共通の結果でない。

(10) D. Jhā : Praśastapādabhāṣya with the commentary, Nyāyakandalī along with Hindi translation, Varanasi, 1977, pp. 697-698.

(11) D. Jhā : ibid.

ekadravyavattvam ekadā ekasmin dravye ekam eva karma vartate , ekaṃ karma ekatraiva dravye vartata ity ekadravyavattvam ／

＜運動は＞‘１つの実体に存すること’とは、同時に１つの実体に１つの運動だけが存在し、＜かつ＞１つの運動が１つの実体だけに存在するということが‘１つの実体に存すること’である。

(12) D. Jhā : ibid.

(13) G. Śāstrī : Vyomavatī of Vyomaśiva, Varanasi, 1983, p. 244.

ekasmiṃś cānekakarmābhyupagame viruddhadigabhimukhatāyāṃ parasparaṃ pratibandhād agamanm eva syāt ／

１つの実体に沢山の運動を認めるとき、反対の方向に向かうということにおいては互いに妨げになることから全く進行がないであろう。

(14) D. Jhā : op.cit., p. 698.

kṣaṇikatvam āśutaravināśitvam ／

‘瞬間的であること’とはより速く消滅してしまうことである。

(15) 中村元 :“パダールタ・ダルマ・サングラハ”, ‘三康文化研究所年報’ Vol. 10, 11 (1977-8), 三康文化研究所, p. 289.

(16) Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit., p. 21.

karmabhir asya punar guṇabhūtasya-api sādharmyam apavarga vināśaḥ, utpattyanantaram agrahaṇād vināśo’numīyate /

さらにこの性質として存在しているもの（音）にとってもまた諸々の運動との共通的な性格は apavarga、すなわち消滅である。発生の直後に把捉されないから消滅が推論される。

(17) Nārāyaṇa Miśra : Vaiśeṣikasūtropaskāra of Śaṅkaramiśra, Varanasi, 1969, p. 184.

apavargaḥ āśunāśaḥ /

apavarga とは速やかなる消滅である。

(18) D. Jhā : op.cit., p. 698.

mūrtadravyavṛttitvam avacchinnaparimāṇadravyavṛttitvam /

‘有形な実体に存していること’とは大きさを特定することのできる実体に存していることである。

(19) D. Jhā : op.cit., p. 698.

aguṇavattvaṃ guṇavattvarahitatvam /

性質を持たないこととは性質を有していることが欠如していることである。

(20) Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit. p. 5.

(21) D. Jhā : op. cit. p. 723-724.

(22) この個所は刊本によって Praśastapādabhāṣya の記述が違っている。

D. Jhā : Praśastapādabhāṣya with Nyāyakandalī および J. S. Jetly and V. G. Parikh : Nyāyakandalī では“.....saṃyogavattvam”となっているが、P. Dviveden : Praśastapādabhāṣya with Nyāyakandalī ; G. Śāstrī : Vyomavatī of Vyomasiva ; Chowkambha Sanskrit Series : Praśastapādabhāṣya with Commentaries of Sūkti, Setu, and Vyomavatī ; J. Bronkhorst and Y. Ramseier : Word Index to the Praśastapādabhāṣya および Bombay University 所蔵の Manuscript 4670 (Bombay Univ. Manu. Card No. 774) : Praśastapādabhāṣya with Nyāyakandalī では、“.....saṃyogajatvam”となっている。

ここでは後者に従った。

(23) G. Śastrī : op. cit., p. 245.

(24) Muni Śrī Jambuvijayaji : op.cit., p. 6.

(25) D. Jhā : op. cit., p. 725- 740

(26) Ibid., p. 698.

svakāryeti ／ svakāryeṇa saṃyogena vināśyatvaṃ na vibhāgavināśyatvam, uttara-saṃyogābhāva-prasaṅgāt ／

‘＜運動＞自ら作り出す＜結合によって＞-----’とは自らの作り出す結合によって＜運動が＞壊されることである。分離によって壊されるということではない。何故なら、＜もし分離によって運動が壊されるなら、＞次の結合が存在しないという＜誤り＞が結果として起こるが故に。

(27) G. Śāstrī : op. cit., p. 245.

tathā svakāryasaṃyogavirodhitvam iti ／ saṃyogamātreṇa vināśādarśanād iti svakāryagrahaṇam ／ karmakāryatvañ ca vibhāgavegayor apīti［tatra vyabhicāra-vāraṇāya］saṃyogagrahaṇam ／ ataḥ svakāryasaṃyogavirodhitvam asādhāraṇam api kvacid āśrayavināśenāpi vināśān na pakṣavyāpakam iti vaidharmyamātram eva ／

同様に‘＜運動＞自ら作り出す結合によって妨げられること’とは次の通りである。単なる結合だけによって＜運動が＞滅するということが認められないことからと考えて＜運動＞自ら作り出す＜結合＞という表現が生じる。そして運動が作り出す結果であることは分離とヴェーガとにおいても存在するという。［その場合、混乱を防ぐために］‘結合’という表現が生じる。これから‘自ら作り出す結合によって妨げられること’は＜結合と運動の結果性において＞また一般的でないものである。あるところでは基体の消滅によってもまた＜運動が＞滅することから＜運動が滅することに対して＞主張（自ら作り出す結合によって妨げられること）の遍満性はないという違い（異質性）だけがまさに存在する。

(28) D. Jhā : op. cit., p. 698.

saṃyogavibhāgeti ／ yathā vegārambhe nodanābhighātaviśeṣāpekṣatvaṃ naivaṃ saṃyogavibhāgārambhe nodanādyapekṣatvam ity arthaḥ ／

‘結合と分離----’とは次の如くである。例えば、＜運動にとって＞ヴェーガ（勢い）の発生においては、衝動と衝突という特殊な＜結合＞に依存する

という特徴がある。だが、結合と分離の発生においては、このように衝動等に依存するという特徴が存在しないという意味である。

(29) G. Śāstrī : op. cit., p. 245.

tathā vibhāge saṃyoge' pi ca kartavye nirapekṣakāraṇatvaṃ karmaṇaḥ svarūpam /

同様に分離と結合が＜運動によって＞作られるとき、独立な原因であることが運動の本来の姿である。

(30) Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit., p. 6.

(31) D. Jhā : op. cit., p. 698.

G. Śāstrī : op. cit., p. 245.

(32) Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit., p. 75.

Candrānanda による注：

saṃyogavibhāgeṣu nirapekṣakāraṇatvāt tatkāraṇadravye samavetatvāt karmotpanna-mātram eva kāraṇabuddhiṃ janayati /

＜運動は＞諸々の結合と分離において独立な原因であるということから、そして＜運動は＞その原因である実体に内属していると云うことから、運動によって生ずるということだけがまさに“＜運動が＞原因である”という理解を生ぜしむる。

（Upaskāra ではスートラが次のように異なり、その注によれば、次のように訳せる。(*)）

kāraṇe samavāyāt karmāṇi /

諸々の運動は原因＜である実体＞に内属しているが故に＜原因＞である。）

(*) Nārāyaṇa Miśra : Vaiśeṣikasūtropaskāra of Śaṅkaramiśra, sūtra 10-2-3. Varanasi, 1969, p.529.

(33) Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit., p. 74.

(34) Nārāyaṇa Miśra : op. cit. pp. 528- 529.

① Vaiśeṣikasūtra 10-2-3 (Candrānanda 10- 14) に対する Upaskāra の始まりの部分

asamavāyikāraṇānīti śeṣaḥ /

＜運動は＞非内属因であるということが＜本文に＞付け加えるべきである。

② sūtra 10-2-1 (Candrānanda 10-12) に対する Upaskāra の始まりの部分

kāraṇa samavāyikāraṇam idam iti pratītiprayogau dravye draṣṭavyau /

‘原因’、これは内属因であるという明瞭な理解とその適用は実体において認められるべきである。

(35) 大網　功：“インド運動論と因果律”，「科学史研究」，Vol. 38(No. 211), 1999, pp. 142- 153.

(36) D. Jhā : op. cit., p. 698-699.

svaparāśrayeti / svāśraye parāśraye ca vyāsajya samavetaṃ yat kāryaṃ saṃyogavibhāgalakṣaṇaṃ tadārambhakatvam /

‘＜運動＞自らの＜拠り所となるもの＞および他の拠り所となるものとに----’とは次の如くである。＜すなわち、＞自身の拠り所となる実体（その運動を生じている実体）と他の拠り所となるものとに付随して、密接に結びついた結合および分離の形を取っている結果であるところのそ＜の結果＞を発生させるということが＜運動にとって＞存在する。

G. Śāstrī : op. cit., p. 245-246.

tathā svaparāśrayasamavetakāryārambhakatvam / yasminn āśraye samavetaṃ karma, tatra āśrayāntare ca samavetaṃ vibhāgaṃ saṃyogaṃ cārabhata iti /

同様に‘自らの拠り所となるものと他の拠り所となるものとに密接に結びついた結果を発生させること’、すなわちある基体に内属した運動がある場合、その場合、＜運動は＞他の拠り所となるものに密接に結びついた結合と分離を形成するということである。

(37) D. Jhā : op. cit., p. 699.

samāneti / karmaṇaḥ karmāntarārambhe gacchato gativināśo na syāt /

‘＜自身と＞同じ＜類に属するもの----＞’とは１つの運動が他の運動を発生させるなら、動きつつあるものにとって動きの停止がないであろう。

(38) G. Śāstrī : op. cit., p. 246.

samānajātīyānārambhakatvam / tathā cotpannaṃ karma vibhāgaṃ saṃyogaṃ cārabhamāṇam upalabdhaṃ na karmāntaram iti / ekasmin dharmiṇy anekasya karmaṇaḥ pūrvam eva pratiṣedhāt /

‘同じ類に属するものを生じないこと’。そして同様に生じた運動は分離と結合を形成しているということが理解され、他の運動が＜形成されるということが理解され＞ないといわれている。何故なら、１つの主体（基体）にお

いて＜属性である＞運動が多くあることが既に全く否定されているが故に。

(39) Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit. p. 4

na karmaṇā karma janyate, karmaṇām uparamadarśanāt ／

運動によって運動は生まれない。何故なら、諸々の運動の停止が認められるが故に。

(40) Nārāyaṇa Miśra : op. cit. p. 48.

(41) D. Jhā : op. cit., p. 699.

dravyeti ／ uttarasaṃyogān nivṛtte karmaṇi dravysyotpādanam ／

'実体----' とは次の如くである。次の結合から運動が停止するとき、実体が生ずる。

(42) G. Śāstrī : op. cit., p. 246.

dravya-anārambhakatvam ／ na karma dravyam ārabhate, tasyottarasaṃyogena vinaśyad-avasthasya kāraṇatva-asambhavād iti svabhedavyāpakaṃ sādharmyam ／

'＜運動は＞実体を形成しないこと'。すなわち、運動は実体を形成しない。何故なら、＜もし運動が実体を形成するとすれば、＞それ（運動）が次の結合によって消滅していくことの原因性が存在しないが故に、ということは自らの類に内属する共通的な性格である。

(43) D. Jhā : op. cit., p. 699.

(44) D. Jhā : op. cit. pp. 127-128.

tataḥ punaḥ prāṇināṃ bhogabhūtaye maheśvara-sisṛkṣā-anantaraṃ sarvātmagatavṛtti-labdha-adṛṣṭa-apekṣebhyas tatsaṃyogebhyaḥ pavanaparamāṇuṣu karmotpattau teṣāṃ parasparsaṃyogebhyo dvyaṇukādiprakrameṇa mahān vāyuḥ samutpanno nabhasi dodhūyamānas tiṣṭhati ／

さらに次に諸々の生物にとって＜幸、不幸を＞経験させるために、大自在天にとって＜世界を＞創造しようとする意欲が＜生ずる＞。その直後にすべてのアートマンに存して＜いるアドリシュタ（不可見力）が＞活動を獲得した＜。その＞アドリシュタに依存しているかの結合（アートマンと原子との結合）から諸々の風の原子（パラマーヌ）に運動が生ずる。そのときそれら（諸々の原子）が相互に結合することからドヴィアヌカ（２微果）等の順序

によって大きな粗大風が生ずる。<その風が>大気の中で強く振動している。

(45) D. Jhā : op. cit. pp. 713- 724.

(46) Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit., p. 6.

(47) D. Jhā : op. cit., pp. 725- 740.

(48) D. Jhā : op. cit., p. 336.

(49) D. Jhā : op. cit., pp. 723- 724.

第２章　運動の種類*

* この論文は　大網功：「古代インドの運動論ー運動の種類についてー」，『科学史研究』Vol. 40 (No. 220)，2001 年冬に掲載された論文に加筆したものである。

1．はじめに

古代インドにおいて Vaiśeṣika 学派では運動はすべて瞬間的と考えられ[1]、“運動は運動するものをある場所から分離させ、次の場所へ結合させる”という考え方を基本としていた。[2] 継続運動は意志的努力や運動の潜在能力、ヴェーガ（運動の勢い）などの動力因によって瞬間的な運動が次々に引き起こされるために生ずるとされた。この派の運動論では、“運動は運動を生み出すことはあり得ない”と考えて、物体あるいは身体は独りでに動くのではなく何か原因に基づいて動いていると考えられていた。[2] 例えば,手足の意識的な運動は身体を支配するアートマン（我；認識および行動の主体）に生じた意識的努力によって生じ、無意識的な運動は意志の働かない何か他の原因に基づくとされた．空中での物体の運動はヴェーガによって生じるとしている。また、瞬間的な運動は５種に分類されている。それらは“持ち上げること”（utkṣepaṇa）、“振り下ろすこと”（apakṣepaṇa）、“屈曲（折り曲げること）”（ākuñcana）、“伸張（折れ曲がっているものを真っ直ぐにすること）”（prasāraṇa）、“進行”（gamana）である。これらの運動について Vaiśeṣika 学派の最初の著作、Vaiśeṣikasūtra（A.D. 2 世紀頃）では１－１－６（スートラの番号は Candrānanda によった。）において種類の名前が記されているだけで、それ以上のことは記されていない。[3] A.D. 6 世紀頃の著作、Praśastapādabhāṣya ではこれらの運動が認識論的にどのような運動であるのか記されている。継続運動についてはその運動を起こす身体の動作からその運動に至るまでの運動過程と運動の分類が述べられている。

S. Dasgupta などの研究によれば、この５種の運動の内、持ち上げることと、振り下ろすことは縦方向の運動であり、屈曲は折り曲げる運動または収縮運動で、伸張は伸ばす運動であると記されている。また、宇井伯寿によれば、屈曲と伸張は左右の運動であると述べられている。[4] しかし、屈曲、伸張運動は左右の運動であろうか、また、これらの書物では何故これらの運動が種類であったのか言及されていない。

ここでは，この５種の運動がどのような運動であるのか、また運動の種類が Vaiśeṣika 学派でどのように考えられていたのか、そしてこれらの運動が何故、運動の種類であったのか Praśastapādabhāṣya および１０世紀のその注釈書，Nyāyakandalī と Vyomavatī について調査した結果を述べる。

Praśastapādabhāṣya 第３章「運動」では種類としてこの５種の運動が上げられているが、

実際には運動を述べた例は瞬間的な運動ではなく、継続運動について述べられている。この瞬間的な運動がどのような運動であるか述べる前に、継続運動について運動の分類をまず見ておく。

2. 継続運動における運動の分類

継続運動について前述したように Praśastapādabhāṣya 第3章「運動」では、その運動を起こすための身体の動作からその運動に至るまでの運動過程が取り扱われている。[5]その継続運動は Praśastapādabhāṣya によれば次のように分類されている。[6]

（ここに原文と筆者の直訳を付しておく。（）、＜＞は筆者が注記したものである。）

etat pañcavidham api karma śarīrāvayaveṣu tatsambaddheṣu ca satpratyayam asatpratyayaṃ ca／yad anyat tad apratyayam eva teṣv anyeṣu ca, tad gamanam iti／

この＜瞬間的な＞5種の運動はまた身体の諸部分およびそれと結びついた諸々の物質において意識の作用に基づく＜運動＞（satpratyaya）と意識の作用から離れた＜運動＞（asatpratyaya）とである。異なるところのそ＜の運動＞はそれら（身体の諸部分およびそれと結びついたもの）および他の諸々のものにおいてまさに意識によらない＜運動＞（apratyaya）である.それが進行であると＜いう＞。

以上である。これによれば、この5種の運動は“意識の作用に基づく運動”（satpratyaya-karman）と“意識の作用から離れた運動”（asatpratyaya-karman）である。そして、それと異なる運動は“意識によらない運動”（apratyaya-karman）とされ、進行（gamana）であると考えられている。そして、“意識の作用に基づく運動”と“意識の作用から離れた運動”は身体および身体に結びついたものに生ずる運動であり、“意識によらない運動”は身体と身体に結びついたものおよびそれ以外のものに生ずる運動とされている。これらの名称は瞬間的な運動に与えられた名称と考えられるが、運動の実際例を取り扱った Praśastapādabhāṣya 第3章「運動」の第4節、第5節ではこれらの名称が継続運動の種類として使われている。[7]従って、これらの名称は瞬間的な運動にも継続運動にも使われていたものと考えられる。これからは第4節、第5節に合わせて、これらの運動の名称を継続運動の種類と見なすことにする。

継続運動の種類については今までに B. Faddegon が言及している。B. Faddegon は Praśastapādabhāṣya のこの個所において、śarīrāvayaveṣu が satpratyayam に対応し、

tatsambaddheṣu が asatpratyayaṃ に対応すると解して、継続運動の分類を次のように分類している。“意識の作用に基づく運動”（satpratyaya-karman）を意識を伴った運動で身体に生じた運動とし、“意識の作用から離れた運動”（asatpratyaya-karman）を身体に伴われた物体の運動および身体から離れた物体の運動として分類している。さらに、“意識によらない運動”（apratyaya-karman）を常に意識の作用を欠いた運動として分類している。[8]これによれば、身体と結びついた物体の運動はすべて“意識の作用から離れた運動”とされている。しかし、身体と結びついた物体の運動には身体、すなわち手や足と共に動く物体の動きと意志的努力に依存しない物体の動きが含まれている。手、足と共に動く物体の動きは意志的努力に基づく動きなので、“意識の作用に基づく運動”の分類に入り、意志的努力に基づかない物体の動きは“意識の作用から離れた運動”の分類に入ると考えられる。Praśastapādabhāṣya に記載された杵と臼との衝突運動において杵を持ち上げる運動は次の如く記されている。[9]

yadā hastena musalaṃ gṛhītvecchāṃ karoti “utkṣipāmi hastena musalam” iti, tadanantaraṃ prayatnas tam apekṣamāṇād ātmahastasaṃyogād yasminn eva kāle haste utkṣepaṇakarmotpadyate, tasminn eva kāle tam eva prayatnam apekṣamāṇād dhastamusalasaṃyogān musale ’ pi karmeti ／

手によって杵をつかみ、“私は手によって杵を持ち上げる”という欲求を人が生ずるとき、その直後に意志的努力が＜生ずる＞。それ（意志的努力）に依存しているアートマンと手との結合から手に持ち上げることという運動が生ずる。ちょうどそのときに、その意志的努力だけに依存している手と杵との結合から杵にまた運動が＜生ずる、＞と＜いわれる＞。

ここにおいて、手に結びついた杵の運動は意志的努力に基づいた運動である。従って、この杵の運動は明らかに“意識の作用に基づく運動”（satpratyaya-karman）の分類に入る。従って、B. Faddegon は誤った運動の分類をしていることになる。では継続運動の分類はどのようになるであろうか、調査した結果を以下に記す。

Praśastapādabhāṣya のこの個所は Nyāyakandalī では次のように注釈されている。[10]（ここに原文と筆者の直訳を付しておく。Praśastapādabhāṣya の本文は原文および直訳の中でアンダーラインで示しておいた。また（）、＜＞は筆者が注記したものである。）

<u>satpratyayam</u> iti ／ prayatnapūrvakam aprayatnapūrvakaṃ ca bhavatīty arthaḥ ／ <u>yad</u>

anyad iti ／ eteṣu śarīrāvayaveṣu musalādiṣv anyeṣu vā dravyeṣu yat tadapratyayajaṃ karma jāyate satpratyayād anyat tad gamanam eva ／

意識の作用に基づく＜運動＞＜と意識の作用から離れた＜運動＞＞とは意識的努力に基づく＜運動＞と意識的努力に基づかない＜運動＞であるという意味である。異なるところの＜運動＞-------とは＜次の如くである。すなわち、＞これら身体の諸部分および＜それと結びつく＞杵等において、あるいは別の物質において、それ（身体の諸部分等のもの）に意識によらないもの（apratyaya）に起因する運動、＜すなわち＞意識の作用に基づく＜運動＞（satpratyaya）とは異なる運動が生ずる。そ＜の運動＞がまさに進行である。

これによれば、satpratyaya（意識の作用に基づく）運動は意志的努力に基づくものであり、asatpratyaya（意識の作用から離れた）運動は意志的努力に基づかない運動であると述べられている。また、apratyaya（意識によらない）運動は satpratyaya（意識の作用に基づく）運動とは異なる運動であるとされている。Vyomavatī によれば、satpratyaya 運動は意志的努力に基づく運動であり、asatpratyaya 運動と apratyaya 運動は意志的努力に基づかない運動であることが注釈されている。[11] Nyāyakandalī に従えば、asatpratyaya 運動は apratyaya 運動の一種であると考えられる。この解釈が正しいことを次に示そう。

asatpratyaya という言葉は Praśastapādabhāṣya および両注釈書において、実際の運動を説明する個所では一切出てこない。ただ、Praśastapādabhāṣya 第３章「運動」、第５節の初めに第４節を次のように要約している個所で使われているだけである。[12]

evam ātmādhiṣṭhiteṣu satpratyayam asatpratyayaṃ ca karmoktam ／

以上のようにアートマンに支配されているものにおいて、satpratyaya-karman（“意識の作用に基づく運 動”）と asatpratyaya-karman（“意識の作用から離れた運動”）とが＜第４節で＞いわれた。

ここで示されているように第４節では satpratyaya と asatpratyaya の運動が記載されていると考えられる。そして、 satpratyaya 運動は意志的努力に基づく運動であり、asatpratyaya 運動は意志的努力に基づかない運動であることが前述の注釈によって示されている。従って、satpratyaya 運動は意識の作用に基づく運動であり、 asatpratyaya 運動は意識の作用から離れた運動であると考えられる。しかし、第４節においては asatpratyaya（“意識の作用から離れた＜運動＞”）という言葉は Praśastapādabhāṣya およびその注釈書のどれを見ても一切記載されていない。[13]

第４節では①手の上げ下ろしの運動、②杵を臼に衝突させる運動、③槍を投げる運動、④弓矢の運動が扱われている。そしてその扱われ方はこれらの運動が生ずるために必要な意志的努力に基づく身体の動きから始まってその運動に至るまでの運動過程が記されている。例えば弓矢の運動では、“弓を引く”という欲求およびそれによって生じた意志的努力から弓を引き、弓と弦の運動が生ずる。この運動から始まって弓を離れた矢の空中での運動に至るまでの過程が記載されている。[14]このように意志的努力に基づいた身体の運動からその運動に至るまでの一連の運動過程が第４節で記載された運動である。すなわち、意識によって生じた運動（pratyaya 運動）、「アートマンによって支配された運動」である。意志的努力以外のものに基づいて生じた運動からその運動に至るまでの一連の運動過程が第５節「アートマンに支配されない運動」で記載された運動である。[15]従って第４節ではアートマンによって支配された運動、すなわち意志的努力によって生じた運動を原因として生まれた一連の運動過程の結果生じた運動が記載されている。これらの運動過程において、運動は大きく２種類に分けることが出来る。それらは意志的努力によって直接生じた運動（例えば、弓矢の運動で記載された弓を引くという運動）と意志的努力からもはや離れた運動である。この意志的努力から離れた運動とは、間接的には意志的努力によっているが、運動過程のこの時点ではもはや意志的努力から離れた他の原因によって生じた運動である。意志的努力から離れた運動についても２種類に分けることが出来ると考えられる。身体および身体に結びついたものの運動（例えば、弓矢の運動で記載された弓と弦との運動）と身体から離れた物体の運動（例えば、矢の空中での運動）である。意志的努力によって直接生じた運動が Praśastapādabhāṣya に記載された satpratyaya 運動である。Praśastapādabhāṣya の運動の分類に従えば、意志的努力からもはや離れた運動の内、身体および身体に結びついたものの運動が asatpratyaya 運動（意識の作用から離れた運動）であると考えられる。身体から離れた物体の運動、例えば弓矢の運動に記載された矢の空中での運動は２様に考えられる。１つは、この運動は身体から離れた意志的努力によらない運動であるから apratyaya 運動（意識によらない運動）である。他は、この運動は身体に結びついた物体が身体の束縛から離れた運動であるから、この運動の原因は身体に結びついたものの運動である。従って、この運動も asatpratyaya 運動のカテゴリーに入るという考え方である。前述の Praśastapādabhāṣya の第４節の要約によれば、第４節では satpratyaya 運動と asatpratyaya 運動が記載されていることになってい

る。従って、意志的努力から離れた運動はすべて asatpratyaya 運動と考えられる。それ故この運動もまた、asatpratyaya 運動と呼ばれていたと考えられる。しかるに第４節において、asatpratyaya という言葉は Praśastapādabhāṣya およびその注釈書のどれを見ても一切記載されていない。この節において、asatpratyaya 運動と考えられる手の無意識的な飛び上がりの運動が記載されている。この運動は無意識的な身体の運動であるから Praśastapādabhāṣya の分類に従えば、asatpratyaya 運動であると考えられる。しかし、この飛び上がりの運動は Praśastapādabhāṣya において apratyaya（意識によらない＜運動＞）とされ、その注釈書では意志的努力に基づかない＜運動＞とされている。[16]その個所は第４節の杵を臼に衝突させる運動において Praśastapādabhāṣya によれば、次のように記載されている。[17]

tato' ntyena musalakarmaṇolūkhalamusalayor abhighātākhyaḥ saṃyogaḥ kriyate, sa saṃyogo musalagatavegam apekṣamāṇo' pratyayaṃ musale utpatanakarma karoti ／ tatkarmābhighātāpekṣaṃ musale saṃskāram ārabhate ／ tam apekṣya musalahastasaṃyogo' pratyayaṃ haste' py utpatanakarma karoti ／

それ故、最後の杵の運動によって臼と杵にとって、衝突と呼ばれる結合が生ずる。その結合は杵に存するヴェーガ（運動の勢い）に依存しつつ、杵に“意識によらない”（apratyaya）飛び上がりの運動を生ずる。その（飛び上がりの）運動は衝突に依存し、杵に＜運動の＞潜在能力（サンスカーラ）を形成する。それ（潜在能力）に依存して、杵と手との結合が手にも“意識によらない”（apratyaya）飛び上がりの運動を生ずる。

ここで示されているように asatpratyaya 運動と考えられる手の無意識的な飛び上がりの運動は apratyaya（意識によらない）運動とされている。このことは asatpratyaya（意識の作用から離れた＜運動＞）が apratyaya（意識によらない＜運動＞）の一種であることを示している。その理由を以下に示す。Praśastapādabhāṣya の分類に従えば、asatpratyaya 運動は意志的努力によらない５種の瞬間的な運動からなっている。５種の運動とは持ち上げること、振り下ろすこと、屈曲、伸張、進行である。この飛び上がりの運動は Praśastapādabhāṣya の分類に従えば、asatpratyaya 運動の内、上への運動であるから、“持ち上げること”という運動に属するはずである。しかし Praśastapādabhāṣya では apratyaya 運動としている。そして apratyaya 運動は５種の瞬間的な運動の中、“進行”だけからなっている。このことは asatpratyaya 運動において“持ち

上げること”という種類はなかったと考えられる。同様にして、“振り下ろすこと”、“屈曲”、“伸張”という運動の種類は asatpratyaya 運動にはなかったと考えられる。それ故、asatpratyaya 運動のすべてが“進行”からなっていると考えられる。従って、asatpratyaya 運動すべてが apratyaya 運動に含まれると考えられる。それ故、５種の瞬間的な運動すべてが配置されているのは satpratyaya（意識の作用に基づく）運動以外にはない。

以上より Praśastapādabhāṣya に記載された継続運動の分類は大きく分けて（Ⅰ）pratyaya-karman（意識によって生じた運動）と（Ⅱ）apratyaya-karman（意識によらない運動）とに分かれる。（Ⅰ）意識によって生じた運動は２つのサブグループ、（１）satpratyaya-karman（意識の作用に基づく運動）と（２）asatpratyaya-karman（意識の作用から離れた運動）に分かれる。（Ⅱ）apratyaya-karman は（１）asatpratyaya-karman と（２）“初めから意識に依存していない運動”（Praśastapādabhāṣya 第３章「運動」，第５節）とに分かれる。そして satpratyaya-karman は意志的努力によって生じた身体の諸部分の運動およびそれと結びついた物体の運動であり、瞬間的な５種の運動すべてが配置されている。 asatpratyaya-karman は意志的努力によって生じた運動を原因とした一連の運動過程において、意志的努力に基づかない運動である。すなわち，身体の無意識的な運動および身体に結びついた物体の運動と身体の束縛から離れた物体の運動である。そして５種の中、進行（gamana）だけが配置されている。 また、apratyaya-karman には、意志的努力に基づかない運動すべてが含まれ、進行だけが配置されている。これらを図示すると第１図のようになる。[18]

３．瞬間的な５種の運動

前節で示したように，瞬間的な５種の運動（持ち上げること，振り下ろすこと，屈曲，伸張，進行）は継続運動の分類では satpratyaya-karman（意識の作用に基づく運動，すなわち意志的努力によって生じた運動）に属している．そして５種の内，“進行”は分類中のすべてに含まれている．Praśastapādabhāṣya によれば，“進行”を除いた４種の運動は方向の定まった運動とされ，“進行”は方向の定まらない運動とされた．[19] B. Faddegon によれば、これら５種の運動は手足の運動を基にして作られたものであると述べられている。[20]確かに、５種の運動は意識の作用に基づく運動であるから、手足

第１図　運動の分類

- karman（運動）
  - Ⅰ、pratyaya-karman（意識によって生じた運動）アートマン、すなわち意志的努力に支配される運動
    - ①身体の運動
    - ②それに伴われた物体の動き
    - （１）satpratyaya-karman（意識の作用に基づく運動）
      - ①身体の意識的な運動
      - ②それに伴われた物体の動き
      - utkṣepaṇa（持ち上げること）
      - apakṣepaṇa（振り下ろすこと）
      - ākuñcana（屈曲）
      - prasāraṇa（伸張）
      - gamana（進行）
    - （２）asatpratyaya-karman（意識の作用から離れた運動）
      - gamana
  - Ⅱ、apratyaya-karman（意識によらない運動）アートマンに支配されていない運動
    - ①身体の無意識的な運動
    - ②それに伴われた物体の動き
    - ③身体から離れた物体の運動
      - 杵と臼の衝突
      - 投げやりの運動
      - 弓矢の運動
    - 初めから意識が作用していない運動
      - ①落下運動
      - ②回転
      - ③水の流れ
      - ④息という風の運動
      - ⑤マナスの運動
      - ⑥原因の分からない運動
      - gamana

の運動と考えてもよいが、運動を５種と考えたことについてもっと深い意味があると考えられる。この５種でもって運動のすべてを表しているということを以下の調査で明らかにしたいと考える。まず、これらの運動が認識論的にどのような運動であるか，個々について Praśastapādabhāṣya およびその注釈書によって調査した結果を次に述べる．

３－１．“持ち上げること”という運動

Praśastapādabhāṣya によれば，“持ち上げること”は次のように記されている．[21]

tatrotkṣepaṇaṃ śarīrāvayaveṣu tatsambaddheṣu ca yad ūrdhvabhāgbhiḥ pradeśaiḥ saṃyogakāraṇam adhobhāgbhiś ca pradeśair vibhāgakāraṇaṃ karmotpadyate gurutvaprayatnasaṃyogebhyas tad utkṣepaṇam ／

その中で“持ち上げること”とはは身体の諸々の部分とそれと結びついている＜諸々の物質＞において，上方にある諸々の場所との結合の原因となり，また下方にある諸々の場所との分離の原因となる運動であって重さと意志的努力と結合とから生ずるところの運動，それが“持ち上げること”である．

これによれば，“持ち上げること”という運動は身体の諸部分やそれと結びついている物質を下方から上方へ持ち上げる運動である．その記述の仕方は認識論的で，この運動によって生じたそれらのものが占める場所の変化が記述されている．すなわち，この運動は手等の身体の部分とそれと結びついた杵などの物質を下方の場所から分離させ，上方の場所と結合させる働きをなすことが記述されている．また，この運動が生ずる原因は重さと意志的努力と結合であると記されている．だが，ここではこれらの原因によって運動がどのように生ずるか書かれていない．そのことは第３章「運動」，第４節「アートマンによって支配された運動」において記載されている．

この記載によれば，“持ち上げること”という手の運動は次の順序で生ずる．[22] すなわちまず初めに，供犠などをなそうとして“手を上げたい”という欲求がアートマンに生じる．その欲求によって“手を上げる”という意志的努力が手の領域を占めているアートマンの部分に生ずる．その意志的努力と手の重さに依存してアートマンと手の結合が生ずる．その結合から手に“持ち上げること”という運動が生ずるとされている．すなわち，この記述によれば，“持ち上げること”の原因は前述のように意志的努力，結合，重さである．重さが原因である理由は第３章第４節の Nyāyakandalī の注釈において「重さを欠いたものには＜持ち上げることという運動を＞実行することが

不可能であることから」と述べられている.[23] このように意志的努力に抗するものがなければ，“持ち上げること”が不可能であるという感覚的理由から重さが原因として上げられている．このような原因の中で実際に“持ち上げること”に寄与する原因は意志的努力である．従ってこの運動は意志的努力に基づいて手やそれと一緒にある物質を上方へ持ち上げるという運動である．

以上より，“持ち上げること”という運動は意志的努力によって手などの身体の部分およびそれと結びついた杵などの物質を下方の場所から分離させ，上方の場所と結合させる，すなわち下方から上方へ移動させる運動である．

３－２．“振り下ろすこと”という運動

Praśastapādabhāṣya によれば，“振り下ろすこと”は次のように記されている.[24]

tadviparītasaṃyogavibhāgakāraṇaṃ karmāpakṣepaṇaṃ

それ（持ち上げること）と反対の結合と分離を＜起こす＞原因となる運動が振り下ろすことである．

この個所は Nyāyakandalī によれば，身体の部分およびそれと結びついている物質において，「下方の場所との結合の原因となり，上方の場所との分離の原因となる運動が“振り下ろすこと”である」と注釈されている.[25] 従って“振り下ろすこと”という運動が起こることによって運動体が占める場所の変化は“持ち上げること”の全く反対である．

３－３．“屈曲”（折り曲げること）という運動

Praśastapādabhāṣya によれば，“屈曲”は次のように書かれている.[26]

ṛjuno dravyasyāgrāvayavānāṃ taddeśair vibhāgaḥ saṃyogaś ca mūlapradeśair yena karmaṇāvayavī kuṭilaḥ sañjāyate tad ākuñcanam ／

真っ直ぐになっている物質の先端にある諸々の部分にとってはその運動によって＜先端部分があった＞その場所との分離が＜起こり＞，根本の場所との結合が＜生じて＞，＜物質＞全体に折れ曲がりが生ずるところの運動が屈曲（折り曲げること）である．

これによれば，屈曲運動は真っ直ぐになっている物質の先端部分をそれが占めていた場所から分離させ、根本の場所へ結合させる運動，すなわち 先端部分を折り曲げる

運動である．折り曲げるという運動の方向は一般的には２通り考えられる．１つは竹など縦に真っ直ぐになっているものの先端を根本の場所に折り曲げる運動である.他は横に真っ直ぐになっているものの先端を根本に折り曲げる運動である．ここに記載されている“屈曲”はどちらであるかこの個所の注釈を見ても明らかでない．しかし，次節（３－４）で扱うこの運動の逆の運動，すなわち根本に折れ曲がっている先端を真っ直ぐにする運動，“伸張”ではその方向性が Nyāyakandalī において示されている．“伸張”について Nyāyakandalī では次のように注釈されている.[27]

agrāvayavānāṃ mūlapradeśavibhāgād uttaradeśasaṃyogotpattau satyām ity arthaḥ／

＜その運動（“伸張”）によってそれ（“屈曲”）と反対に結合と分離が起こるときとは＞先端の部分にとって，根本の場所との分離から上方の場所（uttaradeśa）との結合が発生するとき，という意味である．

この“伸張”は次節で扱うが，根本に折れ曲がっている先端を真っ直ぐにする運動である．この注釈によれば，真っ直ぐにする方向が上方の場所にあることを示している．従って，“屈曲”という運動は竹などのように縦に真っ直ぐになっているものの先端を根本に折り曲げる運動であると理解される．すなわち，この運動によって縦に真っ直ぐになっているものの先端の部分がそれが占めていた空間等の場所から分離されて根本の場所と結合され，全体として折り曲げられるということである.[28] この運動が生ずる原因については書かれていない．この原因について一般的には２通り考えられる．１つは人の意志的努力によって竹などが折り曲げられることである.他は物質の重みなど他の力によって曲げられることである．しかし，この運動は前節（第２節）で示したように，継続運動の分類において satpratyaya-karman（意識の作用に基づく運動）に属し，意志的努力に基づく運動である．従って，この屈曲運動の動力因は“折り曲げよう”という意志的努力であると考えられる．さらに，Praśastapādabhāṣya に記載されたこの“屈曲”は普通に考えれば瞬間的な運動とは考えられない．しかし，Praśastapādabhāṣya では運動はすべて瞬間的な運動とされている．“持ち上げること”および“振り下ろすこと”は直線的な運動であるから，これらを瞬間的な運動と考えてもあるいはものを持ち上げるなどの全体的な運動と考えても，これらの運動の結果としての分離と結合の記載の仕方は Praśastapādabhāṣya に記載された仕方と同じである．たとえば，“持ち上げること”については運動体が下方の場所から分離され，上方の場所と結合するという仕方は瞬間的な運動であっても全体的な運動であっても同じよ

うに記載される．しかし，この“屈曲”は普通に考えれば瞬間的な運動とは考えにくい．何故なら，真っ直ぐになっているものの先端が折れ曲がるとき、先端が占めている空間は次々に変わる．すなわち，先端が占めている空間との瞬間的な分離と結合が多数回あるはずである．従ってここに記述された運動は瞬間的な運動ではなく，“屈曲”全体をなす運動である．Praśastapādabhāṣya およびその注釈書では“屈曲”という全体的な運動において，折れ曲がり始めるときの先端とそれが占めていた空間との分離と，折れ曲がり終わるときの先端と根本との結合が記載されているだけである．“屈曲”を構成する瞬間的な運動によって生ずる先端とそれが占めている空間との瞬間的な分離と結合の仕方は書かれていない．しかし，この運動の動力因を“折り曲げよう”という意志的努力であるとすれば，この意志的努力によって方向付けされた瞬間的な運動が次々に生じて全体的な運動，“屈曲”を構成していると考えられる．従って，瞬間的な運動によって生ずる先端とそれが占めている空間との分離と結合の仕方はこの意志的努力に従って生ずる．この瞬間的な運動もまた“屈曲”と呼ぶことができる．この意味において“屈曲”は瞬間的な運動である．

３－４．“伸張”（折れ曲がっているものを真っ直ぐにすること）という運動

Praśastapādabhāṣya によれば，“伸張”は次のように書かれている．[29]

tadviparyayeṇa saṃyogavibhāgotpattau yena karmaṇāvayavī ṛjuḥ sampadyate tat prasāraṇam ／

その運動によってそれ（“屈曲”）と反対に結合と分離が発生するとき＜物質＞全体が真っ直ぐになるところのその運動が伸張である．

この箇所は Nyāyakandalī では前節で示したように真っ直ぐになる方向が上方の場所であると解釈している．また，

Vyomavatī では「全体が折れ曲がっているものがこの伸張によって真っ直ぐになる」と注釈されている．[30]

以上からこの運動は“屈曲”の逆の運動であって，根本に折れ曲がっているものの先端部分を上方に真っ直ぐにする運動である．この運動の原因については書かれていない．この運動の動力因は一般的には“折れ曲がっているものを真っ直ぐにしよう”という人の意志的努力とその物体の弾性との２通り考えられる．前述したようにこの運動は“屈曲”と同じように satpratyaya-karman（意識の作用に基づく運動）に属するも

ので、意志的努力に基づく運動である．従ってこの運動は“折れ曲がっているものを真っ直ぐにしよう”という意志的努力によるものである．そして，物体の弾性による運動は意志的努力に基づかないため，“進行”と考えられる．その例としてPraśastapādabhāṣya第３章「運動」，第４節「アートマンに支配される運動」の弓矢の運動において弓の弾性が記述されている．[31] Praśastapādabhāṣyaによれば，第４節にはsatpratyaya-karman（意識の作用に基づく運動）とasatpratyaya-karman（意識の作用から離れた運動）とが記述されている．その内で，弓の弾性はasatpratyaya運動に属する運動である．asatpratyaya運動は前節（第２節）によって“進行”であるから弓の弾性は“進行”である．従って弾性による運動は“進行”と考えられる．この“伸張”という運動についてPraśastapādabhāṣyaに記載された分離と結合は前節（３－３）のように瞬間的な運動によったものではなく，折れ曲がっているものを真っ直ぐにする“伸張”全体について書かれたものである．従って，“伸張”は瞬間的な運動ではない．しかし，前節のように“折れ曲がっているものを真っ直ぐにしよう”という意志的努力によって方向付けされた瞬間的な運動が次々に生じて伸張運動全体を構成するとすれば，前節と同じようにこの瞬間的な運動もまた“伸張”と呼ぶことができると考えられる．この意味において“伸張”は瞬間的な運動である．

３－５．“進行”という運動

“進行”はPraśastapādabhāṣyaおよびその注釈書によれば,前述（第３－１から４節）の運動，すなわち“持ち上げること”，“振り下ろすこと”，“屈曲”，“伸張”以外の運動すべてであるとしている．Praśastapādabhāṣyaには“進行”は次のように書かれている．[32]

yad aniyatadikpradeśasaṃyogavibhāgakāraṇaṃ tad gamanam iti ／

＜運動している物体と＞方向が定まっていない場所との結合と分離とを＜引き起こす＞原因となる＜運動＞，それが進行である，と＜いう＞．

この個所はNyāyakandalīでは注釈されていないが，Vyomavatīにおいては「“持ち上げること”など先に述べた４つの運動と異なった，方向の定まっていない場所との結合と分離を引き起こす運動が進行である」と注釈されている．[33]これらのことから“進行”は“持ち上げること”などと違って方向の定まらない運動である。第３－３，４節で述べた“屈曲”や“伸張”もまた普通に考えれば，一定の方向を持たない瞬間的な

運動である．しかし，“屈曲”や“伸張”は“進行”と異なるもので，方向の定まった運動とされている．そしてこの“進行”は意志的努力によらない運動（apratyaya-karman）に適用されている．このことから方向が定まっているということは意志的努力によって方向付けられた運動であると考えられる．例えば，“屈曲”は真っ直ぐになっているものの先端が“折り曲げよう”という意志的努力によって根本に曲げられる運動である．これは意志的努力によって先端が真っ直ぐな状態から根本へ向かうという方向付けされた運動である．それ故，意志的努力が方向を定めていると考えられる．しかし，意志的努力が働いていても“進行”と呼ばれる運動がある．人が部屋から部屋へ動いているというような運動は Praśastapādabhāṣya では“進行”とされている．[34] 動いている人は意志的努力によって動いているのであるが，その運動は“進行”とされている．従って，方向の定まっている運動は“持ち上げる”，“振り下ろす”，“折り曲げる”，および“真っ直ぐにする”という特殊な意志的努力によって生ずる運動であって，それ以外は意志的努力が働いても方向の定まらない運動，すなわち“進行”と理解されていたと考えられる．

さらに“進行”について Praśastapādabhāṣya では次のように記されている．[35]

atha viśeṣasaṃjñayā kimarthaṃ gamanagrahaṇaṃ kṛtam iti ?

na, bhramaṇādyavarodhārthatvāt ／ utkṣepaṇādiśabdair anavaruddhānāṃ bhramaṇapatanasyandanādīnām[36] avarodhārthaṃ gamanagrahaṇaṃ kṛtam iti ／

＜問＞ しかし、何のために特別の名称によって進行という表現がなされたのか？

＜答＞ そうではない．何故なら，回転等を包含することを目的としていることの故に．＜すなわち＞持ち上げること等の言葉によって包含されていない回転，落下，流れることなど＜の運動＞を包含するために進行という表現がなされたのである．

すなわち，回転，落下，流れること等方向の定まらない運動を包含するために，“進行”という種類が作られたのである．しかし，落下運動は意志的努力が働いていない運動であるけれども，普通に考えれば、方向の定まった運動である．だが，ここに示されているように“進行”に入っている．落下運動は Praśastapādabhāṣya によれば，次のように書かれている．[37]

pṛthivyudakayor gurutvavidhārakasaṃyogaprayatnavegābhāve sati gurutvād yad

adhogamanaṃ tat patanam ／

土<性の物質>と水<性の物質>とにとっては，重さを阻止するような結合と意志的努力とヴェーガ（運動の勢い）とが存在しないとき，重さ故に下へ向かう進行<が生ずる>.それ（その進行）が落下である.

この記述において，落下運動は下へ向かうという方向の定まった運動でありながら，意志的努力によらない運動であるがため，“振り下ろすこと”という運動ではなく，“進行”という運動であるとされている．これらのことから“進行”は意志的努力によっても方向が定まらない運動および意志的努力によらない運動である.

以上より Vaiśeṣika 学派では運動の方向は“持ち上げる”などの特殊な意志的努力によって決まり，しかも方向の定まった４種の運動は縦方向，すなわち上下方向の運動である．それ以外の運動は意志的努力が作用している運動でさえも，方向の定まらない運動とされ，“進行”であると理解されていた.従って，“進行”という運動の種類は非常に多くの運動を含んでいることになる.

Vyomavatī によれば,このことが次のように記されている.[38]

----- ／ tasmād utkṣepaṇādivad bhramaṇādīnām api karmatvajñāpanārthaṃ gamanagrahaṇaṃ kṛtam iti ／ na caitasmin pakṣe bhramaṇādīnām aparajātisambandhe ’pi dūṣaṇam, tadapekṣayā ānantyasyābhyupagamāt ／

それ故，持ち上げることなどのように回転等もまた運動であるということを知らせるために進行という表現がなされたのである．そして回転等は<それぞれ>別の種類と結びついているけれども，この主張（回転等を進行と表現するという主張）に欠陥はない．何故なら，それ（すなわち進行という表現）に依存することによって<種類の>無限性を獲得するが故に.

すなわち,回転等を種類と考えると,種類が無限に多くなる.その無限性を保つために方向の定まっている４種の運動以外はすべて“進行”という種類に含ませてしまったのである.

このように多くの運動をどうして“進行”と呼ぶことが出来るのであろうか，Praśastapādabhāṣya によれば，“進行”はその運動をしている物質をある場所から分離させ、方向の定まっていない次の場所と結合させる働きを所有している．その運動体をある場所から分離させ，次の場所へ結合させるということはすべての運動で共通である．この意味において回転等多くの運動が進行という種類に含まれているのである.[39]

以上のことから，Vaiśeṣika 学派では“持ち上げること”，“振り下ろすこと”，“屈曲”，“伸張”という４つの運動は“持ち上げる”，“振り下ろす”などの特殊な意志の力によって方向が定められた運動である．それ以外の運動はすべて方向の定まらない運動とされ，“進行”と呼ばれていた．すなわち，特殊な意志の力によって運動の方向が定められるということである．また，方向の定まっている運動はすべて上，下，すなわち縦方向の運動である．すなわち上から下へ，下から上への直線的な運動，上から下へ折り曲げる運動，および下に折れ曲がっているものを下から上へ真っ直ぐにする運動である．Vaiśeṣika 学派ではこれら４つの特殊な運動が１つ１つ種類とされ，それ以外の運動はすべて“進行”という運動の種類に入れられていた．何故に，このような特殊な運動が種類と数えられ，それ以外の運動はまとめて進行と呼ばれていたか，この疑問を解明すべく調査した結果を次に記す．

４．瞬間的な運動を５種とする Vaiśeṣika 学派の理由

瞬間的な運動を５種とする理由が Praśastpādabhāṣya 第３章,第３節「運動の分類についての論議」において，次のような質問に対していわれている．すなわち，運動は運動している物体をある場所から分離させ，次の場所へ結合させるのだから，“持ち上げること”等の運動において“上へ行く”，“下へ行く”，“根本へ行く”等の観念が認められる．従って，運動の種類が５つである必要がなく，進行（行くこと）１種類だけで十分であるという問いに対して，この５つの運動が種類である理由が Praśastapādabhāṣya では次のように述べられている．[40]

> na, vargaśaḥ pratyayānuvṛttivyāvṛttidarśanāt ／ ihotkṣepaṇaṃ paratrāpakṣepaṇam ity evamādi sarvatra vargaśaḥ pratyayānuvṛttivyāvṛttī dṛṣte taddhetuḥ sāmānyaviśeṣabhedo ’ vagamyate ／
>
> ＜答＞　そうではない．何故なら＜分類された＞それぞれの群において＜同類の＞観念の随伴と＜異類の観念の＞排除とが認められるが故に．ここでは持ち上げることがあり，あそこでは振り下ろすことがあるというように至る所でそれぞれの群において＜同類の＞観念の随伴と＜異類の観念の＞排除とが認められる．それ（このような観念の随伴と排除）を原因として＜種々なる運動の＞普遍と特殊との区別が理解される．

これによれば，５種の運動はそれぞれが同種の運動でまとまり群をなしたとき，それ

らは共に同類であるという観念が起こり，他の種類の運動とは異なっているからその群から他の運動を排除しようという観念が起こる．そのような観念が起こる原因となる普遍（共通性）がそれぞれの運動群に付随すると書かれている．すなわち，５つの運動が種類である理由は５種の運動にそれぞれ普遍が存在していることである．これに対し，Nyāyakandalī ではその普遍について注釈がなされている.[41] すなわち,「牛という群に対して馬等，異類の観念の群を排除することによって同類の観念に従うことが認められるから“牛という共通性（牛性）”という普遍が考えられる．そのように５つの運動には“持ち上げるという共通性”などの普遍が考えられる」としている．この共通性はそれぞれ同じ群の運動に対しては同類の観念が起こり，異なった群の運動に対しては排除しようという観念が起こる．すなわち，このような共通性すなわち，普遍がその群に付随しているから種類となりうるのだとしている．

５．普遍

このような種類の原因となる Vaiśeṣika 学派の普遍について少し説明しておく．普遍については中村，村上による詳細な研究がある.[42] それらによれば，普遍は同種である個々のものに内属し，永続性のある実在である．そして個々のものが共通であるという認識を持つ原因である．以下においてこれらの研究に準拠しながら，普遍を見ていく．Praśastapādabhāṣya では，普遍は次のように記されている.[43]

sāmānyaṃ dvividham ---------- param aparaṃ ca ／ svaviṣayasarvagatam abhinnātmakam anekavṛtti ekadvibahuṣv ātmasvarūpānugamapratyayakāri svarūpābhedenādhāreṣu prabandhena vartamānam anuvṛttipratyayakāraṇam ／ katham ? pratipiṇḍaṃ sāmānyāpekṣaṃ prabandhena jñānotpattāv abhyāsapratyayajanitāc ca saṃskārād atītajñānaprabandhapratyavekṣaṇād yad anugatam asti tat sāmānyam iti ／

普遍は２種である．すなわち上位＜の普遍＞と下位＜の普遍＞とである．＜普遍は＞自らの対象領域のすべてのものに存し（すなわち，内属し），本性が異ならないものとして，多数のものの中に存する．＜そしてその普遍は＞１つ，２つあるいは多数のもののうちに，＜それら＞個物自身の本質が＜ともに＞随伴する（anugama）という観念を生ずる．＜そして，＞諸々の基体（すなわち，個物）において，＜それらの個物の＞本質が異ならないものとして連続して存在し続け，＜それらの本質が共に＞随伴している（anuvṛtti）（すなわち，それらが同種であ

る）という観念を引き起こす原因である．何故に？１つの普遍に依存しているそれぞれの個物に対して連続して＜ある＞知識が生ずるとき，そして＜その知識を＞繰り返し意識したことによって生じた潜在印象（saṃskāra）により過去の知識の連続した流れを観察することから（すなわち，想起することから）[44]＜それらの個物の中に共に＞随伴している一つのもの（共通性）がある．それが普遍である．

これによれば，一つの共通性に基づいて群をなしているそれぞれの個物において，それらを見て形態等に関して共通的なある知識が生ずる．この個物にもあの個物にもその共通性がある．そしてその知識を繰り返し意識したとき，強くその共通性が心の中に印象づけられる．この印象に基づいて過去の記憶を探ってこの共通性が一つの知識，例えば、牛という観念に思い至る．それによってそれぞれの個物に対して，これも牛だ，あれも牛だという共通的な牛という観念が伴われる．それぞれの個物に伴う共通的な牛という観念の原因となる牛の共通性という実在が普遍であると述べられている．すなわち，普遍とはものに内属した共通性で，同種のものが共通に存在しているという観念を引き起こす原因である．また特殊は異種のものを排除するという観念を引き起こす原因である．野沢によれば，普遍はものに内属した共通性で，誰にでも認められる認識の原因となる客観性のある実在である．[45] このような普遍が５種の運動に付随していると考えられている．すなわち，“持ち上げるという共通性”，“振り下ろすという共通性”，“折り曲げるという共通性”，“折れ曲がっているものを真っ直ぐにするという共通性”，“進行という共通性”が５種の運動にそれぞれ付随している．前述のようにこれらが５つの運動の群にそれぞれ付随しているから，５つの運動は種類となり得たのである．この種類は Vaiśeṣika 学派では主観的でなく，誰もが認識できる客観性のある実在であると考えられていた．その例が Praśastapādabhāṣya 第３章，第３節「運動の分類についての論議」において２つ述べられている．[46] それらは“入ること”，“出て行くこと”という運動もまた種類であるという議論と“葉が穴の中に落ちる”という葉の運動に対する議論とである．“入ること”と“出て行くこと”が種類であるという議論に対しては，この２つの運動は種類ではなく，“進行”という１つの運動を見方の違いで主観的にそう呼んでいるだけであると答えている。その理由は次のように述べている．人がある部屋から他の部屋へ動いているとき，前の部屋と後の部屋の戸口にそれぞれ立っている２人の観察者にとっては，“彼が部屋を出て行

く”，“彼が部屋の中に入る”という観念がそれぞれ生ずる．従ってこの運動は観察者の主観によって１人の観察者が“出て行くこと”という運動であると主張し，他の観察者は“入ること”という運動であると主張するが、部屋と部屋の境にある覆いを取り去ってしまえば，この２つの観念は生ぜず，ただ“進行”（行くこと）だけであると述べられている．すなわち，この運動は客観的には単なる“進行”であるとしている．また，“葉が穴の中に落ちる”という運動に対しては見方の違いで，“葉が回転する”，“葉が落下する”，“葉が穴の中へ進入する”という３つの運動に見えるが，実際には１つの運動であることが示されている．

以上より Vaiśeṣika 学派ではこの例が示すように，運動の種類は主観的でなく，誰もが共通に認識できる客観的な実在でなければならない，と考えられていた．

６．結論

(1) 個々の運動に対するまとめ

① Vaiśeṣika 学派では運動はすべて瞬間的とされ，５種の運動が考えられたが，実際には５種の運動は瞬間的な運動ではなく，全体的な運動，例えば 真っ直ぐな物体の先端を根本に折り曲げるという全体的な運動が記述されている．瞬間的な運動によって全体的な運動が如何に構成されるのか述べられていない． Vaiśeṣika 学派では“運動は運動を生み出すことはあり得ない”と考えていたので，この全体的な運動は意志的努力などの動力因によって瞬間的な運動が次々に引き起こされて生じるものと考えられる．そして全体的な運動が記述された理由は次のように考えられる．瞬間的な運動は運動体を瞬間的にある場所から分離させ，次の場所へ結合させる原因として考えられていたが，“屈曲”などの曲線運動における瞬間的な運動が記述しにくかったことと瞬間的な運動だけでは運動の方向を含めた運動全体が表しにくかったためであろう．

② ５種の運動の内，“進行”を除いた４つの運動，すなわち“持ち上げること”，“振り下ろすこと”，“屈曲”，“伸張”は，“持ち上げる”など特殊な意志的努力によって運動の方向が規定されている．しかもその方向はすべて縦方向である．

“持ち上げること”および“振り下ろすこと”はそれぞれ“持ち上げる”，“振り下ろす”という意志的努力に基づき，下から上へ，上から下へそれぞれ向かう直線的な運動である．また“屈曲”は“折り曲げる”という意志的努力によって縦に真っ直ぐな物体の先端を根本に折り曲げる運動である．これは上から下に向かって折り曲げ

る運動である．また，“伸張”はその逆で，“真っ直ぐにする”という意志的努力によって根本に曲がっていた物体を下から上に向かって真っ直ぐにする運動である．
そして“進行”は方向の定まらない運動とされている．

③　横方向の運動は方向の定まらない運動とされ，運動の種類として考えられず，すべて“進行”という種類に入れられている．これは，上下は意志的努力によって方向を定めることが出来たが，横は出来なかったと言うことである．横はいろいろな方向があるために方向を一定として捉えることが出来なかったと考えられる．例えば，弓を引くという運動の場合でも弓の向け方によって引く方向が違ってくる．従って，“引く”という運動は弓矢の運動の個所で記載されているが，独立な種類として言及されていない．
また，落下運動は縦方向の運動であるが，意志的努力によらない運動なので方向の定まらない運動とされ，“進行”に入っている．

④　上記特殊な意志的努力による４つの運動以外の運動はすべて方向の定まらない運動とされ，“進行”という種類に含まれている．従って，“進行”は非常に多くの運動を含んでいる．それらは上記の特殊な意志的努力以外の意志的努力に基づく運動と意志的努力によらない運動である．

以上より方向の定まらない運動の種類，“進行”は非常に多くの運動を含んでいる．“持ち上げること”等４つの運動は特殊な意志的努力によって縦方向に方向付けされた運動で，それぞれが独立した種類をなしている．

(2) 運動が５種類である理由

Vaiśeṣika 学派では、５つの運動を独立した種類と考える理由はそれぞれの運動の群に“持ち上げるという共通性”などの普遍が伴われているからであるとしている．すなわち，“持ち上げるという共通性”は“持ち上げること”という運動の群に対して共に同類であるという観念を起こし，“振り下ろすこと”という運動の群等を排除しようという観念を起こす原因である．そして Vaiśeṣika 学派では普遍，すなわち運動の種類は主観的でなく，客観的な実在でなければならないと考えられていた．Vaiśeṣika 学派において５つの運動を種類と考えた理由は以下のように考察される。

Vaiśeṣika 学派では，“運動は運動体をある場所から分離させ，次の場所へ結合させる”という考え方を基本としている．そのために運動を種類として客観的に捉えるた

めには，方向の定まったものと定まらないものとを分けることが必要であったと考えられる．それ故，定まった方向を有する運動がまず独立した種類と考えられ，それ以外の運動はまとめられて１つの種類とされた．(1) で示したように，定まった方向はすべて縦方向である．それ故，定まった方向を客観的に選ぶことの出来たのは縦方向以外にはなかったと考えられる．そのため，“持ち上げること”等縦方向の４つの運動が種類となり，それ以外の運動は方向の定まらない運動とされ，“進行”という種類に入れられている．

以上より，Vaiśeṣika 学派で運動をこの５種類と考えたのは運動を場所の移動として捉え，時間の経過として捉えていなかったことに起因すると考えられる．

〔引用文献および注〕

(1) D. Jhā : *Praśastapādabhāṣya with the commentary, Nyāyakandalī along with Hindi translation.* Varanasi, 1977, p. 697.

(2) *Ibid.* pp. 697-698.

(3) Muni Śrī Jambuvijayaji : *Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the Commentary of Candrānanda,* Baroda, 1961, p. 2.

(4) S. Dasgupta : A History of Indian Philosophy Vol. 1 Cambridge, 1963, p. 317.

K. H. Potter : The Tradition Nyāya- Vaiśeṣika up to Gaṅgeśa, Encyclopedia of Indian Philosophy Vol. 2, Delhi , 1995 (reprint), p. 132.

など。

宇井伯寿："業句義"，「勝論経に於ける勝論学説」，『印度哲学研究』第３巻 pp. 547- 561.

(5) D. Jhā : *op. cit.* pp. 720 - 724.

(6) D. Jhā : *op. cit.* p.702.

(7) D. Jhā : *op. cit.* pp. 713- 740.

(8) B. Faddegon : *The Vaiśeṣika-System.* Liechtenstein (reprint), 1969 (the first ed. Amsterdam, 1918), p. 227.

(9) D. Jhā : *op. cit.* pp. 714- 715

(10) D. jhā : *op. cit.* p.702.

(11) G. Śāstrī : *Vyomavatī of Vyomaśiva.* Varanasi, 1983, p. 247.

upasaṃhāram āha ity etat pañcavidham api karma satpratyayam asatpratyayañ ceti / pratyayaḥ kāraṇam, tac ca sāmānyapadenāpi sad iti viśeṣaṇāt prayatnākhyam eva vivakṣitam / pāramparyeṇa vā pratyayakāryatvāt prayatnaḥ pratyaya ity uktaḥ / ataḥ satpratyayo yasya tat tathoktaṃ karma, prayatnapūrvakam iti yāvat / asatpratyayam ayatnapūrvakam / tac ca śarīrāvayaveṣu tatsambaddheṣu bhavatīti / etasmād yad anyat, tad apratyayam ayatnapūrvakam, asmadādiprayatnasya tatrāvyāpārāt / tac caiteṣv anyeṣu ca dravyeṣu bhavaty utkṣepaṇādivilakṣaṇatvād gamanam eveti /

著者は要約をこの５種の運動はまた、意識の作用に基づく（satpratyaya）＜運動＞と意識の作用から離れた（asatpratyaya）＜運動＞とである。と述べた。＜これは次の通りである。＞意識作用（pratyaya）は原因である。そしてそれは普遍

（共通性）という言葉によってもまた sat（存在していること）（すなわち、意識作用が存在していること）なのであると考えて、＜ pratyaya（意識作用）を＞限定することから意志的努力という名前がまさにいわんとされたことである。あるいは＜意志的努力が＞継続による意識作用の結果であることから意志的努力が意識作用（pratyaya）であるといわれる。それ故、意識の作用に基づくこと（satpratyaya）が存在するところのそれ（運動）は同様にいわれた運動（意識の作用に基づく運動）である、すなわち意志的努力に基づく＜運動＞であるという意味である。意識の作用から離れた（asatpratyaya）＜運動＞は意志的努力に基づかない＜運動＞である。そしてそれらは身体の諸々の部分およびそれと結びついた物質において存在するといわれる。これから異なるところのものそれが意識によらない（apratyaya）＜運動＞、すなわち意志的努力に基づかない＜運動＞である。何故なら、その場合、我々等の意志的努力の作用がないが故に。そしてそれはこれら（身体の部分およびそれと結びついた物質）と別の物質において存在し、“持ち上げること”などと性格を異にすることからまさに“進行”であるといわれる。

(12) D. Jhā : *op. cit.* p. 725.

この個所の注釈は Vyomavatī になされている（Nyāyakandalī にはない）。Vyomavatī によれば、次のように注釈されている。（ G. Śastri : *op. cit.* p. 260.）

upsaṃhāram āha evam ātmādhiṣṭhiteṣu prayatnadvāreṇa anadhiṣṭhiteṣu satpratyayam asatpratyayañ ca karmoktam ／

＜著者は次のように第４節の＞要約を述べる。＜すなわち、＞以上のように意志的努力を介してアートマンに支配されているものにおいておよび支配されていないものにおいて、“意識の作用に基づく運動”と“意識の作用から離れた運動”とがいわれた。

(13) D. Jhā : *op. cit.* pp. 713 - 724.

G. Śāstrī : *op. cit.* pp. 253 - 260.

(14) D. Jhā : *op. cit.* pp. 720-724.

(15) D. Jhā : *op. cit.* pp. 725- 740.

(16) D. Jhā : *op. cit.* pp. 716-717.

Nyāyakandalī による注釈

sa saṃyogo musalagatavegam apekṣamāṇo' pratyayam aprayatnapūrvakaṃ musale utpatanakarma karoti / vego nimittakāraṇam, musalaṃ samavāyikāraṇam / tatkarmābhighātāpekṣaṃ musale saṃskāram ārabhate utpatanakarma svakāraṇābhighātākhyaṃ saṃyogam apekṣamāṇaṃ musale vegam ārabhate / taṃ saṃskāram apekṣya hastamusalasaṃyogo' samavāyikāraṇabhūto' pratyayam aprayatnapūrvakaṃ haste' py utpatanakarma karoti /

その結合は杵に存するヴェーガ（勢い）に依存しつつ、杵に意識によらない＜すなわち、＞意志的努力に基づかない飛び上がりの運動を生ずる。 ヴェーガは動力因であり、杵は内属因である。その飛び上がりの運動は衝突に依存し、杵に潜在能力を形成する。＜すなわち、＞飛び上がりの運動は自らの（その運動の）原因である衝突と呼ばれる結合に依存しつつ、杵にヴェーガを形成する。それに＜すなわち、＞潜在能力に依存して、手と杵との結合という非内属因が手にまた意識によらない（無意識的な）＜すなわち、＞意志的努力に基づかない飛び上がりの運動を生ずる。

(17) D. Jhā : *op. cit.* pp. 715 - 717.

(18) 大網功：「インド運動論と因果律」，『科学史研究』Vol. 38（No. 211），1999年秋，pp. 142- 153.

(19) D. Jhā : *op.cit.* p. 700.

yad aniyatadikpradeśasaṃyogavibhāgakāraṇaṃ tad gamanam iti /

＜運動物体と＞方向の一定していない場所との結合と分離を引き起こす原因となる運動、それが“進行”であると＜いう＞。

(20) B. Faddegon : *op. cit.* pp. 226- 227.

(21) D. Jhā : *op. cit.* p. 699.

Nyāyakandalī の注釈では次のように示されている。

śarīrāvayaveṣu hastādiṣu tatsambaddheṣu musalādiṣu ca yad ūrdhvabhāgbhiḥ pradeśaiḥ saṃyogakāraṇam adhobhāgbhiś ca vibhāgakāraṇaṃ gurutvasaṃyogaprayatnebhyo jāyate tad utkṣepaṇam /

身体の諸々の部分において、＜すなわち＞手等において、そしてそれと結びついている＜諸々の物質＞において、＜すなわち＞杵等において上方にある諸々の場所との結合の原因となり、下方にある諸々の場所との分離の原因となって重さ

と結合と意志的努力とから生ずるところの＜運動＞、それが持ち上げることである。

Vyomavatī の注釈では次のように示されている。

G. Śāstrī : *op. cit.* p.246.

tad evāha tatrotkṣepaṇam ／ yad ūrdhvaṃ bhajanta ity ūrdhvabhājas taiḥ saṃyogakāraṇam, adhobhāgbhiś ca vibhāgakāraṇaṃ karmotpadyate ／ kebhyaḥ keṣu ceti ? gurutvadravatvaprayatnasaṃyogebhyaḥ samastavyastebhyaḥ ／ tad utkṣepaṇam ity udāharaṇārtham, vegāder api tatkāraṇatvāt ／ śarīrāvayaveṣu hastapādādiṣu tatsambaddheṣu musalādiṣv ity āśrayanirūpaṇam ／

上方に配置されている諸々のものということが上方を占めている諸々のものである。＜運動しているものと＞それらのもの（上方を占めている諸々のもの）との結合の原因となり、そして下方を占めている諸々のものとの分離の原因となる運動が生ずる、それ（その運動）をまさに彼はその中で持ち上げることとは と述べた。何から、そして何において＜その運動が生ずるの＞か？　重さと流動性と意志的努力と結合とのすべてあるいは個々のものから＜その運動が生ずる＞、＜このことが＞それが持ち上げることであるという言明の意味である。何故なら、ヴェーガ（運動の勢い）などにとってもまた、それ（運動）の原因性があるが故に。身体の諸々の部分において、＜すなわち＞手足などにおいて、それと結びついている＜諸々の物質＞において、すなわち杵等においてということが＜持ち上げることの＞基体となるものの形態である。

(22) D. Jhā : *op. cit.* p. 713.

cikīrṣiteṣu yajñādhyayanadānakṛṣyādiṣu yadā hastam utkṣeptum icchaty apakṣeptuṃ vā, tadā hastavaty ātmapradeśe prayatnaḥ sañjāyate ／ taṃ prayatnaṃ gurutvaṃ cāpekṣamāṇād ātmahastasaṃyogād dhaste karma bhavati, hastavat sarvaśarīrāvayaveṣu pādādiṣu śarīre ceti ／

供犠、学習、布施、農業等をなそうと望んで、手を持ち上げる（utkṣeptum）とか、あるいは下げる（apakṣeptum、振り下ろす）とかしたいとき、手の領域を占めているアートマンの部分に意志的努力が生ずる。その意志的努力と重さとに依存しているアートマンと手との結合から手に運動が生ずる。そして足などの身体のすべての部分および身体全体に手＜の場合＞と同様に＜運動が生ずる＞。

(23) D. Jhā : *op. cit.* p.714.

saty api prayatne gurutvarahitasya utkṣepaṇāpakṣepaṇayor aśakyakaraṇatvād gurutvasyāpi kāraṇatvam ／

意志的努力があるときでさえも、重さを欠いたものには持ち上げることおよび振り下ろすこと＜という運動＞について、実行することが不可能であることから（aśakyakaraṇatvāt）、重さもまた＜これらの運動の＞原因性を有する。

(24) D. Jhā : *op. cit.* p. 700.

(25) D. Jhā : *op. cit.* p. 700.

tadviparīteti ／ adhodeśasaṃyogakāraṇam ūrdhvadeśavibhāgakāraṇaṃ karmāpakṣepaṇam ity arthaḥ ／

それと反対の------とは次の如くである。＜身体の諸々の部分とそれと結びついている諸々の物質において＞下方の場所との結合の原因となり、上方の場所との分離の原因となる運動が振り下ろすことであるという意味である。

Vyomavatī (G. Śāstrī : *op.cit.* p.246.) では次のように注釈されている。

tadviparītasaṃyogavibhāgakāraṇaṃ karmāpakṣepaṇam iti ／ ūrdhvabhāgbhir vibhāgakāraṇam adhobhāgbhiś ca saṃyogakāraṇam iti ／

それとは反対の結合と分離を＜引き起こす＞原因となる運動が振り下ろすことである。とは＜次の通りである＞。上方を占めているものとの分離の原因となり、そして下方にあるものとの結合の原因となる＜運動が振り下ろすことである＞ということである。

(26) D. Jhā : *op. cit.* p. 700.

Vyomavatī では次のように注釈されている。（ G. Śāstrī : *op. cit.* p. 246.）.

ākuñcanam ṛjuno dravyasya ye' grāvayavās teṣāṃ taddeśais tadupalakṣitākāśādipradeśair vibhāgaḥ, saṃyogaś ca mūlapradeśair iti tadupalakṣitākāśādipradeśair eva ／

屈曲とは＜次のことを引き起こす運動である＞。真っ直ぐになっている物質の＜先端の諸々の部分にとって、すなわち＞先端の諸々の部分であるところのその諸々の部分にとって、その場所との、すなわちそれ（先端の部分）によって特徴づけられた虚空等の場所との分離が＜起こる＞。そして根本の場所との結合ということはそれ（根本）によって特徴づけられた虚空等の場所との＜結合が＞まさに＜生ずる＞。

Nyāyakandalī では次のように注釈されている。（D. Jhā: op.cit. p. 700.）

ṛjuna iti ／ taddeśair agrāvayavasambaddhair ākāśādideśaiḥ sañjāyate iti, yena karmaṇeti sambandhaḥ

真っ直ぐになっている.....とは＜次の如くである＞。その場所とのとは先端の部分と結びついている虚空等の場所とのということである。生ずるとはその運動によって.....であるところのと結びついている（すなわち、その運動によって生ずるところのもの）。

(27) D. Jhā : *op. cit.* p.700.

(28) *Vaiśeṣikasūtra* の１４世紀の注釈書, *Upaskāra* では,“屈曲”は布などを折り曲げる運動であると記述されている(Śrī Nārāyaṇa Miśra : *Vaiśeṣikasūtropaskāra of Śaṅkaramiśra.* Varanasi, 1969, pp. 38- 42.). しかし, *Praśastapādabhāṣya* 記載の“屈曲”は第３章「運動」, 第３節「運動の分類についての論議」において方向の定まった運動とされている. 布などを折り曲げる運動は方向性がないから, ここで記載されている“屈曲”とは違うと考えられる.

(29) D. Jhā : *op. cit.* p. 700.

(30) G. Śāstrī : *op. cit.* p. 247.

yena karmaṇā samutpannenāvayavī kuṭilaḥ sann ṛjuḥ sampadyate, tat prasāraṇam iti ／

全体が折れ曲がって存在している状態が、その運動が生ずることによって真っ直ぐになるという、その運動が伸張である。

(31) D. Jhā : *op. cit.* pp. 720- 724.

(32) D. Jhā : *op. cit.* p. 700.

(33) G. Śāstrī : *op. cit.* p. 247.

yad aniyatadikpradeśasaṃyogavibhāgakāraṇaṃ tad gamanam iti ／ uktapradeśebhyo ’nye’ niyatadikpradeśās taiḥ saṃyogavibhāgakāraṇam iti ／

＜運動している物体と＞方向が定まっていない場所との結合と分離とを＜引き起こす＞原因となる＜運動＞、それが進行である、と＜とは次の如くである＞。＜持ち上げることなどで既に＞いわれた諸々の場所から異なった、方向の定まっていない諸々の場所、その諸々の場所との結合と分離とを＜運動体が＞＜引き起こす＞原因となる＜運動が進行である＞ということである。

(34) D. Jhā : *op. cit.* pp. 705 - 706.

dvayor draṣṭror ekasmād apavarakād apavarakāntaraṃ gacchato yugapanniṣkramaṇa-praveśanapratyayau dṛṣṭau, tathā dvārapradeśe praviśati niṣkrāmatīti ca / yadā tu pratisīrādyapanītaṃ bhavati, tadā na praveśanapratyayo nāpi niṣkramaṇapratyayaḥ, kintu gamanapratyaya eva bhavati /

人が１つの部屋から他の部屋へ通過している間、２人の観察者にとって同時に“出て行くこと”、“入ること”という２つの観念が認められる。同様に、戸口のところで＜一方の人には＞“彼が中に入る”ということになり、また＜他方の人には＞“彼が出て行く”ということになる。しかし、カーテン等の＜覆い＞を除去するとき、そのとき“＜中に＞入ること”という観念もなければ、また“＜外へ＞出て行くこと”という観念も生じない、ただ“進行”という観念だけが生ずる。

(35) G. Śāstrī : *op. cit.* p. 251.

(36) この箇所は① D. Jhā : *op. cit.* (*Praśastapādabhāṣya with the commentary, Nyāyakandalī along with Hindi translation*) pp. 710-711, ② P. Dvivedin : *Praśastapādabhāṣya with the commentary, Nyāyakandalī*, Delhi, 1984 (the 2nd edition). p.296 .

では bhramaṇapatanaspandanādīnām となっている. しかし、

① G. Śāstrī : *Vyomavatī* p.251. ② J. Bronkhorst and Y. Ramseier : *Word index to the Praśastapādabhāṣya*. Delhi, 1994, p. 72 では----syandanādīnām となっている.

どちらが正しいか判定しにくいが, *Praśastapādabhāṣya* の第３章「運動」, 第５節「アートマンに支配されない運動」において回転, 落下, 流れること (syandana) 等が記載されているが, 揺れ動くこと (spandana) は記載されていない. このことから例としては spandana よりは syandana の方が適切と考えられる.

(37) D. Jhā : *op. cit.* p. 728.

(38) G. Śāstrī : *op. cit.* p. 252.

(39) D. Jhā : *op. cit.* pp. 711 - 712.

Praśastapādabhāṣya ではこの個所は次のように記載されている。

atha vā astv aparaṃ sāmānyaṃ gamanatvam, aniyatadigdeśasaṃyogavibhāgakāraṇeṣu bhramaṇādiṣv eva vartate, gamanaśabdaś cotkṣepaṇādiṣu bhākto draṣṭavyaḥ, svāśraya-saṃyogavibhāgakartṛtvasāmānyād iti /

あるいはむしろ進行性は＜運動性より＞下位の普遍であるとしよう。＜その進行性は＞定まっていない方向の地点との結合と分離の原因となる回転等＜の運動＞においてまさしく存在する。そして進行（行くこと）という言葉は持ち上げること等においては二次的なものであると理解されるべきである。何故なら、＜両者においては＞自身の拠り所となる物質（すなわち、その運動をしている物質）の結合と分離を作り出すものであることという普遍（共通性）が＜共に＞あるが故にと。

Nyāyakandalī ではこの個所は次のように注釈されている。

gamanaśabdagrahaṇasyopalakṣaṇārthatvād gamanapratyaya utkṣepaṇādiṣu bhākto draṣṭavyaḥ ／ upacārasya bījam āha ---------- svāśrayasaṃyogavibhāgakartṛtvasāmānyād iti ／ gamanaṃ svāśrayasya saṃyogavibhāgau karoti, utkṣepaṇādayo ' pi kurvanti, etāvatā sādharmyeṇotkṣepaṇādiṣu gamanavyavahāraḥ ／

＜すなわち、持ち上げること等の運動において＞進行という言葉の把握は＜行くということを＞間接的に指し示すこと（upalakṣaṇa）を目的としたものであるということの故に。進行という観念は持ち上げること等においては二次的なものであると理解されるべきである。＜この行くことという＞二次的な名前を適用することの要因を著者は何故なら、＜両者において＞自身の拠り所となる物質の結合と分離を作り出すものであることという普遍が＜共に＞あるが故にとと述べている。進行（行くこと）は＜運動＞自身の拠り所となる物質の結合と分離を作る。持ち上げること等も同様に＜自身の拠り所となる物質の結合と分離とを＞作る。このような性質を同じくすることによって持ち上げること等において＜二次的に＞進行という表現の仕方が存在する。

(40) D. Jhā : *op. cit.* pp. 702.

(41) *Ibid.*

samādhatte ------- neti ／ yat tvayoktaṃ tan na, utkṣepaṇādiṣu vargaśaḥ prativargaṃ pratyayānuvṛttivyāvṛttyor darśanāt ／ govarge aśvādivargavyāvṛttyā pratyayānugama-darśanāt gotvaṃ kalpyate yathā tathotkṣepaṇādiṣu prativargam itaravargavyāvṛttyā pratyayānugamadarśanād utkṣepaṇatvādisāmānyakalpanety abhiprāyaḥ ／

＜答＞ 著者はそうではないと答える。汝によって言われたところのものは誤りである。何故なら、持ち上げることなど等において,＜分類された＞それぞれの

群において<すなわち、>それぞれの群に対して、<同類の>観念の随伴と<異類の観念の>排除とが認められるが故に。牛という群において馬等<の異類の観念>の群を排除することによって<同類の>観念に従うことが認められるから“牛であること”（牛であるという共通性）<という普遍>が想定される。同様に持ち上げること等においてそれぞれの群に対して他<の観念>の群を排除することによって<同類の>観念に従うことが認められるから、“持ち上げるという共通性”などの普遍（すなわち、種類）が想定されるという意味である。

(42) 村上真完 ：『インドの実在論』平楽寺書店, 1997, pp. 213- 328.

中村元：『ニヤーヤとヴァイシェーシカの思想』春秋社, 1996, pp. 555- 588.

(43) D. Jhā : *op. cit.* pp. 741- 743.

(44) *Nyāyakandalī* による。*Ibid.* pp. 744.

pratyavekṣaṇāt（<過去の知識の連続した流れを>観察することから）を Nyāyakandalī では smaraṇāt（想起することから）と注釈している。

piṇḍaṃ piṇḍaṃ prati sāmānyāpekṣaṃ yathā bhavati, tathā jñānotpattau satyāṃ yo ' bhyāsapratyayas tena yaḥ saṃskāro janitaḥ, tasmād atītasya jñānaprabandhasya jñānapravāhasya pratyavekṣaṇāt smaraṇād yad anugatam asti tat sāmānyam ／

それぞれの個物（物質）に対して普遍に依存して存在するようにそのように知識の発生があるとき、繰り返し意識することが生ずる。その繰り返しの意識によって潜在印象が生じられる。その潜在印象により過去の知識の連続、すなわち知識の流れを観察することから、すなわち想起することから<それらの個物の中に共に>随伴している１つのもの（共通性）がある。それが普遍である。

(45) 野沢正信：書評「村上真完著『インドの実在論』」，『印度哲学仏教学』第13号, 1998, pp. 359- 360.

(46) D. Jhā : *op. cit.* pp. 703- 708.

Praśastapādabhāṣya によれば、この個所は次のように記載されている。

dvayor draṣṭṛor ekasmād apavarkād apavarakāntaraṃ gacchato yugapanniṣkramaṇa-praveśanapratyayau dṛṣṭau, tathā dvārapradeśe praviśati niṣkrāmatīti ca ／ yadā tu pratisīrādyapanītaṃ bhavati, tadā na praveśanaratyayo nāpi niṣkramaṇapratyayaḥ, kintu gamanapratyaya eva bhavati ／ tathā nālikāyāṃ vaṃśpatrādau patati bhūnāṃ draṣṭṛṇāṃ yugapad bhramaṇapatanapraveśanapratyayā dṛṣṭā iti jātisaṅkaraprasaṅgaḥ ／

na caivam utkṣepaṇādiṣu pratyayasaṅkaro dṛṣṭaḥ ／ tasmād utkṣepaṇādīnām eva jātibhedāt pratyayānuvṛttivyāvṛttī, niṣkramaṇādīnāṃ tu kāryabhedād iti ／

人が１つの部屋から他の部屋へ通過している間、２人の観察者にとって同時に“出て行くこと”、“入ること”という２つの観念が認められる。同様に、戸口のところで＜一方の人には＞“彼が中に入る”ということになり、また＜他方の人には＞“彼が出て行く”ということになる。しかし、カーテン等の＜覆い＞を除去するとき、そのとき、“＜中に＞入ること”という観念もなければ、また“＜外へ＞出て行くこと”という観念も生じない、ただ進行（行くこと）という観念だけが生ずる。同様に、坑の中に竹の葉などが落下しつつあるとき、それを見ている多くの人々にとっては同時に“回転”、“落下”、“進入”という観念＜が起こること＞が認められる。このことは＜それらの運動が別々の種類であるとすると＞種類の混乱＜という誤り＞が結果として生ずることになる。しかし、“持ち上げること”等においてこのように観念の混乱＜が起こること＞が認められない。それ故、“持ち上げること”等に関してだけ種類の違いから＜同類の＞観念の随伴と＜異類の観念の＞排除とが生ずる。だが、“出て行くこと”等＜の運動＞に関しては、＜現れた＞結果の違いから＜同類の観念の随伴と異類の観念の排除とが生ずるのである＞と＜いうことである＞。

第３章　継続的な運動*

＊　本論は

大網　功：“古代インドにおけるVaiśeṣika学派の運動論”、『科学史研究』24巻(No. 156), 1985.　pp.193-204

に大幅に加筆したものである。

1、はじめに

このインドの運動論では、“運動は運動するものをある場所から分離させ、次の場所へ結合させる”という考え方を基本として、瞬間的な運動が考えられていた。継続運動は意志的努力や運動の潜在的能力、ヴェーガ（運動の勢い）等の動力因によって瞬間的な運動が次々に引き起こされるために生ずるとされた。この派の運動論では、“運動は運動を生み出すことはあり得ない”と考えて、物体あるいは身体に独りでに動くのではなく、何か原因に基づいて動いていると考えられていた。例えば、手足の意識的な運動は身体を支配するアートマンに生じた意識的努力によって生じ、無意識的な運動は意志の働かない何か他の原因に基づくとされた。空中での物体の運動はヴェーガ（運動の勢い）によって生ずるとしている。

ここでは継続運動について述べる。Vaiśeṣika学派の最初の書物であるVaiśeṣika-sūtraには継続運動は第５章に記載されている。そこでは継続運動は断片的に記載されており、運動がどのような仕方で生ずるのかは断片的に書かれている。Praśasta-pādabhāṣya第３章「運動」第４節「アートマンに支配された運動」、第５節「アートマンに支配されない運動」には継続運動が記載されている。そこでは継続運動が最も整理された形で書かれている。Vaiśeṣikasūtra第５章の第１日課はPraśastapāda-bhāṣya第３章第４節にほぼ対応している。Vaiśeṣikasūtra第５章第２日課はPraśa-stapādabhāṣya第３章第５節にほぼ対応している。ここでは継続運動が最も整理された形で書かれているPraśastapādabhāṣya第３章第４節および第５節において記載された継続運動がどのような運動であったかを述べる。第４節ではアートマンに支配された運動、すなわち意志的努力に基づいた運動が記載され、第５節では初めから意志的努力に基づかない土性の物質、水、風（四大種のうち３種）の運動およびマナスの運動が記載されている。その記載の仕方は第４節では意志的努力による手の運動からその運動が生ずるまでの運動過程が記されている。第５節では意志的努力以外の運動の原因によって生じた運動が記載されている。そして、第４節では手の持ち上げの運動、杵と臼との衝突運動、槍を投げる運動、弓で射るときの矢の運動が記載されており、第５節では特殊な結合（衝動、衝突、＜それとそれに＞つながれた部分との結合）に基づく運動、落下運動、水の流出運動、ろくろの回転運動、息という風の運動、マナスの運動、アドリシュタ（adṛṣṭa, 不可見力と呼ばれ、ダルマ、アダルマによる力）

による運動が記載されている。継続運動の運動の分類は第２章運動の種類で既に述べた。その分類に従えば、第４節は“意識によって生じた運動（pratyaya-karman）”に分類される。しかも、身体の意識的な運動とそれに伴われた物体の動きは“意識の作用に基づく運動（satpratyaya-karman）”に分類され、それ以外の運動、すなわち身体の無意識的な運動や身体から離れた物体の運動などは“意識の作用から離れた運動（asatpratyaya-karman）”に分類されている。第５節は“意識によらない運動（apratyaya-karman）”に分類されている。第４節、５節で記載されたこれらの運動がどのように記載されているか順を追って説明する。B. Faddegonによれば、Vaiśeṣikasūtraでは継続運動は簡潔に書かれていて非常によいが、Praśastapāda-bhāṣyaでは長たらしく書かれていて冗長過ぎてよくないと記されている。[1]しかし、筆者の調べによれば、Vaiśeṣikasūtraに記載された継続運動は断片的に書かれており、運動の仕方がどうなっているのかあまり書かれていない。Praśastapādabhāṣyaでは整理された形で書かれており、運動の仕方など明瞭に記されている。ここではまずはVaiśeṣikasūtraに記載された継続運動が断片的に書かれていることを示した後、Praśastapādabhāṣyaに記載された継続運動を見ていく。

２、Vaiśeṣikasūtraにおける運動論

Vaiśeṣikasūtraにおいて、運動論は第５章に記載されている。第１日課では主に「意志的努力によって生じた運動の研究」、すなわち「アートマンに支配された運動」が記載されている。第２日課では主に「４大種で作られた物質およびマナスの運動」が説明されている。

第１日課では次のような運動が記載されている。

５－１－１、意志的努力による手の運動。２～６では杵と臼との衝突運動。７では落下運動。８～１０ではものを投げる運動。１１、子供の運動。１２、身体における火の運動。１３、　眠っている人の動き。１４、風による草の運動。１５、宝石の進行、鉄針の磁石への接近。１６～１８、矢の運動。以上の運動が断片的に記載され、運動のメカニズムはあまり記載されていない。

第２日課では意志的努力に基づかない運動で、四大種、すなわち土、水、火、風で作られた物質およびマナスの運動が記載されている。５－２－１では特殊な３つの結合、すなわち衝動、衝突および＜それと＞つながれた部分との結合に基づく運動。２では

意志的努力と特殊な結合に基づかない土性の物質の運動はアドリシュタ（不可見力）という超能力によって生ずる。３～８では水の落下、水の蒸発、水の流れ、木の幹を水が上昇するなどの水の種々なる運動。９では水の濃縮および溶解について記されている。１０～１２では雷鳴について、１３では火と風の運動は土性の運動と同様に説明される。１４では炎の上向きの運動、風の横吹、原子とマナスの最初の運動はアドリシュタによって生ずる。１５～２０まではマナスの種々なる運動が記載されている。しかし、これらの運動について断片的に記載されているだけで、運動が生ずる原因が単に記載されているだけである。これらの記述をスートラに従ってもう少し詳しく調べてみよう。

２－１、Vaiśeṣikasūtra第５章第１日課の運動

スートラの記載が７世紀頃のCandrānandaの注釈書と１５世紀頃のUpaskāraでは多少異なる個所がある。Candrānandaの注釈書に記載されたスートラを主体にして第１日課では継続運動がどのように述べられているか調べた。[2]

(1) 意志的努力による手の運動

ātmasaṃyogaprayatnābhyāṃ haste karma //5-1-1 //

アートマンと＜手と＞の結合と＜アートマンに生じた＞意志的努力の両方によって手に運動が＜生ずる＞。

(2) 杵と臼との衝突運動

５－１－２から６迄は手と手に持った杵の運動がスートラに記載されている。この個所はCandrānandaとUpaskāraではスートラの記述が違っていた。ここではCandrānanda 記載のスートラを主にとったが、５－１－４についてはUpaskāra 記載のスートラをとった。手と杵の運動がスートラにおいて次のように記述されていた。

tathā musalakarma hastasaṃyogāc ca //5-1-2//

abhighātaje musalakarmaṇi vyatirekād akāraṇaṃ hastasaṃyogaḥ //5-1-3//

tathātmasaṃyogo hastakarmaṇi //5-1-4// (Upaskāra)[3]

musalābhighātāt tu musalasaṃyogād dhaste karma //5-1-5//

tathātmakarma hastasaṃyogāc ca //5-1-6//

そして同様に杵の運動は手と＜杵と＞の結合から＜生ずる＞。 //5-1-2//

杵の運動が衝突によって生ずるときには、手と＜杵と＞の結合は＜その運動が意志的努力から＞離れていることから原因ではない。 //5-1-3//

同様にアートマンと＜手と＞の結合は＜衝突直後の＞手の運動において＜原因ではない＞。 //5-1-4//

しかし、杵の衝突によって生じた杵と＜手と＞の結合から手に運動が＜生ずる＞。 //5-1-5//

同様にアートマン（身体の一部分[4]）の運動は手との結合から生ずる。 //5-1-6//

この中において５－１－４はCandrānandaでは

tathātmasaṃyogo hastamusalakarmaṇi //5-1-4//

同様にしてアートマンと＜手と＞の結合は手にある杵の運動において＜原因ではない＞。 //5-1-4//

Candrānanda本とUpaskāra両方の注釈では共に“衝突後の手の飛び上がりの運動においてアートマンと手との結合は原因ではない”と注釈されている。[5]従って注釈では両方とも手の運動が記されているので、ここではUpaskāraに記載したスートラをとった。

(3) 落下運動

saṃyogābhāve gurutvāt patanam //5-1-7//

結合がないとき、重さから落下が＜生ずる＞。

(4) ものを投げる運動

nodanaviśeṣābhāvād nordhvaṃ na tiryag gamanam //5-1-8//

prayatnaviśeṣān nodanaviśeṣaḥ //5-1-9//

nodanaviśeṣād udasanaviśeṣaḥ //5-1-10//

特殊な衝動がないことから上向きの進行および横向きの進行がない。//5-1-8//

特殊な意志的努力から特殊な衝動が＜生ずる＞。//5-1-9//

特殊な衝動から特殊な投げ上げが＜生ずる＞。//5-1-10//

(5) 子供の運動

hastakarmaṇā dārakakarma vyākhyātam //5-1-11//

子供の運動は手の運動によって説明される。

(6) 身体における火の運動

tathā dagdhasya visphoṭane //5-1-12//

同様に焼かれたる者の＜火の運動は＞火ぶくれにおいて＜存在する＞。

(7) 眠っている人の動き

prayatnābhāve gurutvāt suptasya ptanam //5-1-13//

眠っている人の落下は意志的努力がないとき重さから＜生ずる＞。

Upaskāra

yatnābhāve prasuptasya calanam //5-1-13//

眠っている人の動きは意志的努力がないが故に＜生ずる＞。

(8) 風による草の運動

tṛṇakarma vāyusaṃyogāt //5-1-14//

草の運動は風との結合から＜生ずる＞。

(9) アドリシュタによって生ずる運動

maṇigamanaṃ sūcyabhisarpaṇam ity adṛṣṭakāritāni //5-1-15//

宝石の進行や鉄針の＜磁石への＞接近という＜運動＞はアドリシュタ（不可見力）によって引き起こされた＜運動＞である。

(10) 矢の運動

iṣāv ayugapat saṃyogaviśeṣāḥ karmānyatve hetuḥ //5-1-16//

nodanād ādyam iṣoḥ karma karmakāritāc ca saṃskārād uttaraṃ tathottaram uttaraṃ ca //5-1-17//

saṃskārābhāve gurutvāt patanam //5-1-18//

矢において同時でない諸々の異なった結合は＜矢の瞬間的な＞運動が＜種々＞異なること（運動が多くあること[6]）において原因である。 //5-1-16//

衝動から矢の最初の運動が生ずる。そしてその運動によって作られた潜在能力から次の＜運動＞が＜生ずる＞。そして同様に次のまた次の＜運動が順次に生ずる＞。 //5-1-17//

潜在能力が存在しないとき、重さから＜矢は＞落下する。 //5-1-18//

以上が第５章第１日課である。これらのスートラは運動が断片的に記載され、運動のメカニズムはあまり記載されていない。例えば、杵と臼との衝突運動および矢の運動についてこれらのスートラを解析してみる。

（１）杵の運動[7]

杵の運動は前述の５－１－１手の運動から５まで記述されている。これらのスートラを要約すると以下のようになる。

５－１－１、アートマンと手の結合および意志的努力が共に手の運動の原因である。

５－１－２、杵の運動は手と杵との結合によって生ずる。

５－１－３、杵の運動が衝突によって生ずるときは手と杵との結合は原因ではない。

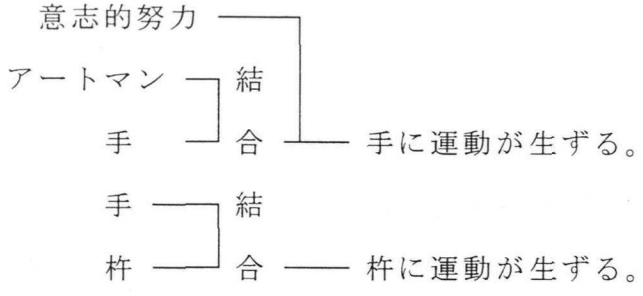
５－１－４、同様にアートマンと＜手と＞の結合は＜衝突直後の＞手の運動において＜原因ではない＞と記されている。

５－１－５、衝突直後の手の運動は杵と手との結合から生ずる。

以上より、これらのことを図示すると第１図のようになる。

第１図　Vaiśeṣikasūtraに記載された手と杵の運動

①　意志的努力によって生ずる運動



②　衝突によって生ずる運動

ここでは手に運動が生ずるとき、アートマンに生じた意志的努力と、アートマンと手の結合とが並列的に記述されている。しかし実際にはアートマンと手との結合は“手を動かす”という意志的努力によって生ずるものと考えられる。従ってここでは手の運動の単なる原因が上げてあるだけで、後に示すPraśastapādabhāṣya記載のような原因の順序が記述されていない。また杵の運動については運動を起こす原因が断片的に

書かれているだけで、手と杵とがどのような運動をして、杵の衝突につながるのか、その運動過程、杵が臼と衝突を起こす運動過程や衝突直後の運動過程などが記されていない。

（２）矢の運動[8]

矢の運動はスートラ５－１－１６から１８まで記述されている。これらのスートラでは以下の通り矢の運動が記述されている。

矢において同時でない諸々の異なった結合は＜矢の瞬間的な＞運動が＜種々＞異なることにおいて原因である。　//5-1-16//

衝動から矢の最初の運動が生ずる。そしてその運動によって作られた潜在能力から次の＜運動＞が＜生ずる＞。そして同様に次のまた次の＜運動が順次に生ずる＞。　//5-1-17//

潜在能力が存在しないとき、重さから＜矢は＞落下する。　//5-1-18//

５－１－１６については注釈をみるとCandrānandaでは矢の空中での運動が結合が多数であることから、運動も多いことを注釈している。Upaskāraでは瞬間的な運動はその場所と分離して次の場所と結合する、その結果その結合によって運動は第５瞬間時で消滅してしまう。それ故、同時でない異なった結合があることは運動が多数であることを知らしむるものであると注釈されている。このことは両注釈とも空中での矢の運動を想定して注釈されていると考えられる。５－１－１７においては矢の運動があいまいな形で書かれている。“次の運動”とは矢の空中の運動と考えることができる。衝動については２通りの考え方をすることができる。１つは、衝動が弦と矢の間に一瞬の間作用し、矢は即座に弦から離れて、その間に生じた運動の潜在能力によって、空中を運動するという考えか方である。他はこの衝動のもとで弦の運動が矢に徐々に伝わり、矢の運動が徐々に激しさを増すという形の衝動について雑な取り扱いをし、矢の運動が衝動から生ずる場合と潜在能力から生ずる場合の２通りがあることを単に示したに過ぎないという考え方である。

この衝動が一瞬の間、作用するという考え方で注釈しているのがCandrānandaの注釈である。また、１５世紀のUpaskāraではVaiśeṣikasūtraと同じように衝動はあいまいな形で書かれている。

ここではsūtra5-1-17に対するCandrānandaによる注釈とUpaskāraを見ていく。

Candrānandaによれば、５－１－１７は次のように注釈されている。[8]

jyāśarasaṃyogaḥ prayatnāpekṣo jyāgatavegāpekṣo vā nodanam, tat ādyam iṣoḥ karma nodanāpekṣaṃ saṃskāraṃ karoti, nirapekṣaṃ tu saṃyogavibhāgau ／ tataḥ saṃyogād vinaṣṭe karmaṇi nodane vibhāgād vinivṛtte ādyakarmajasaṃskāra uttaram iṣau karma karoti, tathottaram uttaraṃ paunaḥpunyenety arthaḥ ／

意志的努力に依存している、あるいは弦に存するヴェーガに依存している弦と矢との結合は衝動である。それ故、矢の最初の運動は衝動に依存して、潜在能力を生ずる。だが、＜これらと＞独立に＜運動によって矢の＞結合、分離が＜生ずる＞。それ故、結合から運動が消え、分離から衝動がなくなるときには、最初の運動によって生じた潜在能力は矢に次の運動を生ずる。‘同様に次のまた次の＜運動が順次に生ずる＞’。とはいくども繰り返して＜運動が生ずる＞という意味である。

ここで書かれていることは衝動が瞬間的に作用し、すぐには弦から離れて空中を運動するということを述べている。すなわち、弦の運動の潜在能力、ヴェーガに基づいて弦と矢との間に衝動が瞬間的に作用する。そのとき、矢に最初の運動が生じ、その運動によって矢にヴェーガが生ずる。そして衝動という結合において最初の運動が消え、その運動から生じたヴェーガによって、第２瞬間時の運動が生ずる。その運動によって矢は即座に弦から離れ、空中で運動する。そして矢は次の空間と結合することによって第２の運動が消え、ヴェーガによって第３の運動が生ずる。その運動によって、その空間から分離し、次の空間と結合して第３の運動が終わる。このようにヴェーガによって矢に次々に運動が生じ、それによって矢と空間との分離と結合が次々に起こるということである。

これは“運動は運動しているものをある場所から分離させ、次の場所と結合させる”というVaiśeṣika学派の運動に対する基本的な考え方を忠実に守ったために生じた考え方である。Upaskāra 5-1-17では次のように記されている。[9]

puruṣaprayatnenākṛṣṭayā patañjikayā nunnasyeṣor ādya karma jāyate, tatra nodanam asamavāyikāraṇam, iṣuḥ samavāyikāraṇam, prayatna-gurutve nimittakāraṇe tena cādyena karmaṇā samānādhikaraṇo vegākhyaḥ saṃskāro janyate ／ sa ca vegena gacchatīti pratyakṣasiddha eva ／

tena saṃskāreṇa tatreṣau karma jāyate tatrāsamavāyikāraṇaṃ saṃskāraḥ, samavāyikāraṇam iṣuḥ, nimittakāraṇan tu tīvro nodana-viśeṣaḥ / evañ ca yāvad iṣu patanam anuvartamānena saṃskāreṇa uttarottaraḥ karmasantāno jāyate svajanyottarasaṃyogena karmaṇi naṣṭe saṃskāreṇa karmāntarajananād eka eva saṃskāraḥ karma-santānajanakaḥ na tu karmasantānavat saṃskārasantāno' py abhyupagantum ucito gauravād iti darśayitum āha ----- tathottaram uttarañceti, tatkarmakāritāc ca saṃskārād ity ekavacanañ ca / nyāyanaye tu karmasaṃtānavat saṃskārasantānasvīkāre gauravam / yat tu yugapat prakṣiptaśarayor ekasya tīvro vego' parasya tu mandaḥ, tatra nodana-tīvratvamandatve nimittam /

人の意志的努力によってパタンジカーを引くことによって矢が推されている間に、<矢に>最初の運動が生ずる。その場合、衝動は非内属因である。矢は内属因である。意志的努力と重さとは動力因である。そしてその最初の運動によって同じ基体にヴェーガと呼ばれる潜在能力が生ずる。そしてそれ（同じ基体、すなわち矢）はヴェーガ（勢い）によって動いているということがまさに直接知覚によって実証される。そのときに、その潜在能力によって矢に運動が生ずる。その場合、潜在能力は非内属因であり、矢は内属因である。しかし、動力因は強い特殊な衝動である。そしてかくの如く矢が落下するまで付き従いつつある潜在能力によって次の<さらに>次の運動の継続（santāna)が生ずる。<運動>自らによって生ずる次の結合によって運動が消滅するとき、潜在能力によって別の運動が生ずることから１つの潜在能力だけが運動の継続を生み出すものである。しかし、運動の継続のように潜在能力の継続もまた認めることは適切ではない、何故なら仮定が不要に重ねられるが故に、ということを示すために<著者は>‘同様に次のまた次の’と述べている。そして‘そしてその運動によって生じた潜在能力から’という<著者の言葉において><潜在能力が>１つであること（すなわち単数であること）が語られている。しかし、ニャーヤの教義において、運動の継続のように潜在能力の継続を仮定するとき、仮定が不必要に重ねられる<という不合理>が<存在している>。しかし、同時に投げられた２本の矢において、１本<の矢>については強いヴェーガが<生じ>、他<の矢>については遅い<

ヴェーガが生ずる>。その場合、衝動の強さ弱さに原因する。

ここでは衝動がどのように生ずるかは書かれていない。パタンジカーに矢が押されていることが衝動と考えられる。衝動から矢に最初の運動が生ずることが書かれている。この記述では衝動中の矢の運動があいまいである。しかし、次の運動において、最初の運動で生じた潜在能力によって次の運動が生ずると記されているので、ここでは衝動が瞬間的に作用しているように考えられる.あいまいであるが、衝動が瞬間的に作用していることはCandrānandaと同じである。衝動以降の矢の運動、すなわち空中での矢の運動の発生の仕方は最初の運動で生じた潜在能力だけによって次々に矢に運動が生ずることが記されている。しかも次々に生ずる矢の運動に対して運動の継続(santāna)という言葉を使って、VaiśeṣikasūtraやPraśastapādabhāṣyaと違って運動の連続性が明瞭に表されている。すなわち、矢の瞬間的な運動が次から次へ生ずる連続性がVaiśeṣikasūtraやPraśastapādabhāṣyaにおいては“次の次の”(uttaram uttaram)という形で表していたものを継続(santāna)という明瞭な形で瞬間的な運動の継続性が表されている。また、Nyāya学派において運動の継続の他に潜在能力の継続を主張しているが、それに対してUpaskāraは不必要な仮定を重ねることになるから、矢の空中での運動において潜在能力は１つであることを述べている。これは他の書物にないことである。Nyāya学派が潜在能力（サンスカーラ、saṃskāra）の継続、すなわち潜在能力の瞬間性を主張したのは次の理由によるものと考えられる。

Nyāya学派では音の発生に対してサンスカーラはある種の動因とされた。音の強弱があることに対して強さの異なったサンスカーラが多数あると考えられた。音は瞬間的なものと考えられていたので、サンスカーラもまた瞬間的と考えられていた。この音のサンスカーラ論をNyāya学派では運動論に適用したものと考えられる。[10]Nyāya学派において、サンスカーラが瞬間的である理由は後に述べることにする。

以上がスートラ第５章第１日課である。全般的に第１日課では運動を起こす原因が断片的に書かれていることが分析の結果いえることである。

２－２、Vaiśeṣikasūtra第５章第２日課の運動[11]

スートラ第５章第２日課では継続運動が以下のように述べられている。

(1) 特殊な結合による運動

nodanād abhighātāt saṃyuktasaṃyogāc ca pṛthivyāṃ karma //5-2-1//

衝動、衝突、そして＜その部分とその部分に＞つながれた部分との結合から土性の物質に運動が＜生ずる＞。

(2) アドリシュタ（不可見力）によって生ずる運動

tad viśeṣeṇādṛṣṭakāritam //5-2-2//

＜衝動や衝突等から＞異なる＜原因＞によって＜生ずる＞それ（土性の物質の運動）はアドリシュタによって引き起こされる。

(3) 水の種々なる運動

apāṃ saṃyogābhāve gurutvāt patanam //5-2-3//

＜水と他の物質との＞結合がないとき、水にとって重さから落下が＜生ずる＞。

tad viśeṣeṇādṛṣṭakāritam //5-2-4//

＜重さから＞異なる＜原因＞によって＜生ずる＞それ（水の落下運動）はアドリシュタによって引き起こされる。

dravatvāt syandanam //5-2-5//

＜水の＞流れることは流動性から＜生ずる＞。

nāḍyā vāyusaṃyogād ārohaṇam //5-2-6//

＜水の＞蒸発は太陽の光線と風との結合から＜生ずる＞。

nodanāt pīḍanāt saṃyuktasaṃyogāc ca //5-2-7//

＜水の上昇は＞衝動から、＜衣服などで＞圧することから、そして＜衝動や圧することが生じている部分とそれに＞つながれた部分との結合から＜生ずる＞。

vṛkṣābhisarpaṇam ity adṛṣṭakāritam //5-2-8//

樹木の中を水が上昇することはアドリシュタによって引き起こされる。

(4) 水の濃縮と溶解

apāṃ saṅghāto vilayanaṃ ca tejasaḥ saṃyogāt //5-2-9//

水の濃縮と溶解は火との結合から生ずる。

(5) 雷鳴

tatrāvasphūrjathur liṅgam //5-2-10//

その場合、雷鳴があるということは＜そのことの＞印である。

vaigikaṃ ca //5-2-11//

そして＜それは＞ヴェーダに由来する。

apāṃ saṃyogād vibhāgāc ca stanayitnuḥ //5-2-12//

水の結合と分離から雷雲が＜生ずる＞。

(6)　火と風の運動

pṛthivīkarmaṇā tejaḥkarma ca vāyukarma ca vyākhyātam //5-2-13//

火の運動と風の運動は地の運動によって説明される。

(7)　アドリシュタによる運動

agner ūrdhvajvalanaṃ vāyośca tiryakpavanam aṇumanasoś cādyaṃ karmety adṛṣṭkāritāni //5-2-14//

火が上昇する炎＜の運動＞、そして風の横吹き、そして原子とマナスの最初の運動、以上＜これらの運動＞はアドリシュタによって引き起こされる。

(8)　マナスの種々なる運動

hastakarmaṇā manasaḥ karma vyākhyātam //5-2-15//

＜手とアートマンとの結合と意志的努力とから生ずる＞手の運動によってマナスの運動が＜同じように＞説明される。

ātmendriyamanorthasannikarṣāt sukhaduḥkhe tad anārambhaḥ //5-2-16//

アートマン、感覚器官、マナスおよび対象の接触から快感と不快感が生ずる。それを（その接触を）形成することはない。

ātmasthe manasi saśarīrasya sukhaduḥkhābhāvaḥ sa yogaḥ //5-2-17//

マナスがアートマンの中に安住しているときは、身体に一緒にある＜アートマン＞には快感も不快感も生じない。それがヨーガである。

(9)　アートマンの運動（ヨーガにおける息という風の制息の運動）[12]

kāyakarmaṇā'tmakarma vyākhyātam //5-2-18//

身体の運動によってアートマン（息という風）の運動が＜同じように＞説明される。

(10)　アドリシュタによるマナスの運動

apasarpaṇam upasarpaṇam aśitapītasaṃyogaḥ kāryāntarasaṃyogāścety adṛṣṭkāritāni //5-2-19//

＜死んだとき、マナスが身体から＞去ること、＜マナスが別の身体に＞近づくこと、＜胎児が母親の＞食べ、飲んだ食物と結合すること、＜マナスが＞他の結果と結合すること、以上のことはアドリシュタによって引き起こされる。

(11)　解脱

tadabhāve saṃyogābhāvo'prādurbhāvaḥ sa mokṣaḥ //5-2-20//

それ（アドリシュタ）が存在しないときには＜生命作用と呼ばれるアートマンとマナスとの＞結合は存在しない。そして＜他の身体が＞現れない。それが解脱である。

(12) 暗黒

dravyaguṇakarmavaidharmyād bhāvābhāvamātraṃ tamaḥ //5-2-21//

暗黒は実体、性質、運動から性質を異にするものであるが故に、単なる＜光の＞存在がないこと（非存在）である。黒

tejaso dravyāntareṇāvaraṇāc ca //5-2-22//

そして光が他の実体によって覆われることから＜暗黒が生ずる＞。

(13) 方角、時間、虚空

dikkālāv ākāśaṃ ca kriyāvadbhyo vaidharmyān niṣkriyāṇi //5-2-23//

方角と時間と虚空は活動を有するものから性質を異にするものであるから活動しないものである。

(14) 運動と性質の説明終わり

etena karmāṇi guṇāś ca vyākhyātāḥ //5-2-24//

これによって運動と性質とが説明された。

以上のようにスートラ第５章第２日課では、土、水、火、風およびマナスの運動が述べられている。これらの運動についてこの第２日課では運動を起こす原因が簡単に書かれているに過ぎない。運動のメカニズムを見つけることは出来なかった。

以上でVaiśeṣikasūtra第５章に記載された継続運動について終わりにするが、Vaiśeṣikasūtraでは継続運動についての記述は運動が生ずる原因が単に記載されているだけで、運動のメカニズムはあまり記載されていない。Praśastapādabhāṣyaでは運動が生ずる原因と運動のメカニズムが明瞭に記されている。次節以降Praśastapāda-bhāṣyaに記載された継続運動について見ていく。

３、 Praśastapādabhāṣya第３章第４節アートマンに支配された運動

この第４節では身体の運動、杵と臼との衝突運動、槍を投げる運動、弓矢の運動が扱われている。これらの運動の過程がどのように説明されているか Praśastapāda-bhāṣyaに従って説明する。

３－１、　身体の運動

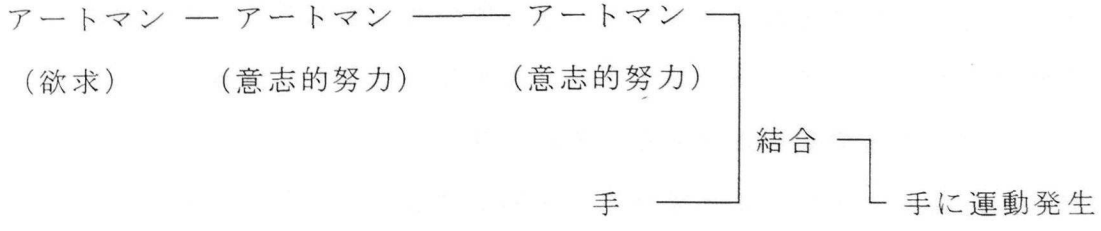
この身体の運動は意識の作用に基づく運動と無意識的な運動とに分かれる。無意識的な運動は物体の運動と同じ方法で扱われている。意識の作用に基づく運動はPraśastapādabhāṣyaによれば、身体の運動は次のごとく記されている。[13]

cikīrṣiteṣu yajñādhyayanadānakṛṣyādiṣu yathā hastam utkṣeptum icchaty apakṣeptuṃ vā, tadā hastavaty ātmapradeśe prayatnaḥ sañjāyate ／ taṃ prayatnaṃ gurutvaṃ cāpekṣamāṇād ātmahastasaṃyogād dhaste karma bhavati, hastavat sarvaśarīrāvayaveṣu pādādiṣu śarīre ceti ／

供犠、学習、布施、農業等をなそうと望んで、手を上げるとか、あるいは下げるとかしたいとき、手の領域を占めているアートマンの部分に意志的努力が生ずる。その意志的努力と重さとに依存しているアートマンと手との結合から、手に運動が生ずる。そして足などの身体のすべての部分および身体全体に手＜の場合＞と同様に＜運動が生ずる＞。

ここで示されているように、身体の運動はアートマン、すなわち心に生じた“身体を動かす”という意識的努力から生ずる。その運動の発生過程はこの意志的努力によってアートマンと身体との間にそれにふさわしい結合が起こる。その結合から身体に運動が生ずるとされている。例として手を持ち上げる運動が述べられている。この意識的努力はアートマンとその補助器官、マナスとの結合によってアートマンに生じた“手を持ち上げたい”という欲求から“手を持ち上げる”という意志的努力が手の領域を占めているアートマンの部分に起こる。この意志的努力と手との結合から手に“持ち上げること”いう運動が生ずるのである。手の運動の発生過程を図示すると次のような順序になる。

第２図　手の運動



３－２、　杵と臼との衝突運動

Praśastapādabhāṣyaに記載された杵と臼との衝突運動は次の２つの部分に分けることができる。１つは身体部分の運動で、杵を持ち上げ、振り下ろす運動である。他は杵と臼との衝突部分の運動である。それらの運動はPraśastapādabhāṣyaによれば次のように記載されている。

（１）　身体部分の運動

この身体部分の運動では杵を持ち上げるという運動と杵を振り下ろすという運動が記述されている。それらは次の通りである。[14]

yadā hastena musalaṃ gṛhītvecchāṃ karoti “utkṣipāmi hastena musalam” iti, tadanantaraṃ prayatnas tam apekṣamāṇād ātmahastasaṃyogād yasminn eva kāle haste utkṣepaṇakarmotpadyate, tasminn eva kāle tam eva prayatnam apekṣamāṇād dhastamusalasaṃyogān musale'pi karmeti ／ tato dūram utkṣipte musale tadarthecchā nivartate ／ punar apy apakṣepaṇecchotpadyate ／ tadanantaraṃ prayatnas tam apekṣamāṇād yathoktāt saṃyogād dhastamusalayor yugapad apakṣepaṇa-karmaṇī bhavataḥ ／

手によって杵をつかみ、“私は手によって杵を持ち上げる”という欲求を人が生ずるとき、その直後に意志的努力が＜生ずる＞。それ（意志的努力）に依存しているアートマンと手との結合から手に持ち上げることという運動が生ずる、ちょうどそのときに、その意志的努力だけに依存している手と杵との結合から杵にまた運動が＜生ずる、＞と＜いわれる＞。それ故杵が高く持ち上げられたとき、そのための欲求（持ち上げようとする欲求）がやむ。さらにまた、振り下ろそうとする欲求が生ずる。その直後に意志的努力が＜生ずる＞。それ（意志的努力）に依存している前述の＜２つの＞結合（すなわち、アートマンと手との結合および手と杵との結合）から手と杵とに同時に振り下ろすことという運動が生ずる。

ここでは、人が杵をつかみ、“杵を持ち上げたい”という欲求がアートマン、すなわち心に生ずる。その直後にそれにふさわしい意志的努力が生じる。この意志的努力に基づいてそれにふさわしいアートマンと手の結合が起こり、それに基づいて“杵を持ち上げること”という手の運動が生ずる。それと同時にこの意志的努力に基づいて手と杵との結合が起こり、それによって杵に“持ち上げること”という運動が生ずる。

杵が十分に高く持ち上がると、次に杵を臼めがけて“振り下ろしたい”という欲求が生じる。それによって前と同じ方法で“杵を振り下ろすこと”という運動が手と杵に生ずる。以上、このような順序で身体部分の運動が生ずる。

（２）　衝突部分の運動

次に杵と臼との衝突による杵の運動は次の如く記載されている。[15]

tato' ntyena musalakarmaṇolūkhalamusalayor abhighātākhyaḥ saṃyogaḥ kriyate, sa saṃyogo musalagatavegam apekṣamāṇo' pratyayaṃ musale utpatanakarma karoti ／ tatkarmābhighātāpekṣaṃ musale saṃskāram ārabhate ／ tam apekṣya musalahastasaṃyogo' pratyayaṃ haste' py utpatanakarma karoti ／

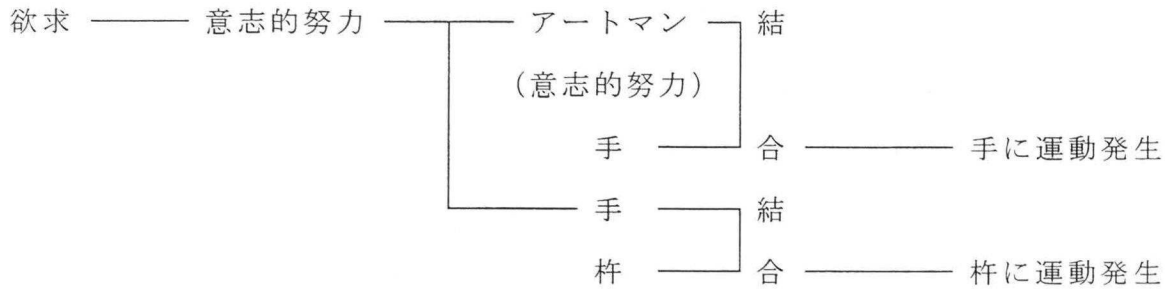
それ故、最後の杵の運動によって臼と杵にとって、衝突と呼ばれる結合が生ずる。その結合は杵に存するヴェーガ（勢い）に依存しつつ、杵に意識に依らない飛び上がりの運動を生ずる。その飛び上がりの運動は衝突に依存し、杵に潜在能力（サンスカーラ）を形成する。それ（潜在能力）に依存して、杵と手との結合が手にまた意識に依らない（無意識的な）飛び上がりの運動を生ずる。

ここでは杵と臼との衝突に関して記されている。すなわち、杵の振り下ろす最後の運動によって杵は臼と衝突をする。そのとき、杵の振り下ろしによって杵に生じた潜在能力、ヴェーガ（勢い）に基づいて杵に意識に依らない飛び上がりの運動が生ずる。それに伴われて杵に潜在能力、ヴェーガ（勢い）が生ずる。この杵に存するヴェーガに基づいて杵と手の結合から手に無意識的な飛び上がりの運動が生ずる。

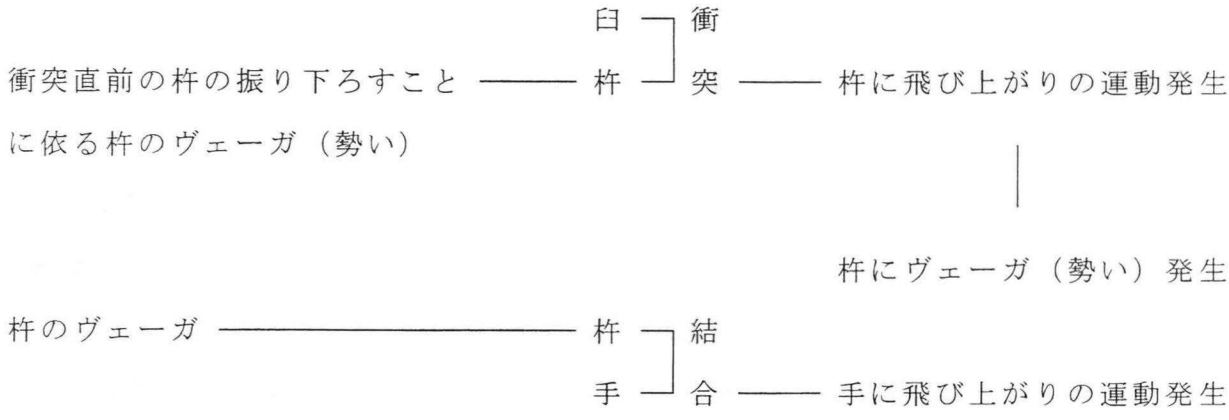
以上がPraśastapādabhāṣyaに書かれた杵と臼との衝突である。これを図式化すると第３図のようになる。

第３図　杵と臼との衝突運動

（１）　身体部分の運動（杵を持ち上げる、振り下ろす運動）



（２）臼と杵との衝突



３－３、　槍を投げる時の槍の運動

槍を投げる運動はPraśastapādabhāṣyaにおいて次のように記述されている。[16]

yadā tomaraṃ hastena gṛhītvotkṣeptum icchotpadyate, tadanantaraṃ prayatnaḥ, tam apekṣamāṇād yathoktāt saṃyogadvayāt tomarahastayor yugapad ākarṣāṇākarmaṇī bhavataḥ / prasārite ca haste tadākarṣaṇārthaḥ prayatno nivartate / tadanantaraṃ tiryag ūrdhvaṃ dūram āsannaṃ vā kṣipāmītīcchā sañjāyate / tadanantaraṃ tadanurūpaḥ prayatnas tam apekṣamāṇas tomarahastasaṃyogo nodanākhyaḥ / tasmāt tomare karmotpannaṃ nodanāpekṣaṃ tasmin saṃskāram ārabhate / tataḥ saṃskāranodanābhyāṃ tāvat karmāṇi bhavanti yāvad dhastatomaravibhāga iti / tato vibhāgān nodane nivṛtte saṃskārād ūrdhvaṃ tiryag dūram āsannaṃ vā prayatnānurūpāṇi karmāṇi bhavanty

ā patanād iti /

槍を手によって掴み、持ち上げようとする欲求が生じる。その直後に意志的努力が＜生じる＞。それ（意志的努力）に依存している前述の２つの結合（すなわち、アートマンと手の結合および手と槍の結合）から槍と手の両方に、同時に引くという運動が生ずる。そして手が伸ばされたとき、その引くという目的の意志的努力がやむ。その直後に“横へ、あるいは上へ、あるいは遠くへ、あるいは近くへ私は投げる”という欲求が生じる。それに続いて、それにふさわしい意志的努力が＜生じる＞。それ（その意志的努力）に依存している槍と手の結合が衝動と呼ばれる。それから（その衝動から）槍に生じた運動は衝動に依存してそれに（槍に）潜在能力（saṃskāra）を形成する。それ故、潜在能力と衝動との両方によって手と槍との分離＜が起こる＞まで諸々の運動が生ずると＜いう＞。その後、＜手と槍との＞分離から衝動が消失するとき、＜生じた＞潜在能力から上へ、あるいは横へ、あるいは遠くへ、あるいは近くへ意志的努力にふさわしい諸々の運動が落下に至るまで生ずると＜いう＞。

ここでは槍を投げることの運動過程が記載されている。人が槍をつかみ、“槍を持ち上げよう”という欲求がアートマンに生じる。その直後にそれにふさわしい意志的努力が生じる。この意志的努力に基づいてそれにふさわしいアートマンと手の結合が起こり、それに基づいて“槍を引く”という手の運動が生ずる。それと同時にこの意志的努力に基づいて手と槍との結合が起こり、それによって槍に“引く”という運動が生ずる。手が伸ばされたとき、“引く”という目的の意志的努力が止む。その直後に“槍を横へ、あるいは上へ、あるいは遠くへ、あるいは近くへ投げる”という欲求が生じる。その欲求にふさわしい意志的努力が生じる。すなわち、“槍を横へ投げる”という欲求に対しては“横へ投げる”という意志的努力、“上へ投げる”という欲求に対しては“上へ投げる”と言う意志的努力、等々の意志的努力が生じる。この意志的努力に依存している手と槍との間に衝動と呼ばれる結合が生ずる。この衝動から槍に運動が生ずる。その運動は衝動に依存して槍に潜在能力（saṃskāra）を形成する。この潜在能力と衝動の両方によって手と槍が分離するまで衝動中において槍に諸々の運動が生ずる。分離によって衝動がなくなれば、槍に生じた潜在能力から上へ、横へ、遠くへ、近くへ意志的努力にふさわしい諸々の運動が落下まで生ずる。

ここに記載された衝動について、Nyāyakandalīでは次のように注釈されている[17]。

tam apekṣamāṇas tomarahastasaṃyogo nodanākhyo nodyasya tomarasya nodakasya ca hastasya sahagamanahetutvāt /

‘それに（その意志的努力に）依存している槍と手との結合は衝動と呼ばれる’、何故なら、<衝動には>槍という推されるべきものと手という推進者の両方が一緒に進行することの原因であるという特質があるが故に。

これによれば、衝動とは“推すもの”と“推されるべきもの”が一緒に動くような結合である。この結合を媒介として“推すもの”の運動が“推されるべきもの”に徐々に伝わって行くのである。ここでは、衝動を通して手が槍を推し、手の運動が槍に伝わり、槍の運動が徐々に激しくなっていく。すなわち、衝動を通して意志的努力に基づいて槍に最初の運動が生ずる。その槍の運動に伴われて槍に潜在能力（運動の勢い）が生ずる。さらに衝動のもとで意志的努力に依存している手が槍を推し続けるため、槍の潜在能力から槍により激しい運動が生じ、その運動からより強い潜在能力が生ずる。このような方法でこの衝動のもとで槍の運動と潜在能力が相乗的にまして行く。衝動中で槍の運動が激しくなり、ついに手と槍との衝動が保てなくなり、槍は手から離れ、落下するまで空中を運動する。空中では槍は衝動中に蓄えられた潜在能力（勢い）、すなわち意志的努力にふさわしい潜在能力によって運動する。

以上がPraśastapādabhāṣyaに記載された槍を投げるときの槍の運動である。この槍の運動過程を図示すると第４図のようになる。

第４図　槍を投げる運動

①　槍を引く

欲求 ―― 意志的努力 ―┬― アートマンと手の結合 ―― 槍を引くという手の運動
　　　　　　　　　　　└― 手と槍の結合 ―――――― 槍を引くという槍の運動

②　槍を横へ、あるいは上へ、あるいは遠くへ、あるいは近くへ投げる。

欲求 ―― 意志的努力 ―― （アートマンと手の結合）

手　衝
槍　動 ―――――― 手と結合中の槍に運動発生

槍に潜在能力（勢い）発生

③　衝動中の槍の運動

手と槍の間の衝動

槍の潜在能力 ―――――――――――――― 手と結合中の槍の運動

益々激しくなる。

槍の潜在能力増大

④　槍が手から離れ、空間中での運動

衝動中に得られた

槍の潜在能力 ―――――――――――――― 槍が落下するまでの

諸々の運動

３－４、　弓矢の運動

ここでは前述の槍の運動と同じく衝動過程(nodana)が記述されている。槍の運動では意志的努力によって生じた手と槍との間の衝動過程であったが、この矢の運動では弓の弦の潜在能力に基づく弦と矢との間の衝動過程である。

この弓矢の運動はPraśastapādabhāṣyaによれば、次のように記されている。(18)

yo balavān kṛtavyāyāmo vāmena kareṇa dhanur viṣṭabhya dakṣiṇena śaraṃ sandhāya saśarāṃ jyāṃ muṣṭinā gṛhītvā ākarṣaṇecchāṃ karoti, sajyeṣv ākarṣayāmy etad dhanur iti / tadanantaraṃ prayatnas tam apekṣamāṇād ātmahastasaṃyogād ākarṣaṇakarma haste yadaivotpadyate tadaiva tam eva prayatnam apekṣamāṇād dhastajyāśarasaṃyogād jyāyāṃ śare ca karma, prayatnaviśiṣṭahastajyāśarasaṃyogam apekṣamāṇābhyāṃ jyākoṭisaṃyogābyāṃ karmaṇi bhavato dhanuṣkoṭyor ity etat sarvaṃ yugapat / evam ākarṇād ākṛṣṭe dhanuṣi nātaḥ param anena gantavyam iti yaj jñānaṃ tatas tadākarṣaṇārthasya prayatnasya vināśas tataḥ punar mokṣaṇecchā sañjāyate, tadanantaraṃ prayatnas tam apekṣamāṇād ātmāṅgulisaṃyogād aṅgulikarma, tasmāj jyāṅgulivibhāgaḥ tato vibhāgāt saṃyogavināśaḥ, tasmin vinaṣṭe pratibandhakābhāvād yadā dhanuṣi vartamānaḥ sthitisthāpakaḥ saṃskāro maṇḍalībhūtaṃ dhanur yathāvasthitaṃ sthāpayati tadā tam eva saṃskāram apekṣamāṇād dhanurjyāsaṃyogād jyāyāṃ śare ca karmotpadyate / tat sva-kāraṇāpekṣaṃ jyāyāṃ saṃskāraṃ karoti / tam apekṣamāṇa iṣujyā-saṃyogo nodanam, tasmād iṣāv ādyaṃ karma nodanāpekṣam iṣau saṃskāram ārabhate / tasmāt saṃskārān nodanasahāyāt tāvat karmāṇi bhavanti yāvad iṣujyāvibhāgaḥ, vibhāgān nivṛtte nodane karmāṇy uttarottarāṇīṣusaṃskārād eva ā patanād iti /

身体の鍛錬をなした力強い人が左手によって弓をしっかり握り、右手によって矢をつがえ、こぶしによって矢と一緒に弦をつかみ、“私は弦と矢と一緒にこの弓を引く”という＜弓を＞引こうという欲求を生ずる。それに続いて意志的努力が＜生じる＞。それ（意志的努力）に依存しているアートマンと手との結合から引くという運動が手に＜生ずる＞、ちょうどそのとき、その意志的努力だけに依存している手と弦と矢との結合から弦と矢とに運動が＜生ずる＞。意志的努力によって特定化された手と弦と矢との結合に依存している弦と弓の両端の結合から弓の両端に運動が生ずる。以上このことはすべて同時に＜起こる＞。このように耳まで弓が引かれたとき、これ（手）によってこれ以上に引くことが出来ないという理解に＜達する＞。その理解から、それ（弓）を引くという目的の意志的努力

が消滅する。それから、さらに＜それを＞解き放そうとする欲求が生じる。それに続いて意志的努力が＜生じる＞。それ（意志的努力）に依存しているアートマンと指との結合から指に運動が＜生ずる＞。それから弦と指との分離が＜生ずる＞。それ故、その分離から結合（矢と弦と指との結合）が消滅する。それが消滅したとき、束縛がなくなることから、弓に住している弾力という潜在能力は弓が丸くなっている状態を弓の元の安定な状態になるように復せしめる。そのとき、その潜在能力だけに依存している弓と弦との結合から弦と矢とに運動が生ずる。それ（運動）は＜運動＞自身の原因（すなわち、弓と弦との結合）に依存し、弦に潜在能力を生ずる。それ（弦の潜在能力）に依存している矢と弦との結合は衝動＜という特殊な結合＞である。それ（衝動）から矢に＜生じた＞最初の運動は衝動に依存し、矢に潜在能力を形成する。衝動に伴われたその潜在能力から矢と弦との分離が＜起こる＞まで諸々の運動が生ずる。＜矢が弦から＞分離することから衝動が消滅したとき、次々の運動は矢にある潜在能力だけから落下するまで＜生ずる＞のである。

このようにPraśastapādabhāṣyaで説明された弓矢の運動は次の４つの部分に分けることができる。それらは（１）弓を引くときの手の運動およびそれに伴われた弓と矢の運動、（２）弓の弦から指を離したときの弓と弦の運動、（３）弦と矢が結合しながら、一緒に動くという弦と矢の特別なる結合、衝動における矢の運動、（４）空中における矢の運動である。これらの運動を図に示したのが第５図である。これらの運動は次のように説明されている。

（１）　弓を引くときの運動

ここでは次の３つの運動が説明されている。それらは弓を引くときの手の運動、それに伴われた弦と矢の運動、弦の動きに伴われた弓の両端の運動である。それらは第５図の(1) ①の部分で示されている。これらの運動はPraśastapādabhāṣyaによれば、次のように説明されている。すなわち、人が弓に矢をつがえ、“弓を引きたい”という欲求を生ずる。その直後にそれにふさわしい意志的努力が生ずる。その意志的努力によってアートマンと手の結合が生ずる。その結合によって手に弓を引くという運動が生ずる。それに伴われて手と弦と矢との結合から弦と矢に引くという運動が生ずる。そして弦の動きに伴われて弦と弓の両端との結合から弓の両端に運動が生ずる。これら３つの運動は弓を引くという意志的努力によって同時に生ずるのである。

第５図弓矢の運動

(1) 身体部分の運動

① 弓を引く

欲求 —— 意志的努力 ┬ アートマンと手の結合 ——— 弓を引くという手の運動
└ 手と弦と矢との結合 ┬ ——— 弦と矢の引くという運動
└ 弦と弓の両端との結合 — 弓の両端の運動
（弓が丸くなる）

② 弓を解き放つ

欲求 —— 意志的努力 —— アートマンと指の結合 ——— 弦から指を離す動作
|
弓に束縛がなくなる

(2) 弓矢の運動

③ 弓の運動

弓の弾力 ——————————————— 弓に運動発生
（弓：丸くなっている状態 ———— 元の安定な状態）

④ 弦の運動

弓の弾力 ———————— 弓と弦との結合 ——— 弦と矢に運動発生
|
弦に潜在能力（ヴェーガ）発生

⑤ 衝動中の矢の運動①

弦の潜在能力 ———— 弦と矢の間の衝動 ———— 弦と結合中の矢に最初の運動発生
|
矢に潜在能力(ヴェーガ）発生

⑥ 衝動中の矢の運動②

弦の潜在能力 ———— 弦と矢の間の衝動 ┐
矢の潜在能力 ——————————————— 弦と結合中の矢の運動
（ヴェーガ） 激しさ増す
|
矢の潜在能力増大

⑦ 矢が弦から離れ、空間中での運動。

衝動中に得られた ———— 空間と矢との結合、 ———— 矢が落下するまで
矢の潜在能力 分離の繰り返し の諸々の運動

（２）　弓の弦から指を離したときの弓と弦の運動

この部分は弓が束縛を解かれて運動を生ずるところである。第５図の(1) ②、(2) ③④の部分で示された運動である。すなわち、人が弓を十分に引いた後、次に“弓を解き放したい”という欲求が生じる。その直後にそれにふさわしい意志的努力が生ずる。この意志的努力によって指が弦から離れる。弓に束縛がなくなるから弓の弾力によって弓を丸くなっている状態から元の安定な状態へ戻すべく弓に運動が生ずる。その運動に伴われて弓と弦との結合から弦と矢に運動が生じる。そして弦の運動から弦に潜在能力（すなわち、ヴェーガ（勢い））が発生する。

以上が記載されている。次に弦の潜在能力に依存して衝動が生じて、弦の運動が矢に徐々に伝わっていく過程が説明されている。

（３）　衝動中での矢の運動

ここでは（２）で述べたように弓の弾力による弓と弦との結合から弦に運動が発生し、弦に潜在能力が生じる。このとき、弦と矢の結合は弦の潜在能力に基づいて特殊な結合、衝動を発生する。この衝動(nodana)についてはNyāyakandalīでは次のように注釈されている。[19]

taṃ ca saṃskāram apekṣmāṇa iṣujyāsaṃyogo nodanam, nodyasyeṣor nodakasya guṇasya sahagamanahetutvāt ／

そして‘それに’、<すなわち>潜在能力に‘依存している矢と弦との結合は衝動<という特殊な結合>である。’何故なら、<衝動には>推されるべき矢と推進者たる弦とが一緒に進行することの原因であるという特質があるが故に。

これによれば、前述の手と槍との衝動と同じように、衝動とは“推すもの”と“推されるべきもの”が一緒に動くような結合である。この結合を媒介として“推すもの”の運動が“推されるべきもの”に徐々に伝わって行くのである。ここでは、衝動を通して弦が矢を推し、弦の運動が矢に伝わり、矢の運動が徐々に激しくなっていく。すなわち、衝動を通して弦の潜在能力に基づいて矢に最初の運動が生ずる。その矢の運動に伴われて矢に潜在能力（ヴェーガ（運動の勢い））が生ずる。さらに衝動のもとで弦が矢を推し続けるため、矢の潜在能力から矢により激しい運動が生じ、その運動からより強い潜在能力が生じる。このような方法でこの衝動のもとで矢の運動と潜在能力が相乗的に増して行く。これは第５図(2) ⑤⑥の部分の運動である。

（４）　空中での矢の運動

ここでは（３）で矢の運動が激しくなり、ついに矢は弦との結合、衝動が保てなくなり、弦から離れてそれまでに蓄えられた潜在能力によって空間中を運動する。第５図⑦の部分である。この潜在能力は矢の重さが障害となり徐々に減少して行きついには０となる。そのとき、矢の重さによって落下する。

以上がPraśastapādabhāṣyaによって述べられた弓矢の運動である。弓矢の運動を図式化した第５図の⑤から⑦までの図式、すなわち衝動過程における図式は回転や落下などに使われた方法である。２－２で示した衝突過程のパターン（第３図（２））と今示した衝動過程のパターン（第５図⑤ー⑦）は記憶の発生過程のパターンとよく類似していること（非常に強く印象を受けたときの記憶の発生過程と衝突過程のそれぞれのパターンの類似および普通に印象を受けたときの記憶の発生過程と衝動過程のそれぞれのパターンの類似）を次章に示す。

４、　Praśastapādabhāṣya第３章第５節「アートマンに支配されない運動」

この第５節では主に意志的努力に基づかない運動が記載されている。そこには落下運動、水の流出運動、ろくろの回転運動、息という風の運動、マナス（アートマンの補助器官）の運動、原因の分からない運動が記述されている。Vaiśeṣika 学派ではこれらの運動はすべて方向の定まらない運動とされ、進行という種類に入れられていた。これらの運動の内、水の流出運動は堤の破れ目から水が流出する仕方が記述され、息という風の運動は空気が流出する呼吸運動について記述されている。マナスの運動についてはマナスの２つの運動が記述されている。１つは人が対象物を知覚するために生ずるマナスの運動、他は輪廻の世界において死後、人が生まれ変わるために死体からマナスが抜けだし、次に誕生する身体へ入る運動が記述されている。原因の分からない運動はすべてアドリシュタ（不可見力）と呼ばれる超能力によって動かされると考えられていた。このような運動の内、落下運動、ろくろの回転運動および水の流出運動がPraśastapādabhāṣyaにおいてどのように記述されているか、見ていく。

４－１、　ろくろの回転運動

ろくろの回転はPraśastapādabhāṣyaでは次のように記載されている。[20]

tathā cakrādiṣv avayavānāṃ pārśvataḥ pratiniyatadigdeśasaṃyoga-vibhāgotpattau yad avayavinaḥ saṃskārād aniyatadigdeśasaṃyoga-

vibhāganimittaṃ karma tad bhramanam iti ／

同様にろくろなどにおいて、諸々の部分にとって＜ろくろの＞縁ではそれぞれ方向の定まった＜空間の＞場所との結合と分離が生じているとき、＜ろくろの＞全体は潜在能力から方向が一定しない場所と結合し、分離する＜、その＞ことを原因として運動＜が生ずる＞ところのそ＜の運動＞が回転であると＜いう＞。

これは回転運動の定義である。すなわち、回転しているろくろのある部分に注目すれば、瞬間瞬間、方向の定まった場所との結合、分離がそれぞれ行われるが、その部分部分の方向は一定していないため、それを総合した全体では方向が一定していない諸々の場所との結合、分離が行われる。この運動が回転であり、その推進力となるものが潜在能力であると、述べている。Praśastapādabhāṣyaでは回転についてこれ以上のことは述べられていない。Nyāyakandalīでは回転の定義だけでなく、その運動の仕方が述べられている。その仕方は次のように記されている。(21)

prathamaṃ cakrāvayavini daṇḍasaṃyogāt karmotpadyate ／ uttarottarāṇi karmāṇi nodanād abhighātāt karmajāt saṃskārāc ca bhavanti ／ evaṃ vegād daṇḍasaṃyukte cakrāvayave ādyam karma daṇḍasaṃyogāt, avayavāntareṣu ca saṃyuktasaṃyogāt, daṇḍasaṃyuktasyāvayavasyo-ttarottarakarmāṇi saṃskārān nodanāc ca ／ apareṣāṃ saṃskārāt, saṃyuktasaṃyogāc ca ／ daṇḍavigame tu cakre tadavayaveṣu ca saṃskārād eva kevalāt ／

最初にろくろの全体において、棒との結合から運動が生ずる。次々の運動は衝動と衝突と、そして運動から生じた潜在能力とから生ずる。それ故、棒と接触しているろくろの部分において、＜棒の＞勢い(vega)から最初の運動が生ずる。何故なら棒との結合があるが故に。そして他の諸々の部分においても、＜棒と＞接触している部分と＜他の部分と＞の結合（saṃyuktasaṃyoga)から＜運動が生ずる＞。棒と接触している部分の次々の運動は潜在能力と衝動から生ずる。そして、他の諸々の部分（すなわち、棒と直接接触していない部分）＜の運動＞は潜在能力と、＜棒と＞接触している部分と＜他の部分と＞の結合とから＜生ずる＞。だが、ろくろおよびその諸々の部分から棒を取り去るとき、まさに潜在能力だけから、＜運動が同様に生ずる＞。

ここでは、棒を付けたろくろの回転運動が記述されている。棒を回すことによってろ

くろが回転を始めるとしている。この方法によってろくろの回転がどのように説明されていたか次に述べる。Nyāyakandalīではろくろを、棒を接続しているところを中心にしていくつかの同心円上の輪に分割し、それらを部分としてろくろが構成されているとされ、そして棒の回転運動は部分と部分とをつなぐ結合を通して次々に部分に伝わると考えられていた。部分と部分、すなわち輪と輪をつなぐ結合は“<その部分（動いている部分）とそれに>つながれた部分との結合”(saṃyuktasaṃyoga)と呼ばれている。回転運動は棒に直接接触している部分とそうでない部分とに分けて論じられている。棒に直接接触している部分の回転運動は次のように説明されている。棒の回転に伴って接触部分に特殊な結合、衝動が生じ、この結合を媒介として棒の潜在能力、ヴェーガ（棒が回転する勢い）に基づいて接触部分に回転が発生する。この回転によってその部分に運動の潜在能力（勢い、すなわち、　ヴェーガ）が発生する。この特殊な結合、衝動を通して棒がその接触部分を回転させ続けるため、その潜在能力から接触部分に、より激しい回転運動が生じ、その運動からより強い潜在能力が生ずる。このような方法で接触部分の回転運動と潜在能力は増大する。棒に直接接触していない部分の回転運動もまた同じパターンが使われていた。すなわち、“<その部分とそれに>つながれた部分との結合”を媒介として直接接触している部分の運動が接触していない部分に伝わっていく。その伝わり方は接触している部分と同様である。棒を取り去ったときは生じた潜在能力によって回転がなされる。このように回転運動が説明されている。これを図示したものが第6図である。この回転運動を説明したパターンは弓矢の衝動過程のパターン(第5図⑤ー⑦）と全く同じものである。また、Praśastapādabhāṣyaに書かれた“回転は潜在能力による”ということはこのNyāya-kandalīの説明により、ろくろから棒が取り去られたときのろくろ自身が回転する運動がいわれているものと考えられる。

第６図　ろくろの回転運動

（１）　棒に回転運動が与えられる。

（２）　棒に直接接触しているろくろの部分

① 棒のヴェーガ ―――― 棒と接触部分との衝動 ―― 接触部分に最初の回転発生

|

接触部分にヴェーガ発生

② 棒のヴェーガ ―――― 棒と接触部分との衝動 ┐

接触部分のヴェーガ ―――――――――――――― 回転運動

|

ヴェーガ増大

（３）　ろくろのその他の部分

①棒に接触している ―― 接触部分と他部分との結合 ― その部分に最初の回転発生

部分のヴェーガ　　(saṃyuktasaṃyoga)

|

その部分にヴェーガ発生

②　　saṃyuktasaṃyoga ┐

ヴェーガ ―――――――――――――― 回転運動

|

ヴェーガ増大

（４）　棒を取り去る（ろくろのすべての部分）

ヴェーガ ―――――――――――――――――― 回転運動

４－２、落下運動

落下運動はPraśastapādabhāṣyaによれば次のように説明されている。[22]

pṛthivyudakayor gurutvavidhārakasaṃyogaprayatnavegābhāve sati gurutvād yad adhogamanaṃ tat patanam / yathā musalaśarīrādiṣūktam /

tatrādyaṃ gurutvāt, dvitīyādīni tu gurutvasaṃskārābhyām /

土性の物質と水性の物質にとっては、重さを阻止させるような結合と意志的努力とヴェーガ（勢い）とが存在しないとき、重さから下へ向かう進行＜が生ずる＞。そ＜の進行＞が落下である。例えば、＜この落下運動は＞杵や身体等において既に述べた通りである。そこで、最初＜の落下運動＞は重さから＜生ずる＞。だが、第２＜瞬間時＞等＜の運動＞は重さと潜在能力との両方から＜生ずる＞。

これによれば、落下運動は重さから生ずる下へ向かう進行とされ、重さを持っている物質は土性の物質および水性の物質であると考えられていた。落下の運動過程についてはNyāyakandalīによれば、次のように注釈されている。(23)

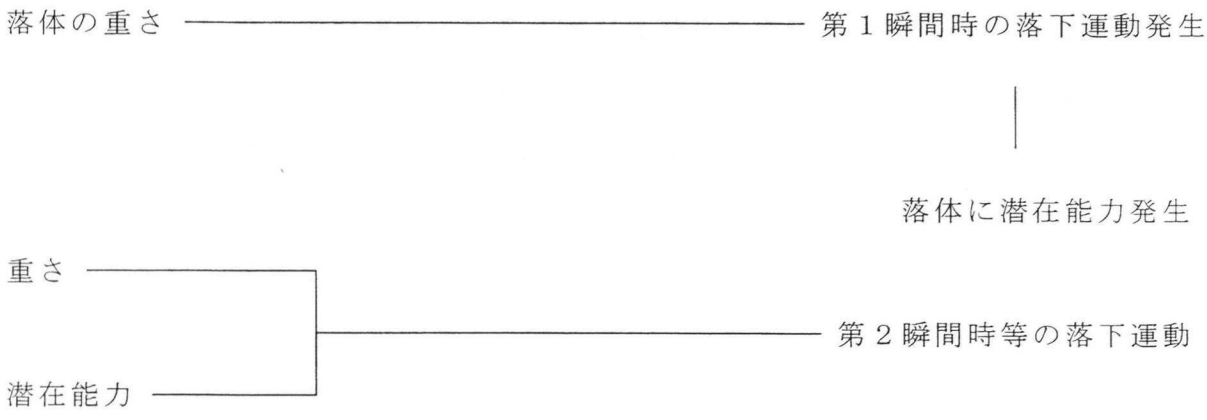
tatrādyaṃ karma gurutvāt, dvitīyādīni tu gurutvasaṃskārābhyām / teṣu musalādiṣv ādyaṃ karma gurutvād bhavati tena karmaṇā saṃskāraḥ kriyate, tadanantaram uttarakarmāṇi gurutvasaṃskārābhyāṃ jāyante, dvayor api pratyekam anyatra sāmarthyāvadhāraṇāt /

‘そこで、最初の’＜落下＞運動は‘重さから＜生ずる＞。だが、第２＜瞬間時＞等＜の運動＞は重さと潜在能力(saṃskāra)との両方から＜生ずる＞。’＜すなわち＞それら杵等において最初の運動は重さから生ずる。その運動によって潜在能力が生ずる。それに続く次々の運動は重さと潜在能力とから生ずる。何故なら、＜重さと潜在能力との＞２つにおいてもまた、それぞれは他の所では＜運動を生じさせる＞能力として確定されているが故に。

これによれば、第１瞬間時の落下運動は重さによって生ずる。この最初の落下により、落体中に潜在能力（ヴェーガ、すなわち勢い）が生ずる。次の瞬間の落下運動は重さと落体に生じた潜在能力とを推進力として生ずる。このようにして、次々に落下していくと考えられていた。何故、潜在能力が付け加えられるのかその理由はNyāya-kandalīによれば、潜在能力は運動を発生させる能力を持っているからとしている。これを図示すると第７図になる。この運動の発生パターンは矢の衝動過程のパターンと同じである。この場合違っている点は物体を最初に落下せしめる推進力、すなわち重さが運動物体と違った物体にあるのではなく物体内部にあることである。そのため、落体はいつも推進力と共に動いているので、いつも衝動状態にある。したがって、落下は第１瞬間時より第２瞬間時の方が運動が激しくなり、それによって生ずる潜在能力の強さもまたより強くなる。それ故、第３瞬間時では第２瞬間時より運動がより激

しくなり、潜在能力の強さもまたより強くなる。このようにして落下運動は時間がたつに従ってより激しく、潜在能力の強さもまたより強くなっていく、と考えられる。

第７図　落下運動



４－３、　水の流出運動

水の流出運動については堤でせき止められていた水が堤の破れ目から流出する仕方が記述されている。それはPraśastapādabhāṣyaによれば次のように記載されている[24]。

samantād rodhaḥsaṃyogenāvayavidravatvaṃ pratibaddham avayavadravatvam apy ekārthasamavetaṃ tenaiva pratibaddham, uttarottarāvayavadravatvāni saṃyuktasaṃyogaiḥ pratibaddhāni / yadā tu mātrayā setubhedaḥ kṛtobhavati, tadā samantāt pratibaddhatvād avayavidravatvasya kāryārambho nāsti / setusamīpasthasyāvayavadravatvasyottareṣām avayavadravatvanāṃ pratibandhakābhāvād vṛttilābhaḥ / tataḥ kramaśaḥ saṃyuktānām evābhisarpaṇam / tataḥ pūrvadravyavināśe sati prabandhenāvasthitair avayavair dīrghaṃ dravyam ārabhyate / tatra ca kāraṇaguṇapūrvakrameṇa dravatvam utpadyate / tatra ca kāraṇānāṃ saṃyuktānāṃ prabandhena gamane yad avayavini karmotpadyate tat syandanākhyam iti /

すべての方向で堤との結合によって＜水の＞全体の流動性が阻まれる。そして＜堤と直接に接触している＞部分の流動性はまた１つのもの（堤）と密接に結びついている。それによって全く＜流動性が＞阻まれる。＜直接に接触している部分

に続く＞次々の部分の流動性は諸々の“＜その部分とそれに＞つながれた部分との結合”（すなわち、堤と直接結びついている部分とそれにつながれた次の部分との結合および次の部分とそれにつながれた部分との結合等の結合）によって阻まれる。だが、わずかばかり堤の破壊がなされるとき、すべての方向で＜流動性が＞阻まれているという特徴から全体にわたる流動性が結果を生ずることはない。堤＜の破れた穴＞に隣接している部分の流動性と＜その部分に続く＞次々の諸々の部分（すなわち、隣接している部分に順次つながれる諸々の部分）の流動性にとっては阻むものが存在しないことから活動が得られる。それ故、＜それに＞順次つながれた諸々の部分だけが＜破れた穴に＞接近する。従って、前の実体（すなわち、堤によって阻まれて堤の形をなしている水）が崩壊しても＜堤の破れた穴と＞連続したつながりによって存在している諸々の部分によって長い実体（すなわち、連続して細長くつながれた形の水）が形成される。そしてその場合、原因の性質（すなわち、連続して細長くつながれていく諸々の部分の流動性）に基づく順序によって＜長い実体の全体に＞流動性が生じる。そこでまた、原因となるつながれた＜諸々の部分＞が連続したつながりによって＜引き続き＞進行するとき、全体に運動が生ずる、そ＜の運動＞が“流れること”（syandana）と呼ばれる＜運動＞である、と＜いう＞。

以上がPraśastapādabhāṣyaにおいて水の流出について記載された個所である。ここでは水の流動性が原因となって水の流れが生ずることが記されている。まず水が堤にせき止められて水の流動性が消失したところから始まり、堤が破れて穴があいたとき、水の流出がどのように生ずるのかその流出過程が書かれている。堤にせき止められたときは、堤に直接接触している部分は堤によってその流動性が阻まれる。次の部分は“＜直接接触している部分とそれに＞つながれた部分との結合”（saṃyukta-saṃyoga）によって堤につながれることからその部分の流動性が阻まれる。次の部分も同じようにして水の流動性が“＜阻まれた部分とそれに＞つながれた部分との結合”（saṃyuktasaṃyoga）によって順次阻まれる。このように、４－１、ろくろの回転で示した“部分と部分とをつなぐ結合”(saṃyuktasaṃyoga)によって全体として流動性が堤によって阻まれるということが記されている。次に堤が破れて穴があいたときは穴に隣接している部分は堤との結合が消え、その流動性は阻むものが無いから活動を開始する。この部分に隣接している次の部分も阻むものがなくなったから流動

性が活動を開始する。このような方法で隣接している部分に順次つながれた部分が流動性の活動を開始し、穴に接近する。これらの部分は今までの流動性を阻止する部分と部分とをつなぐ結合関係がなくなり、今までの堤に阻まれた形の水はなくなり、新たなる穴と隣接している部分とそれにつながれた部分との結合（saṃyukta-saṃyoga）が生じ、堤の破れた穴と連続したつながりによって存在している諸々の部分によって細長くつながれた形の水が形成される。このように生じた細長くつながれた諸々の部分の流動性がその方向に順次作用するから細長くつながれた水全体に流動性が生じる。その流動性によって諸々の部分が連続したつながりによって、すなわち方向を異にすることなく一列をなすことによって引き続き進行するとき、全体に運動が生じる。それを“流れること”（syandana）と呼ぶと記されている。これを図に示すと第８図のようになる。

以上でPraśastapādabhāṣya記載の水の流出過程について説明を終わりにする。ここでは水の流出がdravatva（流動性）によることが記載されている。

以上でPraśastapādabhāṣya第３章運動、第４節、第５節に記載された運動の主なるものを紹介した。これによれば、槍を投げる運動、弓矢の運動、回転運動、落下運動の衝動過程において同じパターンが見られた。すなわち、衝動過程、「推しているもの」と「推されている物体」の結合において、「推しているもの」の推進力が「推されている物体」に徐々に伝わっていくというパターンが見られた。それを図示すると第９図のようになる。次に、これらの運動がどのような原因によって生ずるのか、その発生原因を見ていく。

第８図　水の流出運動

(1)　水の流動性が堤によって阻まれる。

堤 ―――――――― saṃyoga ――― 堤に直接接触している部分の水
流動性阻まれる。

直接接触している部分の水 ―― saṃyuktasaṃyoga ―― その部分に続く部分の水
流動性阻まれる。

その部分に続く部分の水 ―― saṃyuktasaṃyoga ―― 次に続く部分の水
流動性阻まれる。

このようにして全体として水の流動性が阻まれる。

(2)　堤に小さい穴があいたときの水の流出

① 堤に開いた穴 ―――――― saṃyoga ―――――― 穴に隣接している部分の水
阻むものがないから流動性が得られる

穴に隣接している部分の水 ―― saṃyuktasaṃyoga ―― この部分に続く部分の水
阻むものがないから流動性が得られる

この部分に続く部分の水 ―― saṃyuktasaṃyoga ―― 次に続く部分の水
阻むものがないから流動性が得られる

このようにして破れた穴に隣接している部分の水に順次つながれた部分の水は連続して細長くつながれた形の水を形成し、それらの部分は流動性が得られる。

② このようにつながれた部分の水の流動性は細長くつながれた形の水全体に流動性が生ずる。

③ その流動性によって諸々の部分が連続したつながりによって引き続き進行するとき全体に水の流出が生じる。その流出が“流れること”（syandana）と呼ばれる。

第９図　物体の運動に見られた衝動過程のパターン

①「推しているもの」の推進力 —— 衝動 —— 「推されている物体」の最初の運動

|

「推されている物体」の勢い

②「推しているもの」の推進力 —— 衝動 ┐

「推されている物体」の勢い ———————┘ 「推されている物体」の運動

激しさ増す

|

「推されている物体」の勢い　増大

③衝動によって得られた勢い(vega) —— 空中での結合分離 —— 物体の空中での運動

５、　運動の発生原因

運動の発生原因は第１章「運動の共通的な特徴」で既に述べたように、意志的努力、重さ、流動性、勢い（ヴェーガ）、特殊な結合である。ここではPraśastapādabhāṣyaの運動論の第４節、第５節で記述されている運動について、起こる原因は何か、調査した。その結果を次に示す。身体の運動（意識の作用に基づく運動）では心中に起こった物を投げようとか、動かそうとかする意志的努力が身体をそのように動かす原因と考えられている。物体の運動は身体に伴われた物体の動き（意識の作用に基づく運動）とそれ以外の物体の運動とがある。身体に伴われた物体の動き（意識の作用に基づく運動）では、身体の運動と同じく意志的努力が原因である。それ以外の物体の運動では本稿３、４節の例で示したように、勢い、弾力、重さ、流動性、そして特殊な結合が原因となっている。流動性は水が流れるという運動を生ずる原因となるものである。また特殊な結合は衝動（nodana）、衝突（abhighāta）、＜動いている部分とそれに＞つながれた部分との結合（saṃyuktasaṃyoga）である。第５節で記載された息の運動および身体中のマナスの運動は意志的努力が原因となっている。息の運動は呼吸するとか、くしゃみをするとかという息、すなわち、風の動きである。[25]身体中のマナスの運動は対象物を知覚するために感覚器官へ動くマナスの動きである。[26]

Vaiśeṣika学派では、マナスは原子的な微小粒子で身体内にただ１つ存在するものとされ、このマナスが感覚器官に到達したとき、物が知覚できるとされていた。このような息およびマナスの運動では人が覚醒しているときと人が眠っているときの２つの場合について原因が論じられている。人が覚醒しているとき、“願いと嫌悪に伴われた意志的努力”（icchādveṣapūrvakaprayatna）に基づき、アートマンと息の結合、アートマンとマナスの結合から生ずるとされた。また、人が眠っているときは“生命に伴われた意志的努力”（jīvanapūrvakaprayatna)に基づいて生ずるとされた。身体からマナスの脱出すなわち、死、身体へマナスの進入すなわち、誕生におけるマナスの運動はアドリシュタ（adṛṣṭa、 不可見力）すなわち、超能力的な力によって生ずるとされた。[27]また、原因不明なる運動はすべてアドリシュタによって生ずるとされた[28]。このアドリシュタ(adṛṣṭa)は、Praśastapādabhāṣyaではdharma、adharmaの総称としてアートマンのguṇaの１つとしてあげられている。また、世界の創造と還滅とに関与する神の意志によるある種の力でもある。[29]

このようにマナスの運動および体内での風の運動は意志的努力および不可見力によって、運動が発生すると考えられていた。物体の運動は先に示したように、色々な原因によって発生した。これらをまとめると第１０図のようになる。これらの発生原因の内、ヴェーガ（勢い）および特殊な結合について、次節で述べる。

第１０図　運動の発生原因

1.　身体の運動（意識下の運動）：　意志的努力　prayatna

2.　物体の運動

（1）勢い　vega ┐ 潜在能力

（2）弾力　sthitisthāpaka ┘ saṃskāra

（3）重さ　gurutva

（4）流動性　dravatva

（5）意志的努力

（6）特殊な結合　①　衝動　nodana

②　衝突　abhighāta

③　＜動いている部分とそれに＞つながれた部分との結合

saṃyuktasaṃyoga

3.　息の運動　意志的努力

4.　マナスの運動　①　身体中での運動：意志的努力

②　身体から脱出および進入する運動：　不可見力　adṛṣṭa

5.　運動の原因が未知なるもの：　不可見力

６、　vega　および特殊な結合

物体運動が発生する原因となるvegaと特殊な結合、nodanaおよびabhighātaについて、どのようなものであったか調査した。特殊な結合、saṃyuktasaṃyogaは本稿４、ろくろの運動、水の流動性で既に考察したように、部分と部分とをつなぐ結合であって、運動中では動いている部分とまだ動いていない部分とをつなぐ結合で、動いている部分の運動を動いていない部分に伝える役目をする結合である。この結合はnodanaと全く同じ性質を持っているので、ここでは省いた。まず、特殊な結合について述べる。

６－１、　衝動（nodana）

特殊な結合の内、衝動は注釈書Nyāyakandalīによれば、次のように記されている

(30)。

atha kiṃ nodanam ata āha----tatra nodanaṃ gurutvadravatvaprayatna-vegān samastavyastān apekṣamāṇo yaḥ saṃyogaviśeṣaḥ ／ kathaṃ saṃyogaviśeṣo nodanam ucyate, tatrāha---- nodanam avibhāgahetoḥ karmaṇaḥ kāraṇam iti ／ nodyanodakayoḥ parasparavibhāgaṃ na karoti yat karma tasya kāraṇaṃ nodanam ／

kim uktam syāt? anena saṃyogena saha nodako nodyaṃ nodayati nānyathā, tenāyaṃ nodanam ucyate ／

＜問＞その場合、衝動とは何か？

＜答＞ここで著者（Praśastapāda）は‘その内、衝動は重さ、流動性、意志的努力およびヴェーガ（勢い）のすべてあるいは個々のものに基づくところの特殊な結合である。’とのべている。

＜問＞何故、＜この＞特殊な結合が衝動といわれるのか？

＜答＞そこで著者は‘衝動とは＜結合している２つのものが＞分離しないということを原因として運動＜が生ずるとき、その運動＞の原因＜となる結合＞である。’と述べている。＜すなわち＞推されるべきものと推進者との相互の分離を起こさない運動、その＜運動の＞原因が衝動である。

＜問＞どういうことなのか？

＜答＞この結合と一緒に推進者は推されるべきものを駆らしめる＜ということで＞、それ以外のことではない。従って、こ＜の特殊な結合＞は衝動といわれる。

また、弓矢の運動において，「矢の空中での運動は衝動で得られた唯１つのヴェーガによって生ずる。」という個所で、Nyāyakandalīでは次のように記されている。(31)

nodanābhighātayor anyatarāpekṣaṃ karma saṃskāramārabhate na karma mātram, vegābhāvāt

衝動と衝突とのいずれかに依存する運動は潜在能力を形成する。単なる運動だけは＜潜在能力を形成＞しない。何故なら、ヴェーガ（勢い）が存在しないが故に。

これから分かるように、衝動は「推しているもの」と「推されているもの」とが接触しているときに生ずる。この特殊な結合は「推しているもの」が「推されているもの」を運動せしめるという結合で、この結合を媒介として「推しているもの」から「推されているもの」へ推進力が伝えられるのである。すなわち、「推されているも

の」の運動は衝動中、ヴェーガを生じ、生じたヴェーガは「推されているもの」の運動を更に激しくする。衝動中ではこのような状態で、「推しているもの」の運動が「推されているもの」へ徐々に推進力を伝え、「推されているもの」の運動は徐々に激しくなるのである。この推している物の推進力はNyāyakandalīでは重さ、流動性、ヴェーガ（勢い）および身体に起こった意志的努力であると記されているが、Praśastapādabhāṣyaおよびその注釈書には流動性が衝動の原因になっていることはいっさい書かれていない。しかし、Vaiśeṣikasūtraの１３世紀頃の注釈書Anonymous Commentaryのsūtra 5-2-3（dravatvāt syandanam //“流れることは流動性から生ずる”）の注釈において、流動性から生ずる流れについて、重さによって生ずる落下と全く同じパターンを使った説が紹介されている。その個所は Anonymous Commentaryによれば、次のように書かれている。[32]

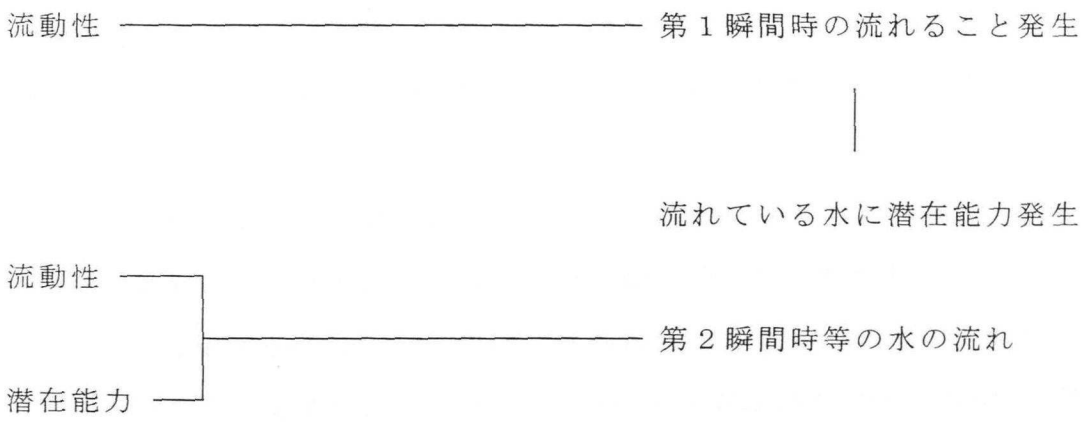
uccadeśān nimnadeśābhisarpaṇaṃ syandanam / tad dravatvād utpadyate / prathamaṃ syandanaṃ dravatvāt / dvitīyādisyandanāni dravatvasaṃskārābhyām / yathā prathamaṃ patanaṃ gurutvāt, dvitīyādipatanāni gurutvasaṃskārābhyām iti bhāṣyakārāḥ /

高い場所から低い場所へ近づくことが流れることである。それは流動性から生ずる。最初の流れることは流動性から＜生ずる＞。第２等の諸々の流れることは流動性と潜在能力(saṃskāra)とから＜生ずる＞。例えば、最初の落下は重さから生ずる。第２等諸々の落下は重さと潜在能力とから＜生ずる＞。と諸々の注釈者が＜述べている＞。

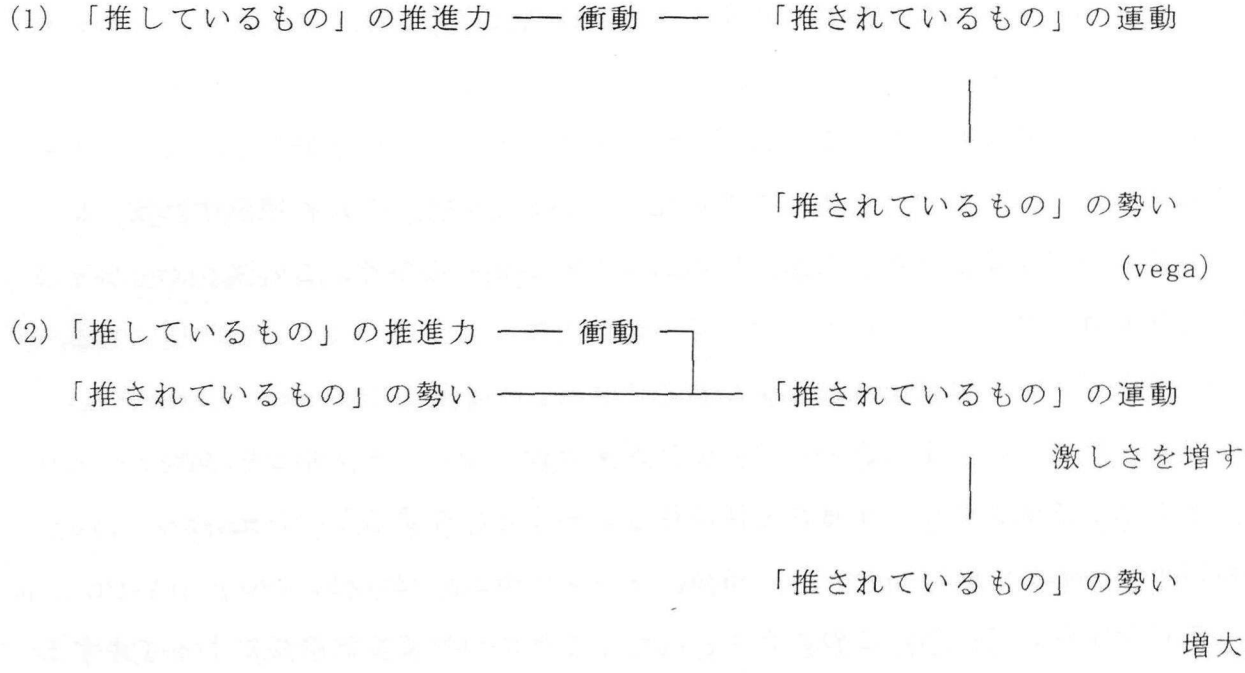
これによれば、最初の流れることは流動性から生ずる。第２瞬間時等の流れることは流動性と流れることによって生じた潜在能力とから生ずる。これを図示すれば、第１１図のようになる。水の流れは内に流動性を持っているので、この流れている水はいつも流動性と共に動いているので、落下運動と同じようにいつも衝動状態にある。従って発生パターンは落下運動と全く同じである。しかし、Anonymous Commentaryでは、さらに続けて、“潜在能力については認識手段がないから、第２等の諸々の流れることおよび落下については重さと流動性とからまさに生ずる”（saṃskāre pramāṇābhāvāt dvitīyādisyandanapatanānāṃ gurutvadravatvābhyām evopapattiḥ)とこの説が否定されている。このように、流れることについては流動性によって生ずるということがVaiśeṣika学派の一般的な考え方であったようである。

以上より、衝動は「推しているもの」と「推されているもの」が接触しているときに生ずる結合であって、この結合を媒介として「推しているもの」の推進力が「推されているもの」へ伝えられるという結合である。この「推しているもの」の推進力は重さ、流動性、ヴェーガ、意志的努力である。衝動を媒介として「推しているもの」から「推されているもの」へ推進力の伝達は第１２図のようになる。

第１１図　水の流れ



第１２図　衝動（nodana）



6－2　衝突（abhighāta）

特殊な結合の内、衝突（abhighāta）はNyāyakandalīによれば、次のように記されている。[33]

vegāpekṣo yaḥ saṃyoga ekasya vibhāgakṛtaḥ karmaṇaḥ kāraṇaṃ so 'bhighātaḥ, abhighātyābhighātakayoḥ parasparavibhāgo yataḥ karmaṇo jāyate tasyaivaikasya hetur yaḥ saṃyogaviśeṣaḥ so'bhighātaḥ ／

‘ヴェーガ（勢い）に依存している＜特殊な＞結合で、’＜２つのものの＞分離を作り出す‘１つの運動＜が生ずるとき、その運動＞の原因となる結合、それが衝突である’＜すなわち、＞衝突されるものと衝突するものとの相互の分離が＜１つの＞運動から生ずる場合、その１つ＜の運動＞だけを引き起こす特殊な結合、それが衝突である。

これによれば、衝突（abhighāta）という結合は勢い（vega）に基づいて「衝突するもの」と「衝突されるもの」とを一瞬結合させ、この結合によって生じた運動によって両者をすぐに分離させてしまうような結合である。すなわち、勢いに基づいて「衝突するもの」が「衝突されるもの」にぶつかり合ったときに生ずる結合である。この衝突のメカニズムは本稿３－２、「杵と臼との衝突運動」で既に述べたように、この特殊な結合を媒介として、衝突前の推進力（vega）を衝突後の物体へ伝える結合である。しかも、物体の衝突後の推進力もまたvegaである。すなわち、衝突前に持っていた「衝突するもの」のvega(勢い)が衝突後、物体に運動を生じさせる。そしてその運動に伴われて物体に勢いが生ずるということである（第３図参照）。それ以降の物体の運動はこの勢いによって生ずる。Vyomavatīによれば、この個所の注釈において衝突後の物体の運動について次のように書かれている。[34]

nanv ekasyeti padaṃ vyartham, abhighātād ubhayatrāpi karmopalabdheḥ ／ satyam ／ tathāpy ekasyeti ādyakarmajñāpanārtham uttrottarāṇi vegād eva bhavantīti ／

‘１つの’という言葉は無用なのか？　運動の取得について、衝突から２つの場合（１つの場合と多数の場合）で＜考えられる＞。＜それは＞その通りだが、しかし‘１つの’ということは最初の運動を暗示するために＜ある＞。＜そして＞次から次への＜運動＞はまさしくヴェーガ（勢い）から生ずるのである。

これによれば、衝突後の最初の、すなわち第１瞬間時の運動は衝突によって生ずる、

すなわち第１瞬間時の運動は衝突を介して「衝突するもの」が衝突前に持っていた勢い（ヴェーガ、vega）によって生ずる。。第２瞬間時以降の運動は第１瞬間時の運動に伴われて生じた勢いによって生ずるということである。衝突のメカニズムは第１３図のように書ける。

第１３図　衝突

衝突前の推進力（vega）――――― 衝突 ――――――― 衝突後の最初の運動

|

衝突後の推進力（vega）

衝突後に得られたvega ――――――――――――――――― 衝突後の次々の運動

６－３　勢い（vega）

vegaはPraśastapādabhāṣyaのguṇa（性質）の章saṃskāra（潜在能力）の項で、次のように記されている。[35]

saṃskāras trividhaḥ ---- vego bhāvanā sthitisthāpakaś ca ／ tatra vego mūrtimatsu pañcasu dravyeṣu nimittaviśeṣāpekṣāt karmaṇo jāyate niyatadikkriyāprabandhahetuḥ sparśavaddravyasaṃyogaviśeṣavirodhī kvacit kāraṇaguṇapūrvakrameṇotpadyate ／

サンスカーラ（潜在能力）は３種である。すなわち、vega（勢い）、bhāvanā（潜在印象）、sthitisthāpaka（弾力）とである。その内、ヴェーガは有形な５つの実体（地、水、火、風、マナス）において、＜衝動、衝突等の＞特殊な動力因に依存した運動から生ずる。そして一定方向へ運動を継続させるための原因である。可触性を有する実体との特殊な結合によってうち消される。ある場合には、＜実体の全体を構成している＞原因＜である部分＞の性質＜としてのヴェーガ＞に基づく一連のつながりによって、＜全体のヴェーガは＞生ずる。（すなわち、実体の一部分に生じたヴェーガが全体に及ぶ）。

これによれば、重さ、流動性によらない物体の運動はヴェーガ（勢い）を推進力として動く。このヴェーガ（勢い）は一定方向へ運動を継続させるために必要なある能力である。そしてヴェーガは特殊な結合（衝動、衝突）に基づいた運動から生じ、単独の運動からは生じない。そして可触性を有する実体との結合によってヴェーガは妨げられる。空中での矢の一定方向へ進む運動においては３－４で既に示したように矢の重さが障害となり、潜在能力、すなわちヴェーガ（勢い）が徐々に減少してゆき、最後には落下すると記されている。その個所はNyāyakandalīによれば、次のように記載されている。(36)

vibhāgān nivṛtte nodane karmāṇi uttarāṇi saṃskārād eva vegākhyād bhavanti yāvat patanam iṣor etasya ca pāto gurutvapratibandhaka-saṃskārakṣayāt ／

＜矢が弦から＞分離することから衝動が消滅したとき’、次々に＜生ずる＞‘諸々の運動は’ヴェーガと呼ばれる‘潜在能力だけから’落下＜が起こる＞まで生ずる。そしてこの矢にとって、重さという障害によって潜在能力が失われることから落下が＜生ずる＞。

ここでは衝動が消滅した後、矢が空中での運動は衝動で得られたヴェーガ（勢い）によってのみ次から次へ生じ、重さが障害となり、ヴェーガは徐々に減少してゆき、最後にはヴェーガが０となり、落下すると記されている。このヴェーガの減少過程はNyāyakandalīによれば、弓矢の運動において次のように記されている。(37)

nodanābhighātayor anyatarāpekṣaṃ karma saṃskāram ārabhate na karmamātram, vegābhāvāt ／ na cāntarāle nodanaṃ nāpy abhighātaḥ, tasmād eka eva śarajyāsaṃyogāpekṣeṇa śarakarmaṇā kṛto viśiṣṭaḥ saṃskāro yāvat patanam anuvartate ／ yathā yathā cāsya kārya-karaṇāc chaktiḥ kṣīyate, tathā tathā kāryaṃ mandataratamādibheda-bhinnam upajāyate ／ yathā taros taruṇasya phalaṃ prakṛṣyate ’pakṛṣyate ca jīrṇasya ／

衝動と衝突とのいずれかに依存する運動は潜在能力を形成する。単なる運動だけは＜潜在能力を形成＞しない。何故なら、勢い（vega）がないが故に。そして途中の空間では、衝動もないし、また衝突もない。それ故、矢と弦との結合に依存する矢の運動によって生じた特別な潜在能力唯１つが落下するまで従う。そして

これ（潜在能力）が＜運動という＞結果を生ずることから能力が崩壊すればするほど、その能力に従って結果はゆっくり、よりゆっくり、最もゆっくり等の種類に分けられた形で生ずる。例えば、若い木にとっては実が優り、そして古い木にとっては実が劣るが如くである。

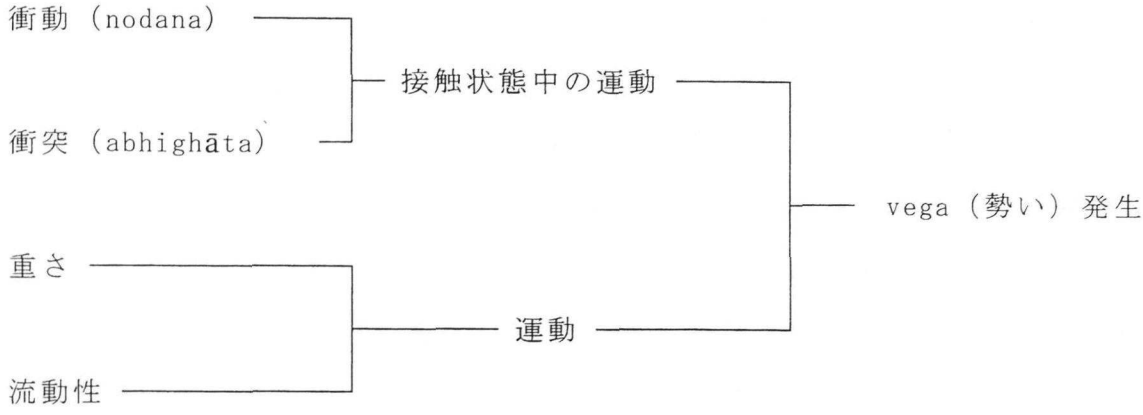
これによれば、ヴェーガは特殊な結合（衝動、衝突）に基づいた運動から生ずる。単なる運動からは生じない。ヴェーガが生ずるには運動の勢い（衝動や衝突などによる運動の激しさ）が必要である。衝動も衝突もない場合、運動は以前に衝動や衝突等で生じたヴェーガによって継続する。その継続の仕方はこの注釈によれば、“若い木には実が多くなるが、古い木には実が少なくなると同じようにヴェーガの強さが弱くなればなるほど、その能力に従って運動はよりゆっくりとなる”としている。このことより、ヴェーガは周囲の抵抗あるいは重さ等に抗して運動している場合、徐々に減少して行くことがわかる。以上のことを表にすると第１４図のようになる。このようにヴェーガは特殊な結合に基づいた運動から生ずる運動の勢いであって、空中での運動では矢が落ちないように一定方向を保つために横方向の運動の原因となっている。ヴェーガは運動の勢いなので重さが抵抗力として作用しているときは横方向の運動の勢いが徐々に減少していくだけである。そしてその運動の勢いが０になったとき、落下が生ずるのである。ひとたび落下したときは落下運動は常に衝動過程を生じているので、その過程の中でヴェーガ、すなわち運動の勢いは生じる。すなわちヴェーガはB. N. SealやU. Mishraが述べるように２種類ある[38]というのではなく、あくまでもヴェーガは１種類で、特殊な結合に基づいた運動から生じた運動を継続させるためのある種の能力、すなわち運動の勢いである。また、ヴェーガと認識部門の潜在的能力、bhāvanā(潜在印象）とにおいて、発生パターンが類似している。これは次章で示す。

第１４図　ヴェーガ（勢い）

(1) 重さ、流動性によらない物体の運動を継続させるに必要な推進力。

(2) 特殊な原因に基づいた激しい運動から５つの実体（土、水、火、風、マナス）に発生。

(3) 発生図



(4) ヴェーガによる運動の継続

物体中のヴェーガ ―――― 空間中の結合と分離 ―― 空中での物体の運動

(5) 周囲の抵抗あるいは重さとに抗したとき、ヴェーガは徐々に減少する。

６－４、Nyāya学派における瞬間的なサンスカーラ

Nyāya学派では音の発生に対してサンスカーラはある種の動因とされた。音の強弱があることに対して強さの異なったサンスカーラが多数あると考えられた。音は瞬間的なものと考えられていたので、サンスカーラもまた瞬間的と考えられていた。以下においてNyāya学派においてサンスカーラが何故、瞬間的であったか、調査した結果を記す。[39]

鐘を鳴らしたとき鐘の音が余韻を残すことについて、Nyāya学派では鐘の振動によって強さの違った音が沢山生ずるために余韻が残ると考えられていた。鐘の振動過程についてはNyāya学派では次のように考えられていた。

手によって鐘が打たれるとき、鐘は振動し、接触している風を動かす。この風の活動により、鐘はさらに振動し、この鐘の振動によりさらに他の風を振動させる。その風の振動によってさらに鐘が振動するというように鐘の振動過程が述べられている。この振動過程において、鐘の振動によって音が発せられる。そして音の強弱の原因はこの振動過程において生ずる鐘と風の衝突の際に生ずるサンスカーラであると考えら

れていた。次にNyāya学派においてこの衝突過程とサンスカーラとの関わり合いを見ていく。

Nyāyavārttikaによれば、[40]

tac ca kāraṇaṃ saṃskāra iti / kutas tadutpattiḥ? pāṇisaṃśleṣam apekṣamāṇāt karmaṇaḥ / pāṇighaṇṭāsaṃśleṣāt pāṇigatavegāpekṣād ghaṇṭāyāṃ karma, tatkarma pāṇyabhighātam apekṣamāṇaṃ vibhāga-samakālaṃsaṃskāraṃ karoti / sā calantyādhyātmikaṃ vāyum upa-gṛhṇāti / sā ca vāyunā'bhihatā punaḥ karma karoti, tataś ca karmaṇā saṃskāraḥ, saṃskāreṇa punaḥ karma, punar vāyūpagraha ity evamādinyāyena saṃskāra utpadyata iti / tatrāntyasyātimāndyād ghaṇṭāyāṃ mahābhūtasaṃkṣobhaṇaśakter abhāvas tato vāyūpagrahocchedaḥ tataḥ saṃskārakṣaya iti /

そしてその（音が強くあるいは弱くなることの）原因はサンスカーラ（潜在能力）であるという。

＜問＞　何からそれが発生するのか？

＜答＞　手との接触に基づく運動＜を始まりとする諸々の運動＞から、すなわち手に存するヴェーガに基づく手と鐘との接触から鐘に運動が＜生ずる＞。その運動は手との衝突に基づくサンスカーラを＜鐘と手との＞分離と同時に＜鐘に＞生ずる。それ（鐘）は振動しつつ、内なる風(ādhyātmikaṃ vāyum)(すなわち、鐘とその部分とに結合している諸々の風の原子）を獲得する。（すなわち、風に運動を生じさせる）。＜その運動から風にヴェーガが生じる＞。それ（鐘）は風によって打たれ、＜風に存するヴェーガに基づき＞＜鐘は＞さらに運動を生ずる。それ故に、運動によって＜鐘に＞サンスカーラが＜生じる＞。サンスカーラによって＜鐘に＞更なる運動が＜生ずる＞。更なる風の獲得が＜生ずる＞。以上のような原理によって、サンスカーラが生ずるという。その場合、＜サンスカーラの＞最後が非常に弱いことから、鐘に粗大元素との激しい衝撃の力（śakti)が存在しない。それ故に、風の獲得が断ち切られる。従って、サンスカーラが失われるという。

ここでは音の強弱の原因となるサンスカーラの発生が鐘の振動の仕方と共に次のように述べられている。手で鐘を打つとき、手に存するヴェーガに基づいて手は鐘と衝

突する。それによって鐘は振動する。その振動によって鐘にヴェーガが生ずる。鐘は振動しつつ内なる風、すなわち鐘に結びついている諸々の風の原子に衝撃を与え、風の原子に運動を生じさせる。風の原子はその運動によってヴェーガを生ずる。この風の原子が全体となって大きなヴェーガを生じ、鐘に衝突する。その衝突によって鐘は風のヴェーガに基づき、振動する。その運動によって鐘にヴェーガが生じる。このヴェーガに基づいて鐘はさらに振動する。この運動によって新しい風に衝撃を与える。このような方法によってヴェーガ、すなわちサンスカーラが生ずる。そしてサンスカーラは次第に弱くなっていくと記されている。

さらにNyāyavārttikatātparyaṭīkaに於ける同じ個所の注釈では、音の発生過程が更に詳しく記されている。要約すれば、次のようになる。音は虚空中で鐘の振動によって生ずる。また、衝突過程に於ける鐘の振動は衝突前の手や風のヴェーガに基づいて衝突直後に生ずる。そしてこの鐘の振動によって生じたサンスカーラからさらに振動が生ずる。この鐘に生じたサンスカーラに基づいて次の風との衝突がある。このように衝突後、鐘に瞬間的な振動が２度起こされる。この２度の鐘の振動によって虚空中で音が発生する。[41]このことから音の強さの原因となるサンスカーラはこの鐘の振動過程で鐘に生じたサンスカーラ全部であることがわかる。これらのサンスカーラの強さは衝突をたびたび行うことによって、次第に弱くなっていく。他方、風の運動は鐘の瞬間的な振動を持続させるための補助的な手段であり、音の伝播の直接的な媒介物ではない。このような鐘と風の振動過程において衝突が手と鐘、鐘と風、風と鐘というようにたびたび生じている。そして衝突後に生ずるヴェーガは「衝突される物体」に生じている。すなわち、手で鐘を打つとき、手に存するヴェーガに基づく衝突から鐘は振動する。その振動から鐘にヴェーガが生ずる。このヴェーガに基づいて鐘は風に衝突する。この衝突によって風は活動する。この活動から風にヴェーガが生ずる。この風が鐘と衝突して、鐘が振動し、鐘にヴェーガが生ずる。このように衝突が次々に行われることによってヴェーガは異なった物体に次々に生じ、それに基づいて次の衝突が行われる。このような過程で、異なった物体に次々に生ずる運動は瞬間的であり、衝突も次々に行われる。従って、ヴェーガもまた瞬間的と考えざるを得ない。このようにNyāya学派のヴェーガは瞬間的で、異なった物体に運動を生じさせる能力を持っている。また、ヴェーガは音が音を生ずるときに最初の音を発生させるある種の動力となっている。音の強さはヴェーガの強さに対応して決まる。Nyāya学派では鐘

の音において、いろいろな強さの音が沢山あるためにはヴェーガが瞬間的であるため、音の強さに対応して強さの異なるヴェーガが沢山存在していると考えられている。このヴェーガが沢山である理由はNyāyavārttikatātparyaṭīka2-2-38に次の如く記されている。[42]

anekaḥ saṃskāra iti tattvaṃ śabdabhedāt iti / ekasya hi saṃskārasya dharmabhedakalpanāyāṃ kalpanāgauravaprasaṅgaḥ saṃskāras tāvad eko dharmī dharmabhedāś ceti / tad iha dharmabhedasthāne 'stu saṃskārabhedaḥ kṛtam atraikena dharminā / na ca saṃskāra-bhedeṣu dharmabhedāḥ kalpanīyāḥ saṃskārabhedamātrād eva kāraṇāt kāryabhedopapattau tadgatadharmabhedakalpanāvaiyarthyād iti bhāvaḥ /

'沢山のサンスカーラが存在するということが真実である。何故なら、音の違いの故に。'と<Nyāyavārttikaはいう>。実に一つのサンスカーラに属性の違い（強さの度合い）を想定するとき、想定が多すぎるということになってしまう。すなわち、サンスカーラは一つのダルミン（属性を有している主体）であるのに、属性の諸々の違いが存在するということになる。だから、ここでは属性の違いの代わりに、サンスカーラの違いがあるべきである。この場合には一つのダルミンで十分である。（すなわち、想定が多すぎるという過失に陥らない）、そしてサンスカーラの諸々の違いがあるとき、属性の諸々の違いが想定されるべきでない。何故なら、サンスカーラの違いだけを原因として結果の違いが生ずるとき、その中にある属性の違いを想定することは無益であるが故にという趣旨である。

ここで書かれていることは次の通りである。

Nyāya学派では音の強弱の原因となるものは鐘の瞬間的な振動の激しさ、すなわちその振動を生じさせるためのサンスカーラの強さである。音が強く、あるいは弱く聞こえるため、それに対応するサンスカーラにも強い、弱いが存在する。従って、サンスカーラが多数あることが真実であると考えられていた。音の違いの原因となるサンスカーラがもし一つであるとすると、音の違いを示すためにサンスカーラはその強さを表す強い、弱いなどの度合いが属性の違いとして想定されねばならない。その場合、想定することが多くなってしまう。すなわち、サンスカーラという属性の主体となるもの（すなわち、属性によって限定される主体）が一つであるのに限定する属性の違いが多く考えられねばならなくなってしまう。これなら、属性の違いの代わりに、強

いサンスカーラ、弱いサンスカーラ、より弱いサンスカーラなどサンスカーラの違いを考えてしまった方がよい。そうすれば、サンスカーラという一つの主体だけを考えればよいことになる。従って、サンスカーラの違いを考えれば、その中に属性の違いによる多くの想定はいらない。それ故強さの異なった多くのサンスカーラが音の強弱の原因として必要であるということである。

以上のことより、サンスカーラは多数であることの説明がなされた。その説明の仕方は論理学的な方法で、音の強弱が多数あることに対して強さの異なったサンスカーラが多数あることの説明がなされたに過ぎない。サンスカーラは今まで見てきたように運動の潜在能力、すなわち運動の勢いまたは激しさを表し、瞬間的な運動を生ずるためのある能力である。また、音の発生のある種の動因ともなっている。このサンスカーラが音の場合、音の強さに対応して多数存在することは今、見たとおりである。運動についてサンスカーラがきちっとした形で論じられている個所は今まで調査したNyāya学派の書物にはなかった。しかし、Nyāyavārttika2-2-38 およびその注釈書、Nyāyavārttikatātparyaṭīka2-2-38 で矢が空中を飛行するとき、サンスカーラが一つなら、矢は空中を全く進まず、すぐに落下してしまうことが述べられている。[43]ここには矢が空中を飛行するためには多数の瞬間的なサンスカーラが必要とされるというNyāya 学派の考え方が示唆されている。しかし、サンスカーラが瞬間的であるのはこのような鐘の音のように、たびたびの衝突によって生ずる場合であって、空中での矢の運動においては瞬間的なサンスカーラは成り立たない。何故なら、サンスカーラは衝動や衝突など特殊な結合によって生じた運動から生じ、空中での運動のように単なる運動からは生じないからである。しかも数量的な取り扱いは全然されていない。また、このサンスカーラは時間との関係が一切取り扱われていない。従って、このサンスカーラは速さという形で捉えられたものではないことは明らかである。それ故、このサンスカーラはB. N. Seal、Karl H. PotterやU. Mishraなどが述べている[44]ような、運動の加速度の説明をよりしやすくするという考えのものではないことは明らかである。

7、 結論

以上のことから継続的な運動について、次のようなことが結論として言える。

（1） 身体の運動（例：手に伴われた物体の運動）

身体およびそれに伴われた物体の運動は次の順序で生ずる。

①アートマンに“物体を動かす”という欲求がわく。

②それにふさわしい意志的努力が生ずる。

③この意志的努力に基づいてアートマンと手との結合が生ずる。

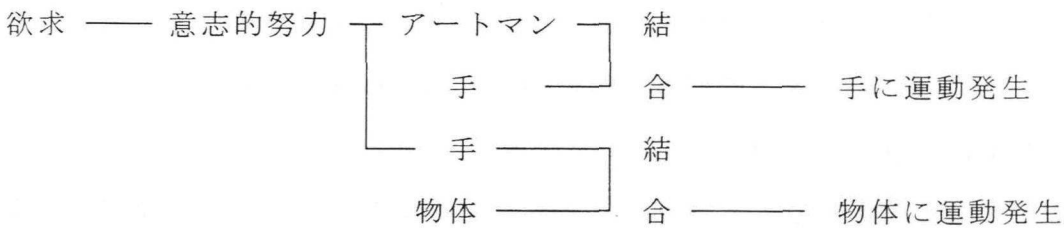
④手に運動生ずる。

⑤意志的努力に基づいて手と物体との結合が生ずる。

⑥物体に運動生ずる。

これを図示すると第１５図のようになる。

第１５図　身体の運動



（２）　物体の運動

今まで見てきたように、Praśastapādabhāṣya第３章第４節では物体の運動は意志的努力による手の運動からその運動が生ずるまでの運動過程が記されており、第５節では意志的努力以外を原因として生じた運動が記載されている。これらの運動過程において、落下運動と川の流れは内に持っている重さと流動性を原因として生ずる。それ以外の物体の運動は特殊な結合（衝動と衝突）を媒介として同じパターンで説明されている。すなわち、「推しているもの」と「推されている物体」との間に生じた衝動を介して「推しているもの」の推進力を原因として物体に運動が生ずる。または「衝突する物体」と「衝突されるもの」との間に生じた衝突を介して「衝突する物体」のヴェーガを原因として衝突する同一物体に跳ね返りの運動が生ずる。その運動の発生の仕方は次の順序で生ずる。

（ｉ）　特殊な結合：

(1) 衝動

① 衝動は「推しているもの」と「推されている物体」との間に生じた結合で、この結合を介して、運動の推進力が「推しているもの」から物体へ徐々に伝えられる、このような役目をする結合である。

② 衝動を介して、「推しているもの」の推進力を原因として物体に最初の運動が生ずる。

③ この最初の運動から物体中にヴェーガ（vega、勢い）が生ずる。

④ さらに衝動中において、「推しているもの」が物体を推し続けるため、物体は生じたヴェーガから運動を生じ、その運動によってヴェーガはさらに増す。このように衝動中においては「推しているもの」の運動が物体に伝わり、物体の運動は益々激しくなり、ヴェーガもまた増してくる。ついに、物体は衝動から離脱する。

(2) 衝突

① 衝突は「衝突するもの」のヴェーガ（勢い）に基づいて「衝突するもの」と「衝突されるもの」とを一瞬結合させ、この結合によって生じた運動によって両者をすぐに分離させてしまうような結合で、衝突前の推進力（ヴェーガ）を衝突後の物体へ伝える結合である。

例えば、杵が臼に衝突して、杵がはね返る運動では、衝突直前の杵のヴェーガ（勢い）を原因として、衝突後、杵に跳ね返りの運動が生ずる。

② 衝突を介して、「衝突するもの」（杵）の衝突直前のヴェーガを原因として衝突後の物体（杵）に最初の跳ね返りの運動が生ずる。

③ この最初の運動から物体中にヴェーガが生ずる。

(ii) 特殊な結合から離れた後の物体の運動

物体は結合中に得られたヴェーガ（勢い）に基づいて、ヴェーガが無くなるまで運動を続ける。

これらの過程を図に示すと第１６図のようになる。

第１６図　物体の運動

①　特殊な結合

推すものの推進力 ―― 推すもの ― 衝
推される物体 ― 動 ―― 物体に最初の運動発生
|
物体にヴェーガ発生

衝突するもの ― 衝
衝突する物体のヴェーガ ―― 衝突する物体 ― 突 ―― 物体に最初の跳ね返り運動発生
|
物体にヴェーガ発生

②　衝動中に於ける物体の運動

推すものの推進力 ―― 推すもの ― 衝
推される物体 ― 動
物体中のヴェーガ ―― 物体の運動激しさ増す
|
物体のヴェーガ（勢い）増大

③　空中での運動

物体中のヴェーガ（勢い） ― 空間との結合分離 ―― 特殊な結合から離れた物体の運動
周囲の抵抗
重さ
物体中のヴェーガ減少

（３）ヴェーガ（運動の勢い）

ヴェーガは特殊な結合に基づいた運動から生ずる運動の勢いであって、単なる運動からは生じない。このヴェーガは瞬間的な運動を一定方向へ継続させるために必要なある種の能力である。空中での運動では矢が落ちないように一定方向を保つために横方向の運動の原因となっている。このとき、重さが障害となる。そのため、矢の横方向の運動の勢い、すなわちヴェーガが徐々に減少していき、０になったとき、落下が生ずる。ひとたび矢に落下運動が生じたとき、矢は重さという推進力を常に内に持っているため、矢は常に衝動過程を生じている。すなわち、最初の瞬間では矢は重さのため落下する。この落下によって矢はヴェーガ（運動の勢い）を生ずる。第２瞬間時以降では矢は常に重さという推進力に駆り立てられているから重さとヴェーガの両方から落下運動が生ずる。そのため、その過程の中、すなわち落下中ではヴェーガ、すなわち運動の勢いは増してゆき、落下は次第に速くなっていくと考えられる。このようにヴェーガ（運動の勢い）は特殊な結合、すなわち衝動や衝突等において生じ、運動を継続させるためのある種の能力、運動の勢いである。

（４）Vaiśeṣika学派のvega理論とBuridanのimpetus理論との比較

ヴェーガは重さなどの自然力ににによらない物体の運動を継続させるに必要なある種の能力（運動の勢い）で、物体の勢い、すなわち速さに関係している。物体が周囲の抵抗あるいは重さに抗して運動を続けるとき、ヴェーガは徐々に消耗していく。

Buridanのインペトスはヴェーガと同様で、自然力によらない物体の運動を継続させるに必要なもので、速さに比例する。周囲の抵抗あるいは自然力に抗して運動を続けるとき、インペトスは徐々に消耗していく。[45]このようにヴェーガとインペトスは現象的な側面で非常に似通っているが、本質的に異なっている。その違いについて論ずる。

両者において、発生の仕方は全く違っていた。ヴェーガは「推しているもの」と「推されている物体」との間にある特殊な結合を媒介として、「推されている物体」に生じた運動から発生するある種の能力、勢いである。だが、インペトスは「推しているもの」によって「推されている物体」に直接込められた駆動力である。また、インドと西洋では運動の捉え方が非常に違っていた。インドでは、運動はすべて瞬間的と考えた。ヴェーガはこの瞬間的な運動を次々に引き起こすある種の能力であった。しかし、Buridanの場合、インペトスはアリストテレスの運動論、“物は何か推してい

るものがなければ動かない”という考え方の延長上にある。そのため、手から物体が離れたとき、物体を推すため内在力としてインペトスが考えられている。このようにヴェーガは瞬間運動を次々に引き起こすための力として考えられた。このようにヴェーガとインペトスは発生パターンに関して発想上の違いがある。

以上見てきたように、今までの研究者たちは現象的な側面のみに注目して、ヴェーガとインペトスとが類似しているという点を強調してきた。だがここでは、最終的にヴェーガが西欧のインペトスと本質的に異なっていることが結論づけられる。

〔引用文献および注〕

(1) B. Faddegon : The Vaiçeṣika-System, (2nd ed.) Liechtenstein, 1969, pp. 221-236.

(2) Muni Śrī Jambuvijayaji : Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the Commentary of Cndrānanda, Baroda, 1961, pp.37-39.

Candrānandaによる注釈５－１－１

svāśrayasaṃyogāpeksitvāt prayatnasya kriyārambhe ātmahastasaṃyogaḥ karmaṇaḥ kāraṇam ／ sāpekṣakāraṇatvāt saṃyogasya prayatno'pi kāraṇam ／ato dvābhyāṃ haste karma ／

運動発生において、意志的努力が自らの基体（アートマン）の結合に依存するという特性から、アートマンと手との結合は運動の原因である。＜運動発生において＞結合が依存すべき原因を伴うという特性から、意志的努力もまた原因である。それ故、両者によって手に運動が生ずる。

５－１－２

tatheti saṅkhyāmātrātideśaḥ, tena hastamusalasaṃyogo musalakarmaṇaḥ kāraṇaṃ pūrvādhikṛtaś ca prayatnaḥ na tu ātmahastasaṃyogo 'samavāyikāraṇaṃ musalakarmaṇi, ātmasaṃyuktahastasaṃyogād eva tatsiddheḥ ／

同様にということは数だけを移すことである。それによって手と杵との結合は杵の運動の原因である。そして先行して規定された＜原因＞は意志的努力である。しかし、アートマンと手との結合は杵の運動においては、非内属因ではない。何故なら、アートマンと結びついた手と＜杵と＞の結合から、まさにそれ（杵の運動）が成就されるが故に。

５－１－３

vegavaddravyasaṃyogo' bhighātaḥ ulūkhalābhighātād utpanne musalasyotpatanakarmaṇi akāraṇaṃ hastamusalasaṃyogaḥ pūrva-prayatnasyābhighātād vinaṣṭatvāt, 'utpatatu musaladravyam' itīcchāyā abhāvāt prayatnāntarasyābhāvaḥ, saṃyogasya ca guṇakarmārambhe sāpekṣakāraṇatvāt prayatnarahito hastamusalasaṃyogo na kāraṇam utpatanasya ／

ヴェーガを有する実体の結合は衝突である。臼との衝突から杵の飛び上がる運動が生じたとき、手と杵との結合は原因ではない。何故なら、先行する意志的努力は衝突によって失われることの故に。‘杵という物質を飛び上がらせましょう’という欲求が存在しないことから別の意志的努力が存在しない。そして性質と運動の発生において結合には依存すべき原因（結合から運動が発生するために結合が依存している原因）を伴うという特性があることから意志的努力を欠いた手と杵との結合は＜杵の＞飛び上がりの原因ではない。

5－1－4

yathaiva hastamusalasaṃyogo musalotpatanakarmaṇi na kāraṇaṃ tathātmahastasaṃyogo’pi hastotpatanakarmaṇi na kāraṇaṃ saṃyogasya sāpekṣakāraṇatvāt ‘musalena sahotpatatu hastaḥ’ iti abhisandher abhāvenaprayatnasya cābhāvāt ／

ちょうど、手と杵との結合が杵の飛び上がりの運動において原因でないのと同様にそのようにアートマンと手との結合もまた手の飛び上がりの運動において原因ではない。何故なら、＜運動発生において＞結合が依存すべき原因を伴うという特性の故に。そして、‘手は杵と一緒に飛び上がらせましょう’という意図が存在しないことによって意志的努力が存在しないが故に。

5－1－5

ulūkhalābhighāto musalasyotpatanakarmaṇaḥ kāraṇam ／ hastamusala-saṃyogas tu musalagatavegāpekṣo hastakarmaṇaḥ kāraṇam, nābhighāto’samavetatvāt ／

臼と＜杵と＞の衝突は杵の飛び上がりの運動の原因である。しかし、杵に存するヴェーガに依存する手と杵との結合は手の運動の原因である。衝突ではない。何故なら、＜衝突は手と＞密接に結びついているということではないが故に。

(3) Śrī Nārāyaṇa Miśra : Vaiśeṣikasūtropaskāra of Śaṅkaramiśra, Varanasi, 1969, p. 296-298.

Upaskāra

tathā hastasaṃyogāc ca musale karma //5-1-2//

abhighātaje musalādau karmaṇi vyatirekād akāraṇaṃ hastasaṃyogaḥ //5-1-3//

abhighātān musalasaṃyogād dhaste karma //5-1-5//

そして同様に手と＜杵と＞の結合から杵に運動が＜生ずる＞。

杵等の運動が衝突によって生ずるときには、手と＜杵と＞の結合は＜その運動が意志的努力から＞離れていることから原因ではない。 //5-1-3//

衝突による杵と＜手と＞の結合から手に運動が＜生ずる＞。 //5-1-5//

Upaskāra 5-1-5

yathā musale utpatati musalamukhasthaṃ loham utpatati tathā hasto' pi tadotpatati / atrābhighātaśabdena abhighātajanitaḥ saṃskāra ucyate upacārāt / utpatato musalasya paṭutareṇa karmaṇā abhighātasahakṛtena svāśraye musale saṃskāro janitas tatkṛtaṃ saṃskāram apekṣya hastamusalasaṃyogād asamavāyikāraṇād dhaste' py utpatanaṃ na tu tadutpatanaṃ prayatnavadātmasaṃyogāsamavāyikāraṇakam avaśo hi hasto musalena sahotpatatīti bhāvaḥ /

杵が飛び上がりつつあるとき、杵の口の部分にある鉄＜の輪＞が飛び上がるのと同様に、そのとき手もまた飛び上がる。この場合、＜スートラの＞“衝突”という言葉によって衝突から生じた潜在能力が比喩的にいわれている。＜すなわち、＞飛び上がりつつある杵の、＜臼との＞衝突に伴われて生じたより強い運動によって自らの（その運動の）基体である杵に潜在能力が生ずる。その生じた潜在能力に依存して、非内属因である手と杵との結合から、手にもまた飛び上がりが生ずる。しかし、その飛び上がりは意志的努力を有するアートマンと＜手と＞の結合という非内属因＜から生ずるの＞ではない。実に意志によらない手が杵に伴われて飛び上がるという意味である。

(4) CandrānandaおよびUpaskāraにおける注釈による。

(5) Candrānanda : Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit., p. 38.

Upaskāra : Śrī Nārāyaṇa Miśra : op. cit., pp. 298-299.

(6) Candrānandaの注釈による。Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit., p. 39.

(7) Candrānanda : Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit., p. 37.

Upaskāra : Śrī Nārāyaṇa Miśra : op. cit., pp. 295-298.

(8) Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit. p. 39.

スートラ５－１－１６におけるCandrānandaの注釈

nodanād ādyaṃ karma, saṃskārād vahūni karmāṇi iṣāv utpadyante / ekasmiṃs tu karmaṇi prathameṇaivākāśasaṃyogena vinaṣṭatvāt karmaṇa uttarasaṃyogavibhāgā notpadyeran tasmād iṣāv anekaṃ karma /

矢において衝動から最初の運動が、潜在能力から多くの運動が生ずる。しかし、１つの運動においては最初の虚空との結合だけによって消失するという＜運動の＞特質から、運動にとってより後の諸々の結合と分離は生じないであろう。それ故、矢において沢山の運動が存在する。

(9) Śrī Nārāyaṇa Miśra : op. cit., pp.305-308.

Upaskāraにおいて５－１－１６の注釈

iṣāv iti ṣaṣṭhyarthe saptamī / idam atrākūtam --- vegena gacchatāṃ śarādīnāṃ kuḍyādisaṃyogānantaraṃ śrādau saty eva gatyuparamo dṛśyate atrāśrayanāśas tāvan na tan nāśakaḥ āśrayasya vidyamānatvāt / virodhiguṇāntarañ ca nopalabhyate, tena svajanyaḥ saṃyoga eva karmanāśaka ity unnīyate / sa ca saṃyogaś caturthakṣaṇe jātaḥ pañcamakṣaṇe karma nāśayati / tathā hi ------ karmotpattir atha vibhāgaḥ atha pūrvasaṃyoganāśaḥ uttarasaṃyogaḥ karmanāśaḥ / tenāyugapatsaṃyogaviśeṣāḥ karmanānātvajñāpakā ity arthaḥ / saṃyoga-viśeṣā iti / saṃyoge viśeṣaḥ svajanyatvam eva anyathā saṃyoga-mātrasya karmanāśakatve karma kvacid api na tiṣṭhet //

矢においてということは第６格（Genetive)の意味に＜用いられる＞第７格(Locative)である。これはここでは＜次のような＞意味である。矢などがヴェーガ（勢い）によって進んでいる間、壁などの結合の後直ちに矢などが存在するとき、まさに運動の停止が見られる。この場合、それ（運動）の崩壊は基体の崩壊ではない。何故なら、基体が存在しているが故に。そして他の障害となる性質は生じていない。それによってみずから生じた結合はまさに運動を消滅させるということが導かれる。そしてその結合は第４クシャナ（第４瞬間時）において生じ、第５瞬間時において運動が消滅する。すなわち、その場合運動の発生が＜第１瞬間時に＞ある。そのとき、＜第２瞬間時に＞分離が生ずる。そのとき＜第３瞬間時に＞前の結合の消滅がある。＜第４瞬間時に＞さらなる結合がある。＜第５瞬間時に＞運動の消滅がある。それによって同時でない諸々の異なった結合が運動

の種々性を知らしむるという意味である。‘諸々の異なった結合’とは結合において異なっていることである。すなわち、<結合>みずからによって生まれるべきことはまさに<異なっていること(viśeṣa)である>。他方、単なる１つの結合は運動を消滅させるという特質の故に、運動はまたどこにも存在しないであろう。

(10) 大網功：“古代インドにおけるニャーヤ、およびヴァイシェーシカ両学派の音の伝播論”、『科学史研究』３５巻 (No. 198), 1966 pp. 122-130.

(11) Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit., pp. 40-44.
Śrī Nārāyaṇa Miśra : op. cit., pp.309-329.

(12) Candrānanda注による。Muni Śrī Jambuvijayaji : op. cit., p. 43.

(13) D. Jhā : Praśastapādabhāṣya with the commentary, Nyāyakandalī along with Hindi translation, Varanasi, 1977, p. 713.

(14) D. Jhā : Ibid., pp.714-715.

(15) Ibid., pp.715-717.

(16) Ibid., pp.718-720.

(17) Ibid., p. 720.

(18) Ibid., pp.720-724.

(19) Ibid., p. 723.

(20) Ibid., pp. 732-733.

(21) Ibid., pp. 732-733.

(22) Ibid., p. 728.

(23) Ibid., p.729.

(24) Ibid., pp.729-731.

(25) Ibid., p. 733.

(26) Ibid., pp. 735-736.

(27) Ibid., pp. 736-738.

(28) Ibid., p.740.

(29) 金倉圓照：「勝論のAdṛṣṭaについて」、『鈴木学術財団、研究年報』Nos. 5-7, 1968-1970, pp.5-19.

(30) D. Jhā : op. cit., pp. 725-726.

(31) Ibid. p. 724.

(32) Sh. Tripathi : Vaiśeṣikadarśana of Kaṇāda with An Anonymous Commentary, 2nd ed. Darbhanga, 1988, p. 53.

(33) D. Jhā : op. cit., p.727.

(34) G. Śāstrī : Vyomavatī of Vyomaśivācārya, Part 2, Varanasi, 1984, p.262.

(35) D. Jhā : op. cit., pp. 646-647.

(36) D. Jhā : op. cit., p. 724.

(37) D. Jhā : op. cit., pp. 724-725.

(38) ① B. N. Seal : The Positive Sciences of the Ancient Hindus, Delhi, New ed. 1958, pp. 141-142.

② U. Mishra : Conception on the Matter, Delhi, 1987(reprint), pp. 205-208.

(39) 大網　功：op. cit.

(40) Nyāyavārttika 2-2-35, Nyāyadarśanam Vol. 1, 臨川書店, 1982, pp. 632-633.

(41) Nyāyavārttikatātparyaṭīka 2-2-35, Nyāyadarśanam, Vol. 1, p. 633.

(42) Ibid., 2-2-38, Nyāyadarśanam, Vol. 1, pp. 636-637.

(43) Ibid., 2-2-38.

(44) ① B. N. Seal : op. cit., pp.137-138.

② Karl H. Potter : The Tradition of Nyāya-Vaiśeṣika upto Gaṅgeśa (Encyclopedia of Indian Philosophies Vol. 2), Delhi, 1995. p. 129.

③ U. Mishra : op. cit., pp.214-218.

(45) ① 横山雅彦編：『中世科学論集』，朝日出版，1981，pp.320-329.

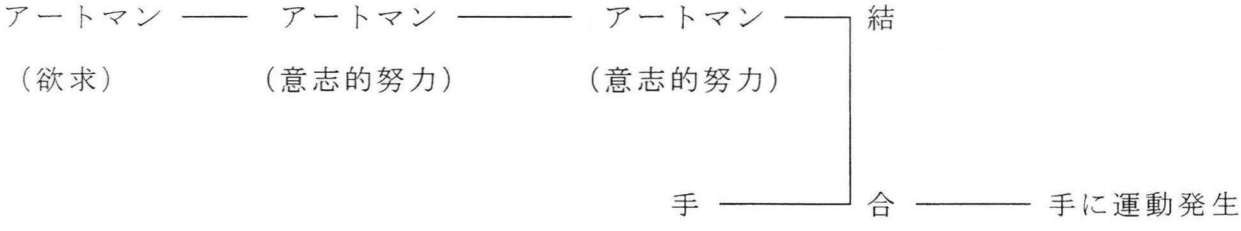
② 伊東俊太郎：『近代科学の源流』，中央公論社，1987，pp. 285-296.

第４章　　身体の運動

1、　はじめに

身体の運動は意識の作用に基づく運動と無意識的な運動とに分かれる。無意識的な運動は物体と同じ方法で扱われている。意識の作用に基づく運動は前章で述べたように身体を動かしたい、例えば手を動かしたいという欲求がアートマンに生じる。その欲求に対して、その身体の領域を占めているアートマンに意志的努力が生ずる。その意志的努力に依存しているアートマンと身体との結合から身体に運動が生ずる。
この意志的努力はアートマンとその補助器官、マナスとの結合によってアートマンに生じた“手を持ち上げたい”という欲求から、“手を持ち上げる”という意志的努力が手の領域を占めているアートマンの部分に起こる。この意志的努力に基づいたアートマンと手との結合から手に“持ち上げること”という運動が起こるのである。この手の運動の発生過程を図示すると第1図のようになる。

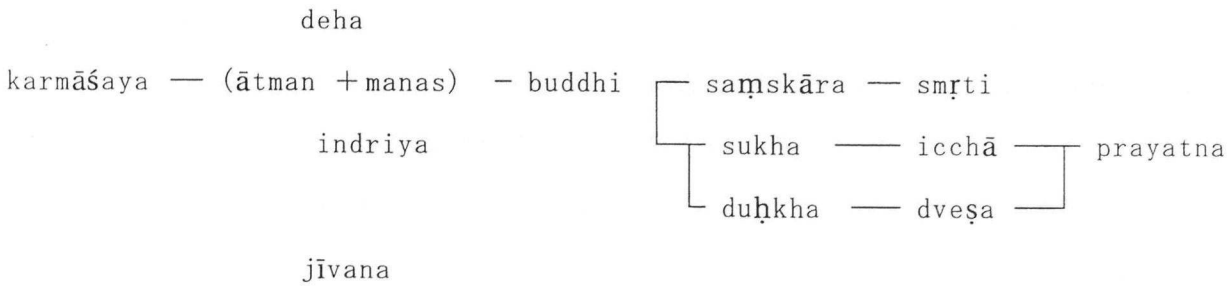
第1図　手の運動



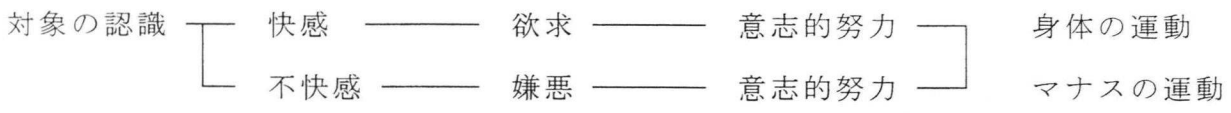
この運動論において、身体の運動、物体の運動およびそれに伴われて生じたヴェーガ理論についてはすでに第3章で述べた。本稿は身体の運動が対象の認識からどのような過程を経て生ずるのか調査した結果を述べる。そして物体の運動の潜在的能力、vega（勢い）と記憶に対する潜在的能力、bhāvanā（潜在印象）とが発生パターンにおいて全く類似していることを示したいと考える。

身体運動を生じさせるこの意志的努力は結論的に言えば、体内にあるアートマンの補助器官、マナスの助けを借りてアートマンに生じた一連の意識過程の1つの状態である。Vaiśeṣika学派およびNyāya学派におけるアートマンの意識過程は宮坂によって少し言及されている。[1]宮坂は「ニャーヤ学派のアートマンの問題」の中で記憶について言及している個所の注で次のような図を示しているだけである。それ以上には言及していない。

第２図



しかし、マナスの運動および身体運動に関連させた意識過程のメカニズムは未だに余りよく分析されていない。筆者はPraśastapādabhāṣyaおよび、その注釈書、Nyāya-kandalīに従ってそのメカニズムの一端を明らかにしたいと考える。その意識過程はPraśastapādabhāṣyaによれば、次の順序で生ずる。



以下の節でこの意識過程がアートマンにどのように生ずるのか見ていく。

２、　アートマンとマナス

Vaiśeṣika 学派においてアートマンは人間にとっての自己そのものであるとされ、認識の主体であり、行動の主体であると考えられていた。人間の意識過程はこのアートマン（我）の中に生ずる。それはアートマン単独では生ずることなく、必ずその補助器官であるマナスの助けを借りて生ずるのである。このアートマンとマナスについてPraśastapādabhāṣyaにどのように記載されているかその一端を見ておく。

２－１、　アートマン　ātman

Vaiśeṣika学派におけるアートマンの存在論証については村上、中村による詳細なる研究がある。[2,3] ここでは村上、中村の研究によりつつ、Praśastapādabhāṣyaに記載されたアートマンについて簡単に述べておく。Praśastapādabhāṣyaによれば、意志的努力を有するものとしてアートマンは次のごとく記されている。[4]

śarīrasamavāyinībhyāṅ ca hitāhitaprāptiparihārayogyābhyāṃ pravṛtti-

nivṛttibhyāṃ rathakarmaṇā sārathivat prayatnavān vigrahasyādhi-ṣṭhātānumīyate ／

車の動きによって＜車を支配する＞御者の存在が推論されるように、身体に内属している２つの動作、利益を得るための有効な活動と不利益を避けるための有効な回避動作とによって、意志的努力を有する肉体の支配者（アートマン）の存在が推論される。

ここで示されているように、アートマンは人間の内部にあって、意志的努力を有し、認識、行動を支配する知の統率体である。このアートマンはPraśastapādabhāṣyaによれば、身体の全体に遍在した不動のものである。属性として認識、快感、不快感、欲求、嫌悪、意志的努力などを有している。アートマンはこれらの属性を自ら能動的に生起することなく、必ずマナスと結合しているとき、その助けによって生ずる。これは宮坂によれば、インド哲学の基本課題、解脱を説明するためとされている。(5)

２－２、マナス　manas

アートマンの補助器官、マナスについて考察する。マナスは非常に速く動き、アートマンと結合して認識を生じさせるものである。そして注意力を引き起こす器官とされている。マナスはPraśastapādabhāṣyaによれば、次のごとく記されている。(6)

saty apy ātmendriyārthasānnidhye jñānasukhādinām abhūtvotpatti-darśanāt karaṇāntaram anumīyate ／ śrotrādyavyāpāre smṛtyutpatti-darśanād bāhyendriyair agṛhītasukhādigrāhyāntarabhāvāc cāntaḥkaraṇam ／

アートマンと感覚器官とが対象に接近しているにもかかわらず、＜すぐに＞認識や快感等が起こらないが、後に＜それらの＞発生が経験されるから、他の器官＜の存在＞が推論される。聴覚器官等が働かないにも関わらず、記憶がよみがえることが経験されるから、また諸々の外部感覚器官によって知覚されない快感等の別の把握対象が存在することから内部器官（マナス）が推論される。

また、Nyāyakandalīによれば同じ個所を次のように注釈している。(7)

ātmanas tāvat sarvendriyair yugapat sambandho'sty eva, indriyāṇām api sannihitair arthaḥ sannikarṣo bhavati, tathāpy ekasmin viṣaye pratīyamāne viṣayāntare jñānasukhādayo na bhavanti, taduparamāc ca bhavantīti dṛśyate, taddarśanād ātmendriyārthasannikarṣebhyaḥ

karaṇāntaram anumīyate yasya sannidhānāj jñānasukhādīnām utpattiḥ, asannidhānāc cānutpattiḥ ／

アートマンは実にすべての感覚器官と同時に結合する。また、諸々の感覚器官と対象との接触は感覚器官の接近によって存在する。それにも関わらず、１つの感覚対象を認識している間、別の感覚対象に関する認識や快感等が存在しない。その＜１つの対象の認識に＞停止があると＜別の対象の認識が＞生起すると言うことが経験される。このような経験から、アートマンと感覚器官と対象との接触から別の器官、すなわちその器官の近接の故に認識とか快感等が生起し、近接なきときは生起しないという別の器官、＜マナス＞が推論される。

ここで示されているように、アートマンが対象を認識したり、快感などの属性を得たりすることはアートマン自身では生起することができず、マナスが一緒の時に生ずる。従ってマナスはアートマンにこれらの属性を生じさせる非常に重要な器官である。だが、精神性は有していない。また、内にある器官であるため、内官と呼ばれる。このマナスは微細な粒子で体内に１個存在し、アートマンの中に生起した意志的努力によって迅速に動くと記されている。[8]

２－３、　マナスの運動-----対象の知覚

マナスの運動はPraśastapādabhāṣyaによれば、身体内の運動と体外の運動とに分類される。[9]体内の運動はアートマンが対象を知覚しようとしたときに生ずる。また、体外では死体からマナスが去る運動や誕生の時マナスが体内に入る運動などがある。体内の運動は意志的努力によって生じ、体外の運動はアドリシュタ（adṛṣṭa不可見力）によって生ずる。ここではマナスの運動と対象の知覚とがどのような関係にあるのか見ていく。Praśastapādabhāṣyaによれば次の如く記されている。[10]

savigrahe manasīndriyāntarasambandhārthaṃ jāgrataḥ karma ātmamanaḥ-saṃyogād icchādveṣapūrvakaprayatnāpekṣāt, anvabhiprāyam indriyānta-reṇa viṣayāntaropalabdhidarśanāt ／ suptasya prabodhakāle jīvana-pūrvakaprayatnāpekṣāt ／

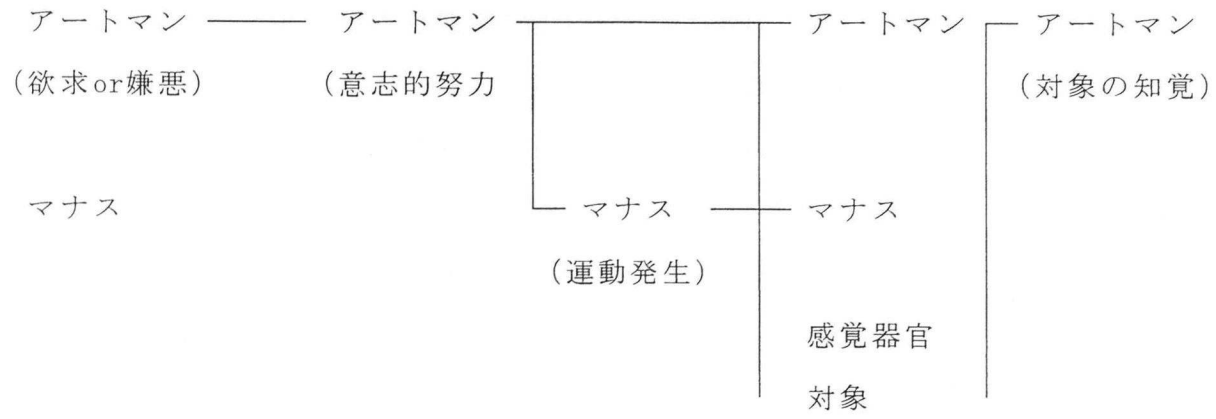
目覚めている人にとって、身体と共にあるマナスに別の感覚器官と結合するために運動が生ずる。それは欲求あるいは嫌悪に基づく意志的努力に伴われたアートマンとマナスとの結合から起こる。何故なら、意図に従ってある１つの感覚器官

（例えば眼）で１つの感覚対象（例えば、色）を知覚することが経験的に知られているが故に。眠れる人にとって、目覚めるときに生命に基づく意志的努力に伴われたアートマンとマナスとの結合から＜マナスに運動が＞発生する。

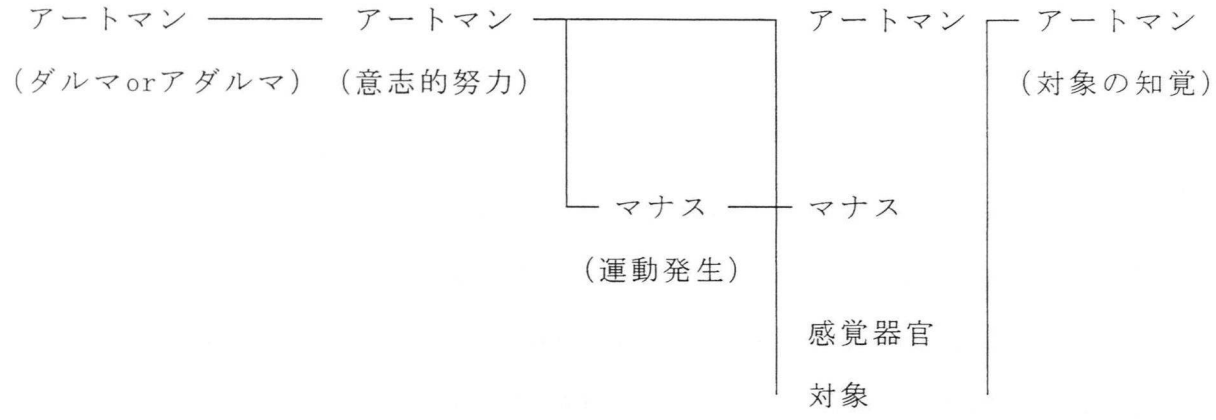
このように対象の知覚はアートマンと感覚器官が対象と接触しているだけでは生ぜず、そこへマナスが動かされることによって生ずるとPraśastapādaは考えた。その知覚の生じ方はアートマンに対象を知覚したいと望む欲求または嫌悪が生起し、それに基づいて知覚しようとする意志的努力が生ずる。この意志的努力によってアートマンと感覚器官とが対象と接触している場所へマナスが動かされたとき、初めてアートマン、すなわち人間が対象を知覚するとしている。このことはマナスがアートマンに知覚を生じさせる媒介物となっている。すなわちアートマンは体内に遍在しているので、アートマンと感覚器官は至る所で同時に接触しているのだが、物の色が知覚されたり、音が聞こえたりするのは媒介物であるマナスが意志的努力によって眼から耳に迅速に動かされるため、ほとんど同時に色と音が知覚されるとしている。[11]この知覚に関するPraśastapādaの説明を図示すれば、第３図の如くなる。

第３図　対象の知覚

①　目覚めているとき



②　覚醒時における知覚



３、ダルマ、アダルマ

Vaiśeṣika学派において、人間が行為をなした結果、その人の心に印象づけられて後に倫理的な影響を及ぼすある種の能力がダルマ（善業の功徳）、あるいはアダルマ（悪業の罪悪）と呼ばれた。[12]それは輪廻の世界で行為を促す源になっていた。インド正統派の哲学ではkarman（業）という言葉が行為を表すと同時にこの意味に用いられた。このダルマ、アダルマがPraśastapādabhāṣyaにおいてどのように記述されているのか見ておく。

３－１、　ダルマ　dharma

Praśastapādabhāṣyaによれば、ダルマは次の如く記されている。[13]

dharmaḥ puruṣaguṇaḥ ／ kartuḥ priyahitamokṣahetuḥ, atīndriyo'ntya-sukhasaṃvijñānavirodhī puruṣāntaḥkaraṇasaṃyogaviśuddhābhisandhijaḥ,

varṇāśramiṇāṃ pratiniyatasādhananimittaḥ ／

ダルマはプルシア（人間の精神、すなわちアートマン）の性質である。それは行為者にとって、快いこと、利することおよび解脱をもたらす原因である。超感覚的なものであり、究極の幸福を完全に理解する事によって滅する。プルシア（すなわちアートマン）と内官との結合および清浄なる意向から生ずる。そして階級および生活期のきまりを実行することを原因として生ずる。

ここで示されているように清浄なる心を持つ人、すなわちアートマンとマナスとの結合により清浄なる意向にあるアートマンを所持している人がヴェーダに定められた祭式を行うことやダルマに対する信仰、人を傷つけないこと、盗みをしないことなど聖典に定められた行為または修行を行うことによって、ダルマがその人に生ずる。これは行為をなした人を幸福にあるいは解脱に導くものである。

３－２、　アダルマ　adharma

Praśastapādabhāṣyaによれば、アダルマは次の如く記されている。(14)

adharmo'py ātmaguṇaḥ ／kartur ahitapratyavāyahetur atīndriyo'ntya-duḥkhasaṃvijñānavirodhī ／tasya tu sādhānāni śāstre pratiṣiddhāni dharmasādhanaviparītāni hiṃsānṛtasteyādīni ／vihitākaraṇaṃ pramādaś caitāni duṣṭābhisandhiṃ cāpekṣyātmamanasoḥ saṃyogād adharmasyotpattiḥ ／

アダルマはまたアートマンの性質である。それは行為者にとって、損害や苦悩を与える原因である。超感覚的なものであり、最後の苦を完全に理解することによって滅する。だが、アダルマの実行は聖典で禁止され、ダルマの実行と反対のことであり、傷害、うそをつくこと強奪等を行うことである。また定められたことをしないことと怠惰とである。これらの行いと有害な意図に伴われたアートマンとマナスとの結合からアダルマが生起する。

ここでいわれていることは不純な意図を持つ人、すなわちアートマンとマナスとの結合により、不純な意図にあるアートマンを所持している人が傷害、うそをつくこと、強奪等聖典で禁止された行為を行うことによって、アダルマがその人に生ずる。これは行為者を不幸に導くものである。

以上のことから、ダルマ、アダルマについてPraśastapādabhāṣyaに従ってまとめれば、第４図の如くになる。このように人間の行為から生じたダルマ、アダルマという

一種の分からざる能力は生命を維持する基本となるもの、すなわち宗教の世界で輪廻の根源となるものである。宮坂によれば、ダルマ、アダルマは神の意志を反映したある種の能力と記されている。[15]すなわち神が行為者に行為から生ずる果報を後に与えるという思想である。

第４図　ダルマ、アダルマ

○　行為の結果、倫理的にその行為者の心に残った残余感で、後世に彼の心に影響を与えるある種の能力である。

１、　ダルマ

(1)　アートマンの特殊な性質。

(2)　行為者に対して、幸福、本人の益すること、解脱の原因となるもの。

(3)　超感覚的なもの。

(4)　聖典に定められた行為によって生ずる。

ダルマに対する信仰、不傷害、不盗、うそをつかないこと等。

(5)　アートマン（清浄なる意図）viśuddhasaṃkalpa ―― 結合 ―― 聖典に定められた行為 or 修行 ―― アートマン（ダルマ）

マナス ―― 結合 ―― 幸福

２、　アダルマ

(1)　アートマンの特殊な性質。

(2)　行為者に対して、本人の不利益、罪を起こす原因となる。

(3)　超感覚的なもの

(4)　聖典において禁止された行為

傷害、うそをつくこと、強奪等。

(5)　アートマン（不純な意図）duṣṭābhisandhi ―― 結合 ―― 聖典で禁止された行為 ―― アートマン（アダルマ）

マナス ―― 結合 ―― 不利益、罪

4、　意志的努力　prayatna

次にアートマンに付随する段階的な意識過程、すなわち心の動きについて述べる。最初に身体の運動を引き起こす意志的努力について、Vaiśeṣika学派がどのように考えていたか述べる。Praśastapādabhāṣyaによれば次の如く記されている。[16]

prayatnaḥ saṃrambha utsāha iti paryāyāḥ ／ sa dvividhaḥ----jīvanapūrvakaḥ, icchādveṣapūrvakaś ca ／ tatra jīvanapūrvakaḥ suptasya prāṇāpānasantānaprerakaḥ, prabodhakāle cāntaḥkaraṇasyendriyāntaraprāptihetuḥ ／ asya jīvanapūrvakasyātmamanasoḥ saṃyogād dharmādharmāpekṣād utpattiḥ ／ itaras tu hitāhitaprāptiparihārasamarthasya vyāpārasya hetuḥ śarīravidhārakaś ca ／ sa cātmamanasoḥ saṃyogād icchāpekṣād dveṣāpekṣād votpadyate ／／

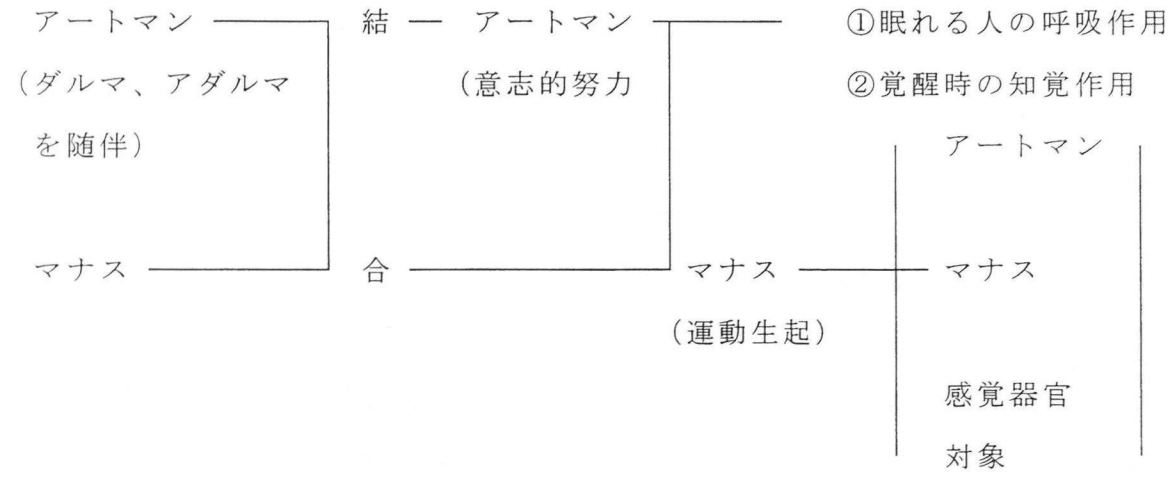
意志的努力（prayatna）、猛烈さ（saṃrambha）、意志の強さ（utsāha）とは同義語である。その意志的努力は２種類存在する。すなわち生命に基づくものおよび欲求と嫌悪に基づくものである。そのうち、生命に基づく意志的努力は眠っている人の呼吸を持続させ、覚醒時においては内官と他の諸々の感覚器官とが結合するための原因である。この生命に基づく意志的努力はダルマあるいはアダルマに伴われたアートマンとマナスとの結合から生ずる。だが、欲求と嫌悪とに基づく別の意志的努力は益することを得ようとする行動あるいは不利益を回避しようとする行動の原因であり、身体を＜重さがあっても倒れないように＞保持している。それは欲求あるいは嫌悪に伴われたアートマンとマナスとの結合から生ずる。

これによれば、意志的努力の発生は生命に基づくものと欲求あるいは嫌悪に基づくものとに分かれている。生命に基づく意志的努力は眠っている人の呼吸を促し、覚醒時においては前述したように、マナスを動かしめ、アートマンに知覚作用を起こさしめる。この意志的努力はダルマあるいはアダルマに伴われたアートマンとマナスとの結合から生ずる。また、欲求あるいは嫌悪に基づいた意志的努力は目覚めている人の知覚作用、身体の運動を起こさしめる。すなわち、これは人が目覚めているときにアートマンと感覚器官と対象とが接触している場所へマナスを動かしめ、アートマンに知覚作用を生ぜしめる。そして身体に行動を起こさしめる。この意志的努力はアートマンが意識過程の１つ、欲求あるいは嫌悪の状態にあるとき、それに伴われたアートマンとマナスとの結合から生ずる。欲求に基づいた意志的努力はその人あるいは他人

に対して有益な行動を起こさしめ、嫌悪に基づいた意志的努力は自分あるいは他人に対して不利益を回避する行動を起こさしめる。以上まとめると第５図のようになる。

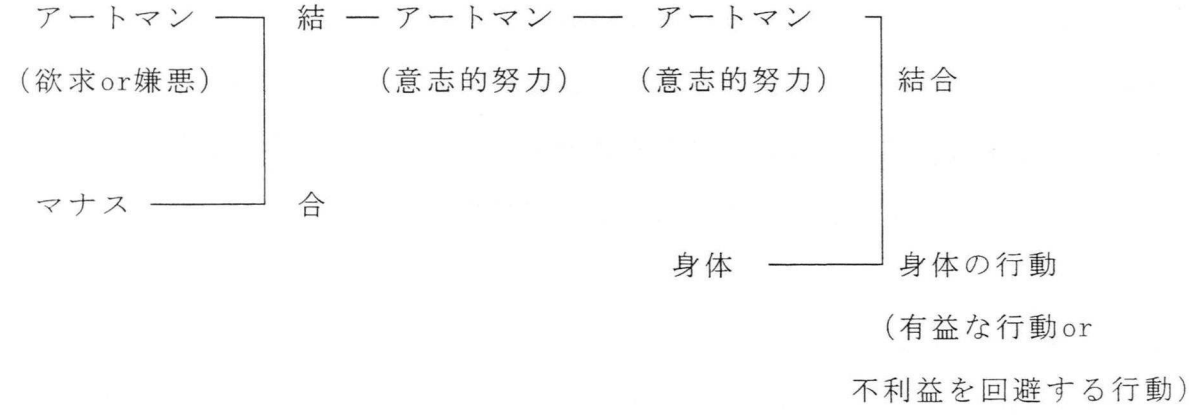
第５図　意志的努力

Ⅰ、　生命に基づく意志的努力

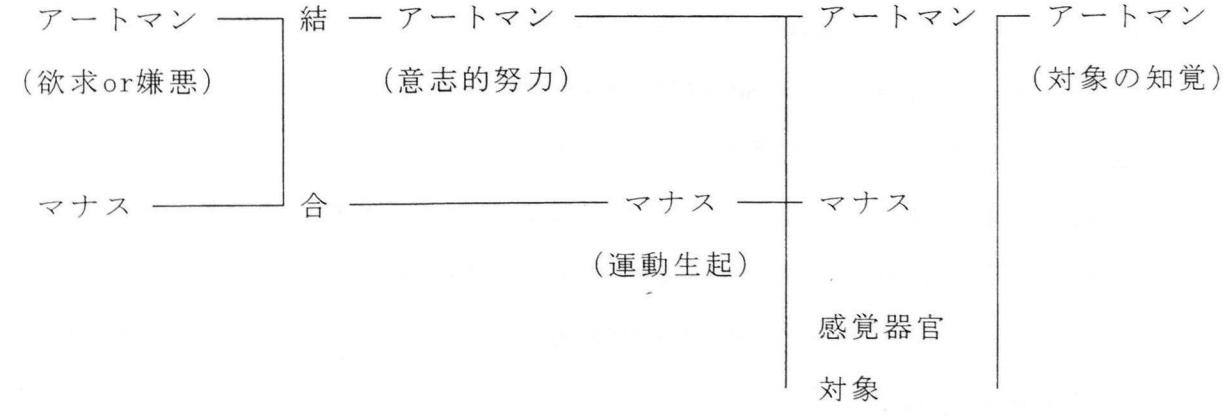


Ⅱ、　目覚めている人の意志的努力

①　身体の運動



②　対象の知覚



5、　欲求、嫌悪

アートマンに生じた意識過程の１つ、欲求あるいは嫌悪について述べる。この欲求あるいは嫌悪はそれに伴われたアートマンがマナスと結合しているとき、意志的努力を生ずる。Praśastapādabhāṣyaによれば、欲求と嫌悪は次の如く記されている。

5－1、　欲求　icchā

svārthaṃ parārthaṃ vā' prāptaprārthanecchā ／ sā cātmamanasoḥ saṃyogāt sukhādyapekṣāt smṛtyapekṣād votpadyate ／ prayatnasmṛti-dharmādharmahetuḥ ／

kāmo' bhilāṣaḥ, rāgaḥ saṅkalpaḥ, kāruṇyam, vairāgyam upadhā bhāvaḥ ity evamādaya icchābhedāḥ ／ [17]

欲求とは未だ得られていないものを自分のためあるいは他人のために望むことである。それは快感等に伴われたあるいは想起に伴われたアートマンとマナスとの結合から生ずる。そして意志的努力、記憶、ダルマおよびアダルマの原因である。

性欲、食欲、貪欲、意欲、同情、棄てようとする欲望、ごまかそうとする欲望、秘められた願い、これらは欲求の種類である。

ここに記されているように欲求とはまだ得られていないものを獲得しようとする願いである。この欲求は快感（sukha）にあるアートマン、または過去の経験を想起しているアートマンがマナスと結合しているときに生ずる。

5－2、　嫌悪　dveṣa

prajvalanātmako dveṣaḥ ／ yasmin sati prajvalitam ivātmānaṃ manyate sa dveṣaḥ ／ sa cātmamanasoḥ saṃyogād duḥkhāpekṣāt smṛtyapekṣād votpadyate ／ prayatnasmṛtidharmādharmahetuḥ krodho droho manyur akṣamā' marṣa iti dveṣabhedāḥ ／ [18]

嫌悪は激情するという性質を有している。それが存在するとき、自己をいらだたせるかの如く考えられるもの、それが嫌悪である。それは不快感に伴われたあるいは想起に伴われたアートマンとマナスとの結合から生ずる。嫌悪は意志的努力、記憶、ダルマ、アダルマの原因である。怒り、悪意、怨恨、ねたみ、憤怒とが嫌悪の種類である。

ここで示されているように嫌悪は感情が悪い方に激している状態である。これは不快感（duḥkha）にあるアートマン、または過去の経験を想起しているアートマンがマナスと結合しているときに生ずる。

これら欲求と嫌悪をPraśastapādabhāṣyaに従ってまとめると第６図の如くになる。

第６図　欲求、嫌悪

Ⅰ、　欲求　icchā

① 結 ┌ アートマン ――― アートマン ――― アートマン ―― 有益な行動
　　│ （快感or記憶）　　（欲求）　　（意志的努力）
　　│
　合 └ マナス

② 欲求の種類

性欲、食欲、貪欲、意欲、同情、捨てようとする欲望、ごまかそうとする欲望、秘められた願い

Ⅱ、　嫌悪　dveṣa

① 結 ┌ アートマン ――― アートマン ――― アートマン ―― 不利益を回避する行動
　　│ （不快感or記憶）　　（嫌悪）　　（意志的努力）
　　│
　合 └ マナス

② 嫌悪の種類

怒り、悪意、怨恨、妬み、憤怒

６、　快感、不快感

アートマンに生じた意識過程の１つ、快感および不快感について述べる。これは欲求あるいは嫌悪を生じせしめる。Praśastapādabhāṣyaによれば、次のように記載されている。

６－１、　快感　sukha

anugrahalakṣaṇam sukham / sragādyabhipretaviṣayasānnidhye satīṣṭopalabdhīndriyārthasannikarṣād dharmādyapekṣād ātmamanasoḥ saṃyogād anugrahābhiṣvaṅganayanādiprasādajanakam utpadyate tat sukham / atīteṣu

viṣayeṣu smṛtijam ／ [19]

快感は好ましきことを本性とする。花冠など自分に好ましい対象が近接しているとき、望んだものを感ずる感覚器官と対象との接触により、ダルマ等に伴われたアートマンとマナスとの結合から好ましく感ずること、強い愛着、眼などの輝きが生ずる。それが快感である。過去の対象について快感は想起から生ずる。

ここで示されているように快感は自分に好ましい対象と感覚器官とが接触したとき、ダルマに伴われたアートマンとマナスとの結合から生ずる。すなわち快感は好ましい対象をアートマンが認識したときに生ずる。

6－2、 不快感 duḥkha

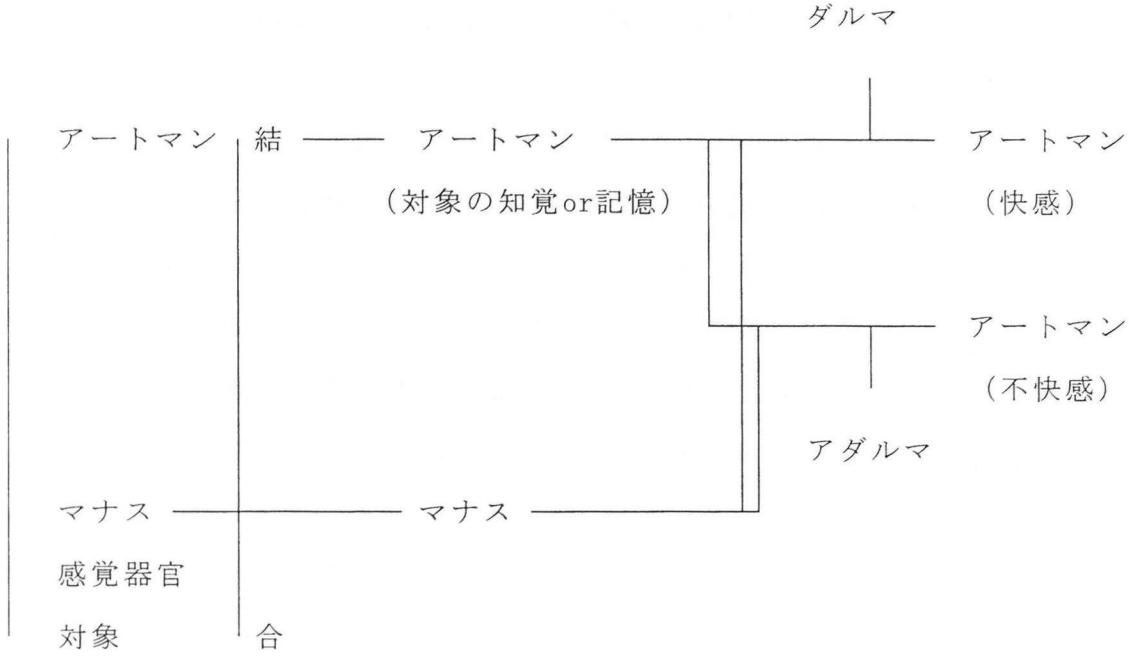
upaghātalakṣaṇaṃ duḥkham ／ viṣādynabhipretaviṣayasānnidhye saty aniṣṭopalabdhīndriyārthasannikarṣād adharmādyapekṣād ātmamanasoḥ saṃyogād yad amarṣopaghātadainyanimittam utpadyate tad duḥkham ／ atīteṣu sarpavyāghracaurādiṣu smṛtijam ／ [20]

不快感は害するということを本性とする。毒など欲しない対象が近くにあるとき、欲しないものを知覚する器官と対象との接触によりアダルマ等に伴われたアートマンとマナスとの結合からじれったさ、不快なる感じ、意気消沈の原因となるものが生ずる。それが不快感である。過去に経験した蛇、虎、盗賊等における不快感は想起から生ずる。

これから分かるように不快感は自分が欲しない対象と感覚器官とが接触したときに、アダルマに伴われたアートマンとマナスとの結合から生ずる。すなわち人が不快なる対象を知覚したとき、アダルマの作用により不快が生ずる。

以上から快感および不快感を図式化すると第７図のようになる。

第７図　快感、不快感　sukha, duḥkha



７、　記憶　smṛti

ここでは記憶がPraśastapādabhāṣyaにおいてどのように記載されているか調べる。Praśastapādabhāṣyaによれば、記憶は次のように記されている。[21]

liṅgadarśanecchānusmaraṇādyapekṣād ātmamanasoḥ saṃyogaviśeṣāt paṭvābhyāsādarapratyayajanitāc ca saṃskārād dṛṣṭaśrutānubhūteṣv artheṣu śeṣānuvyavasāyecchānusmaraṇadveṣahetur atītaviṣayā smṛtir iti ／

＜記憶は事柄の＞特徴（liṅga)を知ることおよび＜思い出そうという＞欲求に基づいて想い出すこと[22]などに伴われたアートマンとマナスとの特殊な結合から、そして強烈なる認識に基づいて、あるいは繰り返しによる認識に基づいて、あるいは＜深く＞留意することによる認識に基づいて生じた＜心的＞潜在能力（すなわち潜在印象）から＜生ずる＞。見たり、聞いたり、経験した諸々の事柄において、＜事柄の特徴から最初に生じた認識に基づいて＞[23]残された知識によって後に＜推測すべき対象を＞[23]確認することの原因、あるいは欲求、あるいは連想、あるいは嫌悪の原因となる過去の＜知覚された＞[23]対象が記憶である。

ここでいわれているようにVaiśeṣika学派では記憶はある事柄の認識がそれに伴われたアートマンとマナスとの特殊な結合を通して後々まで心に刻印されることである

と考えられた。その認識はじきに消えてしまうものであるが、これが持続して記憶として残るために必要な保持能力が潜在印象（bhāvanā)と呼ばれる能力（saṃskāra)である。この潜在印象によって記憶が生ずるとされた。また、潜在印象の生じ方は認識の度合いによって３つの方法に分けられていた。それらは奇妙な事柄に対して、強烈なる認識がアートマンに生じ、それから得られた強い潜在印象、通常の事柄に対して、弱い認識が生じ、それを繰り返すことによって得られた強い潜在印象、未曾有の現象、すなわち非常に珍しい事柄に対して、電光の閃きを見るようにはっと心を打つ強烈なる認識（留意による認識）が生じ、それから得られた勝れた潜在印象である。

このような潜在印象の生じ方はPraśastapādabhāṣyaによれば、次の如く記されている。[24]

bhāvanāsaṃjñakas tv ātmaguṇo dṛṣṭaśrutānubhūteṣv artheṣu smṛti-pratyabhijñānahetur bhavati jñānamadaduḥkhādivirodhī ／paṭvabhyāsādara-pratyayajaḥ ／paṭupratyayāpekṣād ātmamanasoḥ saṃyogād āścarye'rthe paṭuḥ saṃskārātiśayo jāyate ／yathā dākṣiṇātyasyoṣṭradarśanād iti ／ vidyāśilpavyāyāmādiṣv abhyasyamānaṣu tasminn evārthe pūrvapūrva-saṃskāram apekṣamāṇād uttarottarasmāt pratyayād ātmamanasoḥ saṃyogāt saṃskārātiśyo jāyate ／

prayatnena manaścakṣuṣi sthāpayitvā'pūrvam arthaṃ didṛkṣmāṇasya vidyutsampātadarśanavad ādarapratyayaḥ tam apekṣamāṇād ātmamanasoḥ saṃyogāt saṃskārātiśayo jāyate ／ yathā devahrade rājatasauvarṇa-padmadarśanād iti ／

だが、潜在印象（bhāvanā)という名の潜在能力（saṃskāra） はアートマンの性質であり、見たり、聞いたり、経験した諸々の事柄において、記憶と再認識することの原因である。また＜反対の＞知識[25]、恍惚、不快感等によって妨げられる。そしてこの潜在印象は強烈なる認識（pratyaya）から生ずるものと、繰り返しによる認識から生ずるものと、留意による認識から生ずるものである。強烈なる認識に伴われたアートマンとマナスとの結合から不思議な事柄において強烈なる、すばらしい潜在能力が生ずる。例えば南の地方に住んでいる人が＜まだ見たことのない＞[25]駱駝を見たことから＜強烈なる印象を受けるように＞。学問、工芸、体操等を繰り返し行うとき、それと全く同じ事柄において＜繰り返しによっ

て次から次へと生ずる＞以前の潜在能力を前提とする順次後の認識によるアートマンとマナスとの結合からすばらしい潜在能力が生ずる。

未曾有の事柄を見ようと願ってる人が意志的努力によってマナスを眼に置かしめ、稲妻のような衝撃を見るように、留意による認識が生ずる。それに伴われたアートマンとマナスとの結合からすばらしい（勝れた）潜在能力が生ずる。例えば、神々の湖（devahrada）で＜見たいと願う人が真夜中に思念をこらすとき、たゆまない勝れた意志的努力から眼にマナスを置き続けることによって一瞬間＞[26]金、銀の蓮の花を見ることから＜勝れた潜在能力が生ずる＞ようにという。

ここで言われているように、これらの認識の内、奇妙な事柄（例：初めてみる事柄）に対して生じた強い認識と、未曾有の現象（例：想像上の「神々の湖」にある金銀の蓮の花）に対して生じた留意による認識とは強烈であるがため、それに伴われたアートマンとマナスとの１回の結合を通して記憶を生み出すに十分な潜在能力を生ずる。しかし、繰り返して得られた認識では１回の認識は弱いため、記憶を生み出すに不十分な弱い潜在能力を生ずる。そこで事柄を繰り返すことによって認識が次第に強くなってくる。それにつれて、それを持続しようとする潜在能力も次第に増大していく。ついに認識するというアートマンとマナスとの結合がなくても、その事柄の認識は増大した潜在能力によって記憶される。Nyāyakandalī によれば、この繰り返しによる認識の個所は次の如く注釈されている。[27]

teṣv abhyasyamāneṣu tasminn evārthe pūrvagṛhīte ／pūrvetyādi ／yataḥ suciram anuvartate, sphuṭataraṃ ca smaraṇaṃ karoti ／na hy ādyānubhava eva saṃskāraviśeṣam ādhatte, prathamaṃ tadarthasmaraṇābhāvāt ／ nāpy uttara eva hetuḥ, pūrvābhyāsavaiyarthyāt ／ tasmāt pūrvasaṃskārāpekṣottarottarānubhavāhitādhikādhikasaṃskārotpattikrameṇopāntyasaṃskārāpekṣād antyānubhavāt tadutpattiḥ ／

それら（学問、工芸、体操等）を‘繰り返し行うとき、それと全く同じ事柄において’、すなわち以前に把捉された事柄と全く同じ事柄において、‘以前の----’は次の通りである。＜以前に把捉された全く同じ事柄において潜在能力がその事柄の繰り返しによって＞非常に長い間、＜次から次へと＞継続され、そしてより明瞭なる記憶を生ずる。実に＜連鎖過程の＞最初の認識（anubhava）だけが特別な潜在能力を与えるわけではない。何故なら、＜連鎖過程の＞最初にはその

事柄を思い出すことがないからである。また、最後の認識だけが原因ではない。何故なら＜もし最後の認識だけが原因であるとすれば＞以前の繰り返しは役に立たなくなるが故に。このような理由から＜繰り返しによって順次に＞以前の潜在能力を必要として後に引き続いて起こる認識によって導かれたますますより勝れた潜在能力が生ずるという順序（連鎖過程）で、最後の一つ手前の潜在能力を必要とする最後の認識からそれ（その特別なる、すばらしい潜在能力）が生ずる。

ここでは認識（anubhava）と潜在能力（saṃskāra）とが相関的に増大していく連鎖過程が記されている。すなわち、最初に事柄の弱い認識がある。それに伴われたアートマンとマナスとの結合を通してこの弱い認識から弱い潜在能力が生ずる。その事柄の繰り返しから、この弱い潜在能力に基づくさらなる認識がある。それに伴われたアートマンとマナスとの結合を通してより強い潜在能力が生ずる。このような順序で事柄の繰り返しにより認識と潜在能力とが相関的に増大する。この連鎖の最後の１つ手前の潜在能力に基づく最後の強烈なる認識によって強い特別なる潜在能力が生ずるとされている。この過程を図示すると次の如くなる。

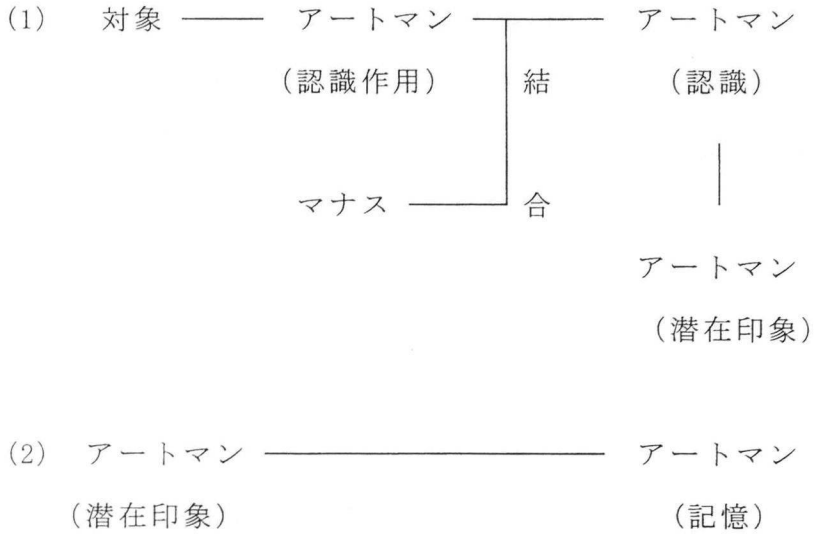
（認識に伴われたアートマンとマナスとの結合の繰り返しを通して）

最初の弱いanubhava（認識） ——— 弱いsaṃskāra（潜在印象） ——— より強いanubhava ——— より強いsaṃskāra ——— ------ ——— 非常に強いsaṃskāra ——— ——— 最後の非常に強いanubhava ——— 強い特別なるsaṃskāra（ ——— smṛti、記憶）。

この記憶および潜在能力に関してまとめると第８、９図の如くなる。

第８図　記憶　smṛti　（１）

Ⅰ、記憶



Ⅱ、　記憶のための潜在的能力、潜在印象（bhāvanā）

(1) アートマンの属性

(2) 潜在印象の発生原因

①　強烈なる認識　　paṭu-pratyaya

不思議なあるいは珍しい事柄に対する認識

②　留意による認識　　ādara-pratyaya

電光の閃きを見るように心に強く残る認識

③　繰り返しによる認識　　abhyāsa-pratyaya

学問、工芸、体操等通常の事柄に対して繰り返し行うことによって得られた認識

これらの認識を前提とするアートマンとマナスとの結合からbhāvanā が生ずる。

(3) 潜在印象を打ち消す原因

①　反対の知識　　pratipakṣa-jñāna

②　陶　　酔　　mada

③　不快感（or 苦）　duḥkha

④　享　楽（or 楽）　sukha

第９図　記憶　（２）

Ⅲ、　記憶の生じ方

（1）強烈なる認識　paṭu-pratyaya

①　不思議な事柄 ── アートマン ──┬── アートマン
　　珍しい事柄　　（強い認識作用）│結　　（強烈なる認識）
　　　　　　　　　　　　　　　　　│
　　　　　　　　マナス ──┘合　　│
　　　　　　　　　　　　　　　　　アートマン
　　　　　　　　　　　　　　　　　（強い潜在印象）

②　アートマン ──────────────── アートマン
　（強い潜在印象）　　　　　　　　（記憶　）

（2）留意による認識　ādara-pratyaya

①　未曾有の事柄 ── （強く心に残る認識作用） ── （留意による認識）
　　　　　　　　　　　　　　　　　│
　　　　　　　　　　　　　　　　　（勝れた潜在印象）

②（勝れた潜在印象）──────────────（記憶）

（3）繰り返しによる認識　abhyāsa-pratyaya

①　通常の事柄 ── （通常の認識作用） ── （通常の認識）
　　　　　　　　　　　　　　　　　│
　　　　　　　　　　　　　　　　　（弱い潜在印象）

②　　　　　　（認識作用の繰り返し）──┬── （認識　増大）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　│
　（弱い潜在印象）──────────────┘　　│
　　　　　　　　　　　　　　　　　　（潜在印象　増大）

③（勝れた潜在印象）──────────────（記憶）

８、　結論

以上のようにPraśastapādabhāṣyaおよびその注釈書Nyāyakandalīに基づいてVaiśeṣika学派の運動論の内、身体の運動およびそれに関連した心の動きを見てきた。Vaiśeṣika学派では身体の運動について５種の瞬間的な運動が上げられていた。これらは既に述べたように、縦方向の運動が４種類とそれ以外の運動とに分かれていた。Vaiśeṣika学派では心のどのような動きによって身体の運動が生ずるかということが言及されていた。心の動きは身体内にある２つの実体、アートマン（認識および行動の主体）とマナス（アートマンの補助器官で体内を動き回っている微小粒子）との相互作用によって生ずるとされた。このことについて次のような結論を得た。

（１）　認識から身体の運動が生ずるまでの意識過程

アートマンに生起する意識過程はアートマンとマナスとが結合状態にあるとき、次の順序で発生する。

① アートマンに意志的努力が生じたとき、マナスはこの意志的努力によってアートマンと感覚器官が外界の対象物と接している場所へ動かされ、これらと接触することによってアートマンに対象物を認識させる。

② アートマンが対象を認識した後、ダルマ（善業の功徳）の作用によってアートマンに快感が生ずる。あるいはアダルマ（悪業の罪悪）の作用によって不快感が生ずる。また、記憶からも快感、不快感が発生する。

③ 快感に基づいてそれを得たいという欲求がアートマンに生ずる。不快感に基づいてそれを避けたいという嫌悪が生ずる。

④ 欲求に基づいてそれを得ようとする意志的努力が生ずる。嫌悪に基づいてそれを回避しようとする意志的努力が生ずる。

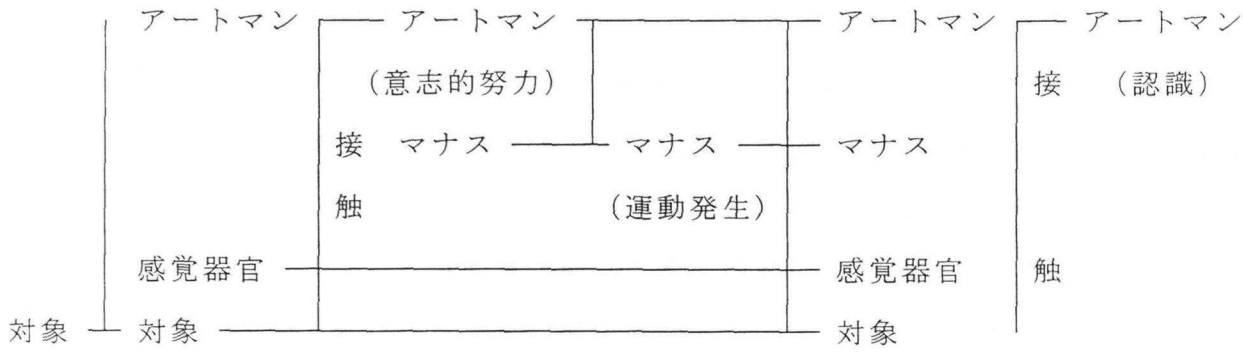
⑤ この意志的努力に基づいて身体の運動が生ずる。体内ではマナスに運動が生ずる。

⑥ 運動の結果、身体の運動ではその倫理的結果によって、その人のアートマンにダルマあるいはアダルマが発生する。マナスの運動では対象物をアートマンに認識させる。

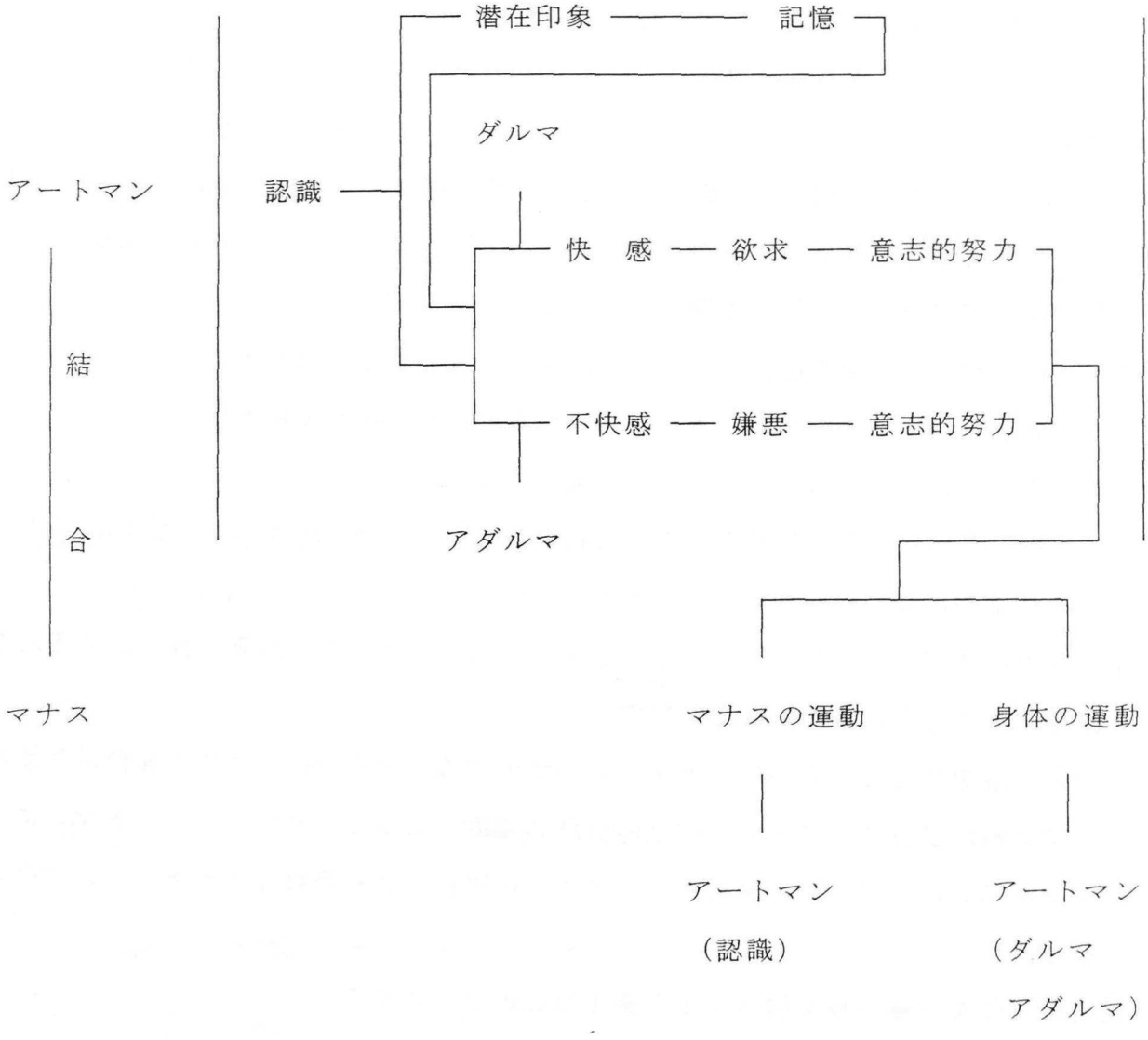
以上のような意識過程を図示すると第１０図のようになる。

第１０図　認識から身体の運動が生ずるまでの意識過程

(1)　認識過程とマナスの運動



(2)　身体の運動が生ずるまでの意識過程



（２）　運動物体の潜在的能力、vegaと記憶に必要な潜在的能力、bhāvanā との比較

Praśastapādabhāṣyaでは２つの潜在的能力、vega（勢い）とbhāvanā（潜在印象）がもっと広い概念、saṃskāra（潜在能力）の中で一緒に取り扱われていた。この２つの潜在的能力について、発生パターンが全く類似していることを以下に示す。

①　物体の運動については前章で示したように、衝動（nodana）あるいは衝突（abhigāta）という「推すもの」と「推される物体」との間に働いている特殊な結合を媒介として「推しているもの」の推進力が物体に伝わり、物体に運動が発生するとされた。

（ｉ）　特殊な結合、衝突による物体の運動

衝突は「衝突するもの」と「衝突されるもの」との間にできた一瞬の接触である。この接触によって物体に跳ね返りの強い運動が生じ、その運動によって物体に強いvegaが発生する。このvegaによって衝突後の運動が物体に次々に生ずる。

（ii）　特殊な結合、衝動による物体の運動

衝動は「推しているもの」と「推されている物体」との間に生じた接触である。この接触を通して「推しているもの」の運動が物体に徐々に伝わっていく。初め、物体に弱い運動が生ずる。この運動によって物体に弱いvegaが発生する。このvegaと衝動とから物体により強い運動が生ずる。それにつれてより強いvegaが発生する。このような方法で物体の運動とvegaは相関的に増大する。この増大によって衝動が持ちこたえられなくなったとき、物体は「推しているもの」から離れ、その増大したvegaによって空間中を次々に運動する。周囲の抵抗や重さによってvegaは徐々に減少し、ついに０となる。物体は重さのため落下する。

以上、物体の運動は第１１図のように示される。

②　記憶に必要な潜在的能力、bhāvanā

Praśastapādabhāṣyaによれば、記憶は次の順序で発生する。

人がある経験をしたとき、それに基づく認識がアートマンに生ずる。この認識からそれを持続しようとする潜在的能力、bhāvanā（潜在印象）がその認識に伴われたアートマンとマナスとの結合を通して生ずる。この潜在印象が非常に強いとき、それから記憶が生ずるとされた。また、潜在印象の生じ方は認識の度合いによって３つの方法に分けられていた。それらは強烈なる認識による強い潜在印象、通常の認

識の繰り返しによって得られた強い潜在印象、留意による認識から得られた強く、鮮明な潜在印象である。

（ｉ） 強い認識および留意による認識

強い認識は奇妙なあるいは珍しい事柄を経験したときに生ずる。また、留意による認識は未曾有の事柄、すなわち宗教的な想像上の事柄を見ようと努力をして、一瞬見えたとき生ずる認識で、電光の閃きを見るようにはっと心を打つような非常に強いものである。これら２つの認識は非常に強いため、それに伴われたアートマンとマナスとの１回の結合だけで記憶を生ずるに十分な潜在印象を発生させる。

（ii） 通常の認識の繰り返し

通常の経験は弱い認識を生ずる。この認識からそれに伴われたアートマンとマナスとの結合を通して弱い潜在印象が生ずる。同じ経験を繰り返すことによって、すなわちその認識に伴われたアートマンとマナスとの度々の結合を通して、認識と潜在印象とは相関的に増大する。ついに記憶を生ずるに十分な強い特別なる潜在印象が発生する。

とPraśastapādabhāṣyaでは説明されていた。これから記憶を生ずる過程は第１２図のように示される。

以上のことから第１１図と第１２図とを比較することにより、運動および記憶の発生の仕方が全く類似していることが分かる。すなわち、運動物体の衝突という特殊な結合と記憶に必要な強い認識および留意による認識（それに伴われたアートマンとマナスとの特殊な結合）が対比される。また、運動物体の衝動という特殊な結合と記憶に必要な通常の認識の繰り返しとが対比される。特に、物体運動の潜在的能力、vegaと記憶に必要な潜在的能力、bhāvanāとの発生過程が全く類似している。さらに、Praśastapādabhāṣyaではこの２つの潜在的能力、vegaとbhāvanāの代わりにもっと広い概念、saṃskāra（潜在能力）がしばしば用いられている。このことは潜在的能力、vegaとbhāvanāとに関係した発生パターンはもっと広い概念、saṃskāra（潜在能力）に由来するものと考えられる。

第１１図　物体の運動

１、　「推しているもの」と「推されている物体」との接触中または

「衝突するもの」と「衝突されるもの」との接触中

（ｉ）

①　「推しているもの」の推進力 ―― nodana

②　物体の衝突前の推進力、vega ―― abhighāt

―― 物体に最初の運動発生

物体に潜在能力、vega発生

（ii）　「推しているもの」の推進力 ―― nodana

物体の潜在能力、vega ―――――――――――――― 物体の運動　増大

物体中のvega　増大

２、物体が「推しているもの」または「衝突されるもの」から離脱

物体中の潜在能力、vega ―― 空間との結合、分離 ――― 空中での物体の運動

周囲の抵抗

重さに抗する場合

物体中のvega　減少

第１２図　記憶

１、アートマンに生じた　①　強烈なる認識　paṭu-pratyaya

②　留意による認識　ādara-pratyaya

③　繰り返しによる認識　abhyāsa-pratyaya

に伴われたアートマンとマナスとの結合中において

（ｉ）　アートマン　アートマン

①不思議な事柄 ―― （強い認識作用） ―― （強い認識）

珍しい事柄

②未曾有の事柄 ―― （留意による認識作用） ―― （非常に強い認識）

③通常の事柄 ―― （通常の認識作用） ―― （弱い認識 anubhava）

学問、工芸、体操等

（弱い潜在印象）　（強い潜在印象）

（ii）　（認識の繰り返し）

（弱い潜在印象） ―― （認識　増大）

（潜在印象増大）

（強い潜在印象）

２、（強い潜在印象） ―― （記憶 smṛti）

反対の知識

陶　　酔

不　快　感

享　　楽

（潜在印象　減少）

（記憶　減退）

〔引用文献および注〕

(1) 宮坂宥勝："ニャーヤ学派におけるアートマンの問題"，宮坂宥勝：『インド古典論』下、筑摩書房、1984, pp. 142-167.

(2) 村上真完："ヴァイシェーシカ哲学におけるアートマン存在論証"、『東北大学文学部研究年報』第２５号、1976 pp. 1-52.

(3) 中村元："ヴァイシェーシカ哲学の思想"、中村元選集『ニヤーヤとヴァイシェーシカの思想』春秋社、1996, pp. 499-816の内pp. 527-550.

(4) D. Jhā：Praśastapādabhāṣya with Nyāyakandalī, Varanasi, 1977, p. 199.

(5) 宮坂宥勝："ヴァイシェーシカ学派におけるアートマン観と解脱"，宮坂宥勝：『インド古典論』下，pp. 36-61.

(6) D. Jhā：op. cit., pp. 216-218.

(7) D. Jhā：op. cit., pp. 216-217.

(8) D. Jhā：op. cit., p. 226.

(9) D. Jhā：op. cit., pp. 735-738.

(10) D. Jhā：op. cit., pp. 735-736.

(11) D. Jhā：op. cit., pp.221-222.

(12) ① 雲井照善："インド思想と業"，『仏教学セミナー』20, 1974, pp. 387-401.

② 村上真完："サーンクヤ哲学における業の問題"，雲井照善編：『業思想の研究』，平楽寺書店，1979, pp. 535-578.

(13) D. Jhā：op. cit., p. 660.

(14) D. Jhā：op. cit., pp. 677-678.

(15) 宮坂宥勝："ヴァイシェーシカ・ニャーヤ学派における業思想の展開"，宮坂宥勝：『インド古典論』下，pp. 182-198.

(16) D. Jhā：op. cit., p. 638.

(17) D. Jhā：op. cit., pp. 634-635.

(18) D. Jhā：op. cit., p. 637.

(19) D. Jhā：op. cit., pp.630-631.

(20) D. Jhā：op. cit., p. 633.

(21) D. Jhā：op. cit., pp. 625-626.

(22) 中村元：“パダールタ・ダルマ・サングラハ”，『三康文化研究所年報』10・11(1977～8)，三康文化研究所，pp. 157-316の内p. 272による.

(23) Nyāyakandalī(D. Jhā : op. cit., pp. 626-627)による.

(24) D. Jhā : op. cit., pp. 647-657.

(25) Nyāyakandalī (D. Jhā : op. cit., p.649)による.

(26) Nyāyakandalī (D. Jhā : op. cit., p.658)による.

(27) D. Jhā : op. cit., p. 650.